

アル・ハマザーニー著『マカーマート』(3)

訳注 堀内 勝\*

- 第36話 アルメニヤのマカーマ 町でパンとミルクをくすね盗った報いは村で…  
第37話 ナージム(星占い師)のマカーマ 頼るべき方に頼れば  
第38話 ハラフのマカーマ 躰を見れば主人が分かる  
第39話 ニシャープールのマカーマ 巡礼者をカモにしようと  
第40話 イルム(知識)のマカーマ 心に知識の木を植えて根を張ればこそ  
第41話 ワスイッヤ(忠言)のマカーマ 世渡り商人としての心得  
第42話 サイマラのマカーマ 信頼した友人達に見捨てられて報復する  
第43話 ディーナール金貨のマカーマ 互いに相手を貶しあ<sup>げ</sup>って  
第44話 詩のマカーマ 55の謎詩行、5つのみ解き明かされて  
第45話 君侯のマカーマ 君子たるは何処にも御座れど 真の君子とは  
第46話 黄色のマカーマ 黄色の色をした者を使者として  
第47話 サーリッヤのマカーマ 太守と対峙し約束不履行を責める人物は、と篤と見やれば  
第48話 タミーム族のマカーマ 行政に参与した族長の疎外感  
第49話 ハムル(ブドウ酒)のマカーマ 朝に泥酔者に譴責したイマーム、夜は酒屋のナディーム(相伴役)  
第50話 マトゥラバ(探求)のマカーマ 宝探しの話を持ちかけられて  
第51話 ビシュル伝のマカーマ 野盗、獅子と大蛇を斃し婿入りを果たすが  
「終わり」に代えて

---

\* 中部大学国際関係学部 名誉教授

\*\* アラビア語の転写は原則として『岩波イスラーム辞典』にならうが、サジュウや詩の転写に関しては、語末母音、ターマルブータ、定冠詞アルなどを韻律やリエゾンを明確にする形で転写した。

### 第36話 アルメニアのマカーマ 町でパンとミルクをくすね盗った報いは村で…

(原文 M. 'Abduh pp. 186-189)

イーサー・イブン・ヒシャームは語り伝えて以下のように話した：アルメニア<sup>1)</sup>での取引を終えての帰りの旅、我々を迎えたのは大砂漠<sup>2)</sup>であった。大砂漠はその中の子供たち<sup>3)</sup>(= 盗賊、追剥)の方へと導いていった。彼等にけづいた(= 捕まった)のは砂漠の尻尾(= 外れ)のところ(漸く渡りきる寸前)であった。何とこの駝鳥の(生息する荒野の)地で、盗賊どもは我々に乗るラクダを跪かせるよう強いた<sup>4)</sup>のだ。そうしてから我々の旅用鞆をきれいに空にすると、我らの乗用ラクダ<sup>5)</sup>をも(背負う荷物から)楽にさせたのである。我々といえ、この陽光のある間は砂漠の子供らの手中で為すがままであった。革紐でグループ毎に縛られていたし、我らが馬も強制的に枷を結わえられていた。そうこうする中に夜がその尾を伸ばしてきて、さらに星がその瞬きを見せ始めた。こうした闇の紛れ時になってはじめて、盗賊団は(我々を解放し)砂漠の尻(= 背、向こう側)へと退いて行った。我々は胸(= 前方)の方へと道を取ったのであった<sup>6)</sup>。

こうして解放された我々は夜旅を急いだ。そして遂に暁の美しさが慎み深さのヴェールから姿を顕わすところになった。さらに暗黒の闇の鞘から黎明の陽光の剣が抜き放たれた時に至った。昼の太陽が照らし出したのは、何と身に着けているものと言え、我々の髪と顕わな肌のみ(ターバンも外着も剥ぎ取られ、裸同然)であったのだ！依然として白昼にも拘らず我々は恥辱に覆われた驚怖に駆り立てられたままとなり、そのハンディを背負って進まねばならなかった。いくつもの砂漠や荒野の地表を掠めて突き進んだ。そしてようやくマラーガ<sup>7)</sup>の町に辿り着いたのである<sup>8)</sup>。

我々同行の仲間は(多数であったので)それぞれ(二・三人が)一組になって、各々自分の行くべき道を別に取った。私に付いて来たのは一人の若者であった、悲惨さが体内から滲み出ており、ぼ

1) アルメニア *Irmīniyya*；現在は91年ソヴィエト解体によって、「アルメニア共和国」首都はエレバンとして独立している。カフカス山脈南部にあり、西はトルコに接する。アルメニア教会と呼ばれる民族固有のキリスト教を信仰する。歴史的には南方のイスラーム世界に商工業者として広く分散して活動、半ば独立していた時期もあった。イスラーム化との歴史的摩擦がさまざまに伝わっている。

2) 大砂漠 *falāt*；アラブは砂漠の民であり、馴染みの「砂漠」もその特徴によって弁別しており、名称も多義多様に展開している。このファラーは「水を欠く広大な砂漠」と一括りされる語群の中で、規模と深さが関与し「二日行程」を越えて広がる砂漠の意味である。拙著『砂漠の文化』アラブの砂漠観 26-28頁参照。

3) 子供たち→砂漠の子供たち *aṭfāl al-falāt*；「砂漠の子供たちは餓鬼ども」。砂漠に屯し旅行者を襲う、危険な事態に陥ったならば、勝手を知った砂漠を利用し、その奥深くに逃げ込み、避難場所とした。またその中で待ち構える盗賊のこと。道(街道)の息子 *ibn al-sabīl* とも。

4) 我々に乗るラクダを跪かせるよう強いた *wa-anākhū-nā bi-l-arḍi*；「ラクダを跪かせる」の原語 *anākhā* は大事な文化語である。ナフナフ *nakh·nakh* とは、ラクダに掛ける急ぎ立て言葉で、ラクダ杖で前足の膝を打ちながら、このナフナフと声を掛ける。こう習慣づけられているラクダは、前脚の膝を折って次に後ろ足をたたんで地面に座るのである。この動詞が *anākhā* なのであり、より具体的に「ナフナフと声を掛けながらラクダを跪かせる」である。このような不慮の事態では致し方ないことであるが、旅の予定の中で *anākhā* (ラクダを跪かせる) とは、休息か野営の場合であり、行程の半日、ないし一日の終わったことを表わす。マナーフ「ラクダを跪かせる場所」 *manākh* は、「行程」を表わし、「距離の長さ」を表わすと同時に、「時間の長さ」も表しており、それらが「旅行の行程」として広く用いられ、長い旅行、海旅でもマナーフが多用された。洗練された技術として西欧では航海技術と共に借用され、*almanac* アルマナック、オールマナックとして今では「暦」、とか「年鑑」の意味で世界的に用いられている。

5) 乗用ラクダ *rakā'ib*；単数形はラクープ *rakūb*。乳用ラクダのハループ *ḥalūb*。駄用ラクダのハムール *ḥamūl* などと共に、多様な用途の中で、特化してその業種のみを受け持たされるラクダの一つ。乗用ラクダは血統、外見、性質などが勘案されて選別される。

6) この冒頭の段落のサジュウの語は下線部の順に：*aṭfālī-hā / adhyālī-hā, ḥaqā'iba-nā / rakā'iba-nā, yawmi / qawmi, aḥzāban / ighṭiṣāban, adhnāba-hu / aṭnāba-hu*。

7) マラーガ *al-Marāgha*；イラン西端ウルミア湖岸東南の町、北方のティブリーズに通ずる幹線にある。アゼルバイジャン州の主邑。ここには後に有名な天文台が建てられ、そこでは天文学者トゥーシー(1274没)が天文表などの著作を残した。

8) この段落のサジュウの語は下線部の順に：*hishmati / zulmati, nahāri / ash'āri / abshāri, ḥujuba-hā / najaba-hā*。

ろ着をまとっていた。彼はアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフとのクンヤ(尊称)であった。(無一物で空腹であったので、何はともあれ)我々はアブー・ジャービル(abū jābir 体力の父=パン)を求めに出かけた。ほどなくそのパンが見つかった、ガダーの薪<sup>9)</sup>を燃やす炎の中から現れれた。すると例のアレキサンドリア人はパン屋の働き手の一人に歩み寄って、(こっそり)掌一杯の塩を乞うた。それからパン屋(の主人)に声を掛けた、「タンヌール(tannūr 大型パン焼き釜)の頭に登らせてもらえませんか、寒さにやられたものですから?」。こうして彼は焼き釜のサナム(ラクダの瘤=高み、頂点)まで昇ると、(そこに座って)辺りの人々に己の身の上を語り始めた、己の窮状を訴え始めた。訴えながらも、タンヌールの中に、裾下から塩を(こっそり)振りかけていた。それ(の音)は彼の衣類に付く(蚤や虱などの)害虫(が釜の中に落ちて焼け焦げるの)を思わせるに十分であった。堪らずパン屋の主人が怒鳴った、「何とひどい、あんたの父親など亡くなれ!広げた(ぼろ着の)裾を閉じてくれ、わたしの大事な(売り物の)パンを台無しにする気か」。こう言ってパン屋は焼きあがりつつある2個のフブズ(khubz アラビアパン)の所へ行って、タンヌールから投げ出した。このアレキサンドリア人は降りてきてそれを拾い、いそいそと小脇に抱え(て出てきた)のである<sup>10)</sup>。

アレキサンドリア人の実行した謀略には<sup>はかりごと</sup>吃驚させられた。彼が次に言うには、「何かウドム(udm おかず・添え物)となる物を工夫して手に入れますので、しばらくお待ちください。「腹が減っては戦は出来ぬ」<sup>11)</sup>ですからね。こう言い置くと彼は出かけて行き、清潔な瓶を棚に並べている男の所に出かけた。瓶のなかには様々なミルクが収容されていた。彼は(その中の一本を手に取り)店主に、「これはいくらですか?」と尋ねた後で、「味見して良いですか?」<sup>き</sup>と訊いた。店主が「構いませんよ」と応じたので、その瓶に指を突っ込んで掻き回した、何か中の失せ物をその中で探す風であった。(さんざん掻き回した挙句)彼が言うには、「代金はあったはずなんですが……。ところで代わりにご主人、ヒジャーマ<sup>12)</sup>(hijāma 刺絡、吸い玉、放血)をしてあげたいと思います」。店主は「アッラーがあんたを醗くしますよう! あんたはハッジャーム(hajjām 刺絡師)なのか?」と問いかけた。彼が「そうですよ」と答えると、店主はこの刺絡師の父祖たちをさんざん中傷し、またミルク瓶を空にするよう喚<sup>わめ</sup>いた。するとアレキサンドリア人が言うに、「そう仰いますが、(すべてを駄目にする)サタンより(これだけを駄目にした)私の方が益しでしょうが」。(魂胆を悟った)店主は言い放った、「瓶を持ち持って行きなされ。そんな行為に神の祝福などありませんように!」<sup>13)</sup>。

こうしてアレキサンドリア人はミルク瓶を貰った。我々は囲われた場所にと急いだ。そして(せしめた食物に)パクつく<sup>えもの</sup>やすぐに平らげてしまった。(こうして一息つく)我々二人は再び旅路に就いた。そして漸くある寒村に辿り着くと、村人に食料を恵んでくれるよう乞うた。村人の中から一人の若者が即応してくれて、直ぐに自分の家へ飛んで行き、サフファ(ṣahfa 大きめの鉢)を持って来た。その中にはなみなみとミルクが満たされ、その頭(=上辺)にまで達していた。鉢を受け取ると我々は大いに啜った、その鉢が空になるまでがぶ飲みした。それから我々は村人たちにパンを所望した。ところが今度は代金を頂かなければ差し上げられないと、拒まれた。アレキサンドリア人は尋ねた、「何故なのです、ミルクは出し惜しみしなかったのに、パンの方は料金を払わ

9) ガダーの薪 al-ghadā: 薪の原料としては火持ちも長く、燠になっても長持ちする木材。第34話注15を参照。

10) この段落のサジュウは下線部の順に: rafīqin / tarīqin, ṣaghārūn / aṭmārūn, tannūr / maqrūr, hālī-hi / ikhtilālī-hi / adhyālī-hi, la-ka / adhyāla-ka, yalqūṭu-hā / yata'abbātu-hā。

11) 腹が減っては戦は出来ぬ lā ḥīlata ma'a l-'udm: 直義は「欠乏のままでは何の工夫もできぬ」である。

12) ヒジャーマ hijāma: 「刺絡、吸い玉を用いて患部の悪い血を放血すること」。詳しくは解説を参照。

13) この段落のサジュウの語は下線部の順に: udmi / 'udmi, awāni(ya) / albāni / athmāni, isba'a-hu / ḍayya'a-hu, yasubbu-hā / yaṣubbu-hā。

ないと駄目だと拒むのは?」。すると先程の若者が答えた、「あのねこのミルクはガダーラ (ghadāra 巨大鉢 qaṣ'a の中でも最大の物) の中に入れてあったんだ、そこにネズミー一匹が落っこちてしまったんだ。で、わしら決めたんだ、サダカ (自由喜捨) として旅人などに差し出すのが良かろうと」。これを聞いてアレキサンドリア人は絶叫した、「何としたことを!」<sup>14)</sup>。(飲み干した) 鉢を手にとると、叩き割ってしまった。今度は若者の方が絶叫した、「大変だ、鉢が壊された、大変な損害だ」。やがて我々の体に異変が起きた、皮膚が (悪寒に似た) 収縮を起し、胃が上下ひっくり返る捻転を起こした。我々がすることと言えば (苦しみながら) 食べたものを吐き出してきれいにすることであった。(吐き出しながらも) 私は言ったものである、「これは昨日我々がしたことへの報いですよ、きっと」。しかし (依然強気な) アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフは、答えるに詩をもって詠じた;<sup>15)</sup>

おお魂よ 吐き気など催すな

yā nafsu lā tataghaththay

ミルクなど脂質とはむかつき無きものぞ

fa-sh-shahmu lā yataghaththā

時運に伴い脂質食す者に異なる作用せり

man yaṣḥabi d-dahra ya'kul

肥満ともすれば また痩せ細りもさせるものぞ

fī-hi thamīnan wa-ghaththā

されば時運に向かいてある時は新調着を

fa-lbas li-dahrin jadīdan

またあるときには古着を着て対処すべし

wa-lbas li-ākhara raththā

(ムジュタッス mujtathth 調三詩行 thā'iyya th 脚韻詩)

第36話 アルメニアのマカーマ 町でパンとミルクをくすね盗った報いは村で… 完

### 第36話 訳者解説

最後の終わり方、吐き気を催して、げーげー吐きながらも、自分の行為を正当化しようと詩を苦吟する主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ。彼の気概は職業魂の一端を示してさすがと言ったところであろう。この部分マカーマの仕上がりとしても、著者から観ればしてやったりというところであろう。

砂漠に入り込み、その懷で襲われる。砂漠の息子たち (= 盗賊) の餌になる。従って砂漠を旅する時は、こうした砂漠の息子たち対策においても、出来るだけ大人数の旅団・キャラバンを組んだ方が良い。そして道案内として通過する領土の関係者を雇い入れ、安全保障を確保するのが常套策である。本話のように単なる寄せ集めの旅団ならば、安全策が講ぜられていなくて、盗賊に遭遇してしまう。盗賊の方もすべてを奪うわけではない。武力で戦う相手には容赦しないが、反抗しない相手に対しては当座のものは賄える程度の物品は残してやるものである。実際旅に明け暮れた著者

14) 何としたことを! innā li-llāhi; 直訳は「まこと我らはアッラーに属する者」。誦句 innā li-llāhi innā ilay-hi rāji'ūna 「まこと我らはアッラーに属し、彼の許に戻る者」の短縮した表現。悪い事態、不幸が生じた時に唱えられる。

15) この段落のサジュウの語は下線部の順に: daf'at(in) / qaryat(an) / fat(an) / ṣahfat(in), anfāsa-hā / ra'sa-hā / nataḥassa(a)-hā, thamani / labani / thamani, ghaḍārat(in) / fārat(un), ḥarabā-hu / mahrūbā-hu, jildatu / ma'idatu, akalnā-hu / fā'alnā-hu。

アル・ハマザーニーには、生涯二度の盗賊に遭遇した経験を持っている。こうした体験を生かして、もっとリアルに、経験を活かす描き方が出来たはずである。第6話「獅子のマカーマ」で描いた「盗賊」の生き生きした描写は体験に裏打ちされたものであったろう。

盗賊の被害経験のある著者であっても、本話では素寒貧、つまり身ぐるみ剥がされ、闇に紛れての迫り出され方の想定となっている。値の張る商品や持ち回りの日常品だけではない。宵闇の中、上着や外套まで奪い取られていたのだ。そして体面を重んずるアラブにとって、裸同然の己の外観のお粗末に気付くのは、暁時の陽光によってであった。と言うのも盗賊の犯行はそれなりの倫理があり、ぎりぎりの客扱いをして「闇の紛れ」を意図的に用いた見事なものである。現実には宵から朝までの長い夜旅であるので、その間、気づかないこと、同行の士達が気付かない訳がないのだけれども。

マラーガの町について何はともあれ、せねばならないのは飢えを凌ぐことである。語り手と連れのアレキサンドリア人は次のように言っている「我々はアブー・ジャービル (abū jābir 体力の父＝パン) を求めに出かけた」。体力 (jābir) の根源は「パン」にあるとみて、それを別称で言ったわけだが、実はこの表現法はアラブではクンヤ (父称アブー～や子称イブン～などの敬称) を用いての一種の隠語あるいは符牒としての役割を持って使われている。アル・ハリリー『マカーマート』では第19話で、病気になった主人公を知人友人が見舞いに来る。その折主人公が息子に対して、客持て成しをするのに、見舞客の前で二人だけの符牒で言葉のやり取りを行う。それはこの19話の聞かせどころでもあった。アル・ハリリーの方の「パン」の隠語は、アブー・ヌアイム abū nu'aym 即ち「慰安の父」(父称) となっている。空腹時、とりあえず用意されるパンは一時の腹ごしらえにもなり、陰悪な事態も救ってくれる。ましてフズ (普通のパン) ではなく、篩にかけ製粉した huwārā (白パン) ならば、より nu'aym (慰安) となろう。そしてアブー・ジャービル (abū jābir 体力の父＝パン) (父称) についてであるが、アル・ハリリーの方では、ウムム・ジャービル (umm jābir 体力の母) (母称) として出てくる。そしてその指示対象は「ハリーサ harīsa」、即ち「煮肉入りポタージュ」のこととされる。ハリーサは「つき砕いたもの」が直義で、精練小麦粉と煮炊きした肉と肉汁とでよく「つき砕き」、混ぜ合わせポタージュにしたもの。栄養満点で病人や疲れた旅人の jābir (活力蘇生、体力回復) に最適なものと言われた。「小麦」自体が「活力の素」と言われることから abū jābir とは khubz (パン) のこととする説がある。アル・ハリリーのこの第19話の食関係の符牒での言葉のやり取り、及びその具体的内容は、訳者は別にエッセイにして発表したものがある。([アラブの食言葉] *Vesta* 第16号、1993年7月 pp. 43-48 を参照)

当座を凌ぐのはパンとミルクを得ること。本マカーマはパンとミルクをそれぞれに二重の謀略で獲ている優れ技を見せている。砂漠から辿り着いたマラーガの町では見事な主人公の策略で、そして次の行きずりの村では逆に村人側の謀略に嵌められる。初めのマラーガにおいての方が、民族色が出ていて面白い。パンのせしめ方は塩を小細工に用いる。塩は火に焼かれると大きな音がする。それを利用してパン焼き釜の上に登って、蚤虱が釜中に落ちて焼ける音に思わせて、焼きかかったフズ (アラビアパン) をせしめるのである。一方ミルクの方は、売られ方まで開示してくれている。並べられていたミルク瓶の多分大き目の奴であろう、それを手に取って味見をさせてくれ、と言う。許しを得て、恐らく味見風に少しばかりを舌に持って行ったのであろう。しかし味見を始めたなら、こちらの物といったばかりに、瓶に詰まったミルク (ヨーグルト) に指を突っ込んで掻き回す。中に小銭を落としたといわんばかりに。こうして商品にならなくなったミルクを手に入れる。瓶まし入手するのにも口実をうまく儲ける。代金の代わりに刺絡 (ヒジャーマ hijāma) をして差し上げ

ますが、と嘯<sup>うそぶ</sup>いて。

「刺絡」、これを職業とする人をハッジヤーム (hajjām 刺絡師) と言う。アラブ世界では職業としては、下賤な仕事とされ、蔑視の対象とされた。アル・ハリリー<sup>1</sup>の『マカーマート』では第47話で刺絡師の店を舞台に、刺絡師である主人公と客と擬装する息子とが一騒動を起こす、興味深いマカーマが展開されている。そこにおいても、この刺絡の業が卑賤であることが記される。刺絡師がアブー・ザイド長老であることが分かったと、語り手イーサーは、「この刺絡師の正体こそ、誰もが指を差すあの我らが長老なのであった！私は不満をぶつけた、何でこんな卑しい仕事をしているのか、何でこんな浅ましい業にしがみ付いているのかと。ところが老師は耳にしたことに無関心を装い、非難されたことに何食わぬ顔をして言うのであった、「靴と言うものはいずれも岩地を裸足で歩く者に合うよう出来ているものなのだ」。そして軽蔑した風に私から離れ、息子とともども競馬馬のごとく競うように出て行った」。(拙訳、平凡社版Ⅲ 301f. を参照。)なおこの場を描いた画家ワースティイー<sup>2</sup>ほかの細密画が幾つかあり、刺絡師の店、道具類、また店を取り巻く当時の状況を知ることが出来る。

旅を続けて行き着いた寒村では、今度は「やられ役」である。簡単に村人が要求に応じたのには訳があったのだ。大量のミルクを提供される。善良な農民なのだと思うと、次にパンを所望すると、それは代金を払わねばならない、と断られる。ではなぜミルクは只なのかと尋ねると、ミルクを収容してある大容器の中にネズミが落ちて飲めなくなった。ただ捨てるのではなく、旅人などに振る舞おうと決めたというのだ。こうした設定の中には、農民と遊牧民との考え方の違いが一般人にも露呈されていることになる。農民・村民のこの卑賤さ、こす辛さ、狡さは、ベドウィン、砂漠の民の持て成し好きで寛大な気風とは大きく隔たっている。

主人公についてであるが、本話では同行した旅人で、盗賊の被害にあった若者の設定である。この世故に長けた若者を盗賊と対峙させたら、とも思ったりするが……。主人公像は未だ一定してはいないことは明白である。本話では同行した若者で、アレキサンドリア出の主人公名アブ・ル・ファトフとの名(父称)も出しているが、長老という設定でもない。語り手イーサー・イブン・ヒシャームは今回は相棒役、助けられ役であって、その術策に舌を巻く。但し後半の村でのしつぺ返し<sup>したた</sup>には、町での悪さに対しての天罰では、と主人公に訴える件は正常のムスリムとしての強かさを出している。これに対しての主人公の正当化の詩は、大団円を飾るわけであるが、後輩のアル・ハリリー<sup>3</sup>の『マカーマート』の定型として継承されていく。詩の挿入は今述べた一箇所三詩行に留まる。サジュウに関しては全体にその配慮はあるが、これを認めて良いのかという箇所が幾つかある。語末母音が異なる場合、子音で留めたり、カッコで示しておいた。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では 34 話に収録されている。Sofya 版、Paris 版では欠如する。

## 第37話 ナージム(星占い師)のマカーマ 頼るべき方に頼れば

(原文 M. 'Abduh pp. 190-195)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：ある晩のこと、気の知れた友人で知識と教養を備えた人たちと語り過ごしたことがあった。真面目な話題をあれこれ述べ合ったものである。話題がずっと途切れることが無かったのだが、そんな時私達の家の扉を叩く音が聞こえた。私が、「何方でしよう、夜の訪問者は？」と誰何すると、「夜の使いです、その伝令者でございます。空腹に打ち負かされ、追い立てられている者でございます。異国の者で、乗る瘦せラクダ<sup>1)</sup>も疲労困憊しております。我が生活は辛苦の中にあり、我が二人の雛(= 幼い子供)は砂漠<sup>2)</sup>を隔てた遠くに置き去りにしたまま。客となるはその影淡い者<sup>3)</sup>にございます。彷徨い出でたるは、一塊のパンを求めてのこと。皆様の何方か、客を迎えて下さりませぬか？」<sup>4)</sup>。

(この応答の優雅な客人に対して)我々は先を争って扉を開けに出た。そして客人の乗用ラクダを跪かせた<sup>5)</sup>。その間も彼の旅の(真の)目的が何なのか誰も知りたい気持ちでいっぱいだった。そこで客人を誘った、「到着したのはあなたの家ですよ、面倒を見て貰うのはあなたの家族ですよ、どうぞ家の中へ！」と。我々は彼に笑顔を見せて、迎え入れた。そして彷徨いの元(= 食物)を用意してあげて、(彼が食べる間)あれこれと手伝ってあげた。食を満たすまでそうしたのだが、彼と話を交わすうちに、段々お互いに打ち解けていった。そうしてから我々は尋ねた、「東方世界から昇り来る人物はいったい何方なのでしょう、その言葉巧みさで魅了する人物とは？」。客人が答えるに、「誰も木(の真価)を知るにそれを実際噛んでみなければ分からねぬものです<sup>6)</sup>。この私はナージム(星占い師)の名で通っています。時を試算することにより、その運勢に通じております。その何たるかの確たる情報を引き出す者です。すべての乳首(= 原因)からミルク(= 結果)を搾り出します。多くの名立たる人々の要請にも応じて、その対処法の助言を行って来ました。人の中には(心の)瘦せた者、肥えた者が存在することも知りました。流刑もさせられ、それを身をもって体験させられました。どんな土地であれ、私の眼が及ばなかったところはありません。人士の集まりが催されれば、どんな集いにもその仲間内に加わりました。それ故東方世界<sup>7)</sup>では私のことが話題

- 1) 瘦せラクダ niḍw; ba'ir mahzūl. 乗用動物を急がせる、追い越す、追い抜くが語根√n/d/wの原義。乗用ラクダ rākibの総称語に対してニドウの方は「瘦せ細った乗用ラクダ」の義を担う。急がせられ、長い間使われている、優れた乗用ラクダであることが背後に想定されている。
- 2) 砂漠 mahāmāh; 複数形で、単数は mahmah、または mahmaha。「広大な砂漠」。注釈者 M. 'Abduh の説明では mafāwiz ba'ida al-aṭraf (両端が広大な砂漠) とある。mafāwiz は mafwāza の複数形。筆者の分類では規模の大きさを指標とする砂漠の語彙の中で 22 のマファーザに相当しよう。拙著『砂漠の文化』第 1 章「アラブにとって砂漠および砂漠民とは何か」の中の砂漠の語彙の分類表を参照。
- 3) 客となるはその影淡い者 ḍayfun zillu-hu khaffūn; 影 zill とは「寄る辺とする者、頼りとする者」。それが淡い、軽いとは、負担をあまりかけないことを言う。影の濃い者 ṭhaqīl al-zill とはこの反対で、「負担が重い、面倒を掛ける」の義となる。
- 4) この冒頭の段落のサジュウの語は下線部の順に: bābu / muntābu, barīdu-hu / ṭarīdu-hu, ṭalīhun / tabrīhun / fīhun, khaffūn / raghīfūn / muḍīfūn。
- 5) ラクダを跪かせた anakhnā; <anākha「ラクダを跪かせろ」、とは擬声語から由来し「乗っていたラクダの肘下を杖で叩きながら、ナフナフ nakhnakh と声を掛ける」こと。そうするとラクダは肘を折り畳み、座る動作に入る。「ラクダを跪かせろ」とその日の「旅を終える」。この派生形アルマナーフ al-manākh とは欧語アルマナック almanac の語源である。アルマナーフは「ラクダを跪かせるところ」が原義であったが→「一日行程を終えること」→「旅程・予定を終えること」→「計画を立てる・終えること」→「航海予定」→「年間計画」、「年鑑」として欧語アルマナックに技術用語として借用されていった。
- 6) 誰も木を知るにそれを実際噛んでみなければ分からねぬものです lā ya'rifu l-'ūda ka-l-'ājim; 木の材質を知るには外見だけでは分からず、噛んでその感触から真の材質を知ることが出来る。元来は武器の槍や矢の材質を知るために行った。金貨の真贋を試すに、洋の東西を問わず行われた。
- 7) 東方世界 al-sharq、西方世界 al-gharb; アラブ世界では普通「東方世界」とはエジプト以東をさし、「西方世界」

に上ることでしょう、西方世界でも私の名を知らないと否定されるということはありませんまい。(訪れる所いずこであれ)どんな王であろうと王と名の付く人の、その絨毯を踏まぬ王宮はありはしませんでした。またその王の存亡の危機にある時、その近衛(側近)部隊に加わっていないということもありませんでした。戦闘が停戦となるのは、その戦いにおいて私が使者を務める時に他なりません。時運は私に両極で試練を与えて来ました、慰安の局面か悲惨の局面か。両面とも身に沁みしております、吉報の側面も凶報の側面も。どんな試練に立たされてもその対応に誤ることはありませんでした<sup>8)</sup>。

時の変遷 以前には我を害すことありき

wa-in kāna šarfu d-dahri qidman aḍarra-bī

凶事その重荷を負わせ責め苦しめる

wa-ḥammala-nī min raybi-hi mā yuḥammilu

されど好転して吉事必ずや回り来るものなり

fa-qad jā'a bi-l-iḥsāni ḥaythu aḥalla-nī

真<sup>まこと</sup>つ当な正しき地位を与えられん 揺るぐこと無き

maḥallata šidqin laysa 'an-hā muḥawwalu

(タウイール *tawīl* 調 *lāmiyya* 1脚韻詩)

我々は(讃嘆して口を揃えて)言った、「あなたの口(の歯)が壊されませんように!<sup>9)</sup>ワッラーヒ(誓って申しますが)、何とあなたは素晴らしい方でしょう、あなたの父君もまた!(他の話し手はともかくとして)あなたに対しては沈黙していても許されますよ。いくら話してもよいことはあなたにだけ許されることです。ところであなたのターリウ(星の昇り)は何時だったんでしょうか、何処があなたのグループ(星の没する)の地となるのでしょうか?またあなたの望みを前へと押しやり、願いを前方へと導く衝動は何なのでしょう?」。彼は答えた、「私の故国はイエメンです。必要とするのは降雨(の如き布施)なのです。そして私を押しやる衝動は厄難と悲惨な生活(から逃れ出ること)です」。我々は申し出た、「当地に滞在なされば、我々が生活からその他の一切を分かち合いますよ。種が育つ降雨にも巡り合えましょうし、十分に渴を癒すナウ<sup>10)</sup>(anwā' 季節の雨)にも恵まれましょう」。彼の答は意外であった、「あなた方には厄介になろうとは思っておりません。と申しますのもあなた方の中庭は確かなには広いのですが、あなた方が齋す降雨は単なる水であって、(私の望む)渴を癒すに十分なものではございません」。我々は尋ねた、「どんな降雨があなたを十分に潤すのでしょうか?」。彼は、「それはハラフ<sup>11)</sup>(khalaf)殿の齋す雨に他なりません」。こう言っ

とはリビア以西モロッコ(中世はアンダルシアも含めて)までを指す。著者アル・ハマザーニーはベルシャ人であり、しかもベルシャ以西のアラビア語の本場には旅してはいない。それ故「東方世界」はベルシャ以東を、「西方世界」はイラク以西のアラブ世界と意識している。アラブ世界での「西方世界」は全く意識の外であった。主人公の出身地アレクサンドリアが「西の最前線」との概念設定からもそれが分かる。

8) この段落のサジュウは下線部の順に: rāḥilata-hu / ruḥlata-hu, atayta / wāfayta / bayta, mashriqi-hi / mantiqi-hi, 'ājimi / nājimi, akhbura-hu / a'sura-hu / ashtura-hu, 'ayna-hā / bayna-hā, udhkaru / unkaru, bisāta-hu / simāta-hu, būsi-hi / 'ubūsi-hi / labūsi-hi。

9) あなたの口(の歯)が壊されませんように! lā fuḍḍa fū-ka; 話しつぱり、弁舌が聞き手を魅了するほど上手であったり、立派であったりした時に、口に出る言い返し。普通には lā yafḍuḍi llāhu fā-ka 即ち「アッラーがあなたの歯を壊しませんよう!」という。同様な言い回しがアル・ハリリーーの第46話にある。弁舌巧みな子への褒め言葉として(平凡社版 III p. 283)

10) ナウ anwā'; anwā' は複数形で、単数はナウ naw'。一般には星の巡りを一年に振り分けて「28宿」として、その時期の農事の、牧事の、また生活の指標とした。イスラム暦は完全な陰暦なので、季節に合わず、月の宿(manāzil al-qamar)である「28宿」を頼りにした。またナウはその宿に降る雨のことも意味する。「季節の雨」ここでは後者の意味として用いられている。

11) ハラフ Khalaf ibn Ahmad (399/1008 没); サーマーン朝の支配下にあるシジスターンのアミール(太守)。次の第38話の主題になっている。固有名詞としてではなく、このばあいのハラフ(khalaf)は一般名詞として「代用物」

てから詩を詠じた；<sup>12)</sup>

シジスターンへ さあ我が愛する乗用ラクダよ

sijistāna ayyatu-hā r-rāhilah

そしてその海へ 岸辺わが望みを叶えさせてくれよう

wa-baḥran ya'ummu l-munā sāhilah

アルジャーニ<sup>13)</sup>を目指して進もう 彼の地に無事着けば

sa-taqṣidu arjāna in zurta-hā

一つ所望すれば 百丁度の返報あろうぞ

bi-wāḥidatin mi'atin kāmīlah

彼の地のアミール宰相イブン・アミード<sup>14)</sup>より優れてあり

wa-faḍlu l-amīri 'alā bni l-'amīdi

クライシュ族がバーヒラ族<sup>15)</sup>より秀でし如くに

ka-faḍli qurayshin 'alā bāhilah

(ムタカーリブ mutaḳārib 調 lāmiyya 1 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：客人は(詠い終えと)邸を後にした、我々は彼に別れの挨拶をして見送った。彼の去った後しばらくは我々誰も彼との別離を惜しんだままでいた。別れは我々の心に痛みを植え付けた。ところが何日か経ったある曇った日のことだった、我々はスラッヤー(= 昴)の首飾りのように(野外に円座を組んで)座っていた折りのことだ。突然一団の乗用ラクダ(marākib)が追いつてられてきた、脇には騾馬達(janā'ib)が導かれてきた。と、その中に一人の男が我々の中に乗り込んできたのである。我々は問うたものである、「誰だ、この乱入者は?」。姿を見せたのはあの我らが長老ナージム師であった。彼は願いが叶ったという風に、宣の衣の裾を引き摺って、威風堂々と歩み寄って来た。我々は立ち上がるや、彼の方に向かい、お互いに抱き合った。そして尋ねた、「如何したことです、イサームよ<sup>16)</sup>」。すると彼は「軽い人乗せるジマール(jimāl ラクダ達)、重い荷運ぶ騾馬達(bighāl)、錠の掛かりし荷袋達……」こう答える」と以下のように吟じた；<sup>17)</sup>

の意味を担う。ここでの文脈では、単に降雨の「水」ではなく、それに「ふさわしい対価」を求めていることをいっている、とも解釈できる。

- 12) この段落のサジュウは下線部の順に；fū-ka / abū-ka, 'alay-ka / la-ka, amāma-ka / quddāma-ka, maṭaru / ḍurru / murru, yuzra'u / yukra'u, ṣaḥban / raḥban。
- 13) アルジャーニ Arjān；韻律の関係でアルジャーニとなっているが、正式にはアッラジャーニ Arrajān である。フージスターンの主邑で、ブワイフ朝アミールであるルクヌッダウラの宰相サーヒブ・イブン・アッパードの居城がある。サーヒブは次注のイブン・アミードにかつては書簡体様式を学んでおり、宰相職も絡めた師弟の関係になる。著者アル・ハマザーニーは知識を求める旅の最初にサーヒブを頼って暫く滞在しているが、その恩恵は絶大なものであった。
- 14) イブン・アミード Abū al-Faḍl M. Ibn 'Amīd (359-60/969-70 没)；ブワイフ朝のアミールであるルクヌッダウラの宰相を務める。博識の教養人・文人として知られ著書も残しており、第2のジャーヒズとも評された。書簡体の技芸に磨きをかけ、「最後の教師」として「書簡体様式はアブド・ル・ハミード(750 頃没)に始まり、イブン・アミードに終わる」とも言われている。
- 15) バーヒラ族 Bāhila；半島北部マウン Ma'n 族の支族。アラブ諸部族の中で最も卑賤な民であって、その典型としてよく例えにされる。クライシュ族は預言者ムハンマドを出し、Ahl al-Bayt (御家の人々)とされた名門。
- 16) 如何したことです、イサームよ mā warā'a-ka yā 'Iṣām?；この言い回しは、ブレ・イスラム期のキンダ王国ハーリス・イブン・アムルの発言に由来する。ハーリス王は美しく才能豊かと噂されるアウフ・イブン・ムハッラムの娘を娶りたかった。そこで身内で賢明なイサームという女性を使者に立てて、娘を探らせた。帰ってきたイサームに対して王が発した最初の発言がこれであった。イサームに関しては別の節がある。アル・ハリリー『マカーマート』第25話に「この様に老人はその心中をあの手で吐露し」と出てくる。その注23で注記しておいた。拙訳、平凡社版Ⅱ 263、272～73 頁を参照。
- 17) この段落のサジュウは下線部の順に；nashtāqu-hu / firāqu-hu, hājimu / nājimu, munā / ghinā, mūqaratun / muthqalatun / muḳfālatun。

我が主人よ 如何な卑しきことあろうやハラフ殿に

mawlā-ya ayyu radhīlatin lam ya'ba-hā

彼が拒むような 如何な善行のあろうや彼の到達能<sup>あた</sup>わざる

khalafun wa-ayyu faḍīlatin lam ya'ti-hā

求め来し者誰であれ仰せとして聞くはただ「お持ち下され」の言葉

mā yusmi'u l-'āfina illā hāka-hā

彼が応じて下知するはただ「差し上げなさい」の一語

lafazan wa-laysa yujābu illā hāti-hā

高貴なる諸行その人の顔美しく照らし出す

inna l-makārīma asfarat 'an awjuhīn

その人の両頬に尊さ映す黒子<sup>はくろ</sup>浮き出すもの

bīdin wa-kāna l-khāla fī wajanāti-hā

願わくば我が父身請けされんことを偉大さ顕わす彼の雅量

bi-abī shamā'ila-hu llatī tajlu l-'ulā

仕草一つ一つに祝福垂れる彼の手に対してもまた

wa-yadan tara l-barakāti fī ḥarakāti-hā

当今の慈善活動を数え上げる者あらば この我もまた

man 'adda-hā ḥasanāti dahrīn innanī

善行なせし当今の数え上げられる一人となろう

mimman ya'uddu d-dahra min ḥasanāti-hā

(カーミル kāmīl 調 tā'iyya t 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームはさらに語りを続けた：我々はアッラーに祈った、彼が留<sup>とど</sup>まってくれるよう、我々に彼との会<sup>あ</sup>いひが出来る祝福を与えてくれるように。(幸い) ナージム師は数日間滞在してくれた、彼の(己に關しての) 弁舌は控えめではあったが、アミールの善行への感謝だけは別であった。言葉は少なめであったが、アミールの施政への賞賛と下賜の話だけは別であった。<sup>18)</sup>

第37話 ナージム(星占い師)のマカーマ 頼るべき方に頼れば 完

### 第37話 訳者解説

本舞台が中途半端でアト舞台を盛り上げている荒っぽい筋の展開ながら、怒涛の如き終結を迎える。しかもフィナーレのアミールへの頌詩及び讃歌の叙述でもって。アル・ハマザーニーのマカーマのいくつかは、彼が世話になった為政者や高位高官の者に向けてのものであったこと、献呈したものであったことが知られている。中段から終盤にかけての話の持つて行き方は、そうした類のマカーマではなかったかと、推測させる。

今回の主人公についてであるが、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師では無く、ナージム師になっている。「マカーマ」の枠を設定するならば、主人公は奇才を備え変幻自在なアブ・ル・ファトフ師でも良かったはずである。ナージム nājīm とは「星 (najm pl. nujūm) を読む人、占星術師」のことである。直接占星術に触れた部分はないが、「日の出の勢いになっている者」の原語 tālī' は

18) この段落のサジェウは下線部の順に：baqā'a-hu / liqā'a-hu, lisāni-hi / ihsāni-hi, kalāmi-hi / ayyāmi-hi / in'āmi-hi。

天文用語のトゥルーウ *tulū'* (星の出現) と深い関係がある。後者は「天体(太陽・月・星)が東に登ってくることを言い、問題とする天体がトゥルーウの時、12宮の何処の座を占めているか、5惑星の位置関係・アスペクトはどうか、などによって吉凶が占われる。個人的には出生時や婚約時などのハレの日や日常の営為判断に、公的国家的には存亡を賭けた戦争、公的行事や旅行などの重大事の判断に重要な基準とされる。本話でもナージム師は、「時を試算することにより、その運勢に通じております。その何たるかの確たる情報を引き出す者です。すべての乳首(=原因)からミルク(=結果)を搾り出します。多くの名立たる人々の要請にも応じて、その対処法の助言を行って来ました。人の中には(心の)痩せた者、肥えた者が存在することも知りました。流刑もさせられ、それを身をもって体験させられました」と言わしめている。「流刑 *ghurba*」とは国家的判断を求められ、それが誤っていたために君主から一時的追放が下されたことを意味しよう。それ程重要な地位を占めていたのである。

導入部の主人公の名乗りも工夫が出来たはずである、「夜の使いです、その伝令者でございます。空腹に打ち負かされ、追い立てられている者でございます。異国の者で、乗る瘦せラクダも疲労困憊しております。」までは品位ある者でも夜旅となり、道に迷えば想定できることである。しかし続く「我が人生は辛苦の中にあり、我が二人の雛(=幼い子供)は砂漠を隔てた遠くに置き去りにしたまま。客となるはその影淡い者でございます。彷徨い出でたるは、一塊のパンを求めてのこと。皆様の何方か、客を迎えて下さりませぬか?」と訴えている件は、卑下して家庭の窮状までも打ち明ける零落振りを述べ立てる必要があったろうか。誰何されての答え方で、宿主はおおよその人物像は描けられるはずであるから。以降の、邸に留まる用途の誘いを断って中座したのも、空腹のひよ子どもの所に戻る設定ではない。また返礼としてもたらした贈与品においても不釣り合いであり、物語の展開としても雑であって理解の苦しむところである。

わが国では「幼児」をよく「チビ、チビ共、チビちゃん」などと言ったり、また未成熟な物を「嘴が黄色い」などと言ったりするが、アラブ世界では「幼児」を「(鳥の)雛・ヒヨコ」と表現する慣用のあることが分かる。本話には主人公の困窮の様を訴える部分で「我が二人の雛は砂漠を隔てた遠くに置き去りにしたまま」と、「二人の幼い子供」を例える描写がある。「幼児」を「鳥の雛・ヒヨコ」と表現する慣用は、この他にも『マカーマート』の中に多く散見できる。その一例を引くと、第13話では「あくせくと駆けずっては、また駆けずり回る 足を棒にした拳句に戻り行く先は 目を鋭く皿のようにして待ち望む 腹空<sup>す</sup>かしてひたすら待つ<sup>ひよこ</sup>子等のもと」とあり、我が子等を「ヒヨコ達」 *zaghālīl* < *zughlūl* と表現して、引き合いに出し、詩の中にも詠い込めている。

「木を噛む」の言い回しについて、本話では主人公が「試してみる、内実を知る」と言う様な意味合いで、「誰も木を知るにそれを実際噛んでみなければ分からぬものです」 *lā ya'rifu l-'ūda ka-l-'ājim* と言っている。木の材質を知るには外見だけでは分からず、噛んでその感触から真の材質を知ることが出来る。元来は武器の槍や矢の材質を知るために行った。金貨の真贋を試すにも、洋の東西を問わず行われ、実際口に入れ歯で噛んでみることを行うが、アラブでは人品の評価にも当てはまる言い回しにもなっている。アル・ハリリー『マカーマート』第7話には「そしてすぐにでも老人の所まで行き、彼と話を交え、果たして私の予期した通りの(矢に最適の)木(即ち間違いない人物)であるかどうか噛んで(即ち確かめて)みたい気持ちにかられたのであった」。(拙訳 I 232-233、注 17 参照)、及び第9話「私をも子供をも、この人は満足に養ってはくれないのです。ひもじさが昂じて、彼への恨みつらみが涙となって、私はただ飢えて泣くばかりでした。思い余っ

て、この通り、この人をあなた様 (= 法官) の前に連れて来たわけです。どうぞ彼の木の材質 (= 本性) をお囃みになって、アッラーがあなた様をご照覧なされるように、私達を裁いていただきとうございます」。(拙訳 I 272、注 12 参照)

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版、Paris 版いずれにも欠如している。

## 38 話 ハラフのマカーマ 駢を見れば主人が分かる

(原文 M. 'Abduh pp. 196-198)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私はバスラを治めるワリー(=知事)に任命され、(バグダード宮殿に)まします閣下(=カリフ)の許から彼の地に下って行く<sup>1)</sup>ところであった。(チグリス河を下る)船旅であったが、同行者に一人の若者がいた。彼は体つきにおいては健康そのものに見えた。この若者が声を掛けてきた、「私は大地の果てまであらゆる方角に(冒険して)身を持って体験して参りました、迷子になったこともあります。けれども人々からは「一騎当千」と看做されておりますし、ランクにおいても「第一線」の地位を得ております。あなた様のために、この私をお近くに取り立てて頂けませんか、相談役において頂けませんか?」。私は答えて、「そなたの恵まれた才能の中でどんな領域が最も強いのかな、またそなたの理知とするもののなかでどんな手立てを最上の威力と考えておるのかな? いやいや、こう言うのもそなたを友人として遇したいからなのだ。安逸の時も窮地に落ちた時も共にその苦楽を分かち合おうと思つてのこと!」<sup>2)</sup>。

こうして我々は船旅を同道して、任地のバスラに到着したわけなのだが、この若者は何日か私の許に姿を見せなかった。彼の不在には私は寂しく堪らなかった<sup>3)</sup>、辛抱できなくなったのだ。そこで彼を探し求めることにした、街中の隅々まで探し求めて漸く、彼を見つけ出すことが出来た。私は問い掛けた、「(私と会うのを)拒んだのはどうしたことかね、何故どこかへ行ってしまったのかね」。若者が答えるに、「野生の性質が胸の中に渦巻いてしまったものですから、例えば火打石で点けられた火が燃え上がるようなものです。しかし火が一旦燃え尽きれば、自然と収まるものです。逆に火種が残れば、吹き上がったり、広がったりしてしまうものです。水滴だとして同じ、容器の中に一滴づつ落ち続ければ、やがて一杯になり、溢れて行くことでしょう。人の怨恨も同じ、もし(怨恨の卵が胸に)残ったなら、孵化することでしょうし、再び産卵することになるでしょう。自由(奔放性)だとして同じ、どんな罟で捕えようにも捕えられない、気風の良さのように。どんなに鞭打とうが追い出すことはできない、不作法のように<sup>4)</sup>。

まあ兎も角どんな場合にも、人を見る目線は上からであり、高貴寛大な人には頼るような目線で、また卑賤な人には蔑む目線で見えるものです。私たちにとっては、鼻の長い(=高い、ツンとした)人に出会えば、この人は単に象の鼻の持ち主だと看做しますし、横目で我々に応対する人には、この人は取るに足らないのだと看做します。あなたは私に何をしてくれたのでしょうか、召使いが私を排除しようとしているのに、その配慮をしてくれたのでしょうか? <sup>5)</sup> あなたの部下が私を(奴隷として)売り込もう(=決めつけよう)としているのに、あなたは私を買おうとしてくれたでしょう

1) 下って行く inhadara; 首都ないし主要都市に行くことを「上る」、そこから戻ってくることを「下る」と言い表すことは我が国も同様である。アラブは、民族の源郷となっているイエメンに行くことも「上る」と、またムスリムにとってイスラムの聖都メッカに向かうことも「上る」と言って、民族全体の観念となっている。

2) この冒頭の段落のサジュウは下線部の順に; baṣrati / hadrati, alfin / ṣaffīn, ṣanī'atan / dharī'atan, faḍli-ka / 'aqli-ka, rafīqi / diyqi.

3) 彼の不在には私は堪らなかった diqtu li-ghaybati-hi dhar'an; 直訳は、「私は彼の不在に腕を縮めた」。腕は力の基点、ここでは忍耐力を表す。

4) この段落のサジュウは下線部の順に; ankarta / hajarta, talāshat / tāshat, fāḍa / bāḍa, 'atā'i / jafā'i.

5) 召使いが私を排除しようとしているのに、その配慮をしてくれたのでしょうか? wa-anta lam taghris-nī li-yaqla'a-nī ghulāmu-ka; 直訳は、「グラーム(ghulām 召使い、奴隷)が私(の木)を引き抜くために、私(の別の木)を植えてくれたのでしょうか」。

か？<sup>6)</sup> 人(の品質)は彼の召使い達(の立ち居振る舞い)によって知れるものです、著作物がその題名で知れる如くに。それ故部下たちの不作法があなたの命じられたことであるとすると、必要とするものは何なんでしょうか？もしあなたがこのことを把握していないとしたら、これまた何とした驚きでしょう！」<sup>7)</sup>。

こう言ってから、若者は次のように詠じた：

ハラフ・イブン・アフマド殿<sup>8)</sup> 彼の両手が栄えますよう<sup>9)</sup>

zafīrat yadā Khalafī bni Aḥmada inna-hu

まこと彼は近づきになるに容易く 配下の者礼儀正しい

sahlu l-finā' mu'addabu l-khuddāmi

思わずや 寛大さこそ人に伝わり行くもの

awa mā ra'aytu l-jūda yajtāzu l-warā

主人の手から居住する邸全体に満ちるもの

wa-yahillu min yadi-hi bi-dāri muqāmi

(カーミル kāmīl 調 mīmīyya m 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：こう吟じ終わると踵を返して立ち去った。私もすぐ続いた、宥める積りであった。気持ちを落ち着かせて、戻ってくるまで説得を続けた。説得に応じたのは、漸く「居心地を悪くする人とは同席しない」という誓約を取り付けた後のことであった。私もまた彼への相応の敬いを示し共に過ごした<sup>10)</sup>。

## 第38話 ハラフのマカーマ 躰を見れば主人が分かる 完

### 第38話 訳者解説

本話も短くて、あっさりとしており、解説の要はないのだが、副題に「躰を見れば主人が分かる」と付しておいた。逆照射してシジスターンの太守ハラフ・イブン・アフマドの人事行政が賛美するものとして賞揚されている帰結である。前話の第37話およびこの本話は、ハラフ・イブン・アフマドに捧げたものと推察される。マカーマとしてか、リサーラ(書簡)としてかは別にして。

主人公である若者がバスラ知事として赴任する語り手との船旅の中で、彼への客扱いは一切記されていない。最後の後舞台で二人だけになり、その理由が明かされる。語り手(=知事)の部下も供回りの者も見えないところでは主人公への客扱いが侮蔑的であった、というのだ。部下や目下、家族の者の躰がなくなっているのは、主人の考え方や教育の不徳の致すところであり、一緒に居られないのは目に見えているとして、官邸に厄介になることなく離脱して行った。「もしあなたがこのことを把握していないとしたら、これまた何とした驚きでしょう！」との発言は、上に立つ者には強烈な反省を促すものとなっている。その反対に行き届いた客扱い、及び部下の者の躰を疎かにし

6) あなたの部下が私を(奴隷として)売り込もうとしているのに、あなたは私を買おうとしてくれたのでしょうか？  
lā shtarayta-nī li-tabī'a-nī khuddāmu-ka: 直訳は、「あなたの部下・手下が私を売ろうとしているのにあなたは私を買おうとしなかった」。

7) この段落のサジュウは下線部の順に: ḥālin / 'ālin / idlālin / idhlālin, ṭawīlin / flīn, shazrin / nazrin, ghulāmu-ka / khuddāmu-ka, ghilmāni-hi / 'unwāni-hi, awjaba / a'jaba。

8) ハラフ・イブン・アフマド殿 Khalaf ibn Aḥmad; 前話第37話の注10を参照。

9) 「彼の両手が栄えますよう！」 zafīrat yadā-hu とは、『コーラン』第111章1節の有名な罵言、「アブー・ラハブの両手が減びますよう！」 tabbat yadā Abī Lahabin を捩ったもので、逆に賞賛・讃嘆を表す言い回し。

10) この最終段落にはサジュウの配慮は見られない。

なかった典型として主人公が詠じたのは、他ならぬ前話で既に登場しているハラフ・イブン・アフマドであった。「彼の両手が榮えますよう／まこと彼は近づきになるに容易く 配下の者礼儀正しい／思わずや 寛大さこそ人に伝わり行くもの／主人の手から居住する邸全体に満ちるもの」と。このことから本話が創作されたのは、彼がジジスターンのアミール(太守)のもとに滞在した後か、滞在中であったことが分かる。先の第37話に引き続く主題となっている。

アッバース朝の帝都バグダードから任地バスラへは船旅で向かう。バスラはベルシャ湾岸の開港なので、そのまま海に出航もできる。この両都間を船旅で行き来する。これは、ティグリス川に沿うバグダードが造営された8世紀中葉から、ごく普通に採られた交通手段であった。カリフの船の上での宴会とか、サロンの開催とか催されたことが知られている。こちらはユーフラテス河の船旅であるが、アル・ハリリー『マカーマート』では第22話で、農地の検地に向かう書記官と会計官と共に主人公と語り手が船で乗り合わせ、書記官と会計官どちらがどんな点で善し悪しがあるかを論じ合うムナーザラとマハーシン・ワ・マサーウィーの興味深い話が展開されている。

語り手イーサーが今回は驚くことに、バスラ知事に任命され、任地に赴くとの設定である。本話では二度、本舞台と後舞台の初めに口上を述べるのは、定型に沿っている。しかし肝心の主人公がここでも現れず、「若者」で通してしまっている。一工夫すれば、アレキサンドリア出のアブ・ルフアトフに変えることもできたはずである。詩の挿入であるが、後舞台の帰結部に僅か2詩行入れ込んでいるだけで、本舞台のクライマックスには欠けている。と言うよりクライマックスがないままストーリーを終えてしまっている、と言った方が当たっているように思う。

サジュウ文への配慮であるが、注10に付したように最後の段落だけがその配慮に欠けてしまった。本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版、Paris 版いずれにも欠如している。



第39話注4の参考図

ミンバル(説教壇)から語り掛ける説教師、座って上目遣いに耳を傾ける信者達。モスクの中だけに説教師も信者たちもターバンはタハンヌク「あご結び」をしている様が描かれている。

(アル・ハリリー『マカーマート』の挿絵より)

ターバン(‘imāma)の巻き方にもさまざまあり、また両端に垂れ降ろすヒルカ(khirqa、布端)にもさまざまなダンディー振りの工夫もされるところである。中でも一切そうした飾りや優雅さをひらめかすことをせず、端の両端を下顎の所で結ぶか、下顎を通した後、左右どちらかの端で結んでしまう巻き方、これを「あご結び」と言う。敬虔な信者、真摯で質実なアラブのターバンの巻き方だとされる。原語ではタハンヌク(tahannuk)、またはタラッハー(talahhā)と言う。いずれも「上顎」(faqm, fuqm)と対になる「下顎」の語、ハナク(hanak)、ラフユ(lahy)から派生したものである(ほかにdhaqanもあるが)。「ターバンの両端をあごの下で結ぶこと」である。この「あご結び」は同時に来世への信仰と直結している。この「あご結び」は生前のターバンの結び方とされているだけではない。死後あごが下がらないようにあごから頭にかけて紐や布で巻かれる風習がアラブ世界にはある。メッカ巡礼のイフラーム(巡礼着)が鎖帷子とされるのと同様、個人の愛用のターバンのヒルカで巻かれ、棺に納められる。この死後処理のあごの巻き方、これもタハンヌクまたはタラッハーと言われている。

## 39 話 ニシャーブールのマカーマ 巡礼者をカモにしようと

(原文 M. 'Abduh pp. 199-201)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私がニシャーブール<sup>1)</sup>に滞在していたことであった。金曜日であったので、義務と定められている礼拝<sup>2)</sup>に出かけた。そして礼拝が済んでモスクの出口に向かうとき、ダンニッヤ帽<sup>3)</sup>を被った一人の人物が傍らを横切って行った。慣行に従って(帽子の上に巻いたターバンの結び目を)顎の下に結わえていた<sup>4)</sup>。そこで私は彼の傍らについて行き、言葉を掛けた、「あなたは何方で御座いますか?」。彼が答えるに、「わしで御座るか、言うならば蛾で御座る、孤児の綿衣(=財産)にのみ棲み付く。蝗で御座る、禁じられている農作物にのみ飛来する。盗人で御座る、ワクフ(宗教的な寄進)が収納された宝箱をのみ挟じ開ける。クルド人<sup>5)</sup>で御座る、弱者だけを狙い稼ぐ。オオカミで御座る、付け狙うは神の奴隷達(=敬虔なイスラム教徒)、礼拝中の屈拝<sup>6)</sup>と額拝との間を狙って。戦士で御座る、契約時に証言の場で神の資産を(不正に引き出して)強奪する。

わしはダンニッヤ帽を(表では)被り、敬虔さを(裏では)脱ぎ去る者なのよ。タイラサーン頭巾<sup>7)</sup>着て正直そうに振る舞うが、手や舌ではあの手この手を遣り放題。髭は刈り揃えて短く(信心深そうに)見せてはいるが、(人を誑かす)仕掛け網は長く伸ばす。雄弁<sup>8)</sup>さを表に顕わすが、己の汚点は覆い隠す者よ。鬚は白く染め(尊敬される風には見え)ども、(最後の審判に差し出される善悪の行状の)帳簿は黒く染める者。節制で上辺は覆えど、内には貪欲さを隠す者。(あなたは誰と問われればこう答えましょう)<sup>9)</sup>。

私は呆れて言った、「何とまた、アッラーよこの人を呪い給え! いったいあなたは誰なのです?」。

- 1) ニシャーブール Nisābūr: イラン東北部、ホラーサーン州の大都。東の中国、西のイスラム主要国を結ぶ幹線上にあり、イスラム化されたのはイスラム暦 31 年、西暦 651~52 年。ウマル・ハッヤームやアッターールの故郷。著者アル・ハマザーニーもジュルジャーノを経て、382/994 年頃ここに滞在し、『マカーマート』を完成させたとする説がある。
- 2) 義務と定められている礼拝 mafrūdāt: 普段は何処で礼拝しても、どのモスクで礼拝しても構わないが、金曜日の正午の礼拝は、ジャーミウ(al-jāmi' 集団礼拝モスク、金曜モスク)と呼ばれる市・町の代表的なモスクで集団礼拝することになっている。
- 3) ダンニッヤ帽 danniya: 長めの丸型壺形の帽子。壺のダン dann と類似しているところからの命名。主に法学者や法官が着用。帽子が高ければ高いほど権威の象徴とされた。例図はアル・ハリリーアの『マカーマート』I 304 (平凡社版)の挿絵を参照されたい。
- 4) 慣行に従って(帽子の上に巻いたターバンの結び目を)顎の下に結わえていた: 原語では taḥannaka。前頁図を参照。ターバン('imāma)を結んだ後、その端布(khirqa)を上に向けて華美に見せるのが世の常識であった。そうすることをせず、下顎(hanak)に垂らすよう敬虔なムスリムには勧められている。注3で紹介した別図では法官のターバンの端は上を向いて、派手に見せている。比較されたい。
- 5) クルド人 Kurdiyy: イラク・トルコ・イランの国境山岳地帯に住む民族で、イラン語系のクルド語を話す。アラブにとっては、「山の民」、「山岳遊牧民」、勇敢さ、武勇で知られ、悪い評判では我が国の「山賊」のイメージで捉えられていた。本話末の解説参照。
- 6) 屈拝 rukū': イスラム教の礼拝 salāt には、ルクアと呼ばれる一巡の所作があり、その中の最初キヤーム(qiyām 立拝)の後、両手を膝に添えて屈むルクウ(rukū' 屈拝)、その後に座って念ずるのがジュルス(julūs 座拝)、そして床に額を付けて念ずるのがスジュール(sujūd 額拝)である。いずれの所作もその間に唱える文句が定まっており、また時間もたっぷりとられている。
- 7) タイラサーン頭巾 ṭaylasān: 頭全体を覆い肩まで垂らす頭巾。学者や高官、名士などが敬虔さ、慎み深さを示すために着用した。アル・ハリリーアの『マカーマート』拙訳第23話注6を参照。
- 8) 雄弁 shaqāshiq: 単数形は shiqshiqā。シクシカの由来は種雄ラクダが交尾の時期になると、己の力を雌に向かって誇示するため、口内にあるシャクシャカ(shaqshaqa 気囊)を口外に出し、膨らまし、フルル・フルルと低い音が遠くまで響く音を出す。この動詞が shaqshaqa である。このラクダの誇示行為は、人間に学ばれ、演説や説教で「名調子」「雄弁さ」を発揮した時に言われる。
- 9) この冒頭の二段落のサジュウは下線部の順に: danniyatan / sunniyyatan, aytāmi / ḥarāmi, awqāfi / ḍi'āfi, sujūdi / 'uhūdi / shuhūdi, daniyyata-hu / dīniyyata-hu, ṭaylasāna-hu / lisāna-hu, sibāla-hu / ḥibāla-hu, shaqāshiqā-hu / makhāriqā-hu, (liḥyata-hu / ṣaḥīfata-hu), wara'a-hu / ṭama'a-hu。

彼が答えるに、「アレキサンドリア出の者として知られる男ですよ」。思い当たった私は声を上げた、「アッラーよこの(出会いの)恩恵を育んでくれた大地に、そしてまたこの子孫を継承させた彼の父に、降雨齎しますよう！それではアブ・ル・ファトフ師よ、あなたは何処へ行こうとなさっているのです？」。「カアバへ」との師の返事。「バッヒン・バッヒン<sup>10)</sup>(良きかな、快哉)！そこでの饗宴(=稼ぎ)はまだでしょう、料理法はまだなのでしょう？(この私も参りますから)われわれはそれでは巡礼の道連れと言うことになりますね」と私が(嬉しそうに)言うと、彼は、「如何してそういうことになるのかね？わしは(カアバ正殿の)上手に行くのだよ、あんたは下手に行くんじゃないか」との意外な返事。「カアバ正殿の上手に行くとは如何いうことですか？」と尋ねると、「わしがカアバに行くのはな、生活の必要に迫られてのことだ。巡礼でカアバに行くのではないのだ。人の寛大さの溜まり場に行くのであって、聖なる(巡礼)者たちの溜まり場<sup>11)</sup>に行くのではないのだよ。戦利品目当てであって、犠牲捧げる目的などではないのだ。寄進物の対象に向かってであって、お祈りのキブラ(=信者が礼拝時に顔を向ける方角)に向かってではないのだ。(巡礼者と言う)客が目標であって、(巡礼地の一つ)ハイフがあるミナー<sup>12)</sup>であるわけではないのだからな」と答えるではないか。憤慨して私は、「そんなことをなさって何処に忝さなど在るのです？」と問い詰めると、師は(己の行為を肯定で)詠ずるまま答えた；<sup>13)</sup>

何処に居るや 信心深さと権能付与された王が

bi-ḥaythu d-dīnu wa-l-maliku l-mu'ayyad

彼によって高貴な人々の頬ぞバラ色に染まり得る

wa-khaddu l-makrumāti bi-hi muwarrad

彼の領地にては誰であれ大志あればはぐくまれる

bi-arḍin tanbutu l-āmālu fī-hā

居るとせばただ、その雨雲たるはハラフ・イブン・アフマド殿のみ

li-anna saḥāba-hā khālafu bnu aḥmad

(ワーフィル wāfir 調 dāliyya d 脚韻詩)

### 第39話 ニシャープールのマカーマ 巡礼者をカモにしようと 完

#### 第39話 訳者解説

最初に、最後の詩に出てくる人物ハラフ・イブン・アフマドについて説明をしておかねば、詩の内容が掴めないことになるので、説明しておこう。サーマーン朝のシジスターンを治めていたアミールであり、著者アル・ハマザーニーが滞在中世話になった人物である。この太守ハラフについては、37話から続けて読まれている読者には既にお分かりであろう。この3話はこの人物についてのある意味では讃歌ともなっている。従ってアル・ハマザーニーの『マカーマート』の完成が何時であっ

10) バッヒン bakhkhin: 感嘆を表す言葉で「でかした、お見事、良きかな、快哉」。他に bakh bakh, bakhī bakhī, bakhin bakhin とも。すべてラクダが嬉しい時に発する擬声音で、それが牧民に真似され、やがて民族全体の感嘆表現として一般化した。このバッヒンも含めて、「ラクダの感情表現」として拙著『文化誌』第13章「ラクダが鳴く」に記しておいた。

11) 聖なる(巡礼)者たちの溜まり場 mash'ar al-ḥaram; 正式には mash'ar al-ḥarām。押韻の関係で長母音を変化させた。ミナーとアラファートの間にあるムズダリファのこと。巡礼月9日目の夜、巡礼者たちはここで野営を行う。そのため大きな篝火が焚かれた。

12) ハイフがあるミナー minā al-khayf; メッカにあるカアバに隣接する巡礼地がミナー。ここにはハイフのモスクが設けられている。巡礼月10日目に最後の巡礼行と犠牲祭がここで行われる。

13) この段落のサジュウは下線部の順に; faḍla / nasla, (bakhkhin / tuṭbakh), muḥtāji / ḥajjāji, karami / ḥarami, sabyi / hadyi, ṣilāti / ṣalāti, ḍayfi / khayfi。

たか、ニシャープールで完成したと言えるのか、という時代確定の参考になろう。H. Anttila は 37～39、さらに 45、47、48 と続く一連のハラフ・イブン・アフマドへの称賛が背後の意図にあるマカーマ群は、著者がこの太守の下で過ごしたイスラム暦 383 (西暦 993/94) のことではなかろうか、と述べている (*Maqama: A History of a Genre* p. 60)。

注 5 で記しているアラブ人のクルド人観について一言しておこう。クルド人 Kurdiyy はアラブにとっては、丘陵・山岳地帯に住み、勇敢さ、武勇で知られ、「山の民」、「山岳遊牧民」として知られる。一方悪い風評では我が国の「山賊」のイメージで捉えられていたことを述べた。物乞い集団サーサーンとも深く関与している。これら物乞い集団サーサーン、その仲間の結束は非常に強く、その仲間となるには様々の資格と年季が必要とされる。その祖とされるサーサーンがこうした意味を担ったのには大別して二説ある。一説ではサーサーンはペルシャの王家の後継者であったが、父王の娘およびその子孫たちを偏愛して王位を娘の方に譲ってしまう。激怒したサーサーンは王家を飛び出し、「クルド人」たちのならず者集団の仲間入りしてしまう。すぐに頭角を現してリーダーとなり、この集団自体サーサーンと呼ばれるようになった。他の説ではサーサーンは歴としたサーサーン王朝の末裔であり、イスラム勢力に滅亡された後零落し、こうした「クルド」のならず者集団と組むことによって生業を得たとするものである。このサーサーン業については、アル・ハリリーの『マカーマート』の第 49 話「サーサーンのマカーマ」で死に臨むアブー・ザイドがその職業の利害、心得を遺訓として詳しく述べているので、参照されたい。同じくその第 30 話の解説においても触れている。

この第 39 話は、短くてストーリーの断片を切り取った形である。これからメッカのカアバ正殿に向かうところで、マカーマが終わってしまう。ということは、稼ぎの意思表示だけ見せて、その手口も稼ぎ高もこれからということになる。著者はカアバ参拝に関して興味深いことを、主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフに語らせている。てっきりハッジ巡礼に行くものと思った語り手イーサーは、それでは私も同行しましょうと意思を伝える。すると主人公の答は意外であった。自分は巡礼に行くのではない。つまりカアバの「下手」では無く、「上手」に行くのだ、と答えているのだ。この言い回しは、日常では用いられないのであろう、語り手イーサーがその意味を問い返しているのであるから。つまり主人公はマカーマの場としてそこを選んで行くところだと言うのだ。つまり稼ぎの対象はハッジ(巡礼者)達であり、彼らの純朴性と懐の旅金を目当てに行くことになる。ここで話を終えたのは、稼ぎの場を描くと余りに不謹慎になる、との判断があったかもしれない。アル・ハリリーの『マカーマート』の方では、第 31 話において修道僧風な貧相な身なりの主人公が、巡礼者たちに対して真の巡礼および巡礼者とは、を講釈して、布施を取る一篇がある。しかしこれとて聖地メッカで行っているわけでは無く、彼等が通過する巡礼道の一角をマカーマとして、行っている配慮がある。

主人公が自分はこういう者だと名乗った時、さまざまな阿漕<sup>あこぎ</sup>な渡世人振りを披露している。それを巡礼地でも当て嵌めて、このように稼いでマカーマとなれるのだ、と言わせている記述は、我々異教徒やメッカ巡礼に出かけていない者にとっては、逆に巡礼者たちのさまざまな神への純真な信仰と敬虔さぶりの具体的実在を逆照射して、我々に知らしめてくれていることになろう。その後の展開が気懸りのままに終えている。

形式としては主人公の登場と正体暴露、語り手イーサーの進行役、盛り上げの部分の詩の引用は欠如するものの、言い繕いとなる最後の詩は配慮されている。文体のサジュウ体は適宜工夫されている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版、Paris 版いずれにも欠如する。

## 40 話 イルム (知識) のマカーマ 心に知識の木を植えて根を張ればこそ

(原文 M. 'Abduh pp. 202–203)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私は流浪中の身であったので、様々な土地を渡っていたものであった。ある時のこと、一人の男が他の男に話し掛けているところに出くわした。「如何やって学識を獲得していけるのだろうか?」。他の一人が答えるに、「そうですね、知識を求めて来ましたが、目標が遠くてその達成は難しいと思っています<sup>1)</sup>。(知識の習得とは) 弓矢で打てば当たるといふ類のものではありませんし、筮竹 (azlām)<sup>2)</sup>で分け前を(勝ち矢で)得るといふものでもありません。夢見 (manām)<sup>3)</sup>で現実になることもないでしょうし、競馬の馬勒 (lijām)を制御したからといって(勝ち馬券)を入手できるという類のものでもありません。また父祖からの遺伝で継承出来るものでも、寛大な方から借用するわけにもゆきませんからね<sup>4)</sup>。

そこで私は一念発起しました、寝る所は土の上に、石を枕にすることを。怠惰を追い返し、危険に身を乗り出すことを、夜間の勉強をより長くして励むことを、(知己を求めての) 旅の同行者となることを。また様々な意見を持つ人の会合に、思念を業で体験する人の集まりに、好んで参加するすることにしました。そうしますと見えてきたことがありました、最善の方法、それは(知識の) 木を植えることなんだ、心の中に木を植え込むことしか無いのだと。そうすれば目指すものも僅かとはいえ獲得出来得ようし、それだとして他でも無い胸中(に根付く)物となるのであるから。獲物として狩られようが余程の口調の罠に騙されることも少なくなるし、記憶の網以外には捉えられることは無かろうと<sup>5)</sup>。

それでこの確信を我が精神に掛けて持ち運び、目の奥に仕舞い込むことにしたのです。人生の指標として時に応じて用いて、心中の宝として貯め込んできたのです。こうして学習によってさらなる文章力を向上させました。見通しを持つことにより、分析することに通じ、さらに分析が集中を高めました。それ以上のことは神慮に依拠することにしております<sup>6)</sup>。

聞いていた私にはこの人物の言葉が耳に染み入るようであった、心の琴線に触れ、胸に鳴り響いていた。そこで声を掛けた、「そこのお若い方、その太陽の昇り口は何処で御座いますかな?」。すると彼は答えるに詩を以て詠じた：

1) 「目標が遠くて…」の文から「…借用するわけにもゆきませんからね」までの6文は、英訳者 Prendergast によれば、著者の『書簡集』第41の中に、全く同文で一字一句換えることなく再録されていると述べている。(Prendergast p. 152)

2) 筮竹 (azlām、単数形 zalām)：ブレイスラム期に盛んに行なわれた筮竹。部族神や有力神の神殿や社の前に置かれており、鏃の付かない矢が3本が収められていた。3本のそれぞれには「許可」、「禁止」、もう一本は無印で「やり直し」の意味を持っていた。旅出、結婚、自分では判断しかねる時、往時のアラブはこれに頼った。カアバ正殿にも見事な作りの矢筒と矢軸が収められていたと言われる。詩人イムルウ・ル・カイスが父の敵討ちを果たさんと、筮竹で占ったことは知られている。イエメンのカアバと言われ、神託では影響力のあるタバラの地にあるズー・アル・ハラサ (Dhū al-Khalasa) 女神の社で、筮竹を引いたところ「禁止」と出た。何回も引いてみても、矢張り「禁止」と出た。怒ったカイスはその筮竹を折って、「何と頼りないものかな! お前が私の立場だったらどうだ! ?」と悪態をつきながらそれらを神体に投げつけたと言う。ここでは賭矢 (maysir) の方を指して言っているのであろう。本話末の解説を参照。

3) 夢見 (manām)：夢占いもまたアラブは好んだ。イスラム最初期の Ibn Strīn (654–728) が著わした *Ta'bir al-Ru'yā* 『夢判断』の書は権威あるものとされ、以降の様々な夢見に対しての根拠とされた。拙稿「アラブの夢判断・断章」『サウディアラビア協会報』第108号 昭和58(1983)年9月 pp. 8–9、及び「ナーカ(雌ラクダ)の表象(2) ナーカと夢判断」『中東協力センターニュース』第12巻第6号 昭和62(1987)年9月 pp. 35–38をも参照。

4) この冒頭段落のサジュウは下線部の順に：marāmi / sihāmi / azlāmi / manāmi / lijāmi / a'māmi / kirāmi。

5) この段落のサジュウは下線部の順に：madari / hajari / qajari / khatari / sahari / safari / nazari / fikari, gharsi / nafsi, nadri / sadri, lafzi / hifzi。

6) この段落のサジュウは下線部の順に：tahqiqi / ta'liqi / tawfiqi。

アレキサンドリア <sup>か</sup>彼の地こそ我が故郷

iskandariyyatu dārī

されどそれ 我が宿り定まること出来ればのこと

law qarra fī-hā qarārī

今や一人 夜ともなればシリアを徘徊し

lākinna bi-sh-shāmi laylī

昼ともなればイラクをおちこちさ迷う

wa-bi-l-‘irāqī nahārī

(ムジュタッス mujtathth 調 rā’iyya r 脚韻詩)

第40話 イルム(知識)のマカーマ 心に知識の木を植えて根を張ればこそ 完

#### 第40話 訳者解説

本話の注2で述べたが、筮竹(zalam)と同じく、ブレイスラム期に盛んに行なわれた、矢の軸のみを用いた賭け事ゲームにマイシル maysir があった。筮竹が3本矢を用いての託宣であったのに対して、マイシルの方は賭け事であった。10人が名乗り出る。そして10本の矢軸が用意される。刻み目 wasm al-qidh が入っていると当たり矢となり、無印だと外れ矢となる。1番矢から7番矢まで当たりがある。残り3本が外れ矢で、引いた者は賭け徳の費用(多くの場合老ラクダ1頭分の額)を支払わせられることになる。刻み目が多いほど賭け徳を多く得る。賭け徳は屠体とされ28等分に切り分けられる。1番矢が最も多くの賭け徳を得るのではなく、7番矢が最も多くを得る。即ち1番矢は28分の1を得るだけであり、7番矢は28分の7の多くを得るところが面白い。マイシルは冬の娯楽として、富裕者や有力者が寛大さを誇示する一面を持ち合わせていた。焚火を囲んで、周囲の参集者に大盤振る舞いを行うのである。第28話の中にも「彼の求める回答にはどんな賭け矢を混ぜ合わせたところで、当たり矢など引けそうにもなかった。正解へ導いてくれるのは、ただ「私には分かりません」と答えるだけであった。」と出てくる。またハリリーの方では、第35話、36話、50話にその記載がある。訳者もマイシルに関してのエッセイがある、「アラブ遊牧民の娯楽―「賭矢」再現―」月刊シルクロード第4巻4号 昭和54(1979)年5月 pp. 24-27。

本話も掌編である。知識や学識を獲得するには、どうしたらよいのかと言う主題が展開される。二人の対話に、語り手が耳を傾ける。一人が問い掛け、他がそれに答える。その獲得法を答えた若者が、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師であったという設定である。修練や経験を積んだうえでの、老成の開陳であったろうに、若者(fatā)に語らせている。ここでの知識や学識を獲得する方法は、疑いもなく著者のそれを述べたものであろうから、体験談の披露の一端を我々に教えてくれていることになる。「そこで私は一念発起しました」以降の述懐は、著者の知識欲と旅好きが良く表されている。知識を求めての旅はアラブ・イスラム世界では推奨されていたことではあるけれども。

マカーマとしては、文体は全体にサジュウへの配慮もなされてはいる。そして詩の挿入は正体暴露となる最後に2詩行がはめ込まれている。しかし作品自体が短すぎる。もう少し内容に盛り上げや肉厚にする工夫が見られれば、主人公および語り手の配置は順当であるだけに悔やまれる。本舞台と裏舞台の配慮も見られず、筋書きも3人の登場と動きのない会話だけで終わる。本話も、注1

で指摘されているように、H. Anttila (pp. 61, 88, 120, 143) もまた著者の『書簡集』から採られた可能性を指摘している。さらに著者ハマザーニーは『マカーマート』で知られたのではなく、『書簡集』の方で、バディーウ(時代の驚異)となったのである。『書簡集』からマカーマに採られたものはあっても、逆のマカーマ作品から『書簡集』に採り上げられたものは無い旨述べている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版、Paris 版いずれにも欠如する。

## 41 話 ワスイッヤ(忠言)のマカーマ 世渡り商人としての心得

(原文 M. 'Abduh pp. 204-206)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：アレキサンドリア出の  
 アブ・ル・ファトフ師は商売を彼の息子に任せることにした。師は息子を前に座らせ、教え諭した  
 のである。曰く：アッラーに感謝あらんことを、アッラーに讃えあらんことを、そしてその預言  
 者に礼拝を捧げられんことを、アッラーが彼に礼拝と平安与えられんことを！おお我が息子よ(yā  
 bunayya)、わしはお前の頭の良さは信頼しているし、血筋の純粋性(=嫡男)も保っている。とは  
 いえ案じていることがある。心配は悪い方へ進むものでな<sup>1)</sup>。お前自身とお前の采配に全幅の信頼  
 を置いているわけではない。欲望のままということも、サタンの誘惑ということもあろう。そうし  
 たことのためにも助けを求めることを忘れるな、昼には断食を<sup>2)</sup>、夜には睡眠を専ら心掛けるよう。  
 良いか己の(振る舞いの)外面を装うは空腹ぞ、内面支えるは睡眠ぞ。(百獣の王)獅子もその外面  
 内面の両衣を覆っていればこそ、厳しい威厳を和らげることも出来るのだ。この二点のこと肝に銘  
 じたかな、あばずれ女の息子よ<sup>3)</sup>？<sup>4)</sup>

このことがお前の気がかりの一つじゃ。だが他にも幾つかある、二種の盗賊の被害に対しても、  
 お前が万全ではないということだ。一つは寛大さという盗賊じゃよ。もう一つは食欲<sup>5)</sup>という名の  
 盗賊なのだ。この二盗賊には重々肝に銘じておくのだぞ。寛大さの方であるが惜し気無く与えてい  
 たら、財産蝕むは蛾(の幼虫が食べる)よりも早急いということ。また食欲はパスース<sup>6)</sup>(という  
 女の引き起こした長期の部族戦争)よりも根の深い不幸であるということ。人々の言っている「ま  
 ことアッラーは寛大であらせられる！」というのは止めて欲しいものだ。そんな言は離乳させよう  
 とする乳児に対しての子供騙しに過ぎない。いや全くアッラーは確かに寛大であらせ給う。アッラー

- 1) 案じていることがある。心配は悪い方へ進むものでな innī shafīqun wa-sh-shafīqu sayyī'u z-zanni；人間の心理は  
 何処も同じ。心配事は杞憂となり最悪の事態まで想像を進めてしまうもの。普通の言い回しは；inna sh-shafīqa  
 bi-sū'il-l-zanni muwla'un (心配は悪い考えを扇動するもの)。
- 2) 昼には断食を nahāra-ka bi-ṣ-ṣawmi；朝夕の二食が普通であったが、この表現は昼食も入った日に三度の食事慣  
 行が広まっていたことを明かしている。謹厳な者、敬虔な者、修験者などはそれでも二食で通し、昼食を抜くこ  
 とを常習化させていた。「昼食」の断食である。シアスタ(昼寝)文化圏では、空きっ腹を抱えての昼寝は辛かろ  
 う。昼寝をとらずに、夜早い時間帯に寝床に着き、深夜の勤行を行う習慣もあった。更に「一食主義者」もいた。  
 すぐ後で述べられるワジャバート(wajabāt < wajba 一日一食)がそれである。
- 3) あばずれ女の息子よ yā bna l-khabīthati；この言い回しは真実を言ったものでも、罵言でもない。可愛さや親し  
 さを顕わにするときに、善意が口からこぼれ出しているの言いまわしなのである。妻には落ち度は何もなくとも、夫婦  
 の間では yā khabīthati「おおい、あばずれ」と夫が冗談めいて呼びかける。「可愛さ余って憎さ…」での表現形態  
 である。以下に出てくる息子への呼びかけ、「呪われ女の息子よ」、「お前の母など亡くなつてしまえ」も同様で  
 ある。
- 4) この冒頭の段落のサジュウは下線部の順に；'aqli-ka / aqli-ka, sultāna-hā / shaytāna-hā, ṣawmi / nawmi, jū'u /  
 hujū'u。
- 5) 食欲 qaram；欲望のなかでも食欲、食欲の中でもカラムは「肉を食べたいという欲望」のこと。他にアラブの牧  
 民思想を如実に顕わす食欲はアイマ'ayma「ミルクを飲みたいという欲望」などという用語があって興味を引く。  
 「ミルク」を常食とする遊牧民の間では、二日も飲んでいないとなると禁断症状が出て、アイマなどは相当激し  
 く襲うものであろう、と想像するのは難くない。
- 6) パスース Basūs；パスースは半島東北部タミーム族の分かれタグリブ族の Munqadh の娘であった。自分の所有  
 するラクダ Sirāb を親戚のラクダ番に預けて放牧してもらっていたが、ある時バクル族の族長 Kulayb が himā  
 (占有地)としていた牧地に Sirāb が入り込んでしまった。かねてから「占有地に入ったラクダは殺す」と宣言し  
 ていたその族長は Sirāb の豊かな乳房を射ぬいてしまった。Sirāb はよろけながら飼い主パスースのテントまで辿  
 り着き息絶えた。パスースの驚き、怒りは物凄い呪いとして爆発した。タグリブ族は、彼女への同情及び Sirāb  
 の不行き届きを痛感して決起した。そしてタグリブ族は隙を狙ってバクル族の族長を殺してしまったのである。  
 こうして一頭のラクダ Sirāb の殺害、パスースの悲嘆と呪いは、血を血で洗う部属闘争へと発展し、「パスースの  
 戦い」として 40 年もの長きにわたって続くことになった。この「パスースの戦い」については拙稿「パスース  
 の戦い——40 年に亘る部族闘争」、「日本サウディアラビア協会報」(上)第 90 号 昭和 55(1980)年 9 月 pp. 4-10、  
 (下)第 91 号 昭和 55(1980)11 月 pp. 9-14 を参照。

の寛大さは我々を(富み)増してくれていよう、だがしかし神自身は何も減じて(損)はしていないのだ。われわれに益を与えていようが、自身損害を被っているわけではないのだ<sup>7)</sup>。

良いか、誰であれ我々と同じくこうした(恵まれた)状態にいれば、寛大にさせてあげなさい、勝たせてあげなさい。寛大さなどというものは、お前の富を増加させはしない、それどころか(貯めてきた)わしの富を減少させるだけなのだ。お前を飛躍させるところか、わしの足を引っ張るだけにすぎない。突き放すことだ！口達者になれとは言わぬが、嘘も方便と言いたい。この二つのことを理解できたかな、呪われ女(mash'ūma)の息子よ？ 全く商売というのは石から水を湧き出させる<sup>8)</sup>ようなものだ。食事の一回と次の一回の間でさえも(何が起こるか分からない、ましてや船旅などは)よく海風(ほどの強風)が吹き付けるものだ、但しそんなに危険がいつもあるわけではないがな。しかし時には(その船を飛ばす距離は)中国(にまで飛ばす)ほどにもなることがあるものじゃ、たとえ実際旅するわけではないにしても。(旅にあるとして)そんな時後生大事の商品をいとも容易に手放すつもりかね、(お前の)手許に然としてあるのかかわらず。その後で求めるのかね、取り返しがつかないものを(=後の祭りを)？ この二つのことを肝に銘じたか、お前の母など亡くなってしまう(lā umma la-ka)<sup>9)</sup>！

大事なものは資産じゃ。その点お前は(わしのことを)アッラーに感謝せねばならないぞ。それ故、浪費してはならない、使う時は利益ある場合のみと心得よ。(一族郎党に対しては)食べるのはパンと塩、これは良いとして酢と玉ねぎ、これはお前の許可とせよ。そうしたとて非難されはしまいし、(同膳に並べて)一緒にしておく必要もあるまい。肉についてだが、それはお前の筋肉を作る大事なもの。食べなければならないが、(そう多くは)食べないよう期待する。甘い食物類<sup>もの</sup>については、その節制をしない者は脇腹のどちらかに落ちる<sup>10)</sup>ことになる。ワジャバート(wajabāt < wajba 一日一食)、これが清貧な信者の生き方なのだ。空腹時に食べる、これは損失を生じさせない対処法ではある、かといって<sup>たらふく</sup>鰻腹食べることは死を早めることになる。人と交わることも大事なことで、但しチェスの仕掛け人<sup>11)</sup>の(=相手に負けない)ように対処すること。相手の所有するものはすべて奪いなさい、そしてお前の所有するものすべては保持するのだぞ。我が倅や、このわしは言い聞かせた積りだ、言うべきことは伝えたはずだ。お前が受け入れてくれるのなら、神はお前の裁量と共にあろう。受け入れてくれないのならば、お前の(善悪の諸行の)算定人となるであろう。アッラーよ、我らが教主ムハンマドに礼拝を捧げますよう、また彼の聖家族、彼の教友たちすべてにも礼拝を捧げますよう！

#### 第41話 ワスイッヤ(忠言)のマカーマ 世渡り商人としての心得 完

7) この辺りのアッラーと寛大さについての発言は、文学作品だからこそ許されている面があることを強調して指摘しておかねばならない。

この段落のサジュウは下線部の順に：karamu / qaramu、sūsi / basūsi。

8) 全く商売というのは石から水を湧き出させる innamā t-tijāratu tunbiṭu l-mā'a minā l-hijāratī；アラブの概念では、石とか岩は一旦沁み込んで吸収した水を決して外に出そうとしない、と考えられており、それ故「ケチでしみったれ」の代名詞となっている。「運が付いていれば石からすら水を得る」第22話注9を参照。

9) この段落のサジュウは下線部の順に：'abqariyyun / buqariyyun、(bahri) / khaṭara / safara。

10) 脇腹のどちらかに落ちる 'alā ayyi janbay-hi yaqa'u；体のどこかに、特に脇腹に落ちて、肥え太ることになる。結果として体の不調を訴えること、命を縮めることになる。アラブ男性は酒をやらない代わりに、甘いものの好きが激しい。年を経るほど肥満して心臓病や糖尿病患者が実に多い。

11) チェスの仕掛け人 lā'ibu sh-shitrānji；チェスの原語 shitrānj はペルシャ語 chatranj からの借用語。ペルシャ語は発祥の地インドのサンスクリット語 chaturanga に由来。四天使または四軍(象、騎馬、戦車、歩兵)が語源とされている。第15話注6を参照。またアル・ハリリー『マカーマート』第36話では20問の謎掛けの中の、問い⑫に[fāraaziin (チェスの女王 firzaan の複数形)]の記述がある。

## 第41話 訳者解説

今回のテーマはワスイッヤ (waṣiyya) についてである。「忠言」が広い意味であるが、「遺訓」の意味でよく用いられる。本話にも息子に対しての罵言、「あばずれ女の息子よ」とか、「呪われ女の息子よ」、「お前の母など亡くなってしまうえ」など、日常生活の言い回しを伺わせる表現が出てくるが、「遺訓」の文体として最も多いのは、「おお我が息子よ」と呼び掛けるヤー・ブナッヤ yā bunayya で始まるものである。

世渡り商人としての心得を説いているので、遺訓の主題が限られてしまった。資産を減らさないこと、食欲を抑えることの2点に集中している。これを「二種の盗賊」と名付けて、その被害に重々合わない様に、普段から心掛け万全にしておくようにと戒める。アラブの最大の徳とされる「寛大さ」についても具体的な「盗賊」としており、以下の発言は彼の『書簡集』から採られた一節をマカーマに流用したものであるが、真摯に受け取ったら問題を醸すものである。実際アッラーにとってはその通りであろうが、余りにも利己的で、反モラル的である。また信者としてはあるまじき発言であり、よくそのまが原文として残ったものである：

人々の言っている「まことアッラーは寛大であらせられる！」というのは止めて欲しい。そんな言は離乳させようとする乳児に対しての子供騙しに過ぎない。いや全くアッラーは確かに寛大であらせ給う。たしかにアッラーの寛大さは我々を（富み）増してくれていよう、だが神自身は何も減じて（損）はいないのだ。われわれに益を与えていようが、自身損害を被っているわけではないのだ。

しかしイスラム社会が、ヘゲモニーを握っている時代では、イスラムの教えに対しても元来は寛容であり、それを許す環境があったはずで、ムウタジラ思想を始め、神に対しても、聖典『クルアーン』も合理に照らして批判を許容した時代もあったのであるから。

もう一つの盗賊、それは食欲である。食欲はそのままに放っておくと別の「盗賊」となるとする。自分だけでなく家族や使用人にも、「食べるのはパンと塩、これは良いとして酢と玉ねぎ、これはお前の許可とせよ。そうしたとて非難されはしまいし、（同膳に並べて）一緒にしておく必要もあるまい。肉についてだが、それはお前の筋肉を作る大事なもの。食べなければならないが、（そう多くは）食べないよう期待する。甘い食物類については、その節制をしない者は脇腹のどちらかに落ちることになろう。ワジャバート（一日一食）、これが清貧な信者の生き方なのだ」として、この二盗賊には重々肝に銘じておく様にと説いている。用語ワジャバートも認識するに指標となる言葉となろう。

ワスイッヤを遺訓として、もっと多岐にわたって跡取りの息子に訓示したものに、アル・ハリリー『マカーマート』第49話がある。ここでの商人や広く名誉や地位のある人物の世界では無く、そこではもっと卑賤・低俗なサーサーン業のノウハウの伝授であって、それはまたそれで非常に興味がある。サーサーン業とは、無頼・遊業人集団のことで、門付け、物乞い、芸人など何か芸・行動に訴えて人々から小銭を得て生活して行くのを生業としている人々のことである。独特の用語や符牒を持ち、閉じられた職業集団の中に息づいているものであり、その集団の中に入っていかなければ外部からは知れないものが明かされる。アル・ハリリーの方ではサーサーン業についてアブー・ザイドは大きく二つに分けて遺訓としている。前半は士農工商ならぬ官農工商の欠点を挙げ列ねた末、サーサーン業の素晴らしさ、利点を教え諭す。それを鳥の生態に例えているのは興味深い。「サーサーン一族はどこに降り立とうが啄ばむことが出来るし、どこに嘴を差し入れようが中を空にしてしまう。どこを故郷とするわけでもなく、どんな権威も恐れることは無い。朝にはお腹を空かせていようが、夕方には満たされているのは鳥と変わるところが無いのだ！」。まさに鳥のよう

に自由で拘束されること無い。へいこらする必要も無く、また解雇されるのでもない。商品を持ち歩く必要も無く、土の奴隷に成り下がっているのでもない。一日の時間の殆んどを汗水流して益の上がらぬ職工とは大違い。著者は官農工商の内、工を最後に持ってきて、その直後にサーサーン業に突入していく配慮を見せているのは、ある種の技芸を保持し、磨き上げるところなど遊業人も職工と似ている節がある心理が働いたようにも窺える。遺訓の後半はサーサーン職気質、気構え、実際の稼ぎ方のノウハウであり、ここも味わい深い部分である。よくもこれだけ集めたなと思わせるほど微に入り細を極める。ともかく行動に移すこと、実践すること、移動し、めぐり回り、旅を重ねること。厚かましく、積極的に、さらには攻撃的に打って出ること。稼ぎの場に出る前には事前に情報を掴んで把握しておくこと。機会を捉えたら、それを好機として獲物の収穫に全力を挙げる。運を大事にし、それを切り開いて、機会を作り出すこと。どうしても上手く行かず運が付いていず、牙を剥いていると見定めたならその地を離れるべしとも。欲の無さ、怠惰、不活発さ、淡泊さはサーサーン職の最も嫌うものとして再三言及されている。

本話も短い一篇で、不備な点が多いマカーマである。形式的にみても、語り手イーサーが語り出してはいるものの、後舞台の引き回しも無ければ、結末も伝えていない尻切れトンボである。どんな経緯で語り手が関与しているのか明らかではないし、それが舞台も変わることなく主人公の遺訓をそのまま伝えて終わっている。拝聴している跡取りの息子が反応する設定の配慮も無い。

主人公にしたところで、いつの間にか大成した商人になってしまっている。資産を取り崩さないよう、跡取りに遺訓を垂れるほどの分限者になっており、内容的には騙りの語りはあるにはあるが、主人公像の性格付けに今一つ納得の行かないきらいがある。

文体としてサジュウの形式は保ってはいるものの、詩の挿入が欠如している。肝心な韻文での聞かせどころ、盛り上がりの部分、大団円となる部分での詩行の挿入が無いまま終幕を迎えている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では 27 話に、Sofya 版では第 22 話に収録されている。Paris 版では欠如する。

## 42 話 サイマラのマカーマ 信頼した友人達に見捨てられて報復する

(原文 M. 'Abduh pp. 207-216)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：サイマラ<sup>1)</sup>出身のアブー・アンバスのクンヤ(尊称)で知られるイブン・イスハーク<sup>2)</sup>(Muḥammad ibn Ishāq)が語るには；我が親友から聞き取ったものにもさまざま有益な話がある。そうした親友は私が多くの知人の中から選んで、更に選り抜いた人物で、まさかの時にその人には是非頼ろうとした方であった。彼の発言には忠言を受けたい人には忠言となり、戒めを受けたい人には戒めと、論しを受けたい人には論しとなっておった。さてある時私がサイマラから平安の都(Madīna al-Salām バグダードの美称)へ船旅で向かった時のことであった。旅の持ち物の中には、ディナール金貨の巾着袋、旅具、身の回り品などがあつた。その他の(大量の)持ち込み品としては普通の旅人には不要であろう。私は好んで乗客の(集まりである)社交の場に出かけた、今を誇る家系の人々、書記官たち、商人たち、名士の面々、金持ちや余裕ある人々、富豪、大土地所有者などの。交際相手として選別し、なにか逆境の事態が生じた時の蓄え(何重もの相談相手たち)としたいと思つて<sup>3)</sup>。

我々は朝には朝酒、夕べには宵酒を嗜んだし、乳飲み山羊<sup>4)</sup>の肉を味わったり、ペルシャ風オムレツ<sup>5)</sup>や、イブラーヒーム式ミンチ肉料理<sup>6)</sup>、辛味の効いたカリッヤ(qaliyya、複数形は qalāyā、揚げ肉)、ラシード風カバール<sup>7)</sup>(串焼き)、それに羊肉(humlān)に舌鼓を打ったりした。そして蜂蜜酒<sup>8)</sup>を飲んで、技芸のプロの、その名声は世界の果てまで知れ渡った歌姫たちの歌舞音曲に酔い痴れた。デザート(naql)としては皮剥きのアーモンド、砂糖菓子、氷砂糖を選んだ。場の雰囲気芳しさは薔薇の香りに包まれた。焚き染めた香はナッド<sup>9)</sup>であつた<sup>10)</sup>。

(こうして枕飯振舞をした)私はといえば、座に連なった人々の大方の意見では、預言者ムハンマドの従兄弟のアブドッラー・イブン・アッパース<sup>11)</sup>よりも賢く、アブー・ヌワース<sup>12)</sup>

1) サイマラ Ṣaymara；同名の地名は幾つかあるが、ここではイラク南部バスラの近くの町。

2) イブン・イスハーク Muḥammad ibn Ishāq；アブス族出身。クンヤ(尊称)のアブー・アンバス(Abū 'Anbas)とは「しかめっ面の父」の意。「しかめっ面」とはライオンの顔の表情を捕えており、それがライオンの威厳を増すものであったから、「ライオン」の別名となった。イブン・イスハークは教養ある詩人で、機知に富み、話し上手であつた。サイマラでカーディー(法官)を務めていたが、首都バグダードに出かけた折は、カリフ・ムタワッキルのナディーム(相伴、酒友達)を勤めている、247/861年頃とされている。多岐な分野にわたる34の著作を残したことが知られている。275/888～89年に死亡。

3) この冒頭の段落のサジュウは下線部の順に：tujjārī / yasārī / 'aqārī、ṣuḥbatī / nakbati。

4) 乳飲み山羊 jadāyā ruḍḍa；山羊肉の中でも、離乳期近くの、肥え太った仔山羊の肉が美味であつて、また肉質が良いとされている。子ヤギ肉のミルク煮はベドウィンの贅沢の一つであつた。

5) ペルシャ風オムレツ tabāhijāt fārisiyya；新鮮な肉、卵、玉ねぎでオムレツ風に仕上げたもの。

6) イブラーヒーム式ミンチ肉料理 mudaqqaqāt Ibrāhīmiyya；肉を細切れにして kutla(肉団子)に固めた後焼き上げる。現在のコフタ kofta の原型といわれる。イブラーヒームとは、アッパース朝第5代カリフ・ハールーン・アッラシードの兄弟の名前。彼はこの料理をことのほか好んだので料理名として知られるようになった。

7) ラシード風カバール al-kabāb al-Rashīdiyya；アラブを代表する串肉料理。ラシード風とはハールーン・アッラシードのこと。別に注記が無いが特別な高級揚げシシユ・カバールのことか。

8) 蜂蜜酒 nabīdh al-'asal；蜂蜜はイエメン産がよく知られ、それで作られた酒は最高級品であつた。英語にも蜂蜜酒を意味する mead という語がある。

9) ナッド nadd；ウード('ūd 沈香)またはアンバル('anbar 竜涎香)、またその混合香だといわれている。

10) この段落のサジュウは下線部の順に：ḥudhdhāqī / āfāqī、ṭabarzadu / wardu / naddu。

11) 預言者ムハンマドの従兄弟のアブドッラー・イブン・アッパース 'Abudullāh ibn 'Abbās；預言者の叔父アッパースの息子で619年メッカに生れる。知略に優れ、コーランを中心とした学問やハディース(伝承学)に通じ、賢人として知られた。ごく初期からコーランの語句は、それ以前の詩を理解してこそ正しく理解できると、率先して取り組んだ。正統カリフ・アリー時代、バスラ知事を勤める。68/687～88年ターイフで死亡。子孫はアッパース朝を興す。

12) アブー・ヌワース Abū Nuwās；アッパース朝の大詩人。既出、第1話注22、第28話注4以降、第35話注8以降を参照。

よりも機知に富み、ハーティム<sup>13)</sup>よりも物惜しみせず、アムル<sup>14)</sup>より勇敢であり、サフバーン・ワーイル<sup>15)</sup>より雄弁であり、カスィール<sup>16)</sup>より策士であり、ジャリール<sup>17)</sup>より詩作に長け、(詩品の内容は)ユーフラテスの水よりも甘美であり、(その詩風は)体のリフレッシュには何よりも喜ばしいものと認めてくれた。それもなにも私の気前の良さと気風の良さ、蓄えを取り潰したことが評価されてのことであった<sup>18)</sup>。

(こんな飲み食いを重ねたことにより) 積み荷が軽くなったためであろうか、(あろうことか) 船が傾いてしまったのだ! 食料袋(の重さ)は底をついていた。(傾いだ船内から)乗客は出入り口へと我先に逃げた。その時点で(生死に関わる) 重大さが誰の目にも明らかになった。窒息が心臓部まで達した(=余りの衝撃に息を飲んだ)。乗客たちは私を呪って罵倒した「厄病神め!<sup>19)</sup>」と。皆逃げ延びようと辺りに散った、火花の閃光の如くに。混乱が彼らを慌てふためかせ、一人、一人と船外に滑り落ちて行った。右往左往して逃げまわった。私はただ床に座ったままであった。彼等のことを思うと慚愧の念に堪えなくて、そのことで涙があふれて止まらなかった。私は一塊の糞程にも価値がないものなのだ、一人残され、孤独にされて、不吉が刻印されたフクロウ同然であった。それまでは普通に立ち居していたのに、今ではそれも許されず、(その場で)座ったり立ったりオロオロするばかりであった<sup>20)</sup>。

悔い嘆いてばかりいても、何ら益しないと考えるに至った時、私は慎み深さを脱ぎ捨て野生の性格を顕わにした。人に耳を貸さないツンボになり、あのムナーディーのラフタ<sup>21)</sup>よりも醜悪になった。我が様はさながら一心不乱の修道僧<sup>22)</sup>の態であった。財産は消え失せ、残ったは我が身を嘲るのみ。手許に残るは山羊の尾<sup>23)</sup>のみとは!(無我夢中で)気が付いてみると私は我が家にぽつんといるではないか。肝臓は粉々にされ<sup>24)</sup>、運に見放されたまま。既に涙が頬に溝を掘るほどであった。

13) ハーティム Ḥatīm al-Ṭāʾī: プレイスラム期タッイ族のアフザム Akhzam は寛大さ、持成し好きで評判を取った。それを何層倍にも輪をかけた寛大さを発揮したのがその孫ハーティム Ḥatīm であった。「ハーティムよりも寛大な」akram min Ḥatīm と諺にもなっている人物。アル・ハリリー『マカーマート』第44話注68を参照。

14) アムル ‘Amr ibn al-‘Ās (663 没): イスラム初期、預言者時代の末期、正統カリフ時代の遠征軍の将軍として活躍。その勇猛果敢な武勇は知れ渡った。エジプトを征服。彼にちなんだモスクがカイロに最古のモスクとして現存する。

15) サフバーン・ワーイル Ṣaḥbān Wā’il: 預言者ムハンマドが死んだ年(632 年)に生れ、ウマイヤ朝時代の 673 年死亡。イスラム初期、最大の雄弁家であった。説教師(khaṭīb)として活躍。その説教でもサジュウを含めた様々な技巧が多用され、流暢さを増し、聴衆を飽きさせることが無かったと言われる。アル・ハリリー『マカーマート』には多くの引用や記述がみられる。第5話注3、第6話注2、第16話注13、第17話注2などの箇所を参照。

16) カスィール Qaṣīr: カスィールと読ませているが、一般にはクサイル Quṣayr として知られる。Quṣayr ibn Sa’d のことで、ジャーヒリーヤ(プレイスラム)時代主君の仇をとるため、自ら鼻を剃り落とした。これで敵側を欺き、取り入って見事仇討ちを果たした。この長い仇討ち話の中にはクサイルの先見の明ある逸話がいくつも見られる。‘Askarī 俚諺集 I 107, 232-33 他。アル・ハリリー『マカーマート』第49話注22を参照。「カスィール(Qaṣīr)の洞察力」として記述されている。

17) ジャリール Jarīr: 既出、第1話注19、第7話注3、及び第35話注7の箇所を参照。

18) この段落のサジュウは下線部の順に: ‘abbās / nuwās, qaṣīrin / jarīrin, furātī / ‘āfiyati, murū’atī / dhakhīrātī。

19) 厄病神め プスラ burṣa: 危機・難局におとした張本人に対して罵倒する言葉。直訳は「らい病患者」。他の解釈は「不毛の、何も植物が生えない白砂の大地」。

20) この段落のサジュウは下線部の順に: matā’u / shirā’u, (jirābu / bāba), (qīṣṣati / ghuṣṣatan / burṣatan), firāri / sharāri, (dujratu / qatratu / yasratu / ajurrati / ḥasrata / ‘abrata / ba’ratan), shūmi / būmi。

21) ムナーディーのラフタ Raḥṭa al-munādī: munādī は「呼びかける者」の意味で、アザーン(礼拝に参集するのを呼びかける)者、即ち「礼拝呼集者」ムアッジンのこと。ラフタはつんぽ(tarsh)であったため、声が正調にならず、まして声自体が qabīḥ (醜悪)であったため、最悪のムアッジンとしてかえって名を高め、言い回しに登場するようになった。

22) 一心不乱の修道僧 rāhib ‘ubbādiyy: ‘ubbādiyy とは「奉仕する者」の強調形であり、ここでは「神にひたすら奉仕する者」である。英訳者の Prendergast (p. 158) はこれを固有名詞と解釈し、ヒーラ(かつてイラク中央部ユーフラテス沿いにあった町)を中心として修道生活を送った一団のキリスト教徒としている。

23) 山羊の尾 dhanb al-‘anz: アラブ世界の羊は「脂尾羊」といって、尾に脂肪を蓄え、ラクダの瘤のように、水や渇れに対する機能を果たしている。それ故脂肪肉が座布団をくっ付けたようになっており、食利用もできる。一方ヤギの尾の方は細く短く、何の役にも立たない。「価値の無いもの、下賤なもの」の代名詞。

24) 肝臓は粉々にされ mutafattitatan kabidī: 「悲嘆に暮れ」。我が国の「肝を潰された」よりももっと程度が激しい、悲惨な状態をいう。アラブの常識では「肝臓 kabid は感性・感情を支配する所、心臓は理性を支配する所」と考えられていた。第22話には「肝臓には火が点けられ ittaqadat la-ha l-akbādu」と出てくる。akbād は kabid の複数形。

居ついていた我が家<sup>デント</sup>とて廢墟、その跡は砂が吹き消し、かつての生活<sup>しるし</sup>の跡などすべてワジの激流に埋め尽くされて跡形なく、野獣がその棲む地として、朝な夕なうろつき、徘徊する<sup>25)</sup>。

私は、面子は失われ、頼るべき財産を使い果たし、慰安<sup>やすみ</sup>とするものも僅少になり、我が寛ぎの場所も汚物で不浄の所となってしまった。我が飲み友達は私を見捨てて、古き仲間<sup>わづか</sup>たちもまた寄り付かなくなった。いずれの顔もよそを向けて私の方へは視線を上げてくれないのだ。知った人間として認めてくれなくなった。軽蔑されているのだ、ハリーサ売りのバジュー<sup>26)</sup>のように、縄<sup>よ</sup>縛りのラジーンのように！私は河岸を当て所無くうろついた、その様子はガチョウの番人でもあるかのようであった。私は裸足で外に出て、砂漠の方に導かれるように向かっていた。私の眼は血走っており、わが命は抵当に入れられたようなものであった。恰も(砂漠にある)修道院から逃れ出たマジュヌーン(気が狂った者)であるかのように、あるいはまた家畜囲いの中を徘徊して回るロバのようであるかのように！<sup>27)</sup>

その時の私の寂しさといったら、兄妹サフルを嘆く詩人ハンサーウ<sup>28)</sup>か、息子アムルを悼むヒンド<sup>29)</sup>のようであった。失われたものは私の理性ですらそうであった。我が身体も健全であるわけがない。財布が空なのは言うに及ばず、子飼いの召使いまで逃げ去ってしまった。こうなると悪い妄想が浮かんでは消えて果てしなくなり、悪魔の囁きはその限度を越えてしまった。私は家々に出没するジン<sup>30)</sup>に、そして居住地のサタンになってしまったのだ。夜間に現れては、昼間は潜んでいる。墓掘り人より呪われ、また家の賃貸料より厄介な者になった。漂白職人ティーティウ<sup>31)</sup>程にだらしないう、油搾り職人ダーウード程に愚かしいものになってしまったのだ。窮乏が身中に同居し、卑屈さが身体を覆い尽くした。私はミッラ(milla 信仰共同体)の枠外に飛び出した、アッラーに尽くすのが嫌になったのだ。今まで私は(名前通りの)アブー・アンバス(しかめっ面ライオンの父)であった。が今やどうともなれアブー・アフラス(Abū ‘Aflas 財産潰しの父)ともアブー・ファ

25) この段落のサジュウは下線部の順に；(wahshatan / turshatun)、(munādī / ‘ubādiyyun)、ṭanzu / ‘anzu、waḥdī / kabidī / jaddī / khaddī、ṭulūlu-hu / suyūlu-hu、wuhūshu / tunūshu。

26) ハリーサ売りのバジュー Bazī‘ al-harrās；ハリーサ harīsa とは「煮肉入りポターージュ」のこと。「つき砕かれたもの」が直義で、精練小麦粉と煮炊きした肉と肉汁とでよく「つき砕き」、混ぜ合わせポターージュにしたもの。栄養満点で病人や疲れた旅人の jābir (活力蘇生、体力回復)に最適なものと言われた。ハリーサはそれ故ウム・ジャービル Umm jābir「活力を取り戻す母」との異称ないし符牒とされている。アル・ハリリーアの『マカーマート』第19話では「何とたくさんの人がこの料理の効用について述べ立てていることか」と出てくる。「小麦」自体が「活力の素」と言われることから Abū jābir「活力を取り戻す父」と言われている。Abū jābir とは khubz (パン)のこととする説がある。(第19話注37を参照)。人名バジューについては注釈書の方にも説明が見当たらない。続く「縄縛りのラジーン」についても同様である。但しハリーサ売りも縄縛りも賤業とされていたことは、共通の理解があって知られている。

27) この段落のサジュウは下線部の順に；jāhī / ṣiḥāhī / marāhī / rāhī、nudamā‘u / qudamā‘u、(ra’sun / nāsi / harrāsi / marrāsi)、shaṭṭi / baṭṭi、ḥāfi / fayāfi、sakhīnatun / rahīnatun、(dayrin / ḥayri)。

28) ハンサーウ Khansā’；イスラム期以前の最大の女流詩人。ハンサーウは本名ではなく、美人で鼻に特徴があり、綽名としてハンサーウ「驚鼻の女」と呼ばれた。本名は Tumādīr bint ‘Amr。詩才に長け、抒情歌を得意としていた。兄妹であるサフル Ṣakhr が襲撃を受け、勇ましく交戦したが、相手部族の矢に当たって戦死した。ハンサーウは悲しみのあまり、挽歌(rithā‘)を作した。これが彼女の名を一段と高めた。第9話注5、6及びアル・ハリリーアの『マカーマート』第40話注18、第45話注16を参照。

29) ヒンド Hind；ヒール王ムンジル三世の妻。詩人イムルウ・ル・カイスの叔母に当たる。息子アムルは、普通には「子孫」としては<父の息子>が正式名称になる。即ちアムル・イブン・ムンジルとなるべきである。が、ヒンドは息子アムルを立派に育て上げて、名を知られるようになった。それ故彼の名はアムル・イブン・ヒンド(ヒンドの息子アムル)と呼ばれるに至った。アムルも部族紛争で戦死する。愛息を失ったその悲嘆きは人の涙を誘った。

30) 家々に出没するジン ‘ummār；人間と同じく多様な種をもつ精霊ジン。ジンの中でも人間と同じ居住空間に出没したり、屯するジンのことをウンマルと言っている。わが国の「座敷童」<sup>ざし</sup>と類似するが、ウンマルの方は悪さ、悪戯を行う点が異なる。ここでは次に「居住地のサタン」と同格的に説明しているように、悪性ウンマルである。

31) 漂白職人ティーティウ Ṭiyti‘ al-Qaṣṣār；注釈者 M. ‘Abduh には「人名」とあるだけで、英訳者の Prendergast には何の注記も無い。原文 ar‘anu min Ṭiyti‘i l-Qaṣṣāri (漂白職人ティーティウ程にだらしないう)で資料をあたったが、俚諺集やレキシコンにも見当たらない。伝承しなかった一時的な、ないしはローカルな逸話を伴った諺であったか。次の「油搾り職人ダーウード」も同じである。原文 aḥmaqu min Dāwūda l-‘Aṣṣāri (油搾り職人ダーウード程に愚かしい)。

クアス (Abū Faq'as 蒙昧の父) ともなったのだ。導きの道から彷徨い出で、誰も真面に扱わってくれなくなった<sup>32)</sup>。

(こうした状況であったから) 私には助け手など見つかるわけも無く、破滅が先に然と待構えているだけであった。ところが事態が深刻になっている認識が目ざめたのだ。狂犬病に罹ったら死が免れない、そんな状況の自覚が。小銭でも乞い求めることにしたのだ。折しも天界には(ヴェガとアルタイルの)2羽の鷲<sup>33)</sup>が共にあって、地界には(甘い辛い)の二つの海<sup>34)</sup>が突端を接している地であった。両のファルカド<sup>35)</sup>からは遥かに遠い地点であった。私は遊行の旅に出た、恰もメシア(=キリスト)の境地となって。ホラーサーンを経廻り、その荒地も人の集住する地もまわった。そしてケルマーンの地、シジスターンの地、ジーラーン、タバリスターンを経てオマーンへ、更にシンド、インドへ、そしてヌビア、コプト(=エジプト)、イエメン、更にヒジャーズへ出た。メッカもターイフも訪れた。内陸といわず荒地といわず足を運んだ。(持て成しの)火に暖を求め、連れていたロバと共に避難の場と頼りにしてきた<sup>36)</sup>。

遊行の旅を重ねるうちに両頬は日焼けして、両の睾丸が縮んでしまった<sup>37)</sup>。けれども(知を求めた旅でもあったので)いろいろな知識が収集できた、奇譚(nawādir)や新奇な情報(akhbār)、夜話(asmār)、有益譚(fawā'id)、由緒話(āthār)、珍しがり屋(mutaṭarriḥūn)の詩歌、面白がり屋(mulhūn)のお惚気話、恋狂い(mutayyamūn)の狂歌、哲学者(mutafalsifūn)の諸見解、妖術師(masha'widhūn)の策略譚、仕掛け策士(mutamakhriqūn)の騙くらかし話、飲み友達(munādīmūn)の珍奇な話、星占い師(munajjimūn)のまやかし話、藪医者(mutaṭabbibūn)の名医ぶり話、女装男(mukhannathūn)の芸談、パテン師(jarābiza)の舌先三寸話、イブリース(abālisa 悪魔)の誘惑話、(法官)シャアビー<sup>38)</sup>政談の要約譚、(博学の)ダッビー<sup>39)</sup>の蘊蓄譚、(故事来歴に詳しい)カルビー<sup>40)</sup>の学識話、

32) この段落のサジュウは下線部の順に：(ṣakhrin / 'amrin)、(ṣihḥatī / ṣurraṭī)、ghulāmī / ahlāmī、(miqdāra / 'ummārī / dāri / nahārī / ḥaffārī / dāri / qaṣṣārī / 'aṣṣārī)、qillatu / dhillatu / (millati) / (llāhi)、'anbasi / 'afallasin / (faq'asin)、(mahajjata / hujjatu)。

33) 2羽の鷲 al-nasrāni：琴座一等星ヴェガ(織姫星)と天の川を挟んで鷲座一等星アルタイル(彦星)。東アジアでは七夕星と知られる。その間の天の川の中の東には白鳥座の一等星デネブがある。「真夏の三大角」である。いずれの星もすべてアラビア語から由来する。ヴェガとアルタイルはアラブ・イスラムの天球図では共に「鷲」なのである。ヴェガ Vega はイスラム天文学では al-Nasr al-Wāqī' であり、The falling vulture「降下する鷲」の意味である。その後接語 Wāqī' (降下する) が西欧語に借用する過程は、Waagiū となり Wagia そして Wega, Vega と転訛した。一方アルタイルの方は al-Nasr al-Tā'ir であり、その意味は「飛び立つ鷲」the flying vulture である。この後節語 al-Tā'ir が Altaair として Altayr に転訛したわけである。

34) 二つの海 al-bahrayn：甘い水の海(=大河)と辛い水の海(=海)のこと。ペルシャ湾岸を言い、チグリス・ユーフラテス両大河が海と合流する一帯、または半島東岸に西からの伏流水がわき出て多くのオアシスを作っており、その一帯も意味する場合がある。中世までの al-Bahrayn 地方とは後者であり、その名残が現在のバハレーン国の名称である。

35) 両のファルカド Farqadān：これは北の極を指す北斗七星のひしゃく(アラブでは楯の形とされ、柄の部分は葬列の嘆き悲しむ子供達だとされる)を形造る二つの星 β (ベータ) と γ (ガンマ) であり、「瓜二つ、能力の匹敵するもの、甲乙つけがたいもの」の論えとされる。ファルカドとは、「子牛」または「平らな土地」が原義であるが、前者の方がより相応しく、その星の考え方はアラブ民族に先行するメソポタミアのセム族の星概念が投影されているものであろう。なお、アル・ハリリー『マカーマート』第7話注23、及び第23話注35の説明も参照されたい。

36) この段落のサジュウは下線部の順に：nāṣiran / hāḍiran、ṣa'uba / kaliba / dirhama、nasrayn / bahrayn / farqadayn、asṭhu / masṭhu、kharāsāna / 'umrāna / karamāna / sijistāna / jilāna / tabaristāna / 'umāna、sindi / hindi、(qifāra) / nāri / ḥimārī。

37) 両の睾丸が縮んでしまった taqallaṣat khuṣyatā-ya：注釈者 M. 'Abduh にも、英訳者の Prendergast にもなんの注も無い。後者は訳出さえていない。この一文を抜かしてしまうと、サジュウ体への著者の配慮の苦心をも無視してしまうことになる。睾丸 khuṣya (pl. khuṣā) も、それを抜かれた宦官 khaṣiyy (pl. khaṣiyan, khaṣya) も、家畜管理において雄の去勢術とも関連してよく知られている語である。恐らく「精力を使い果たした」の意味と採りたい。第43話注13も参照。

38) シャアビー al-Sha'bī：本名は Abū 'Amr al-Sha'bī (104/722 没)。クーファで法官として、多くの優れた裁きを行った有名人。これらの裁きは纏められて、我が国の「大同政談」の如くに世に伝えられた。

39) ダッビー al-Dabbī：本名は Muḥammad ibn Mufaḍḍal al-Dabbī (308/920 頃没)。生粋のバグダードっ子。シャーフイー派法学者として名を成すが、その博学さの蘊蓄故にまた著作を多く残し、自ら古今の詩人達の代表作を『ムファッダリヤート』(al-Mufaḍḍaliyyāt) の表題で編纂したものが最も知られる。

40) カルビー al-Kalbī：本名は Hishām ibn al-Kalbī (204/819 年頃没)。カルビーとしてよりも、『偶像の書』Kitāb

などである<sup>41)</sup>。

(その旅の間でさえ)人という人に無心を願い出たし、贈り物を頼んだ。これと<sup>おえらがた</sup>思った高人には伝手を求めては見返りをせがんだ、相手の要求に対して頌詩を献上したり、また(彼の敵対者への)風刺詩にも応じた。こうしているうちに、遂には手元には随分と資産が貯まってきた。名を挙げただけでも；インド製の剣<sup>42)</sup>、イエメン製の鋭い刀身<sup>43)</sup>、サービル産<sup>44)</sup>の精密な甲冑、チベット産の革盾<sup>45)</sup>、ハット<sup>46)</sup>製の槍<sup>47)</sup>、ベルベル製の短槍、<sup>たてがみ</sup>(鬘を)刈り上げた貴種のアラビア馬、アルメニア産の驃馬、ミッリース<sup>48)</sup>産のロバ、ルーム(=ビザンチン)製のディーバージュ<sup>49)</sup>絹織物、スース産のハズズ(khazz 羊毛主体に絹入りの毛織物 pl. khuzūz)など。その他数々の貴重品類、精密品類、贈答品類、珍品類、それらも状態が良く、金額が張るものばかりであった<sup>50)</sup>。

さてこういうわけでバグダードに戻ってきたわけであったが、知り合いの連中が私の情報を予め入手しており、また旅で大儲けした情報も掴んでいた。私の到着を喜んで迎えて、大挙してやって来て私の不在の佻しさを訴え、異郷に居る間に故郷で生じたことを話してくれた。皆どれほど会いたかったか、どれほど寂しさが高じていたかを訴えた。一人一人がかつて為したことの弁明をして、己の仕出かした無礼に対して謝罪を表明した。私の方といえば表面上は、彼らの(とった卑劣な行動の)ことは忘れ去ってしまったと思わせ、彼らのかつてなした非礼に対する怨恨は微塵も表状に出すことしなかった。それ故彼等は安心して、肋骨が震えるのを落ち着かせる<sup>51)</sup>ことが出来、嬉しそうにして引き上げて行った<sup>52)</sup>。

翌日になって彼等がやって来たので、私は彼等を我が邸で(食事でも、と誘って)引き留めた。そして使いを出してスークへ用足しに行かせた。使いの者は用向きのものを手に入れるよう、命ぜら

*al-Aṣṇām*の著者イブン・カルビー Ibn al-Kalbī として知られる。歴史家として、150点もの著書を残すが、特にブレイスラム期の、アンサーブ(系譜学)とアッヤーム(部族闘争)の分野に長じていた。『偶像の書』は、それまで禁忌とされていたイスラム以前の宗教事情と偶像の神々を記述して、以降のイスラムを取り巻く研究に新たな道を開いた。

- 41) この段落のサジュウは下線部の順に：wajnatā-ya / khuṣyatā-ya, nawādir / akhbār / asmār / āthār, mutatarriḥna / mulhīna / mutayyamīna / mutafalsifīna / masha'widhīna / mutamakhriqīna / munādīmīna / munajjimīna / mutaḥabbibīna / mukhannathīna, (jarābiza / abālisa), sha'bī / ḡabbī / kalbī。
- 42) 剣 *ṣafā'ih*；単数形 *ṣafīha*。剣もアラブは名称を沢山持っている。代表語はサイフ *sayf* (pl. *suyūf*)。「インド製の剣」というのは、良い鉄や銅はインドから齎されるところからこの名がある。
- 43) 刀身 *quḍub*；単数形は *qadīb*。カディープとは矢張り「剣」の名称の一つで「切っ先の鋭い剣」の意味。部分名称として「抜き身、刀身」の意味もある。なお「カディープ」には他に「一木一杖で製せられた弓」、また武器としての「棍棒」の意味もある。「イエメン製の鋭い刀身」とは上の注でも述べた如く、インド産の良鉄はアラビア海をわたってイエメンに陸揚げされて、そこで製せられた。「イエメンの剣」といえば「名産の剣」の代名詞になっていた。
- 44) サービル産 *sābiriyya*；*Shahpur* のことで、ここは古代イラン王のシャープール王に因んだ町で、シーラーズから25パラサング隔てた所にあり、甲冑作りのの産地として知られた。
- 45) 革盾 *daraq*；単数形は *darqa*。普通の盾はトゥルス *turs* という。ダルカは皮を何枚も張り合わせて製した盾のこと。西アラブのマグリブ地域ではモロッコ皮が余りに有名であるが、マシュリク(東アラブ)ではチベット産がもてはやされた。
- 46) ハット *Khatt*；オマーン湾に面した地で、インド方面から輸入された槍はここで鋭くされて、アラブ諸国に輸出された。
- 47) 槍 *rimāh*；単数形 *rumh*。アラブには二種の槍があり、ベドウィンが愛用する長槍がルムフであり、投げ専用の短槍は、次に出てくるハルバ *harba* (pl. *hīrāb*) である。
- 48) ミッリース *Mirīs*；エジプトの一地方の村名。優秀な驃馬の育成地として知られる。
- 49) ディーバージュ *ḍibaj*；既出。23話後半部「我々は彼の求めた通りの額を支払った、またかれの言いなりのことを約束した。そうするとこの御人は手を懐に差し入ると、絹製の袂紗を取り出した」の中の「絹製の袂紗」が *ḍibaj* である。またアル・ハリリー『マカーマート』第1話注4、及び第25話注25を参照。
- 50) この段落のサジュウは下線部の順に：jtadaytu / takaddaytu / hājaytu, hindiiyyati / yamāniyyati / sābiriyyati / tibbatiyyati / khattiyyati / barbariyyati / jardiyyati / armaniyyati / marrisiyyati / rūmiyyati / sūsiyyati, ṭurāfi / luṭāfi / tuḥāfi, ḥālī / māli。
- 51) 肋骨が震えるのを落ち着かせる *sakanat jawārihu-hum*；「武者震い」とは異なり、「恐れ慄きから来る震え」、これを「肋骨の震え」という。さしずめ我が国の「ガタガタ、譁々震えること」となろうか。
- 52) この段落のサジュウは下線部の順に：khabarī / safarī, faqḍī / bu'dī, shawqī / tawqī。

れた買い物すべて違わず持ち帰ってきた。一方腕の良い女料理人を雇い入れて、20種類の刺激の強い揚げ物<sup>53)</sup>を、様々なタバーヒジャ(=オムレツ)、数ある珍味料理を作らせた。我々はいかにこれらの料理を味わった。その後酒宴の席へと移った。明るく澄んだハンダリースの古酒<sup>54)</sup>が用意され、また美しく芸達者な歌姫たち(mughanniyāt)もそば近くに侍らせた<sup>55)</sup>。

(客人達は呼ばれて飲食を供されるのが)我らの務めとばかり早速その務めに入った。我々は飲み込んだ。一日の最良の時間を楽しく過ごした。こうした間にも、私は15人の客の人数分に合わせて、大きな茄子入れのサンヌ(ṣann pl. ṣinān 編み籠)を用意させておいた。耳(=取っ手)が四つ付く大きなサンヌを。召使いに命じて、客の一人一人に運び屋を付け、それぞれ2デイルハム銀貨で雇わせた。この運び屋たちには予めそれぞれに客の家の住所を教えた、また翌日の夕方参集するようにもと。そしてまた別の召使いに、これもなかなか飲み込みの速い者であったが、客たちにマン(なみなみ)といわずラトル(ほどほど)といわず<sup>56)</sup>酒を遠慮することなく振る舞って相手するように仕向けた。私の方は客たちを前に香を焚いて持て成した、ナッドの香、ウード(=沈香)、竜涎香などを。小一時間も経ったろうか、客たちは酔っぱらって、正気を失って死んだようになった<sup>57)</sup>。

夕刻になると客たちの召使いたちが主人の迎えにやって来た、駄馬や驢馬、あるいは騾馬を引き連れて。そこで私は、主人たちは私の所で一晩過ごしてもらう旨伝えた。すると召使い達は立ち去って行った。その後すぐに私は床屋(muzayyin)のピラールに使いを出した。彼がやって来ると食事をもてなし、彼は喜んで食べた。またクトゥルブリー酒<sup>58)</sup>を振る舞った。彼は飲んで酔いがまわった。そこで私はこの床屋の口の中に赤銅色のディーナル金貨2枚を含ませた。そして(死んだように横たわる)客に対して仕事をしよう命じた。床屋は(酔い気分で軽快に)一時間も経たずにやってのけた、15人の髭すべてを剃り落したのである！客たちは天国の住人の如く滑らかな髭無し顔になった<sup>59)</sup>。

それから私は剃り落した髭それぞれを本人の衣類の中に包み込み、それと共に書付を記した、曰く「友に背信するを隠し通し、忠義を捨てた者は誰であれ、これが代償であり、返報である」。この書付をポケットに差し入れた後、客人たちを縛り上げサンヌ籠に収容した。約束の翌日の夕方になっていたので、時間通り運び手たちがやって来て、サンヌ籠を各自運び去った、悲惨な帰還とあいなった。客たちはこうして自宅に戻ったのであるから<sup>60)</sup>。

彼等が目覚めたのは翌朝のことであった。正気に目覚めてみると、自身が由々しい事態に陥っているのを見出した。客たちの中の、商人であった者は店に出て行けず、書記官は役所に出所できず、兄妹に至っても顔出しできない状態であった。私は非難の矢面に立たされた、来る日も来る日も彼

53) 刺激の強い揚げ物 qalāyā muḥriqāt; 本話注4-8の部分参照。次のオムレツ tabāhijāt も同じ。

54) ハンダリースの古酒 khandarīsiyya; ハンダリーサー khandarīsā と同。ハンダリース、ハンダリーサーが人名か地名かはっきりしないが、「古酒」の意味で用いられる。ペルシャ語からギリシャ語に、ギリシャ語からアラビア語に適用されたものと思われる。なお、「古酒」としてアティーク ‘atīq も用いられる。後者は原義が「古い」であり、tamr khandarīs「古デーツ(酒)」、hinṭa khandarīs「古小麦(酒)」のように用いられる。アル・ハリリー「マカーマート」19話注14、28話最終段、48話中段を参照。

55) この段落のサジュウは下線部の順に：(muḥriqātīn / tabāhijātīn / mu‘addātīn)、(khandarīsiyyatun / mughanniyātun / muḥsinātun)。

56) マンといわずラトルといわず bi-l-manni wa-r-raṭli; ラトルは地域差や時代差があって違いがあるが、おおよそ500cc、マンは2ラトルであるから1000cc。「ほどほど注ぎといわず、なみなみ注ぎといわず」と言ったところ。

57) この段落のサジュウは下線部の順に：(bādhinjāni / ādhānin)、(ākhirati / dāhiyatan)、(‘anbara / sukri)。いずれも不完全。

58) クトゥルブリー酒 qatrūbuliyy; クトゥルブルとはイラクにあるブドウ酒の名産地。上質で美味といわれている。

59) 天国の住人の如く滑らかな髭無しになった šāra l-qawmu jordan murdan ka-ahli l-jannati; 体に毛が無く滑らかにすべすべしているのが jurd < ajrad、髭が無く(又は剃り上げて)顔がすべすべなめらかなのが murd < amrad。天国の住人の清潔さ、清浄さを言ったもの。なお、この段落にはサジュウ技法の工夫は見られない。

60) この段落のサジュウ技法は終末の一組だけである：(ākhitati / khāsiratīn) (不完全)。

等を取り巻く人々がわんさと来て喚き立てた、女たち、召使いども、男衆が私を罵倒し、悪し様に貶すのであった。アッラーの神罰が私に降りかかりますようと呪いの言葉も吐く始末。私は平静に沈黙を守った。彼等に応じて答えを発したわけでは無く、また彼らの言に関心を払うわけでもなかった<sup>61)</sup>。

しかしやがて私の彼等への仕打ちが平安の都に噂として広がり、噂は噂を呼び遂には大臣カーシム・イブン・ウバイドゥッラー<sup>62)</sup>が聞き及ぶこととなった。大臣は書記官を呼び出したのだが、書記官が見いだせなかった。そしてその理由が在宅しており、外出が出来ないとのことであった。大臣が「何故外出できないのか?」と尋ねたところ、「アブー・アンバスの仕出かしたことが理由だそうです。彼は書記官に対して交友とはどういうことか、酒飲み友達はいかにあるべきかを試した結果がそうなったとのことです」との言葉が返ってきた。それを聞いて大臣は大いに笑い、小便が危うく漏れたか、漏れ出て下着を汚したほどであった<sup>63)</sup>。ワッラーフ・アアラム(その辺りは神のみぞ知るところ)。それから声を上げて、「ワッラーヒ(誓って言うが)、アブー・アンバスの殿は的を射ておる、為したことに誤った所など無い。そつとしておいてあげなさい。彼ほど付き合いのことを熟知している人間は他にあるまいから」。それから大臣は私の所に使いを寄こして、素晴らしいヒルア(khil'a 礼服)を持たせ、贈答品を乗せた馬を引いて来て、銀貨5千ディルハムを下賜品として下さったのである。私の為した行いを賞賛に値するものとして<sup>64)</sup>。

私は(外出を控えて)我が家に二か月間閉じこもった。食べたり、飲んだりしながら(一人だけで)時をやり過ごした。その後になって閉じ籠り状態から、外出することにした。連中の何人かは大臣の行為のことを知って、私に和解を求めてきた。しかし何人かは誓ったものである、離婚三回<sup>65)</sup>を行い、さらにギルマーン(男奴隷)とジャワリー(女奴隷)を解放しない限りは、私とは金輪際言葉を交わすことはない。いやいや全くアッラーよ、彼等の威厳たるや大したものであり、その証<sup>あかし</sup>験は賛美されるもの!<sup>66)</sup>

この件に関して、私自身は心にかけているわけではない、関心を特に払ってもいない、また耳衆を引っ掻かれたわけでもなければ、胃を痛めているわけではない。私は害されているどころか、喜ばされているのだ。ヤコブが(懸念し実行させた)心境の事柄と同じなのだから<sup>67)</sup>。まことに私がこのことで念ずるのは、関心を払うべきは、時の子供たち(=時運に翻弄される人間たち)には観察が肝要であるということ、利己的で下劣な兄弟を信頼してはならないこと、例えば代書屋(warrāq)、悪口屋(nammām)、そして嘘つき共(zarrāf)、例えば教養人の権利を踏み躪<sup>にじ</sup>り軽んずる者、書物を借りておきながら返さない者など。まこと我らはアッラーに助けを求め、信頼を置く者である<sup>68)</sup>。

61) この段落のサジュウは下線部の順に: dukkāni-hi / diwāni-hi / ikhwāni-hi。

62) 大臣カーシム・イブン・ウバイドゥッラー al-wazīr al-Qāsim ibn 'Ubayd Allāh: カーシムは宰相職をイスラム暦288年、父から継承した。本話の主人公アブー・アンバスが死亡したのは275年であるから、時代が合わない。従って主人公と同時代とするには宰相の父ウバイドゥッラーのこととせねばならない。父はアッバース朝第15代カリフ・ムウタミド及び16代カリフ・ムウタディドの大臣職を勤めたころの話とされる。

63) それを聞いて大臣は大いに笑い、小便が危うく漏れたか、漏れ出て下着を汚したほどであった。この2節、英訳者の Prendergast はただ He laughed heartily で済ませている。これも猥雑だけの理由でそうしたのであるか、少なくとも意図的である。押韻技法も加味した訳の工夫が求められる。

64) この段落のサジュウは一か所3語のみ。下線部の順に: bāla / qāla / fa'ala。

65) 離婚三回 talāq thalāth: イスラム教徒は妻と二度までは離婚できるが、三度目は元の鞘には収まらない。他の男と結婚した後でないと再婚は不可能となる。『コーラン』第2章229~30節参照。「余程のことでも無い限り」の換喩。

66) この段落にはサジュウ技法の工夫は見られない。

67) ヤコブが(懸念し)実行させた心境の事柄と同じなのだから; 杞憂に終わること。エジプトで高官となっている(死んだはずの愛息)ヨセフの許に末息ベンジャミンを送り出す時、父親ヤコブは憂慮して忠告する。エジプトに着いたら兄弟みな一緒に城門をくぐらない様に、そうしないと全員に不幸が生ずるとして、別々に町の中に入場させ、ヨセフとの再会が叶って、ヤコブの杞憂に終わったという逸話に基づく。『コーラン』第12章67~68節参照。

68) この最終段落のサジュウは3対のみ下線部の順に: udhnī / baṭnī, ḍarra-nī / sarra-nī, musta'ānu / tuklānu。

第42話 サイマラのマカーマ 信頼した友人達に見捨てられて報復する 完

第42話 訳者解説

久々に分量的に言ってもたつぷりと、また内容も充実したマカーマを味わうことが出来た。第22話「マディーラのマカーマ うんざりした講釈、食わず終いの挙句の果ての不運」以来であろう。話の展開は「サイマラ出身のアブー・アンバスのクンヤで知られるイブン・イスハークが語るには、としてアブー・アンバスの、副題に要約した「信頼した友人達に見捨てられて報復する」顛末が語られる。アラブ人の性格として「中傷や侮辱に対して復讐の執念深さ」がよく言われているが、その例証を垣間見させてくれた。

冒頭「サイマラから平安の都（バグダード）へ船旅で向かった時のことであった」で始まっているが、この部分でも興味深い事実を教えている。ペルシャ湾からバスラを経て、バグダードまでは「船旅」もまた陸のラクダの旅と同様、交通手段で頻繁に利用されていたことが分かる。また料金や貸切の設定もあり、ある程度の身分のある者や富裕者が多く利用され、サロンや集い、宴会なども開かれていたことも。話が急転直下するのは、この船が転覆する時からである。「積み荷が軽くなったためであろうか、船が傾いてしまったのだ！ 食料袋（の重さ）は底をついていた」。何とも奇抜な発想である。碗飯振る舞いして、食糧が底を突いた、それが船の底を軽くして重心を失って、ひっくり返ったと言うわけである。船底の重さの大半が乗客の胃袋に収まってしまったために、重心が上に行き、船が傾<sup>かし</sup>いてしまったというわけである。「（傾いだ船内から）乗客は出入り口へと我先に逃げた。その時点で（生死に関わる）重大さが誰の目にも明らかになった。窒息が心臓部まで達した。乗客たちは私を呪って罵倒した「厄病神め！」と」。せっかく身銭を切って碗飯振る舞いをしてあげたのに、この事態に至り、親しく付き合っていた同行の士達から「厄病神」と罵られてしまう。恩義も忘れ、助け出そうともせず、わが身の安泰だけを願って我先にと後にしてしまう。そして「皆逃げ延びようと辺りに散った、火花の閃光の如くに。混乱が彼らを慌てふためかせ、一人、一人と船外に滑り落ちて行った。右往左往して逃げまわった。……私は一塊の糞程にも価値がないものなのだ、一人残され、孤独にされて、不吉が刻印されたフクロウ同然であった」。恩が仇になった。誰も助け手も頼りにもならない。これが伏線となる。

無我夢中で船から逃れ、気付いたら自分の家の前であった。身上を船と共に沈めた文無しは、頼りとなるかつての仲間を訪ね歩くが、誰を頼ろうにも相手にされない。かつて親しくしていた酒仲間にも見放される。「我が飲み友達は私を見捨てて、古き仲間たちもまた寄り付かなくなった。いずれの顔もよそを向けて私の方へは視線を上げてくれないのだ。知った人間として認めてくれなくなった。軽蔑されているのだ、……」というわけである。

仕方なく乞食同然となりながら、旅に出て、物乞いをしながらも、知識の、そして商才の行脚もする。旅を重ねるうちに次第と財となるものも貯まり、分限者として故郷に戻ってくる。すると昔の仲間が不義理を詫び、再び交際を求めてくる。それに対して仕返しをする。本話の盛り上がるの部分である。かつてと同様酒宴を催し、酔わせた上で、旧友たちの髭を剃り落してしまう。髭は男の品位を示す象徴、我が国の武士の<sup>ちよんまげ</sup>丁髷である。「それから私は剃り落した髭それぞれを本人の衣類の中に包み込み、それと共に書付を記した、曰く「友に背信するを隠し通し、忠義を捨てた者は誰であれ、これが代償であり、返報である」。この書付をポケットに差し入れた後、客人たちを縛り上げサンヌ籠に収容した……」。著者はここで話を終わらせていない。珍しくその後の展開も

丁寧に続かせている。噂は広まり、聞き付けたバグダードの高官の報奨、髭を剃られた旧友の対応……。

物語り的には十分な内容であり、筋や仕掛けもまたマカーマの体裁に相応しかろう。幾つかの筋が合わない部分も目立つ。一つは場所設定に食い違いがあり、手直した部分がある。この主人公はアブー・アンバスはサイマラ出身なので、出立したのも、難破した船から無我夢中で辿り着いたのもサイマラであると想定した。しかし再びの財産家として、旅から再び故郷に戻ってくる、「さてこういうわけでバグダードに戻ってきたわけであった」。今までは場所設定は故郷の家サイマラであったから、オヤと思い、そこで、この主人公アブー・アンバスのバグダードの家と設定し直した。アブー・アンバスは、カリフ・ムタワツキルのナディーム(相伴、酒友達)を勤めている時期もあり、そこで首都バグダードに家を持っていたのも不思議はない。次にその邸も含めてすべて売り払って全財産として、バグダードへ出たのであろうか。船上での彼の富裕ぶり、持て成し振りの叙述の後、船が転覆して邸に戻って来ると、長く見積もっても一ヵ月は経ってまい。邸自体が跡地になっている。時間軸の配慮が無い。こうした想定自体、筋の展開上無理がある。しかし不注意な記述は、著者アル・ハマザーニーのマカーマには多い。予めの筋書きとか、読み返しが行われたのかどうか。彼の多くのマカーマの文体や形式の検討を觀ても、どうも思いのままを書きながって終わっている天才の負の一面を露見してしまった作品ではないかとも思える。

しかし本話は、形式や設定においてマカーマのジャンルの範疇に入れて良いかどうか。恐らくムラフ(興味譚)の類が紛れ込んだものであろう。先ず本話の設定は、アブー・アンバスの語りである。主人公であるべきアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフは一度も顔を出さない。語り手イーサーも最初に「我々に語り伝え、以下のように話した」と定型の序だけ登場しただけであり、以下はすべてアブー・アンバスに一話の進行を譲ってしまっている。即ち劇中劇であるべきなのが残りのまま終わってしまっている、「箱もの」が箱自体になって終わってしまっていることになる。箱ものを中入りにさせたり、終わった後なりに、語り手の顔出しの要はあろう。マカーマの文体であるサジュウの配慮も、段落において在ったり、無かったりで徹底していない結果になっている。さらに韻文への配慮に関して、本舞台の盛り上がり、後舞台の大団円にあるべき詩行の挿入に至っては全く欠如している。訳者の見る所、これはマカーマというよりハズル(hazl ユーモア話)の中にジャンル分けされる「ムラフ (mulah 興味譚)」の類を述べたものであろう。こうしたムラフに属する話がアル・ハマザーニーのマカーマの中にいくつか紛れ込んでいる。H. Anttila によれば、このアブー・アンバスことイブシ・イスハークについては歴史上の人物ではあるが、本話に語られたような類の話は伝わっていないと述べている。(p. 45)

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では 27 話に、Sofya 版では第 22 話に収録されている。Paris 版では欠如する。

### 43 話 ディーナル金貨のマカーマ 互いに相手を<sup>けな</sup>貶しあって

(原文 M. 'Abduh pp. 217-222)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私は心中誓いを立てたことがある、バグダードで最も私自身を納得させる物乞い口上を述べた者にディーナル金貨一枚を施すことを。誰がそうなのか尋ねまわって、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師がそうであろうというのが大方の意見であった。そこで彼の所へ出かけた、そうであれば彼に施しを行う用意をして。師はある集団の中にいた、すでにハルカ (ḥalqa 円座) が結ばれており、その中心にいた。私は一同に言葉を掛けた、「やあサーサーン<sup>1)</sup>の息子達よ、誰が最も多芸なネタを持っているのかね、誰がその技芸において最も習熟しているのかね？その人物にこのディーナル金貨を差し上げたいと思いますか？」。すると例のアレキサンドリア人が名乗りを上げた、「わしじゃよ」。すると集まりの中から他の者が「いや俺だ」と名乗り出た。二人は言い争い、口論となっていくた。そこで私は提案を持ちかけた、「それでは二人はお互い相手を遣り込めて見せてくれませんか。その勝利者となった者がこれを受け取ることにしましょう、相手を抑え込んだ者がこの獲物を取ることにしましょう<sup>2)</sup>」と<sup>3)</sup>。

すると早速アレキサンドリア人の方が(相手に対して攻撃の)口火を切った、「おお(汝 寒感走ること)老婆の厳寒<sup>4)</sup>よ、おお(汝 蒸し暑きこと) タンムーズ (= 7) 月の蒸暑よ、おお(汝 汚らしきこと) 冷やし水瓶<sup>5)</sup>の汚さよ、おお(汝 役立たずとくれば) 流通しない偽ディルハム貨よ、おお(汝 聞きたくもないものといえ) 歌い手の講釈話よ、おお(汝 厭な年といえ) ブウス (bu's 厄難多き) 年よ、おお(汝 不吉といえ) 凶兆星よ、おお(汝 厄介なことといえ) 悪夢見るその重苦しさよ、おお(汝 悩みの種といえ) 頭痛持ちよ、おお(汝 その醜悪といえ) ウンム・フバイン<sup>とかけ</sup> 蜥蜴<sup>6)</sup>よ、おお(汝 目つき悪い) ただれ旦よ、おお(汝 あからさまなるは) もの皆照らし出す曙光よ、おお(汝 悲しませるは) 恋人の中を割くことよ、おお(汝 <sup>おぞ</sup>悼ましきは) 臨終の時よ、おお(汝 悲惨なるは) フサインの殉教の場<sup>7)</sup>よ、おお(汝 重荷なるかな) 負債のつけよ、おお(汝 目を背けられるは) しみだらけの顔よ！<sup>8)</sup>

1) サーサーン sāsān: 遊行、門付けを業とする人。サーサーン族 banū sāsān とはそうした職業集団であって、特別な用語、符牒を持ち、団結力が強い。既出、19 話サーサーンのマカーマ、物乞い集団に乞われて、20 話の猿回し、30 話ルサーファのマカーマ、詐欺・物盗り一覧、39 話ニシャープールのマカーマではクルド人との関連、を参照。

2) その勝利者となったものがこれを受け取ることにしましょう、(man ghalaba salaba) 相手を抑え込んだ者がこの獲物を取ることにしましょう (wa-man 'azza bazza) : 両者は見事な同韻を踏んでいる。後者の「相手を抑え込んだ者がこの獲物を取ることにしましょう」の方が諺となっているが、前者もそのまま Zamakhshari の『俚諺集』に載っている (II 357)。

3) 冒頭の段落のサジュウは下線部の順に: ilay-hi / 'alay-hi, rufqatin / ḥalqatin, sil'ati-hi / ṣan'ati-hi, tanāqashā / tahārashā。

4) 老婆の厳寒 bard al-'ajūz: 二月下旬から三月上旬にかけての一週間、寒気最後の時期。この謂れについては、本話末の訳者解説を参照。

5) 冷やし水瓶 kūz: 取っ手付きの土製水差し。より大型の物ほど水を冷却するために、外面にぼろ布が巻かれ、そこに多少の水を撒き、湿り気を与え気化熱利用をする。冷やし瓶は街路傍にも置かれ、道行く人々の渴れを癒している。従って一般に見る冷やし瓶の外観は襦袢切れだらけで汚らしい。

6) ウンム・フバイン蜥蜴 umm ḥubayn: 「出っ腹の母」の意味。蜥蜴の中でも横腹が張っている醜い蜥蜴と言われている。

7) フサインの殉教の場 maqāt al-Husayn: 680 年アリーの二男フサインが、一軍と一族郎党とを連れて、イラク南部カルバラーでウマイヤ朝軍と戦い、惨殺される。カルバラーには今でも立派な廟が建っており、シーア派の聖地として巡礼者を集めている。ムハッラム月 10 日はアーシューラーと呼ばれ、その日にはシーア派の人々のフサイン追悼祭がおこなわれる。一部の地域では己が身を傷つけ、血みどろになり、失神する参加者もでる。

8) この段落のサジュウは下線部の順に: 'ajūzi / (tammūza), kūzi / (yajūzu), (būsi / nuḥūsi / kābūsi / ru'ūsi), (hubayna) / 'ayni / bayni, muḥibbayni / ḥayni / ḥusayni / dayni / shayni。

おお(汝 <sup>つぎ</sup>運の無さたるは)凶報伝える使者よ、おお(汝 他人に遠慮されるは)中傷ばかりで追出される者よ、おお(汝 臭くてたまらぬは)大蒜入りサリード(tharīd ミルク煮粥)よ、おお(汝 苦味は)砂漠に生えるザククーム<sup>9)</sup>の樹よ、おお(汝 吝嗇たるや)借りた家具類返さぬ者よ、おお(汝 持て成しせぬは)飢饉の年なるか、おお(汝 くって掛かるは)反抗的な奴隸か、おお(汝 <sup>ひと</sup>他人脅すは)脅迫の最たる者よ、おお(汝 非才なること)同一語を繰り返すばかりよ！<sup>10)</sup>

おお(汝 文法知らぬは)hattā(～まで)の語法<sup>11)</sup>、そのあらゆる場面を想定しての使用の何とお粗末なことか、おお(汝 汚らわしきは)便所の蛆虫よ、おお(汝 似つかわしき無き様)夏場に毛皮着る者よ、おお(汝 礼儀を失すること)客前でパンを割るに咳をするホストよ、おお(汝 不法たるは)酔っぱらってゲップする者よ、おお(汝 息の臭さは)鷹類の吐く息よ、おお(汝 その思い至らぬは)テントを張るに放置されたテント杭よ、おお(汝 頼り無きは)鍋釜用台置き(の石ころ)よ、おお(汝 不吉なること)巡り来る水曜日<sup>12)</sup>よ、おお(汝 山師たるや)キマール博打<sup>13)</sup>にのめり込む者よ！<sup>14)</sup>

おお(汝 不平託つに)舌<sup>かこ</sup>の纏れた者よ、おお(汝 不浄なること)宦官の小便<sup>もつ</sup><sup>15)</sup>よ、おお(汝 行儀知らずは)盲人のめくら減法の食べ方か、おお(汝 貧に窮して)裸で物乞いに及ぶとは、おお(汝 忌み嫌われるは)休み明けの子供たちの土曜日<sup>16)</sup>よ、おお(汝 訳分からぬ言うは)弔い状<sup>17)</sup>よ、おお(汝 不純なるかな)濁りし水溜めよ、おお(汝 心狭きは)アフワーズ人<sup>18)</sup>程の吝嗇家よ、おお(汝 冗長なるかな)ラッイ人<sup>19)</sup>の長饒舌そのもの！ワッラーヒ(誓って言うが)、もしそなたが(大言壮語して)脚の一方をアルワンド山<sup>20)</sup>に置き、他方の脚をドゥマーワンド山<sup>21)</sup>に置いたと

9) ザククーム zaqqūm; アラビア半島西岸ティハーマ地方の砂漠地帯に生える木で、小葉を付け、不快な匂いがあり、実は苦い。ザククームといえは、一般には地獄に生える巨木で酸っぱく苦い実を多数つける。地獄の住人の食料とされる。

10) この段落のサジュウは下線部の順に: shūmi / lūmi / thūmi / zaqqūmi, mā'ūn / tā'ūn, 'abīdi / wa'īdi / mu'īdi。

11) hattā(～まで)の語法: hattāには大きく分けると従属接続詞用法(until～)及び前置詞用法(to～, into～)があり、さらに状況によって(and, then)なども加わり、多様に使い分けられ、また後置語も格変化や語尾変化が異なり、いろいろ用例を用いて説明せねばならない要注意の語である。

12) 巡り来る水曜日 arbi'a' lā tadūru: 水曜日はアラブ世界では古くから「縁起が悪い日」とされており、その最悪が「巡り来る水曜日」、すなわち一か月が5回まである最終水曜日であった。「巡り来る水曜日」の由来は、注4とも関連しており太古のアラブ・アード族滅亡伝承が踏まえられている。本話末の訳者解説を参照。

13) キマール博打 qimār: お互い掛け金を掛け、笹竹状の細棒を引く、その棒に印はあれば当たり、無印ならば外れとなり、当たりの者が掛け金を取る。人数に応じて、印に数字を付け受け取り額を変える。さらに普及した笹竹を用いた賭け事にマイシル maysir がある。笹竹、マイシル参照。

14) この段落のサジュウは下線部の順に: hattā / shattā, kanīfi / maṣīfi / muḍīfi / raghīfi, makhmūri / ṣuqūri / dūri / quḍūri / (tadūru) / maqīmūri。muḍīfi / raghīfi の個所は訳の関係上順序が入れ替わる。

15) 宦官の小便 bawl al-khiṣyān: 宦官は辜丸(陰茎の場合も)の「生殖部」を切り落とされているため、小便する方向もままならず周囲の衣服を濡らす。便で衣服を汚すことをイルサース ilthāth といって、その臭いと共に宦官への悪口に使われる。第42話注37を参照。

16) 休み明けの子供たちの土曜日 sabt al-ṣibyān: イスラム世界は金曜日が休日。従って仕事が始まり、子供たちは登校をせねばならない土曜日は休日明けなので、特に子供たちの遊ぶ楽しみがなくなることもあり、嫌われる。日曜が安息日のキリスト教国やわが国の月曜 Monday blue と同じ。

17) 弔い状 kitāb al-ta'āzi: 弔い状には、『コーラン』や『ハディース』の章句を散りばめて引用し、書き上げる。全く知らない人への弔い状を頼まれても、抽象的でそれなりに困るし、知人への弔い状はまた知る範囲もあってそれなりに困る。相対的に小難しい文言となって、読む方聴く方、双方を悩ませることになる。読み上げる声も泣いたり咽んだりしているため、明瞭には聞こえない。

18) アフワーズ ahwāz: ペルシャ湾に近いイラン西部の町。既出、第9話注22、第11話注1、及び第16話注1の部分を参照。近隣地域ではこの町の人々は「ケチ bukhī」で知られていた。

19) ラッイ Rayy: イランの首都テヘランの近郊にある。既出、第10話注2を参照。この住人は皆おしゃべりで有名であった。

20) アルワンド Arwand: ペルシャ語ではアルヴァンド。ザグロス山脈の北方の山名。この丘陵地帯にハマザーンがある。現代「アルヴァンド河」と言えば、南方イラクと接するシャット・ル・アラブ河のこと。

21) ドゥマーワンド Dumāwānd: ドゥマーヴァンド。テヘラン北方のエルブルズ山脈の最高峰。標高 5671m 富士山に似て優美に聳える。両山の間はざっと 320km もある！この両山に股をかけて、虹を梳き弓と、雲を綿毛や羊毛

したなら、また片手で雲上の天使の弓(=虹)を掴み、他方の手で天使たちの雲衣<sup>す</sup>を梳くとしたとして、(お粗末かな、現実は何のことはない)なんと汝は一介の羊毛梳き屋(hallāj)に過ぎないではないか!」<sup>22)</sup>。

すると対抗者は(何と仰るとばかりに)訴え始めた、「おお(汝 卑賤なるかな)猿たち馴らす猿回し<sup>23)</sup>よ、おお(汝 血筋卑しきは)ユダヤ人のダニ<sup>24)</sup>よ、おお(汝 息の臭さたるや)獅子の口臭か、おお(汝 その存在感薄きは)存在<sup>からっぽ</sup>において空虚か、おお(汝 戯れ好きは)じゃれつき合う犬か、おお(汝 落ち着きの無さは)絨毯におわす猿か、おお(汝 孤立するは)豆類に溶け合わせぬ南瓜煮か、おお(汝 その軽薄さは)虚無<sup>からつけつ</sup>よりも少なしか、おお(汝 咽ばせるは)ナフサ油の煙か、おお(汝 その体臭たるや)腋臭<sup>わきが</sup>のそれか! おお(汝 落ちぶれ果てたは)権力<sup>むせ</sup>の失墜者か、おお(汝 老いぼれたは)死滅<sup>むせ</sup>のヒラルル(hilāl ここでは新月に至る前の二十七夜月中心の三日間の三日月)か<sup>25)</sup>。

おお 誰よりも卑しきものよ、離婚の不名誉にしがみ付く者ほどに、そしてまたスィダーク(šidāq 婚資)を支払おうとしない者ほどに。おお(汝 穢れ具合は)路上の泥濘<sup>ぬかるみ</sup>か、おお(汝 咎持<sup>とが</sup>つは)断食中に<sup>26)</sup>飲む水か、おお(汝 震え持つ身は)骨の震え(=悪寒を伴う激しい熱病、マラリヤ熱)か、おお(汝 大喰らいのその様)消化加速器か、おお(汝 その菌の汚さは何か)薄汚い黄色の菌しおるは、おお(汝 その奇形たるは何か)耳の醜さは、おお(汝 その強情振りは)縋<sup>よ</sup>られし綱か、おお(汝 その価値の無さは)ファルス銅貨<sup>ふろ</sup>ほども無きか、おお(汝 表裏二面性あるは)表で流す涙の裏切りか、おお(汝 その色好みときたら)針ほども色欲があるとは<sup>27)</sup>! <sup>28)</sup>

おお(汝 臭き足納める)靴を風上に置く者よ、ところがおお(汝 落ちましたな)落ち着く先が平手打ちくらうとは、おお(汝 野心多くして)「かくあれかし」の仮定ばかり、おお(汝 お粗末な癖<sup>ねぐら</sup>はと言えば)屋根からは雨漏りする小屋とは! おお(汝 その大風呂敷を広げるに)ああだのこうだと口先ばかり、ワッラーヒ(誓って言うが)(大ばら吹いて)汝が尻を星々の上に置き、片足を天界の果てまで伸ばして、シリウス<sup>29)</sup>を掌で捕まえて、スラッヤー(昴<sup>すばる</sup>)<sup>30)</sup>を衣服に織り込み、

を梳き毛と見立てている。

22) この段落のサジュウは下線部の順に: lisāni / khiṣyāni / ‘imyāni / ‘uryāni / ṣibyāni, ta‘āzi / makhāzi / ahwāzi / rāzi, arwanda / dumāwanda。

23) 猿回し qarrād: 職業としては卑しいとされた。既出、第20話「猿のマカーマ 猿回しに興じて」、及び第30話注9の部分を参照。

24) ユダヤ人のダニ labūd al-yahūd; 注釈者 M. ‘Abduh のよれば、アラブは伝統的に「ユダヤ人」は出自、血筋からして akhbath (最も卑賤な) 民族と看做していた(p. 220)。それにたかるダニは更に賤しいことになる。英訳者の Prendergast は「フェルト帽」と訳している。labūd (ダニ) と採らずに lubūd と母音を変えたとその意味になる。

25) この段落のサジュウは下線部の順に: qurūdi / yahūdi / usūdi / (wujūdin), harāshi / firāshi, māshin / lāshin, nifī / ibtī, mulki / hulki。

26) 断食中に ‘alā al-rīq; 直訳は「唾の上に」。断食中は飲食は法度。水を飲むのも、更には唾(rīq)も飲み込んではいけない、飲めば咎に当たる。

27) 針ほども色欲がある abghā min ibra: 針(ibra)と糸(khayt)とは男女の性関係に喩えられる。針には穴があり、使用される度に違う糸が通されるところから。他に「針ほどに反抗的な」と解する説もある。糸を通そうともしないし、とおした後でもチクリチクリと。本話末解説を参照。

28) この段落のサジュウは下線部の順に: tālāqi / šidāqi / tarīqi / rīqi, ‘azmi / haḍmi, asnāni / ādhāni, qalsin / falsin, ‘abratin / ibratin。

29) シリウス Shi‘rā: シリウスはアラビア語ではシウラーという。「燃え盛るもの、焼き焦がすもの」の意味で、このシリウスの出現は暑い夏の到来を告げるからである。日本語表記では同じであるが、si‘rā が本来の語であって、この語根√s/r/ʿrは「火を点ける、燃える」であり、shi‘rāの語根√sh/r/ʿrにはこれに類した意味はない。既出、第1話注26の部分を参照。冬の大三角の一角を占める。

30) スラッヤー Thurayyā: Pleiades、我が国の「昴」。スラッヤーとは「大地に湿り気を与えるもの、大地を(植物を繁茂させて)富み増すもの(tharwā)」の意味である。スラッヤーの出現は秋の到来、乾燥世界に生の息吹である雨を齎す有り難い星と看做されている。それ故明るい星々でもないのに、一固まりで単にナジュム(al-najm 星)とも呼ばれ、星を代表するものとした親しまれてきた。その6、7つの星の形、星取りであるが、首飾り(‘iqd)とも、ブドーの房(‘unqud al-‘inab)とも、また天の鶏(dajāja al-samā’)とも見立てられている。

そして天を機織り機となして、大気を衣類に織るならば、アルタイル<sup>31)</sup>を縦糸となし、巡り行く天球を横糸として織り上げた壮語しても、何のことはない汝は一介の織り職人<sup>32)</sup>に過ぎないではないか<sup>33)</sup>。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：ワッラーヒ(いや全く)私には二人のどちらにより深い感銘を受けたかは判断がつかねた。どちらが弁術にバディーウ(badī' 独創性)があったか、またより素晴らしい即興性があったか、さらには敵対者を抉る鋭さ<sup>34)</sup>があったかは判断が難しかった。そこで私はふたりをそのままにして、ディーナール金貨を分けることなく二人の間に置いたまま、その場を去ることにした。さて時も立ったことだし、金貨が二人の間でどうなったことやら<sup>34)</sup>。

### 第 43 話 ディーナール金貨のマカーマ 完

#### 第 43 話 訳者解説

本話全体に言及する前に、本話の中に出てくる注目点を幾つか述べておこう。

注 35 の本文「おお(汝 寒感走ること)老婆の厳寒よ」、及び注 36 の「おお(汝 不吉なること)巡り来る水曜日よ」についてであるが、いずれもがこの出所はアラブ・バーイダ(遠祖のアラブ)であるアード族伝承から由来する。太古のアラブであるアード族は奢り昂ぶり、神に対して不遜であった。アード族の中から義の人フードは神によって預言者と召命された。フードはアードの人々に教えを説くが殆ど受け入れられない。アード族はむしろ神に対抗すべくバベルの塔ならぬバベルの宮殿の建設を進める。金銀宝石類で飾り立てた列柱立ち並ぶ宮殿イラムである。フードの繰り返しの警告と論しに耳を貸さず、逆に預言者を殺そうとする。ここに至って神はこのアード族を滅ぼすことを決め、7 夜 8 日の大暴風を送る。それは寒さを伴う風フスーム(husūm)であった、寒さ激しい「望み断ち切る、絶望の風」であった。それが注 35 の「老婆の厳寒 bard al-'ajūz」の一週間であった。あらゆる建造物は破壊され、ナツメヤシは根ごと宙に舞って地面に倒された。僅かに助かったのは、洞穴に逃れていた老婆 'ajūz であったが、8 日目にその洞窟から吹き飛ばされて果てた。「老婆の厳寒 bard al-'ajūz」と言われる所以である。生存者は、この地を去って海岸方面に向かったフードとその信者、またメッカに使節として出かけていた数名だけであった。いずれも、他の部族の寄留民となり、同化していった。この故事に基づいて、二月下旬から三月上旬にかけての一週間、寒気の最後の時期を指す。普通には「老婆の日々」ayyām al-'ajūz と言う。別説では、年を取ると老婆 = 老人はこの週を過ごすには耐えられず腰を曲げてしまう程であるから。一週間のそれぞれの日には名前が付けられている。

また太古のアラブ・アード族滅亡を引き起こした曜日が水曜日であった。イスラム期以前には水

31) アルタイル al-tā'ir；わし座の主星であり、正式には al-Nasr al-Tā'ir で「飛び立つ鷲」の意味であり、天の川を縦に南から北へ向かう形となっている。中国では「牽牛星」、我が国では「彦星」として知られる。七夕伝説のベガ(織女、織り姫)はアラブ・イスラム世界では琴座としてではなく、al-Nasr al-Wāqī' (降下する鷲)とされており、アルタイルと対になっているのは同じであるが、描くイメージが異なる。なお Vega もアラビア天文学から伝播したものである。上の al-wāqī' (降下する)が Wāqia → Wagia → Waga → Vega と転訛して西洋の星名になった。夏の「大三角」を構成する。

32) 織り職人 hā'ik；この表現でも分かるように、織り職人もまた自慢できる立派な職業とは看做されてはいなかった。それ故のように相手の中傷するときの例とされる。

33) この段落のサジュウは下線部の順に：khuffī / akuffī, layta / (bayti) / kayta、nujūmi / tukhūmi, khuffān / raffān, minwālan / sirbālan, tā'iri / dā'iri。

34) 最終段落のサジュウは下線部の順に：kalāmi / maqāmi / khišāmi, (taraktu-humā / bayna-humā / bi-himā)。

曜日はドゥバール (Dubār) と言われ、「西風が吹く」、「風向きが西に代わる」意味であった。アラブ世界では「水曜日はイスラムの時代になって「第4の日」の意味でアルビアーウ arbi'ā' と名称は変わっても、古くから「縁起が悪い日」、「凶日」である観念は継承されている。そしてさらに、その最悪が「巡り来ることの無い(最後の)水曜日 arbi'ā' lā tadūru」、すなわち一か月に5回ある場合の最終水曜日であった。わが国の「仏滅」のさらに「仏滅」に当たる。この注34、35に関しての情報は、拙稿「滅びたアラブ・アード族伝承(1)～(4)」『国際関係学部紀要』30～32号((1)～(3)部まで)、『国際関係学部 貿易風』3号((4)部)を参照。

また注27で触れた「おお(汝 その色好みときたら)針ほども色欲がある」の元の「針ほども色欲がある abghā min ibra」とは、実は針(ibra)と糸(khayṭ)とは、その形状と用途から、男女の性器との関係でよく喩えとされる。針には穴があり、糸が通される。また使用される時には違う糸も通されることがある。違う糸を通さない針もあるところから、他に「針ほどに反抗的な」との言い回しもある。糸を拒んだり、その同類を刺すからである。糸を通そうともしないし、通した後でもチクリチクリと刺そうとする。

針(=女性)と糸(=男性)とは男女の性関係の喩えは、アル・ハリリー『マカーマート』第8話に巧みな比喩で叙されている。上の表現は、後者の場合は「おお(汝 その噛みつき振りときたら)針ほどに反抗的な」となろう。針を性的表現として比喩化して用いるこのモチーフは、アル・ハリリーによって全面的に、また申し分なきまで「マカーマ」に仕立てあげられている。第8話「マアッラのマカーマ」では、針と、アイシャドーの用具コホル筆と、それと匂わせながら、直接には言及しないで、性的描写も巧みに織り交ぜながら記述する。本『マカーマート』でも、著者アル・ハマザーニーは第31話で櫛(masht)と紡錘(mighzal)という日常品を巧みに言い繕って、語り手の知性を試そうとする場面がある。ここでアル・ハリリーの方の『マカーマート』第8話に巧みな比喩で叙されているその出だしの一部を紹介しておこう：

法官様、実は、わたしには奴隷の娘がございました。その娘ときたら、体つきが素晴らしく、その頬がなめらかで、働き好きな娘でした。時として良馬の如く機敏に立ち回るかと思えば、また時として寝床に静かに横たわっているという風でした。(暑い盛りの)タンムーズ月に(さえも)、あの娘の肌に触れると涼しく感ずる程でしたわい。それはそれは物分かりよく、思慮深く、機転の鋭くきく娘でした。しかし手には指があるというのに、口には歯が見えませんでした。それでもナドゥナードの蛇の舌のように対象を咬んだり刺したりしましたし、ファドファード衣の端に身を包んではそぞろ歩きもしていました。(身なりもよくその場にふさわしい)暗い背景には黒衣で、明るい背景には白衣で人前に出てきたものです。水は飲むには飲みましたが、水桶からではなく(幼少時鍛練のために振り掛けるようにして)飲むに過ぎないのです。(物事の表裏を弁えて)真実も言えば嘘の方便も用いましたし、身を隠しもすれば顕わにもしました。こうは言っても主人には実に従順でしてな、金持に対しては勿論、貧乏な雇い主に対してもよく従っておりましたわい。もし急に関係を絶とうとすれば、(離れまいとして)まとわりついて来ることでしょうが、徐々に身を退けば、彼女はその場に落ちていていたものです。ともかくも彼女が仕えている限りは、美事に仕事をこなしてくれましたわ、時々は直情すぎて相手を傷つけたり、悩ましたりはしましたがね。……(拙訳平凡社版、I 246～47)

さて本話全体について述べて行こう。サーサーンの集まりに出くわした語り手イーサー・イブン・ヒシャームは集まった面々に対して最良の技芸を披露した者にこのディナール金貨を進ぜよう、と

持ちかける。その中に主人公のアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師がいて、名乗りを上げるが、他にもう一人が名乗り出て、二人の舌合戦となる。そこで語り手はお互いをやり込めた方がこの金貨を取るよう提案する。相手にお互いの欠点を論う中傷のし合いの試合である。ここで二人の中傷合戦が展開される。相手を誹謗するわけで、韻律を伴った韻文で行えばヒジャウ(hija' 風刺詩)の体裁を採り、お互いにそれを行うナカーイド(naqā'id 中傷合戦詩)となろう。また形式的な話になるが、韻文・散文に関わりなく、相手を貶し合って打ち負かし合いをするのをムナーファラ(munāfara)またはマサーリブ(mathālib)と言っているが、本話はそれを内容としていると言えるだろう。次いでにこの種のサブジャンルをもう一つ挙げておくと、対抗者同士が同一人物の対象の美点と欠点を叙すジャンル、マハーシン・ワ・マワーシー mahāsin wa-mawāṣī (褒め合いと貶し合い)のうちの、mawāṣī (貶し合い)をテーマにした一篇としたものと同類と言えよう。ムナーファラやマサーリブにおいて相手を中傷するにしても、貶し合いの内容はあまり具体的な相手の描写は見られない。貶し言葉の羅列に終わる著者一流のやり方であり、そのまま訳していたら、身も蓋も無い詰まらぬものとなろう。訳出するにカッコで如何に補って理解が容易となるか、労を要する一篇であった。貶し合いの内容を比較検討するのも固有文化を知る上で特徴となろう。最後は美事な大言壮語と言えよう。その表現で分かることであるが、主人公は「羊毛梳き屋」と見立て、相手は「機械織り職人」と見立てていたことになる。しかしこれとて実際はサーサーン(門付け稼業)と同類であるから、単なる見立てに過ぎないことになる。サーサーンになる前がその職であったとしても、それに類する記述や縁語が一切出てはこない。主人公像としても、主人公が勝利したのではなく、相手もやり手であって、結局対等と言うことになる。語り手は決着が付けられず、お預けにしたまま金貨を残してその場を去るエンディングである。主人公役が特化、あるいは明別されておらず、ここでは対抗者と五分にわたり合わされたと言うことになる。並はずれた臨機応変の機知振りも、雄弁さも、ここでは語り手を承服させてはいないことになる。

アル・ハリリーはこの第43話を周到に換骨奪胎させてマカーマ作品を作り上げている。彼の『マカーマート』第3話で、同じ「ディーナール金貨のマカーマ」としながら、タイトル通り「金貨」そのものを対象とした一篇を作り上げている。金貨の持つ美点と欠点マハーシン・ワ・マワーシー、金貨の美醜をたっぷりと論じ合わせている点、この先行者ハマザーニーのモチーフを意識して異次元のマカーマを作り上げていることは恐らく間違いは無かろう。

文体面では先ほど述べたように、主人公と対抗者が韻文での対応であったならば、相当の鑑賞評価も変わって来よう。類似のテーマながら後輩のハリリーは第3話でそれをやり通している。本話は、サジュウの配慮は全段落に見られて、その点は評価できよう。しかしどこにも詩行の挿入がない。主人公に語り手の跡を追わせて、後舞台を設けてケジメの詩を詠わせることも出来たろうに。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では28話に、Sofya 版では第6話に収録されている。Paris 版では欠如する。

## 44 話 詩のマカーマ 55 の謎詩行、5つのみ解き明かされて

(原文 M. 'Abduh pp. 223-227)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私がシリアの国に滞在していた時のことだった。旅仲間の一行に私も加わっていた。ある日のこと、一行は集まってハルカ(=円座)を組んだ。話題は詩歌のことで、あれこれ意見が飛び交った。難解な詩行を引いてきたり、謎めいた詩行を提起しては討論した。我々の座の近くに一人の若者が立ち留って、恰も理解できているふうに聞き耳を立てていた。しかしそうした態度をとっていたことを後悔したかのようになり、沈黙は守っていた。そこで私は声を掛けた、「そこのお若い方、あなたがそこで立っているのは目障りなんです、ここへ来て座るか、立ち去るかしてくれまいか」。若者が答えるには、「このまま座り込ませてもらおうというものなんですから、一旦立ち去ってから戻って参ります。どうぞそのままお続け下さい」。我々は応じた、「そうしましょう、喜んで」<sup>1)</sup>。

そうして一旦は姿を隠したかと思うと、この若者は時を置かず再び姿を見せた。そうして尋ねるには、「あなたの方の話されていたあの難解な詩行はどうなりました？ また議論されていました謎めいた詩行の方はどういう結論になったのでしょうか？一つこの私に尋ねてみて戴けませんか？」。そこで我々は疑問になっていた難解な詩行を一つづつ彼に説明を求めたが、(驚くことに)どれ一つとして彼の答えられないものは無かった。さらには謎めいた詩行に関しても、的を射ぬかない解釈は無かったのだ。こうして我々の矢筒が空になり(質問の矢が放てなくなり)、質問の貯蔵庫が底をついてしまった<sup>2)</sup>。

(これを見て若者は自ら打って出て)我々の方を質問の矢面に立たせた。議論を新たに始めたのである。若者が「詩行としてこんなものがありますが、例を挙げてご説明願えますか：

(訳者注 以下の詩行に関する問い掛けは数えたところ長く55問続く。[解]は5問しか与えられていない。他の50問の中、12問は注釈者 M. 'Abduh の注釈を頼りに、また第28話を参考にしたが、半数近くは[解]は示されず、未解決のままで終わる。そのため、内容を分かり易くするため、問いに番号を付し、訳者に理解できた範囲で[解]は注に置かず、本文の問いの直後に入れ込むことにした)

- ① どうお答えになります、半詩行(shaṭr)が称揚(raf')せられており、半詩行が忌避(daf')せられている詩句とは？

[訳者注；[解]は注釈者 M. 'Abduh の注により、作者不詳の下の詩句を再現した(p. 224)<sup>3)</sup>。

[解] ワッラーヒ 我には神疎かにせぬ敬虔の一面あり

wa-llāhi 'indī jānibun lā aḏī'u-hu

されど放蕩と逸楽に耽る他の面持ち合わせてあり

wa-li-lahwi 'indī wa-li-khalā'ati jānibun

前半詩行はムスリムの褒められる行為(mustaḥabb)、後半詩行はとても推奨できる行為ではない(makrūh)。]

1) 冒頭の段落のサジュウは下線部の順に：rifqatun / ḥalqatun、ma'ānī-hi / ma'āmī-hi、yafhamu / yandamu、taq'uda / tab'uda、qu'ūdu / a'ūdu。

2) この段落のサジュウは下線部の順に：abyāti / mu'ammayāti、ajāba / aṣāba、kanā'ina / khazā'ina。

3) 作者は Ibn Abī al-Samṭ と言う詩人である。編集者の岡本多平氏がアラビア語の己の知見と時間のかかる博搜とで探し当ててご指摘いただいた。また 'Abdullāh ibn Ja'far と邸前の扉に座っていた女性とのエピソードで、その女性の誦した後半詩行の異なる資料を提示いただいた。

- ② 次にどうお答えになります、一詩行すべてが平手打ちをくらわしている (yaṣfa‘u) 詩句とは？  
 [訳者注；注釈者 M. ‘Abduh 及び英訳者の Prendergast いずれにも何の説明も無い。Prendergast は以下も同じであるが、単に不十分に訳出しただけで何の注釈も無い。従って [解] は不明ということになる。「平手打ち」をキーワードに調べて行くと、第 28 話の「15 の謎詩行」がヒントになる。「平手打ち」とは予期に反する、どんでん返し、の様に解するのであろう。第⑩問、「裏ではあなたを平手打ちし、表ではあなたを騙している詩行とは、さて？」の [解] はイムルウ・ル・カイスの詩から引用されて：

攻め立てては退いて見せ 自在に前進しては後退する

恰も固き岩石 洪水により上流から流され下る如くに

前半詩行では、攻めるも退くも自在の戦勝気分で聞いている「あなたを喜ばせ」る。しかし後半詩行は岩石が洪水で流される恐ろしい例えを持ってきて、友軍が敵軍に雪崩<sup>なだれ</sup>を打って呑み込まれる描写で「あなたに平手打ちを食わせる」の事例がある。これから推断すると、文意の流れが期待や想像していた内容において後半詩行でも全く意に反したものとなって「平手うち」をくらった、そうした詩句なのであろう。]

- ③ 次にどうお答えになります、一詩行のうち前半詩行が怒りを顕わにし、後半詩行が戯れ遊びとされているものとは？

[訳者注；[解] は注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の詩句を再現した (p. 224)。

[解] 我ら恰も剣振り翳し彼等との間で切り合いとなれり

ka-anna suyūfa-nā min-nā wa-min-hum

手に手に持ちて打ち合うは振じられた布棒<sup>④</sup>

makhārīqu bi-aydī lā‘ibī-nā

この詩行は第 28 話第⑦問と同じであるから、そちらを参照されたい。]

- ④ 次にどうお答えになります、一詩行すべてが疥癬病み (ajrab) に罹<sup>かか</sup>っているとされる詩句とは？  
 [訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注にも欠如する。語アジュラブ ajrabu は疥癬 (jarab) に罹ったもの。もっとも一般的には<ラクダ>であり、「疥癬病みラクダ」、その多数が詠まれているのか。jarab には瘡蓋だらけの疥癬が連想させる (より美的な ?!) 「大小の星が張り付いている夜空」の意味もある。我が国の言葉で言えば「星屑」のイメージが重なるのか、こうしたことが詠われているのであろうか。]

- ⑤ どうお答えになります、アルード (‘arūd 前半詩行末尾韻) では戦い合い、ダルブ (darb 後半詩行末尾韻) では仲睦まじくなっている詩句とは？

[訳者注；[解] は注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の詩句を再現した (p. 224)<sup>5)</sup>。

[解] 我ら汝たちに手出し足出し 我先にと横槍を入れけり

qaraynā-kum fā-‘ajjalnā qirā-kum

夜明け少し前なれど 挽き臼で粉挽き潰しながら

qubayla ṣ-ṣubḥi mirdātan ṭahūnā

客に対する朝食の持て成しで手足を使って粉挽きし、捏ねるに忙しく立ち働するホスト側の仕草を描いている。]

- ⑥ どうお答えになります、一詩行すべてが蠅 (‘aqārib < ‘aqrab) となっている詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は欠如する。参考までに、アカーリブ ‘aqārib は蠅

4) 振じられた布棒 makhārīq；単数形は mikhrāq。アラブ版チャンバラごっこ。ほろ布を振りあわせ棒状にして相手と打ち合う。

5) この詩行はジャーヒリーヤ時代のムアッラカートの大詩人 ‘Amr ibn Kulthūm の長詩の中の第 33 詩行に当たることが判明。岡本氏の指摘である。多謝。

（‘aqrab）の複数として馴染みではあるが、他にも「皮紐」の意味もある。また‘aqārib のみの複数形だけで独立した意味を持つ。「中傷、悪口」、それに「災難」がある。最後者の「蠍」は、「厳冬」の意味で‘aqārib al-shitā’（冬の蠍）として知られるが、「蠍」＝「災難」であって、こんな用法も詩行中に謳い込まれているのであろう。同音異義語詩行か、「貴社の記者、汽車で帰社」のような？なお蠍に関しては拙稿「天地の蠍」（星と動物（3）獣帯の天秤・蠍・射手 アラブ・イスラーム世界のフォークロア）を参照。]

- ⑦ どうお答えになります、状況叙述は不謹慎なものではあるが、末句法が見事にそれを帳消しにしている詩句とは？

[訳者注：この詩行の[解]については、設問がすべて終わった後で、5問解答中の第1解答として主人公の若者が説明をしている。本文後半の該当箇所参考。なお設問の仕方も回答もすべて第28話第③問と同一である。但し前半詩行の末語‘aṣābatin の箇所は‘iṣābatin となっている。]

- ⑧ どうお答えになります、「涙流れて止まず lā yarqa’u dam’u-hu」となる詩句とは？

[訳者注：問も[解]も第28話第④問と同一なので、そちらを参照。]

- ⑨ どうお答えになります、一詩行すべてが逃げ去る(ya’biqu)のは、脚(rijlu)のみ残したまま？

[訳者注：注釈者 M. ‘Abduh の注にも[解]が欠如する。思うに、詩の内容は逃亡を叙しており、問題の「脚」は「歩脚」であって詩の形式の方で、律格の長短の歩脚型を表わしているのではないか、と思われる。]

- ⑩ どうお答えになります、謳われている当のその ahl (御人達)には知られていない詩句とは？<sup>6)</sup>

[訳者注：これは第28話第②問と同一である。そこでの問いは、「その部族民の一人のことをマドフ(madh 賞賛)しているのに、当の本人達は気づいていない詩行、これも多くありますぞ。フザッリーからその例を引きましょう」とある。本話での問は余りにおおまかである。]

- ⑪ どうお答えになります、身内(ahl)でも無さそうなのにそれと同じ(mithl)くらい長い詩句とは？

[訳者注：[解]は第28話第⑮問の答にあり。そこでの問いは、「同僚より長く恰も身内ではないように装う詩行については？」とあり、[解]は「ムタナッビーの馬鹿げたものから選ぶことにしよう…と続く。]

- ⑫ どうお答えになります、(邸の)取り壊し(naqd)は出来ないし、その土地を掘ることも出来ない詩句とは？

[訳者注：[解]は注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の詩句を再現した(p. 224)<sup>7)</sup>。

[解] げに天空を引き上げ給う方 我らがために建てられたり

inna lladhī samaka s-samā’a banā la-nā

その支柱たるや遠<sup>はるけ</sup>く高く中天の邸をば

baytan da’a’imu-hu a’azzu wa-arfa’u

天地創造の時、創造神は混沌とした見定めがたい海陸より、水平を上押し上げて空間を作った。それが天空という邸である。その邸は「取り壊しは出来ないし、その土地を掘ることも出来ない。』

- ⑬ どうお答えになります、半詩行が完全であり、半詩行が衣類(sarābil)となっている詩句とは？

6) ここまでを段落として、そのサジュウは下線部の順に：yarfa’u / yadfa’u / yaṣfa’u, yaghdabu / yal’abu / ajrabu / yuhāribu / yuqāribu / ‘aqāribu, waq’u-hu / qaṭ’u-hu / dam’u-hu, kullu-hu / rijlu-hu / ahlu-hu。

7) この詩行はウマイヤ朝の大詩人 Farazdaq の作になるものと判明。岡本氏の指摘による。最末語が wa-aṭwalu (最も長く＝最も高く)となっている。

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は欠如する。恐らく [解] は「半詩行が衣類となっている詩句」の方に見出し得よう。「衣類」と訳した sarābil は複数形で、単数は sirbāl。「シャツ」、「武器の胸当て」、「カリフの役職」などの意味がある。さらに『コーラン』第 16 章 81 節には、「アッラーはあなたの方のために暑熱から身を守るための衣類 (sarābil) を創り与えました。また不慮の事態のために身を守る武器の胸当て (sarābil) をも創り与えた方です」、と sarābil が二か所異義語用法が記されている記述もある。また文字数の多い語は分節されて二語扱い、ここでは sarā+bil で解されることも想定される。]

- ⑭ どうお答えになります、その数 (‘idda) がかぞえられない詩句とは？

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は述べられていない。イッダ (‘idda) には「数」の他に、既婚の女性が再婚する際の「待婚期間」の用語として知られている。こちらの意味が関与していそうである。]

- ⑮ どうお答えになります、それで喜ばされるものをあなたに見せる詩句とは？

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は示されていない。原文は wa-ayyu baytin yurī-ka mā yusarru bi-hi であり、手掛りとなる語句も意味内容も見つからない。恐らく内容の方を問うているのであろう。]

- ⑯ どうお答えになります、世界 (‘ālam) を包み込むことができない詩句とは？

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] が述べられていない。直義は「世界がそれを押し広げ(られ)ない詩句とは」。後述の 45 問、「一旦縮めては地平線まで広げる詩句とは」との関連は？ どちらには [解] がある。]

- ⑰ どうお答えになります、半詩行 (niṣf) は笑えて (yaḍḥaku)、半詩行は痛々しくなる (ya’lamu) 詩句とは？

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注は [解] を述べてはいない。しかし第 28 話第⑩問がこれに相当するものと思われる。そこでの問い、「最初はあなたを喜ばせ、後ではあなたを不安がらせる詩行については？」とあり、[解] は「イムルウ・ル・カイスの詩から引用してみましょう…」とある。詳しくは当該箇所を参照。]

- ⑱ どうお答えになります、その枝が揺すられると、美しさが失われる詩句とは？

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注により、[解] を下の詩句に再現した (p. 225)<sup>8)</sup>。

[解] 汝それほどの容姿なれば もし猛禽の眼光の所持せざれば

la-ka qaddun law-lā jawāriḥu ‘aynay-ka

灰色鳩やすらけく樹上で歌い続けることであらうに

la-ghannat ‘alay-hā wurqu l-ḥammāmi

「汝」とは「気品高い鷹」のこと。「猛禽の眼光」とは、この場合「鵜の眼、鷹の眼」で知られているように、視力良く、獲物である灰色鳩 (wurqu l-ḥammām) を目ざとく見つけて狙いを定める」こと。「その枝が揺すられる」とは、止まっていた枝から鷹が飛び立ち、枝が揺れること。「美しさが失われる」とは捕食されるか、良くて危うく難をのがれたが、羽根毛が無残に飛び散り、見るも無残な形姿になること。]

- ⑲ どうお答えになります、それを全部集めて (jama‘nā) しまうと、その意味 (ma‘nā) が失われる詩句とは？

[訳者注: 注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は述べられてはいない。手掛りが見つからない。]

- ⑳ どうお答えになります、我々が解放して (aflatnā) あげると、迷わせて (aḍlalnā) しまうことになる詩句とは？

8) この詩行は Ibn Tamardāsh という詩人である。ただし、版本によっては ‘aynay-ka の箇所が jafnay-ka (汝が瞳) となっている。岡本氏の指摘による。

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注により、[解] である下の詩句を再現した、作詞者名は不記 (p. 225)<sup>9)</sup>。

[解] 我悩まずば何ぞ 疲れ果てたるラクダのことを

a-lā inna-nī bālin ‘alā jamalin bāli

我ら導くは熟達した指導者 心より我ら従い行く

yaqūdu bi-nā bālin wa-yatba‘u-nā bāli

ここでは乗用 rakūb として用いられてきたジャマル (雄ラクダ) が疲労して憔悴し切っている。まだ使うのか、それとも遺棄して路頭に迷わせるか、我々はベテランのリーダーを見守るばかりだ、頼りになり決断するのは彼だけだからと。この詩行の注目点は bāli が 4 語も用いられていることである。① bālin は balā (悩まず、試練にかける) の能動分詞、②の bāli は baliya (疲れる、擦り切れる)、③ bālin は ①の同じく能動分詞で (試練経し者)、そして④ bāli は語根が異なる bāl (心) 語根・語義を bāli < bālī (わが心) で纏めている。前三者は能動分子形、最後の詩句とは名詞 + 代名詞属格の語形である。]

- ②① どうお答えになります、その shahd (蜂蜜) が毒になっている詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は記されていない。語 shahd には「蜂蜜」の他に、shāhid (証言人) の複数形にも当たる、すなわち「証人達」の意味にもなる。その証言が被告の「毒」になる想定が成り立つが如何なものであろうか。]

- ②② これはどうお答えになります、それを褒めている (madh) のに<sup>けな</sup>貶して (dhamm) しまうことになる詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の [解] の詩句を再現した (p. 226)<sup>10)</sup>。

[解] 我が部族、その人員の数多く誇れるもの <sup>まさか</sup>されど戦時の

fa-inna qawmī wa-in kānū dhawī ‘adadin

<sup>と</sup>事態至るや 頼り甲斐無し 左程のことの無き時も

laysū mina sh-sharri fī shay’in wa-in hānā

前半詩行では自分の属する部族の属員の数誇って、それを褒めている。しかし後半詩行ではそれなのに、一旦事あれば、その武勇の無さ、不甲斐無さの何たるや、左程の「まさかの時」のない事態において、と吐露して<sup>けな</sup>貶してしまうことになる。]

- ②③ どうお答えになります、その表現は甘美 (ḥulw) なのに、その下は悲哀 (ghamm) となっている詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注にも [解] は触れられていない。第 28 話の間⑩と関連があるか。上は上句、下は下句と解して。]

- ②④ さてどうお答えになります、それを解除してあげたのに<sup>けな</sup>締め付けとなって、すべて支払わさることになってしまった詩句とは？

[訳者注；この詩行についての [解] は、設問がすべて終わった後で、5 問解答中の第 2 解答として主人公の若者が説明をしている。後述該当部を参照]

- ②⑤ どうこれはお答えになります、半詩行がマッド (madd 伸長) するのに、半詩行がラッド (radd 反発) している詩句とは？<sup>11)</sup>

9) この詩行はジャーヒリーヤ時代のムアッラカートの大詩人 Imru’ al-Qays の作である。但し、彼の代表的長詩タウィール調の lāmiyya の中には入っていない。岡本氏の指摘による。

10) 詩人の名は Qarīf ibn Anīf. シャイバーン族の Laqīta 支族に属する。部族が襲撃 (ghāra) を受けても戦えずしてみすみすラクダ達 (ibīl) を奪われてしまう。自部族の男どもの情無さを嘆いたもの。岡本氏の指摘による。

11) この段落のサジュウは下線部の順に；ahli-hi / mithli-hi、naqdu-hu / arḍu-hu、(kāmilun / sarābilu)、‘ālamu / ya‘lamu、ghuṣnu-hu / ḥusnu-hu、jama’nā-hu / ma’nā-hu / aflatnā-hu / aḍlalnā-hu、sammun / dhammun / ghammun、‘aqdun / naqdun / maddun / raddun。

[訳者注：この詩行についての〔解〕も、設問がすべて終わった後で、5問解答中の第3解答としての説明が述べられている]

- ②⑥ どうお答えになります、半詩行がラフウ (raf' 上昇) しているのに、そのラフウ自体が平手打ちとなっている詩句とは？

[訳者注：注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕が記されていない。後半詩行がアヤとなつていよう。第②問、第①問との関連、解釈がヒントになりはしないか。]

- ②⑦ どうお答えになります、それを追いつくことが賞賛となり、逆にすると非難することになっている詩句とは？

[訳者注：注釈者 M. 'Abduh の注には欠如する。しかし第 28 話第①⑥問には、「他の言を借りると：語一つなれど一見は称賛しているよう されど別読みを受取れば毀損<sup>こな</sup>わしめていることになろう」がこれに当たろう。①⑥問は「一文字の読み方である場合には軽蔑と受け取られ、その一文字を切り詰めた別読みにすると免罪される詩行とは？」と出てくる。文字 'ayn の尾を追いつくと hamza になる。dā'a (消え失せる) と dā'a (光り輝く) は意味が逆になる。]

- ②⑧ これはどうお答えになります、カアバ参拝の折、恐怖の礼拝で済ますことになる詩句とは？

[訳者注：この〔解〕も注釈者 M. 'Abduh の注には欠如する。「恐怖の礼拝」(ṣalāt al-khawf) とは「緊急事態時の礼拝」のこと。戦時や身の危険が及ぶとき、その対応が出来るよう、義務の礼拝時において、ラクア(礼拝所作一順)の一部を省略できる。俄かな対処が出来ない座って祈るジュールス(座拝)、地面に額<sup>めか</sup>づくスジュード(額拝)はせずに、単にまっすぐ立ったままのキヤーム(立拝)と膝に手を当て頭を垂れて屈むルクウ(屈拝)で済まして良いことになっている。]

- ②⑨ どうお答えになります、シャール (shā' 羊・ヤギ類) が何時でも好きな時にそれを食べられる詩句とは？

[訳者注：この詩行についての〔解〕は、設問がすべて終わった後で、5問解答中の第4解答として説明がなされているので、後述される。]

- ③⑩ さてこれはどうお答えになります、頭 (ra's) を殴ると歯 (adrās) を折ってしまう詩句とは？<sup>12)</sup>

[訳者注：注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。しかしこの〔解〕は第 28 話第⑨問と同一であって、問い方を換えているだけではないかと思われる。そこでは、第⑨問であるが、「一方では真珠のような歯をしているのに他方では刃毀れした鋸のような歯をしている詩行とは」とあり、これの〔解〕については、「再びアアシャー殿に登場してもらいましょう…」とある。前半詩行が「頭」であり、後半詩行が「殴られて折られた歯」の内容となっている。]

- ③⑪ どうお答えになります、伸びて (tāla) 伸びて 6 ラトル (arṭāl < raṭl) に達して (balagha) しまう詩句とは？

[訳者注：この詩行についての〔解〕は、設問がすべて終わった後で、5問解答中の最後の第5解答として主人公の若者が説明をしている。]

- ③⑫ これについてはどうお答えになります、立ち上がった後崩れ落ちて眠ってしまう詩句とは？

[訳者注：注釈者 M. 'Abduh の注に〔解〕があり (p. 225)<sup>13)</sup> 下に記すのがそれである：

12) この 26~30 問のサジュウは下線部の順に：raf'un / ṣaf'un, madḥun / qadḥun, ṭawfi / khawfi, (shā'u / shā'a), ra'sa / idrāsa。

13) 作者はウマイヤ朝のガザル(恋愛)詩人ジャミール Jamīl (660-701) である。恐らく恋人 Buthayna との叶わぬ恋のことを質ねられてのことであろう。min nawmi-kum (汝らの眠りから) の部分が wayha-kum (汝らの呪われたこと

〔解〕 眠れる者よ 汝らの眠りから目覚めて欲しきもの

a-lā ayyuha n-nuwwāmu min nawmi-kum hubbū

そして尋ねたきことあり 恋愛人を殺すこと有りや無しやと

as'alu-kum hal yaqtulu r-rajla l-ḥubbu

問の「立ち上がる」は、〔解〕では「目覚める」となっている。即ち眠っていた者が起こされて、恋人のことを質問されたために再び眠りに落ちる＝正気を失う。]

- ③③ どうお答えになります、減少したいと欲するのに増加してしまう詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。これも推断するに両義的な語句を含んだ詩句なのであろう。第28話の第⑤問との関連はどうか。]

- ③④ さてどうお答えになります、出かけようとしたのに戻って来てしまった詩句とは？

〔訳者注；この詩行についての〔解〕は、注釈者 M. 'Abduh の脚注にある (p. 226)<sup>14)</sup>。

〔解〕 我裕福な彼等の中にあつて 享楽に明け暮れる者に非ず

wa-mā anā min-hum bi-l-'ayshi fī-him

さ非ずして 燻<sup>いぶ</sup>した金の鉱脈たるぞ我なる

wa-lākinna ma'dīnu dh-dhahabi r-raghām

「出かけようとした」のは享楽に明け暮れる裕福な彼等のところ、無為に時を過ごす。「戻って来てしまった」のは思い直して自分は己に秘めた才能「燻した金の鉱脈」を生かして磨くべく時を過ごさねばならない反省に立ったからである。]

- ③⑤ どうお答えになります、イラクを破壊した詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin ḥarabu l-'irāqi]

- ③⑥ これはどうお答えになります、パスラを征服した詩句とは？<sup>15)</sup>

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin fataḥa l-baṣra]

- ③⑦ どうお答えになります、迫害の下、溶けてしまった詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin dhāba taḥta l-'idhābi。③⑧問以下の問い掛け文は同形語や部分同形語のジナース技法を用いている。よく謎々などの言葉遊びに用いられるのでそうした例句か。]

- ③⑧ どうお答えになります、青年期になる前に年老いてしまった詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin shāba qabla sh-shabābi]

- ③⑨ どうお答えになります、約束時の前に帰ってきてしまった詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin 'āda qabla l-mī'ādi]

- ④⑩ どうお答えになります、折角降り立ったのに飛び去ってしまう詩句とは？<sup>16)</sup>

〔訳者注；注釈者 M. 'Abduh の注には〔解〕は欠如する。この問いかけと〔解〕とは上の第⑬問と類似していると思えるが。或いは原文 wa-ayyu baytin ḥalla thumma ḍmaḥalla を見ると、「降り立った」ḥalla、「飛び去ってしまう」ḍmaḥalla の同韻が関与しているか]

よ)となっている。岡本氏の調べによる。

14) 作者はアッバース朝の頌詩詩人ムタナブビー al-Mutanabbī (915-65)。その詩才は己を預言者 (nabiyy) と言わしめた (mutanabbī) ほどである。引用詩もそうした一面を覗かせている。岡本氏の博捜による。

15) この 31~36 問のサジュウは下線部の順に；ṭāla / arṭāl, qāma / nāma, (arāda / zāda), (kāda / 'āda)。

16) この 37~40 問のサジュウは下線部の順に；'idhāb / dhāb, shabāb / shāb, mī'ād / 'ād, ḥalla / ḍmaḥalla。

④① どうお答えになります、きつく縊られて強くなった詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。これも原文 wa-ayyu baytin umirra thumma stamarra であり、「縊られて」umirra、「きつく強くなった」stamarra の同韻、同語根であるところに〔解〕がありそうである。或いは第 28 話第⑦問のぼろ布を「きつく縊られて強くなった」チャンバラ用の布棒が想定されているのか。〕

④② どうお答えになります、直されて改正された詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の〔解〕を得た (p. 226)<sup>17)</sup>。

〔解〕吉報僅か一つならば伝える勿<sup>なか</sup>れ されど二つならば良し

lā taqul bushrā wa-lākin bushrayāni

例えば招待者の目出度きこと 二大祭の情報など

ghurrata d-dā‘ī wa-yawma l-mahrajāni

アラブの興味深い習慣を言っている。吉報は一つの情報だけではいけない。一情報だけならば「直され」る。その吉報に何か関わる関係者の目出たいことなどのもう一つの情報か、それ以外の良い情報、例えば時宜を得た祭礼や祝いごとなどを加えて「二つの情報」としてもたらされねばならない。即ち「改正され」て二つ以上にして吉報は届けるもの。〕

④③ さてどうお答えになります、詩人ティリンマーフの矢より速い詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には欠如する。ティリンマーフ al-Ṭirimmāḥ (110/728 没) はウマイヤ朝期ターファで活躍した砂漠派詩人で旅や動物を好んで描写した。ティリンマーフはジハード(遠征)にも参加しており、「矢より速い」とはそれが関係しているか、詩の内容を問いかけているか。普通名詞 ṭirimmāḥ には「洞察力のある、透徹した、長い」などの「矢」と関連した語義がある。〕

④④ どうお答えになります、彼等の眼より飛び出す詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin kharaja min ‘ayni-him〕

④⑤ どうお答えになります、一旦縮めては地平線まで広げる詩句とは？<sup>18)</sup>

〔訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の〔解〕の詩句を再現した (p. 226)<sup>19)</sup>。

〔解〕アッラーにとりては左程困難なことに非ず

wa-laysa ‘ala llāhi bi-mustankiri

見渡す限りのこの世界を一個人に集めることなど

an yajma‘a l-‘ālama fī wāḥid

太守の能力の高さ、それをアッラーの全能であることの一例を持って来て喩えている。順が逆になるが「一旦縮めては」とは「この世界を一個人あるいは「一つ」に集めること」、「地平線まで広げる」とは「見渡す限りのこの世界」を創造すること。なお⑩問、「世界を包み込むことができない詩句とは」との関連もありそうである。〕

④⑥ さてどうお答えになります、戻ると痛みを刺激する詩句とは？

〔訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin raja‘a fa-hāja l-waja‘a。第 28 話第③、第⑥、第⑩問辺りを手懸りにしてゆけるか。〕

④⑦ どうお答えになります、半分は金で残りは尾となる詩句とは？

17) アッバース朝第 15 代カリフ・ムウタミドの時代、タバリスターン太守として活躍した al-Hasan ibn Zayd (883 年歿) の善政を讃えた詩。作者は不明。岡本氏の調査による。

18) この 41～45 問のサジュウは下線部の順に：umirra / stamarra, ṣalāḥa / uṣliḥa, dāqa / āfāqa。

19) 大詩人 Abū Nuwās の作詩。ある太守を頌讃した madh (頌詩) の一節。岡本氏の調べによる。前半詩行に多少の変異あり。

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin nişfu-hu dhahabun wa-bāqī-hi dhanabun。「金」dhahabun と「尾」dhanabun とは一文字違いである。この問い自身のことか、前半節は「金」で、後半節(=残り)は「尾」となる。しかし韻文の創出が必要となる。第28話第①問の形式ではなく、内容の部分および本話第⑩問、第⑭問などを手懸りにできないものか。]

- ④⑧ これはどうお答えになります、ある部分は暗く、ある部分はワインになっている詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin ba‘ḍu-hu ḡalāmūn wa-ba‘ḍu mudāmūn]

- ④⑨ どうお答えになります、加害者が被害者に変わり、思考する者が思考される側にされてしまう詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin ju‘ila fā‘ilu-hu mafūlan wa-‘āqilu-hu ma‘qūlan]

- ⑤⑩ どうお答えになります、そのすべてが汚されていない詩句とは？<sup>20)</sup>

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin kullu-hu ḥurmatun]

- ⑤⑪ どうお答えになります、各詩行がラクダの行列となっている二詩行とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytayni humā ka-qitāri l-ibili。キタール qitār は現在では「汽車、列車」の意味になったが、元は「ラクダの列」である。連想の妙と言えよう。]

- ⑤⑫ どうお答えになります、高みから降りてくる詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin yanzilu min ‘ālin]

- ⑤⑬ これはどうお答えになります、その前兆(鳥占い)が凶と出ている詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin ṭiyaratu-hu fī l-fāli アラブの鳥占いについては、第3話の訳注3、及び訳者解説、第14話訳注6を参照。「左」とか「鳥」とかが隠喩的に用いられているか。]

- ⑤⑭ どうお答えになります、その終わりは逃げ去るのに、その始まりは求めている詩句とは？

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注により、下の〔解〕の詩句を再現した (p. 225)<sup>21)</sup>。

〔解〕無知なるかな 剣の無知の如く 剣引き抜かれる時

bi-jahlin ka-jahli s-sayfi wa-s-sayfu muntaḍā

寛恕なるかな 剣の寛恕の如く 剣鞘に収まれる時

wa-ḥulmi ka-ḥulmi s-sayfi wa-s-sayfu mughmadu

剣=危険は、その始まりはその抜き身を鞘から放たれれば<血>を「求める」。そして鞘に収まれば<血>は安全に「逃げ去って」終わることが出来る。]

- ⑤⑮ さてどうお答えになります、最初は与えているのに、最後は奪っている詩句とは？<sup>22)</sup>

[訳者注；注釈者 M. ‘Abduh の注には〔解〕は欠如する。原文 wa-ayyu baytin awwalu-hu yahabu wa-ākhiru-hu yanhabu]

20) この46~50問のサジュウは下線部の順に；raja‘a / waja‘a、dhahabun / dhanabun、ḡalāmūn / mudāmūn、mafūlan / ma‘qūlan。

21) この作者はアッバース朝下の首都バグダードで独特の詩趣作品を残した Ibn al-Rūmī (896年歿)である。I‘jaz (秀句)の代表例の一つとされる。彼はアッバース朝黄金期のバグダードっ子。父がルーム(ギリシャ・小アジア)出身であるところから、この愛称で親しまれた。本名は Abū al-Hasan ‘Alī ibn ‘Abbās といった。詩人として活躍し、思索的、瞑想的な詩風で長大な作品が多い。ギリシャ語にも長じており、哲学や神学にも、またムウタズィラ派やシーア派的思想に通じていた。岡本氏の調査による。

22) この51~55問のサジュウは下線部の順に；(ibli / ‘āli / fāli)、(yahrubu / yaṭlubu)、yahabu / yanhabu。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：こうして問いかけてきた詩行のことはかつて聞いたことも無かったものばかりであった。だから我々はその解釈の詩行とその説明を求めた。若者は釈義するのを拒んだ。そこで我ら一同はその切り取り方の見事な語の数々から検討をしていった。しかし何ら回答がその下に見出されることは無かった。若者が手を差し伸べて、提案するには「それではこれらの問いの中から5問だけ選び出してください。それについては(詩と解釈の)説明を行いましょう。その他の問いには何日もかけてその[解]を見出してください。あなた方の(頭の)容器も汗を滴らすこととなるでしょう、あなた方の考え方もより寛容になることでしょう。どうしても[解]が見つからないようでしたら、再度の会合を持つことといたしましょう。その折に残りの問いかけに対する[解]を説明することといたしましょう。そこで我々が(あれこれを議論して)選び出したのは、初めに「第⑦問 状況叙述は不謹慎なものではあるが、末句法が見事にそれを帳消しにしている詩句とは？」であった。その詩行についての解説を求めた<sup>23)</sup>。

すると彼は、答えて「この第⑦問の事例はアブー・ヌワースから引くことにしましょう；

我等一夜過ごせり アッラーの見たところ 最悪の徒党ならん

fa-bitnā yarā-na llāhu sharra ‘aşābatin

邪悪な裾を高慢にも引き摺りながら されど何の誇りあろう

tujarriru adhyāla l-fusūqī wa-lā fakhru<sup>24)</sup>

次に我々が選んだ末、尋ねた。「第②④問の、それを許してあげたのに締め付けとなって、すべて支払わさることになってしまった詩句とは？」をお願いします。若者が答えるに、「それではアアシャーの詩行から引きましょう；

我等がディルハム銀貨そのすべて良質の物なれば

darāhimu-nā kullu-hā jayyidun

その真贋試すに躊躇するなかれ

fa-lā taḥbisannā bi-tanqādi-hā

その解は以下のような説明がなされております。(前半詩行に問題があつて) darāhimu-nā jayyidun kullu-hā が正解。こうすることでワズン(律格の拍の重さ)が保たれたことになります<sup>25)</sup>。

次に我々は三つ目を選んで説明を求めた、「第②⑤問の、半詩行がマッド(madd 伸長)するのに、半詩行がラッド(radd 反発)している詩句とは？」。若者が答えるに、「それではアル・バクリーの詩行から引用しましょう；

本物のディーナール金貨汝が許にもたらされり

atā-ka dīnāru šidqin

23) この段落のサジュウは下線部の順に：sami‘nā-hu / muni‘nā-hu、naḥta-hā / taḥta-hā、yarshaḥu / yasmaḥu、(talāqī / bāqiya)、wad‘u-hu / qat‘u-hu。

24) 繰り返しになるが、設問の仕方も回答もすべて第28話第③問と同一である。但し前半詩行の末語‘aşābatinの箇所は‘iṣābatinとなっている。

25) こうすることでワズン(重さ)が保たれたことになります；前半詩行の darāhimu-nā kullu-hā jayyidun も darāhimu-nā jayyidun kullu-hā も意味は全く同じ。しかし前者を吟味するのを「許してあげた」ところ、律格の短長拍のワズン(重さ)が想定されていた(=銀貨の本物)と異なり軽くなっているのではないか(=「締め付けとなって」しまった)。つまり偽物として判定され、歩脚型を新たに詩行を組み立て直さねばならない破目に陥り、「すべて支払わさることになってしまっ」て後者の詩行と相成ったわけである。このアアシャーの同一詩行は別の視点から、「散文では言い換えられない詩行に関してだが、その事例は多くありますぞ。一例を示すと、詩人アアシャーは次のように詠じておる」として、既に第28話第①問として取り上げられている。詩人アアシャーについても同じ箇所を参照。しかしここでは設問の仕方が異なるので、実は贋物なのに試さなくても良いと「許された」ことが返って相手に試すべしとの「締め付け」を後半詩行で言ってしまった。それが相手の良い口実となって、実際に口に含んで嚙んで試したために銀銀貨だと判明し、すべて贋物を純銀と替えて「支払われ」てしまった。

されど 60 ファルス銅貨分不足しており

yanquṣu sittīna falsā

その御仁 最も高貴なるは確かなれども

min akurami n-nāsi illā

出自、出身部族、人格を除けばのことなり

aşlan wa-far'an wa-nafsā

(ムジュタッス mujutaththu 調 sīniyya s 脚韻詩)

[訳者の解：形式ではなく、内容であるから理解が容易である。二詩行のうち、内容を見るときに、前半詩行は善がマッド(伸長)しているのに、後半詩行が好評価をラッド(反発)していることになる。]

次に我々は四つ目を選んで、「第②⑨問、シャーウ(羊・ヤギ類)が何時でも好きな時にそれを食べられる詩句とは？」について説明を求めた。若者が答えた、「ある詩人の作品を紹介しましょう；

ナワーなどとても出来るものではない ナワーなど切り離されよ

ナワーなど伐採されてしまえ

fa-mā li-n-nawā judhdha n-nawā qutī'a n-nawā

ナワー 我が見るところ仲良き友と切断されるに等しい

ra'aytu n-nawā qaṭṭā'atan li-l-qarā'ini<sup>26)</sup>

(タウィール ṭawīl 調 nūniyya n 脚韻詩)

[訳者の解：この詩行ではナワー *nawā* が都合 4 回も用いられている。*nawā* には「別離」(最初と最後)と「デーツ(ナツメヤシ)の種」(第2、第3語)の意味を持つ同形異義語であり、それを巧みに混ぜて編み込んでいる。友と別れたくないばかりに半ばヤケクソ気味に詠われているわけであるが、設問での意味を取れば「デーツの種」が 4 回も出てくるわけであるから「シャーウ(羊・ヤギ類)が何時でも好きな時にそれを食べられる詩句」ということになる。そしてナワーはこの場合ナツメヤシの樹自体への意味を外延させている。デーツのナワーは細長い種で、硬く羊・ヤギ類よりラクダが好む食材である。]

我々は最後に説明を求めたのは「第③⑩問、伸びて伸びて 6 ラトルに達してしまう詩句とは？」であった。若者は答えた、「それにはイブン・ルーミー<sup>27)</sup>の作品が相応しいでしょう；<sup>28)</sup>

贈り物与えるに、与えた者への贈り物の返しの

贈り物求めて贈り物するに非ず

idhā manna lam yamnun bi-mannin yamunnu-hu

我が心に言い聞かすは、おお我が魂よ休息を！と

wa-qāla li-nafsī ayyuha n-nafsu amhili

[訳者の解：この詩行では *mann* (贈り物) 及びその動詞形 *manna*, *yamnunu* (贈り物、恩恵を与える) が前半詩行だけで 4 回用いられている。『旧約』のモーゼの中に出てくる恵みの食べ物マナもこの語である。そして *mann* は同時に重量単位マンである。1 マンは 2 ラトル、1 ラトルは約 500 グラムである。4 回であるから、「伸びて伸びて」6 ラトルどころか 8 ラトルに達していることになる。6 ラトルで約 3kg、8 ラトルで約 4kg の重さがある。「伸びて伸びて 6 ラトルに達してしまう詩句」とはこのことを指して

26) この詩行はバスラ生まれの言語学者で古詩や古伝承に詳しかったアスマイー *al-Asma'ī* (828 年歿) の作とされる。但し、後半詩行に 2ヶ所異同が見られる。*ra'aytu* (我が見るところ) が *ka-dhāka* (かくのごときもの)、この変更に伴い *qaṭṭā'atun* と主格読みに替わる。また、*li-l-qarā'ini* (仲良き友と) が *li-waṣṣāli* (親しき者と) になっている。岡本氏の教示による。

27) イブン・ルーミー *Ibn al-Rūmī*；既出の注 21 を参照。

28) この段落のサジュウは下線部の順に：‘*aqdun* / *naqdun*、*maddun* / *raddun*、(*shā'u* / *shā'a*)、(*tāla* / *arṭālin*)。

いる。なおこの詩行も既に第28話にでてきており、その第⑤問「それが降り落ちてくると重くなる詩句」として、同じ「重さのマン」を共示として主題にしている。」

イーサー・イブン・ヒシャームはさらに語りを続けた：こう（解説されて）我々も問題とした設問に（甚だしく）アータイル（無飾、浅学）では無いことが自覚された。それで残りの設問の解となる詩行を一生懸命捻り出そうとした。そのいくつかの解は何とか見つけ出した。他のいくつかは何らかのヒントを与えてもらった。暫くして若者は去って行ったのだが、それを追う様に私は詠じた：<sup>29)</sup>

人それぞれ得意とするもの異なれり

tafāwata n-nāsu faḍlan

いくつかは類似した点あるとはいえ

wa-ashbaha l-ba‘ḍu ba‘ḍan

もし彼無くば 我ラドワー山<sup>30)</sup>になれたるや

law-lā-hu kuntu ka-raḍwā

長さにおいて深さにおいて広さにおいて

ṭūlan wa-‘umqan wa-‘arḍan

(ムジュタッス mujtathth 調 qādiyya q 脚韻詩)

#### 第44話 詩のマカーマ 完

#### 第44話 訳者解説

今回のマカーマの聞かせ所は、異文化の人間には理解や鑑賞が難しい。こうしたところにも、アラブの異文化としての言語文化の持つ特色が浮き出ているものではあるが。本話の作品鑑賞は、ひとえに55に亘る謎めいた詩行の割り出しとその内容にある。それが著者からは5問しか答えを明かしてくれていないのである。次々に繰り出される問に対して、それでは後で明かされる解となる詩行が、その内容が、答えになっているかといえ、本文では5つの解の詩行が明かされるだけで、それも説明は殆ど与えてはくれていない。さらに解の解が必要となる。内容ではなく、形式を問うている場合、両者が混ざっている場合も多い。用いられている語の両義性や、半詩行とか脚韻単語など詩学、修辞学に関わる用語、更に朗詠される際の音や子音の特徴など音声学なども素材に上っている。それ故、我々異文化の人間は、その文化固有の形式までを把握の範囲に入れて、理解しなければならない。詩や韻文が翻訳される場合の、異文化理解の本質的問題がここにあり、基本的には翻訳ではなく翻案ということになる。しかも文意の流れのカッコつき補足と、理解したい固有の文化要素、それは人名や地名であったり、祭事や風俗習慣であったり、また固有の観念や表現法であったりする。

55の謎詩行は、そのベースが第28話「イラクのマカーマ 15の詩芸」と類似しているので、それを参照にしながら、訳注をしていったのであるが、それも一部であった。ただしこういう問いに対しては、こんな答えが可能かなと思える節が感じられるようになった面も勉強させられた。とて

29) 最終段落のサジュウは下線部の順に：ijtahadnā / wajadnā / istafadnā。

30) ラドワー山 Radwā : Raḍwā は地名として幾つかある。この詩で相応しいのはメディナ近郊の山である。メディナとその外港ヤンブーとを結ぶ線の西北西にある。ヒジャーズ（断崖壁）山系の主峰で標高1993mもある。このラドワー山は「長さにおいて深さ（＝高さ）において広さにおいて」も辺りの300m級のヒジャーズの山々を圧して、高さ広さの重量感を有しており、「重きことラドワー山の如し」のように「重きをなす、責任感あるもの、支えや柱骨」の喩えとされていた。

もその詩品や作者などの追求など及ばないが。しかし本誌の編集に携わる岡本多平氏は有能なアラビストであり、時間を惜しまず諸文献を博搜していくつかを探し出して頂いた。内容は詩であり、上に述べたように一筋縄ではいかない。ハイレベルの語学素養がなければできない作業である。ここに慎んで謝しておきたい。

本マカーマの訳注を記していく中で、説明してもなお不可解な個所がいくつも出来てしまい途中でギブアップしても仕方がないな、と何度思わせられたことか。特に後半の諸問においては。もっとも原本の注釈者の M. ‘Abduh も、当該個所には何の説明も無いところを観ると、解が不明とされてきたものとも推察も出来そうではあるが。『マカーマート』分野の、大成者ハリリーのものに続き、さらにその分野の創作者ハマザーニーの作品を翻訳するというのは、老境に入っの楽しみになっていたものであった。にも拘らず、浅学のほどをこの時期、この身に、思い知らされることになった。何か文化事項ならば、今までの知識経験、及び資料面からある程度の付言は可能であった。しかしアラブの言語の奥義と詩学・修辞学の伝統と底の広さを見せつけられ、打ちのめされた思いである。とはいえ注釈者 M. ‘Abduh や英訳者の Prendergast が多くを語っていないところを見ると、訳者の浅学・無知振りの弁明が許されるのかもしれない。なにせハリリーのそれに比して、ハマザーニーの方には注釈書の類がほとんど無いのであるから。一番落胆したのは、マカーマ研究の大家である Anttila ですら、この 44 話は「修辭的審美的マカーマ」の部類に属する [p. 58] と記しているだけで、他に一切の分析がない。もちろん「55 の謎詩行」においても。

マカーマの一篇として観た場合も、成功した作品とは言えまい。主人公についてであるが、「アレキサンドリア出の者」とか「アブ・ル・ファトフ」とかの直接の名前こそ出していない。しかしその主人公ぶりは明らかにそうであろう。ここでは単に「若者」として登場するだけである。相変わらずその主人公像がその年齢好にすら作者には築かれてはいないことになる。キャラバンの閑談の席に参加して、話題の「謎を含んだ詩」についての議論に加わる。話題が尽きたところで、主人公自らその類の詩行を含んだものを問いの形で提示するという展開である。ここでも主人公の博学振りが披露される。55 の謎詩行には驚かされるが、その後の展開において、一座の人々から解を求められる。主人公は一旦は一座の人々の求めを断る。「情報には報酬がつくもの」。その際マカーマの特色とされる「稼ぎ」のモチーフを入れ込めなかったものか。いったんは断っているのであるから、その提示が出来たはずである。そのチャンスは2度もあったことになる。すなわち、5問の説明に入る前においても、そして残りの解をどう提示するかの際においても。

主人公は本話においても、「若者」として登場し、終わりには長老然と入れ替わる。この背景にはシャイフ (shaykh 長老) の、現地での呼称が反映していると観て良いのだろうか。シャイフ (長老) という呼称は若者にも用いられることがある、学童期のまだ少年に至っても。一芸に優れた者はその道ではシャイフと呼ばれるからだ、どんなに若くても。7歳から始まる「コーランの暗誦」、これを少しづつ暗記して行って、殆どが挫折してゆく中で 118 章の全章読誦を終えた者は、審査を受けそれに合格すると晴れてハーフィズ (ḥafīz コーラン暗誦者) の称号を与えられる。そして人々から年上の者からもシャイフと呼ばれるようになる慣習があるからである。

語り手イーサーは都合三回顔を出し、それなりの役を果たしている。最初の顔出しは、隊商の一員であって、最初からその座にいる。従って導入役を果たしている。次に主人公が 55 の謎詩行の羅列が終わったところで、一座の対応に入る所に顔を出し、次のステップの移行の進行役となっている。最後は大団円の入りになっており、結末と主人公との別れを演出している。しかも従来ならば、主人公が自己の行為の正当化とか人生訓なりの詩を残してゆくところを、語り手イーサー自身

が己の学の足りなさを思い知らされた詩行を、主人公の遠ざかる姿を目で追いながら詠ずるスタイルにしており、新鮮味がある。

サジュウ文体への配慮という点では、今回は行き届いている。物語の状況叙述ではいつも以上になされている。驚かされたのは、あの短い文で成り立つ「55の謎詩行」の問いにおいても、ほぼ完全に押韻がなされていることである。問いをどう作文するだけでも困難を伴うはずなのに、その上を行った技巧を弄していることになる。問いの一文の中に二語の同一脚韻を作り出しているし、問いの文が短すぎて無理な場合は、次の問いの文とペアにする配慮を行ってサジュウを作り出しているのである。55の謎詩行の連続の中には段落は無いのであるが、訳者は読みやすさも配慮して、適宜段落を設けて脚注でサジュウに当たる語を入れ込んでおいた。厳密に言えばサジュウとは認められないもの(も結構あるが)はカッコで括って示してある。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版、Paris 版、いずれにも欠如する。

## 45 話 君侯のマカーマ 君子たるは何処にも御座れど 真の君子とは

(原文 M. 'Abduh pp. 228–230)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私がイエメンから下って来て<sup>1)</sup>、故郷へ戻る折のことだった。ある夜のこと、夜旅を続けていたのだったが、何の目立つ物も無く、ただ左から<sup>2)</sup>はハイエナが、右からはライオンが横切って行くだけであった。漸く暁の光の剣が抜かれ、昼のランプの額(=曙光)が頭わになった頃、広大無辺な地の果てから何やら現れ出て来た。目を凝らすと騎乗の人物で、完全武装しているではないか。丸腰の者が彼のような者に近づく場合、その対処法がすぐに頭に浮かんだ。しかし私は毛皮を被った(=武人ぶった、変身して大見得を切ることにした)。彼の前に立ち塞がり、(震え声で) 音声を轟かせた、「その場に留まれ、汝の母親などくたばってしまえ<sup>3)</sup>！ 避けたいものだ、汝が甲冑を断ち割り、キタード<sup>4)</sup>の葉を打ち払うようなことは！ またアズド族<sup>5)</sup>の誇りを護りたいものだ！ だから私は戦いたくない、汝次第だが。しかし汝の名を名乗ってほしいものだ」。するとこの人物が答えるに、「そなたは戦いたくない方を選んだ、どちらかといえば、道中の連れをお望みのようじゃな」。即座に私も、「良い選択をします」と応対した。こうして我々は道連れとして旅を続けた<sup>6)</sup>。

こうして道中お互いに親密になり、敬意を払うようになった。話題は飛び交ったのであったが、そうした中にアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師の行状も取り沙汰されたりもした。彼が尋ねるに、「あなたが会った諸侯の中で最も心の広い人物は何方でしたか？」。私は丁寧に答えた、シリアの諸侯について、またその人物の寛大さについて。またイラクの諸王家について、またその一人一人の高貴備わる人物達について、さらに近隣諸国のアミール(豪族)について。ついでに話の矛先をそちらに伸ばし、エジプトの諸侯にまで及んだ。こうして私の見聞を彼に伝えたものであった。さらにはイエメンの諸王族についての善行情報、ターイフ<sup>7)</sup>の諸侯についての珍談。広がった情報のとどのつまりは、挙げての称賛となったサイフッダウラ公<sup>8)</sup>の事績についてである<sup>9)</sup>。

聞き終わって彼は詩を詠じた：

- 1) 下って来て munṣarāfī；イエメンは、アラブ民族の共通の祖先の地として考えられている。そのため、イエメンに向かうことを「上る」と言い、そこから旅立つことを「下る」と言う。なお聖地メッカに対しても同様な意識がある。
- 2) 左から横切って行く sāniḥ；アラブは古来、鳥占をするのが常習であった。朝起きた時から、外に出て最初に見た鳥が左右のどちらに飛んで行くかで、その日の吉凶を占っていた。アラブも右を良し、左を悪しとする右偏重主義である。右の方に横切って行く鳥を見るとバーリフ bārīḥ と呼び「今日は良き日」と喜んだ。左方向に行く鳥を目にしてしまった場合、サーニフ sāniḥ と呼び「今日は悪い日！」とその日の行為を慎重にした。旅出の場合は特に重視した。こうした用語が、縁起と関係なく日常的に用いられていたことを本文は窺わせる。
- 3) 汝の母親などくたばってしまえ lā umma la-ka；相手を罵倒する言葉。第6話注16、第14話注9を参照。
- 4) キタード qitād；tragacanth 科の植物。砂漠地に生育し、その樹姿は異様で、地獄に生え生首をぶら下げる木を連想させる元となった。しかしその材質は固く、燃料には最適、炭も良質であって、砂漠の民には重宝がられた。
- 5) アズド族 Azd；既出。第14話注11を参照。
- 6) 最初の段落のサジュウは下線部の順に；yamani / watani, dabu'u / sabu'u, ṣabāḥi / miṣbāḥi / barāḥi / silāḥi, a'zala / aqbala, ḥidādi / qitādi, kunta / anta, aṣabta / aḥbabta / ajabta。
- 7) ターイフ Tā'if；メッカの東方の高地にあつて、古来メッカとの関係が強く、その食料供給や避暑地として機能した。預言者ムハンマドも、布教を行なったが、「石もて追われる」のみであった。またメッカ征服後も最後まで抵抗した。しかし反乱を次々と制圧しウマイヤ朝の安定に尽くした軍略・政略家のハッジャーズのような傑物をも輩出している。
- 8) サイフッダウラ公 Sayf al-Dawla；第9話注21、第29話注1、及びその訳者解説を参照。この29話を著者は「サイフッダウラのマカーマ」の表題にも選んでおり、そのアラブ馬への熱愛ぶりが伝わって来る。この辺りの文体には修辭的に凝った文体が続く。
- 9) このこまでの段落のサジュウは下線部の順に；takhālaynā / tajālaynā, shāmi / kirāmi, ashrafī / aṭrafī, dhikra / miṣra, jumlati / dawlati。

おお夜の星々を頼りに夜旅する者よ それほど賛美するのなら

yā sāriyan bi-nujūmi l-layli yamdaḥu-hā

もし太陽を目にするならば 如何ほどの賛美も当たらずを思い知らされよう

wa-law ra'ā sh-shamsa lam ya'rif la-hā khaṭarā

おお流れる小川叙す者よ 我が認めるは汝が未訪問なることぞ

wa-wāṣifan li-s-sawāqī habka lam tazuri

広く深く取り巻く大海をば そについて何か情報持つことも

l-baḥra l-muḥīta a-lam ta'rif la-hu khabarā

誰も真珠<sup>しか</sup>を確と知らば それを小石と比較など出来ようか

man abṣara d-darra lam ya'dil bi-hi ḥajaran

誰もハラフ公<sup>10)</sup>と面識持てば 他の人物など述べる要非ず

wa-man ra'ā khalafan lam yadhkuri l-basharā

ハラフ公を訪れなされ さすれば4種<sup>11)</sup>を与えている王を訪れたことになるう

zur-hu tazur malikan yu'ṭi bi-arba'atin

誰も受け取りしことのない物ぞ 公を訪れなされ さすれば分かつもの

lam yaḥwi-hā aḥadun wa-nzur ilay-hi tarā

統治する日々の何と輝かしきか その顔は月に紛<sup>ま</sup>ごうほど

ayyāma-hu ghuraran wa-wajha-hu qamaran

公の決断は宿命の如く 下賜品は降雨の如し

wa-'azma-hu qadaran wa-sayba-hu maṭarā

我が称赞が止まぬは一群の人々、彼等とて時代の精髓

mā ziltu amdaḥu aqwāman aẓunnu-hum

さはあれどハラフ公に比すれば混濁は明らかなり

ṣafwa z-zamāni fa-kānū 'inda-hu kadarā

(バスイート basīṭ 調 rā'iyya r 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私は尋ねた、「そんな慈愛溢れ寛大な王侯などいっしょとして何方なのでしょう?」。彼が答えるに、「どうして存在しましうや、考えが及ばないことなど? どうして私が言いしましうや、理性が受け入れられないようなことなど? ある王侯がいるとして、高貴な人々が彼に多数のディルハム銀貨を献上したとします、すると彼は沽券にかかわるとばかり、ディーナール金貨を、贈与するに最も手軽な手段として、しかも一千枚、代わりに与えることになりましよう。彼は(小人として)誤解されるのを何よりも嫌がる人物なのです。これこそコホルの山、それを害しているのは、(その純量を減ずるとして) コホル筆<sup>12)</sup> (の一削り)

10) ハラフ公 Khalaf ibn Ahmad: シジスターンのは、サーマーン朝アミール(太守)。ハラフについては、既に第37話、38話、39話に記されており、さらに第47話、48話にも登場する。また著者の生涯の解説で既に述べている。『マカーマート』(1)「ハマザーニーについて」222~223ページを参照。

11) 4種 arba'a: 4種の贈答品の意味。以下にそれらが述べられる。

12) コホル筆 mil: 我が国でも最近アイシャドーをする女性が増えてきたので、馴染みの化粧品になってきたが、アラブでは太古からアイシャドーをする風習があった。女のみではなく男もしていたのは、エジプトのファラオ時代の壁画を見ても明らかであろう。アイシャドーをしたのは美容のためばかりではない。暑い地方では、ちょうど野球の選手がデューゲームできるように、墨を目の回りに塗ることにより、まぶしい日射を和らげるのにも効果があったからである。またその用いる材料は眼病を未然に防ぐ薬としても用いられていた。この材料をコホルという。定冠詞を付してアル・コホルという、西洋ではアルコールと無条件的に「液体」、「酒」に意味を変容させられている。しかしコホルの故郷であるアラブは、「粉末」「炭」の意味で用いているのである。コホルは、元来「アンチモニーを意味し、それを原料として粉末化してコホル粉を製造していた。しかしもっと一般には乳香

に過ぎないのです。この大いなる気前良さが公に未来に影響を与えないことがありましようや？王としてどうして許されましようや、恵み深さが喰い潰し<sup>いさ</sup>に変わる事など、資質において威厳<sup>いさ</sup>に聊かの変化ある事など、信仰心において自制することなど、王権において他国を囲む<sup>いさ</sup>ことなど、出自において由緒ある家柄にかわるなど、子孫においては代々繁榮することなど！<sup>13)</sup>

知りたきものよ 彼如何なる人物かその優雅さ

fa-layta shi'rī man hādhī ma'āthiru-hu

<sup>すばる</sup>  
何と昂の星に至るまで望みを抱き続けるとは

mādhā lladhī bi-bulūghi n-najmi yantaḡiru

(バスイート basīt 調 rā'iyya r 脚韻詩)

## 第45話 君侯のマカーマ 完

### 第45話 訳者解説

本マカーマの冒頭ではどんな活劇が展開されるかと期待した。相手は完全武装しているのに、語り手の方は丸腰である。そして毛皮を被って、大音声をあげたのであるから。後輩のアル・ハリリー『マカーマート』とは異なり、本著者アル・ハマザーニーの方は、流血沙汰や殺人の場面を描くのに憚らないからである。終わってみれば何のことは無い、道中をラフィーク(道連れ)として一緒にして、寛大な君子達の話題に終始するだけである。

この武器を持たない、武装をしていない、丸腰の者をアザル a'zal と言う。これを固有名詞 al-A'zal とすると、天空の乙女座の α 星スピカのアラビア名となる。スピカは星座像のシマーク(simāk 突き出たもの=掌)に当たる。この天空にもシマークは二つあり、シマークに何も持たない(a'zal = 丸腰)者と武装する(=槍持つ)者の両者である。丸腰のシマークがスピカであり al-simāk al-a'zal (素手の掌)一方、槍持つ者(rāmiḥ= 槍投げ、射手)のシマークが牛飼座のアルクトゥルスで al-simāk al-rāmiḥ (槍持つ掌)なのである。両巨星は両シマークの意味でアラブ・イスラーム世界では双数形のシマカーニ al-Simākāni (双掌)と呼び習わされている。両シマークともに奇しくも「春の大三角」及び北斗七星から伸びる「春の大曲線」を構成している。

語り手と著者らしき主人公との間で取り交わされたのは、当時のイスラーム世界の君子像をめぐる諸侯の話題であった。アラブ世界に足を踏み入れたことのない著者ハマザーニーの、諸君公の具体的描写は俄かに鈍る。書簡集では西のアラブ世界の著名人達との書簡を通しての交流は知られているにもかかわらず、シリア、イラク、エジプト、イエメンの諸公を語り手に語らせるが漠然としたものである。唯一シリアのハムダーン朝のサイフッダウラ公だけは例外である。サイフッダウラ公の名は当時の社会に名声として広がっていたものを、語り手の口を通して表現したに過ぎない。サイフッダウラ公 Sayf al-Dawla に関しては、第29話では「サイフッダウラのマカーマ」の表題にも

の一種を、またもっと安価なものとして芳香性樹脂やアーモンドの殻を焼いて作った煤をコホル粉としている。コホル粉は小さな壺状の容器ムクフラ(またはミクハラ)に収められる。そしてコホル粉を塗る道具がコホル筆である。本マカーマでは、コホル筆という語は mīl および mirwad で表されている。前者は「傾ける、なぞる」ものの義、後者は「行ったり来たりする」という語から派生している。即ち前者は「横にして塗る」、後者は「(コホル粉を)何回も塗りたい」道具の義である。(アル・ハリリーの『マカーマート』第8話訳者解説より。)なおこの第8話はコホル筆と針を例えて、微妙な性関係を叙している。針を女奴隷に、コホル筆を男奴隷に喩えて法官の前で述べたて。

13) この段落のサジュウは下線部の順に: yakūnu / zunūnu, aqūlu / 'uqūlu, akārima / darāhimi, dhahabu / yahabu, alfu / khalfu, (kuḥli / mīlu / jazīlu), sarafī-hi / sharafī-hi / kalafī-hi / kanafī-hi / salafī-hi / khalafī-hi.

選ばれている。その中で公のアラブ馬への熱愛ぶりを述べている。話のつながりとして、サイフッダウラ公への讃辞で終わらせて、その前後のマカーマート篇とするか、一篇が短すぎるので 29 話の中に組み込む形も採れたろう。本舞台として、こちらを後舞台の構成にして。

最後が肝心であるから、結局自分が世話になった、もっと東のイラン東部とアフガニスタンにまたがるシジスターンのサーマーン朝アミール(太守)ハラフ公の讃辞で唐突に終えている。ハラフ公が君子の中の君子であるとする。ハラフ公とサイフッダウラ公を比較して述べる。サイフッダウラ公が夜の星だとすれば、彼は太陽だと、サイフッダウラ公が小川だとすれば、彼は大海に等しいとまで述べる。短篇だけに唐突にハラフ公の讃辞で終わっているが、いわばハラフ公に捧げる頌詩的意味合いも持たせるものである。なお注 10 を参照。

内容面ではやはり短すぎて、筋の展開が十分ではない観は否めない。形式面では主人公は明らかにアブ・ル・ファトフ師ではない。それらしく思わせるが、道行の二人の会話の中で、「話題は飛び交ったのであったが、そうした中にアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師の行状も取り沙汰されたりもした」とあるからである。一工夫できたところであろう。

語り手イーサーは中入りに顔を出し、進行役を果たしている。この語り手であるが、導入部で二人の誰何の場面で、新情報を明かしている。語り手イーサー・イブン・ヒシャームの出自、それをアラブの有族アズド族 Azd であると名乗っている。こう名乗れば、相手も恐れて手を出せない、そうした算段もあったかもしれないが。

この 45 話の設定は第 14 話と類似している。焼き直しか 45 話が先に執筆され、後に 14 話が作られたか。出来は 14 話の方が良い。旅人との遭遇、道連れとなって道中を共にしている。14 話の主人公は野盗然としているが、こちらは堂々とした教養備えた武人ということになる。14 話の方で語り手が名乗りを上げる、「我は手ごわい敵対者ぞ、アズド族の保護受けし者ぞ!」と。ここでも語り手のアズド族との関係が述べられている。語り手をアズド族出の者としての明記は本話が初めてである。

サジュウ文体も本話では配慮されており、修辞技巧も諸所に散見される。詩の引用も不十分ながら 2 か所配置されており、後のアル・ハリリー『マカーマート』で確立される山場の場面での挿入、後舞台での引き際の結句の挿入の原型の一つとも見て取れよう。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版および Paris 版、いずれにも収録されていない。

## 第46話 黄色のマカーマ 黄色の色をした者を使者として

(原文 M. 'Abduh pp. 231-232)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私がハッジュ（メッカ巡礼）からの帰路<sup>1)</sup>にかかろうとしている折のことであった。私の所に一人の若者がやって来た。彼が言うには、「私には黄色い肌の出の男がおります。彼は異教<sup>2)</sup>に誘われがちですし、指先で踊ったりも致します。異郷生活<sup>3)</sup>が長く馴染んでしまっ、そのため罪滅ぼしをしたいと申し出、私をあなたの所に使わせたわけです。彼の事情をあなたの許で彼に代わって説明したいと思ひまして<sup>3)</sup>。

実は彼は黄色い肌の娘をあなたに嫁として与えることにしております。彼女は居合わせたすべての人を驚かせますし、目にしたすべての人を喜ばせます。あなたが求婚に応じて戴ければ、二人の間からは子種<sup>4)</sup>を得られましょうし、それは辺りに評判を呼び、耳目を集めることになりましょう。この娘の外衣を折り畳めば（＝旅出すれば）、そしてその糸を編み上げれば（＝旅から安着すれば<sup>5)</sup>）、あなたの帰る土地にも（旅での成功の噂は）先行して届くことになりましょう。どうでしょう、あなたの掌中に（畳んで）あるものを押し広げられて（＝投資して）見ては?!<sup>6)</sup>。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた；私は彼の用向きの伝え方に、また彼の尋ね方の文言の巧みに、驚かされたものである。そこで彼の意向に應えることにした。そうすると彼は（嬉しそうに）以下のように詠じた；<sup>7)</sup>

栄光にしがみつくる者 下賤の手に容易に騙される

al-majdu yukhda'u bi-l-yadi s-suflā

されど寛大なる者の手及び思い それはより気高き高みにこそ

wa-yadu l-karīmi wa-ra'yu-hu a'lā

(カーミル kāmīl 調 lāmiyya 1脚韻詩)

第46話 黄色のマカーマ 完

### 第46話 訳者解説

本話との関連で少し言及しておきたいことがある。注5の所で述べておいたように、本話もその主題の一部を「旅」が担っている。この旅についてのアラブ民族の風習、概念の一端を述べておきたい。

- 1) 帰路 qufūl；クフルは「帰路」の意味だが、特に「メッカ巡礼を果たした後の帰路」として、ハッジュに関しての用語になっている。
- 2) 異教 kufri；勤勉・質素を旨とするイスラム教に贅沢や無駄使いは異教徒とするものとの捉え方。またここでは異国、異郷への旅のことを言っている。
- 3) この冒頭段落のサジュウは下線部の順に；sufri / kufri / zufri、(ghurbatu / ḥisbatu?), ilay-ka / laday-ka。
- 4) 子種 walad；暗示的を通して、異郷への商用の旅で上がる「利益」を、さらには「富裕」とか「繁栄」と注記しておこう。
- 5) この娘の外衣を折り畳めば、そしてその糸を編み上げれば idhā ṭawayta hādha r-rayta wa-ṭhanayta hādha l-khayta；この言い回しは「外衣を折り畳む」が旅先に無事着いて、旅ごろもを折り畳むことを、「その糸を編み上げる」とは「旅からの安着、旅の完結」を旅の糸を巻き上げることと言っている。同様な表現が、第3話に「旅の衣類が折り畳めますよう、折り目に糸が通り、また戻せますように」がある。第3話注5を参照。「外衣」の原語 rayt は複数形で、単数は rayta。薄手のマントやコートで、旅や放牧に主に用いられ、雨露を、風や寒さを防ぐために用いられる。
- 6) この段落のサジュウは下線部の順に；ḥādirīna / nāzirīna、(biqā'a / asmā'a?), rayta / khayta、baladi-ka / yadi-ka。
- 7) この短い段落にもサジュウの配慮がある。下線部の順に；irādi-hi / murādi-hi。

巡礼行も含めて、旅はアラブ・イスラム世界にあつては日常の生活行為であつた。と言うより商人の世界は行商が主体であり、さらに商う市場も常設となる前は、定期的な、すなわちマウシム(mawsim 一年の季節の節目)に応じて、移動しての開催であつた。更にそのルーツは放牧に絡んでおり、家畜を連れて半ば未知の放牧地に出かけて行く。毎日同じ道や牧草地では家畜の食料は充分でない。そのため少しは未知な、危険を伴う牧地にも挑戦しなければならない。この牧民的発想が放牧の延長線に旅や市の設定と重なった。旅の日常化は、旅の足となるラクダをはじめとして、放牧の日常化からさまざまに学んでゆくことになる。

旅に関してのさまざまな慣例の中でも、本話で言うならば、「あなたの外衣を折り畳めますよう！」、「あなたのその糸を編み上げますよう！」などがその好例であるが、道中の無事、旅の成功を祈つての挨拶言葉が多様に発展している。送り出す身内や仲間からはザグラダまたはザガーリートと呼ばれる舌笛の歓声の後で、「アッラーがあなたと共に居られましょう Allāhu ma‘a-kum!」と声を掛けられる。エジプト方言では Allāhu wayyā-kum! となろう。「良き結果が得られますように muwaffiqūn khayr!」とも励まされる。それに対して旅立つ者は「皆さんにも良き結果があらんことを Allāhu yuwaffiqu l-jam‘a!」と答えを返すのがしきたりとなっている。旅から帰って来た者に対しては、舌笛の歓声(ザグラダ、ザガーリート)とともに、「道中<sup>つつが</sup>恙ありませんでしたよう in shā‘a llāhu mā takallafta!」と祈りにも似た言葉を掛ける。すると安着した旅人は「ええ、恙ありませんでしたとも mā takallaftu!」とか、「ええ何も、厄介なことなどありませんでした abadan mā shay‘un kallāf!」などと答える。迎える人々は方々から「神のご加護を ma‘ūna!」と祝福の言葉を掛ける。「神のアウス(‘awn 御加護)があつた、アウスを得られたからこそ、無事に戻られました!」の意味である。これに対して安着者は「アッラーが貴方達にもアウス与え給わんことを」の意味で Allāhu yu‘īnu-kum などと答えることになっている。

さて本話であるが、余りの掌編である。恐らく最短のマカーマと言えるのではないか。巡礼の行を終え、メッカから帰郷しようとする語り手の所に一人の若者が現れる。寓意的な口ぶり、黄色い肌をした者を金・金貨と見立てて、無心ないし投資の話を持ちかける。ストーリーは第3話と同工異曲である。むしろ旅立つ者の所に出かけて、幾らかの慈悲心を乞う第3話の方が、両者の掛けあい、詩の掛け合いなどのやり取りがあつて救いとなろう。ジャンルのいえばクドゥヤ(qudya 物乞い)のマカーマと言うことになろう。

形式的には主人公像は明確ではなく、類似した第3話同様、若者に仕立てられている。アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフの名も登場させてはいない。語り手イーサーは冒頭と中入りに顔を出し、こちらは本舞台と後舞台の形式を保っている。文体に関しては、本文が三段落しかないのであるが、いずれの段落にもサジュウの配慮はなされている。詩の挿入に関しては辛うじて大団円として一行を持ってきており、マカーマの形式を保っている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版および Paris 版、いずれにも収録されていない。

## 47 話 サーリッヤのマカーマ 太守と対峙し約束不履行を責める人物は、と篤と見やれば

(原文 M. 'Abduh pp. 233–235)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：我々がサーリッヤ<sup>1)</sup>の町で、そのワーリー(太守)の所に滞在していた折のことだった。ワーリーの面前に一人の香草<sup>2)</sup>の芳しさ漂わす若者が面会にやって来た。そこで集まりは彼のために席を譲るために動きを見せ、敬意を表して座の中央に着席してもらった。私には、彼の放つオーラのためか、彼に名前を聞かせてもらおうと質問することすら躊躇<sup>ためら</sup>われた<sup>3)</sup>。

しばらくして彼の方からワーリーに言葉を掛けた、「そなたは昨日の議題でどんなことを主張しましたか、よもや忘れたで済ませるわけではあるまいな?」。ワーリーは、「決してそのようなことは!」<sup>4)</sup>しかしそれを説明できないような理由がありまして、釈明を妨げております。それに傷付けられたら治癒<sup>な</sup>ることがとても出来ないような……」。すると新参者は言葉を荒げた、「その様は何としたことかな!この果たすべき約束の履行からどのくらい遅れていることか、このことに関しては、そなたの明日は今日のみにあり、そなたの今日は昨日のみにしか無かったということですぞ。約束を反古にしている点ではそなたはヒラーフの木<sup>5)</sup>と違いないではないか、花は咲き見る者の期待満たせど、(結実の)間を待てど実を結ばせることが無いとは!」<sup>6)</sup>。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：二人の対話がこの時点に及んだ時、(思い当た)私はこの新参者の会話に割って入って、声を掛けていた、「アッラーがあなたを護り給わんことを!あなたはあのアレキサンドリア出のお方ではありませんか?」。するとこの新参者は(相好を崩して)答えるではないか、「そなたの見守る目がいつまでも続かんことを!そなたのその詮索眼の何と優れていることか!」。私もすぐに応じて、「おおよこそ、言葉のアミール(君主)よ。歓迎しますよ、寛大なる諸侯のダーツラ<sup>7)</sup>(迷いラクダ)よ!(あなたを求めて)方々を探し回りましたが、ようやく見つけ出しました。訪い求めて来ましたが、やっと探し当てました」<sup>8)</sup>。

こうしてアレキサンドリア出の方と私とは、(その後のことですが)旅の道づれとして一緒に同行して友好を深めた。(その親密な関係は)私が高原に惹きつけられ、彼が低地に呑み込まれるま

1) サーリッヤ Sāriyya: イランのエルブルズ山脈を越えてカスピ海に臨む地域をタバリストン(現在のマーズンダーラン)という。サーリッヤ(現在はサーリー)は東北部に位置し、ターヒル朝時代(821~91)時代より地方総督府が置かれたほどに重要な役割を果たした。現在は州都となっている。

2) 香草 ṣufār; ṣufār < ṣufāra. 「黄色く枯れた植物」。香草を干して乾燥させ、その芳しさを衣食住の生活に用いるアラブに優雅な側面である。za'afārān(サフラン)がもっともポピュラー。

3) この冒頭の段落のサジュウ(押韻技法)は下線部の一か所のみ、順に: qiyāman / i'zāman。

4) 決してそのようなことは ma'ādha llāhi: 直訳は「アッラーの守護を!」、「アッラーの守護される場を!」の意味で、自分にとって何か忌まわしいことが降りかかるような状況の時に発せられる。

5) ヒラーフの木 al-khilāf: 注釈者 M. 'Abduh はサフサーフ(al-safṣāf)の木と、また英訳者の Prendergast は Salix Aegyptia としている。Salix Aegyptiaca が正式名称であろう。Salix は柳科植物の総体であるから、「エジプト柳」とでも訳せようか。ヒラーフの原語 khilāf とは「お互いに異なる、相違を見せる」ことの意味である。「花咲けど実らず」の他に、このヒラーフの種はワジの洪水に流されて、そこの生態環境に合わせて違って生育するといわれる故にこの名を持つとされる。

6) この段落のサジュウは下線部の順に: amsī / mansī, sharḥu-hu / jurḥu-hu, (yawma-ka / amsī-ka), ikhlāfi / khilāfi, 'ayn / bayn。

7) ダーツラ dālla: ダーツラとは放牧や管理されている状態から「迷い出たラクダ」のこと。ここでは、寛大で物惜しみしない王侯貴族や富者の保護と援助を求めてさ迷う主人公を指して言っている。

8) この段落のサジュウは下線部の順に: ḥirāsata-ka / firāsata-ka, kalāmi / kirāmi, nashadtū-hā / wajadtū-hā, ṭalabtū-hā / aṣabtū-hā。

で続いた。私は上に着き、彼は下に着くことになった。私は東方に向かい、彼は西方へ向かったわけである。私は彼の行く跡を振り返って詠じた；<sup>9)</sup>

我知りたきもの かくなる兄弟あるや否や

yā layta shi'rī 'an akhin

喜捨が過ぎて貧乏<sup>ミズ</sup>しくなり<sup>10)</sup> それで名声が一層広がる

ḍāqat yadā-hu wa-ṭāla šītu-hu

かの人物 昨夜は我が許で過ごせり

qad bāta bārīḥatan ladayya

我らの今夜は、いったい何処に仮宿を求めるや

fa-ayna laylata-nā mabītu-hu

貧窮さ これ以上に多くまた長く続きませんよう<sup>11)</sup>

lā darra darru l-faqrī fa-huwa

彼は流浪の身 身持ちの悪さ故に我もまた離れ去る

ṭarīdu-hu wa-bi-hi ruzītu-hu

願わくば彼の貧窮事 全権を委ねたし

la-usalliṭanna 'alay-hi min

ハラフ公<sup>12)</sup>に さすれば解消してくれるは疑い無し

khalafī bni aḥmada man yumītu-hu

(カーミル kāmīl 調 tā'iyya t 韻詩)

## 第 47 話 サーリッヤのマカーマ 完

### 第 47 話 訳者解説

一篇の短さや筋の中断があり、マカーマの完成品とは程遠い。新参者が太守と対峙し、約束不履行を責める。どんな展開を見せるのかと期待させる。すると語り手自身が割って入って、その先の展開をぶち壊す。ストーリーの展開としては、序の部分で肩透かしを喰らった思いである。語り手がこの新参者が探し求めている当の本人であることを公言して終わってしまう。その意外性という意味では、マカーマにおいては新手法とは言えようが、あるいはそれが意図的な狙いであったのか。

中断がなく新参者と太守の対話がつづくならば、おそらく中断以降を補えば、これは訴訟対象のストーリーとして展開されるものであったろう。法官や本話のように太守の前でその訴訟ごとの内容と解決が開示されるはずであった。ここでは訴訟人と太守の間で丁々発止のやり取りが観られて然るべきであったろう。

アル・ハリリーーの『マカーマート』の方では、この訴訟沙汰を巡っては、第 8 話 マアッラの

9) この最後の段落のサジュウは下線部の順に；najdun / wahdun, ṣawwaba / gharraba。

10) 喜捨が過ぎて貧乏<sup>ミズ</sup>しくなり ḍāqat yadā-hu；直義は「両手が狭まった」。手とは「施しの手」である。注釈者 M. 'Abduhによれば、infāqに当たるとある。動詞 anfaqaは「喜捨で貧乏になる」の義。

11) 貧窮さ 余りに長く続きませんよう lā darra darru l-faqrī；直訳は「貧窮の乳の豊かさ、その豊かさがありませんよう！」。darraとは「ラクダが思って以上に乳量豊かに乳を出すこと」。遊牧民にとってはこれ以上想定外の嬉しいことは無く、「神のお蔭だ」と有難がる。この語は感嘆文表現に用いられ、「彼女はなんと美しいのだろう！」は li-llāhi darru jamīli-hāと言う。直訳すれば「彼女の美しさの乳量豊かさは神に属する」となる。

12) ハラフ公 Khalaf；ハラフ・イブン・アフマド。シジスターンの太守。頻出、37 話注 10, 38 話注 8 他。

マカーマ コホル筆と針を喩えれば、第9話 アレキサンドリアのマカーマ 頸飾りを編むとは、第10話 ラフバのマカーマ 男色に溺れると、第13話 バグダードのマカーマ 老婆に身をやつして、第21話 ラッイのマカーマ 太守に堂々とももの申す説教師の心意気、第23話 詩に関するマカーマ 詩を息子に剽窃されたと訴えて、連歌で親子対決する、第26話 ラクターウ(斑入り文)のマカーマ 太守を技ありの書簡でうならせて、第38話 メルヴのマカーマ 正攻法で太守を攻めてみれば、第40話 タブリーズのマカーカ「隣」で済まそうとする夫婦生活が法廷に持ち込まれて、第45話 ラムラのマカーマ 夫婦喧嘩をねたに法官から…云々ゆるマカーマの内容の方のサブジャンル「訴訟もの」として多彩に展開される。訴訟人が主人公一人の場合もあれば、相棒を伴って夫婦として女連れであったり、親子であったりと多様である。

形式としては主人公の表舞台は新参者の顔と正体の露見で終わっており、その後は太守の法廷の場とは全く無関係に、唐突にアト舞台となって主人公と語り手が相連れ立っての旅の描写となってしまう。一方、語り手の役割では中入りがあって、2度の顔出しをしており、また大団円となる結末の詩(本来なら主人公が吟ずるはず)も導入されて、その意味では定型を採っている。しかしながらこの詩だとて、また最後にシジスターンの太守、ハラフ・イブン・アフマドを唐突に何の関連もなく登場させ、その頌詩で終わっている。恐らく本舞台の方では、太守の人物評を行って、その理想像をハラフとして描いた展開が想定される。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版および Paris 版、いずれにも収録されていない。

## 48 話 タミーム族のマカーマ 行政に参与した族長の疎外感

(原文 M. 'Abduh pp. 236-238)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私がシリアの国の一行政区をワーリー(太守)として任された時のことであった。同地に派遣されて来たのはファザーラ族<sup>1)</sup>出のサアド・イブン・バドルであって、彼はワジール(宰相)職を任された。次にアフマド・イブン・アル・ワリード、彼はバリード(郵便業務)長官として、さらにハラフ・イブン・サールム、彼はマザールム(司法職)長官として赴いて来た。また何人かのサワーバ族<sup>2)</sup>出の者も出仕してきた、彼らはキターバ(書記)局を担当することになっている<sup>3)</sup>。

さらにジマーム(諸監査役)職は在住のシリア人の中から選任された。こうしたことから、シリアの国は選良の集う所となり、目指し来る旅人の停泊所の観を呈した。こうして派遣された任官が一人、また一人と引きも切らずにやって来るので、在住の市民たちの目にも、またかといううんざり気分が広がって、むしろ心に重圧を感じるほどになった。

こうした任官の一人としてタミーム族<sup>4)</sup>のアブー・ナダーが到着した。しかし市民たちの目は冷めており、彼を喜んで迎える入れるわけではなく、彼に心を開いてくれる様子はなかった。ある日のことアブー・ナダーが私の執務の間にやって来た。私は彼の能力を高く買っていた。それ故執務の間の中央に彼を迎えて座を占めさせた。私の方から声をかけた、「人生の達人である方がどのようなことをお望みで、任務の仕事の方は如何で御座いますか？」<sup>5)</sup>。

するとアブー・ナダーは右の方に、そして左の方に注意深い視線を送った後で、おもむろにこう告白したのである、「わしのことですが失望と惨めさの間にあると申しましょうか、汚濁と矮小<sup>にこり いやしめ</sup>の中にあるとも申しておきます。人々は例えれば驢馬の糞<sup>6)</sup>の如くで御座います。(彼らの臭覚は鋭く)見込みある高官に彼らの鼻が嗅ぎつけます、しかしその高官とて悪臭を放つに過ぎません。嗅ぎつけてやって来た者たちには良く遇しますが、彼らが何か善行で報いるかというとなんともありません。ワッラーヒ(誓って申しますが)、(我が部族の砂漠の許から)はるばるやって来て、わしは町の人々<sup>つぶさ</sup>を具に見させてもらいました。が、彼らを例えれば頭と衣類を外面に着用した、形だけの人間以外の何物でもありません。こう言い置いてからアブー・ナダーは次のように詠じた：<sup>7)</sup>

汝に我が身を捧げます おおシジスターンの大地よ

fidan la-ka yā sijistānu l-bilādu

その寛大なる王<sup>8)</sup>にも、また汝を頼る臣民たちにも

- 1) ファザーラ族 Fazāra：アラブの北族(アドナーン系)の雄族。第14話はテーマ自体が「ファザーラ族のマカーマ」である。その注1を参照。
- 2) サワーバ族 Thawāba：アラビア半島の一部族。ファザーラ族ほどには知られていない。というのも、このサワーバ族のように、アラビア部族の中には遊牧をせず、キリスト教徒となって、都市で書記や官僚になるものもいた。
- 3) この冒頭段落のサジュウ(脚韻技法)の語は下線部の順に：fazārata / wizārata, walīdi / barīdi, sālimi / mazālīmi, thawābata / kitābata。
- 4) タミーム族 Tamīm：ファザーラ族以上の大部族で、純粋アラビア語の祖地とされた。著者アル・ハマザーニーもアラブであって、この部族出身であるとの説もある。訳者解説(1)p. 217、および第7話注5を参照。
- 5) この二段落のサジュウは下線部の順に：zimāmi / shāmi, ('uyūn / qulūb, 'uyūn / qulūb), qadri-hi / šadri-hi, 'umra-hu / amara-hu。
- 6) 驢馬の糞 rawth al-himār：「下衆・卑賤」なこと。「糞」の原語ラウス rawth はウマ類の糞にのみ用いられるもの。遊牧文化では、家畜の多様な展開が観られ、それが排出物にまで及んでいる。本話の訳者解説を参照。
- 7) この最後の段落のサジュウは下線部の順に：khamāri / šighāri / himāri, muntinūna / yuhsinūna, nāsi / ra'si / libāsi。
- 8) 寛大なる王 al-malik al-karīm：ハラフ公 Khalaf、即ちシジスターンの太守ハラフ・イブン・アフマドのこと。前

wa-li-l-maliki l-kařimi bi-ki l-‘ibādu

例え日々が我が助けとなりても また例え

habi l-ayyāma tus‘idu-nī wa-hab-nī

乗用ラクダや糧食が我を彼の地に導きたりとせも

tuballighu-nī-hi rāhilatun wa-zādu

誰がその埋め合わせするや その間に死滅して行ったものを

fa-man li-ya bi-lladhī qad māta min-hu

また取り戻すこと叶わぬその間の人生の時を

wa-bi-l-‘umri lladhī lā yusta‘ādu

(ワーフィル wāfir 調 dāliyya d 脚韻詩)

#### 第48話 タミーム族のマカーマ 完

#### 第48話 訳者解説

先ず本話注6「驢馬の糞 rawth al-himār」で触れておいた「糞」についての文化的事項を述べておこう。多様な家畜や動物を飼養・利用する遊牧民であるアラブは、牧畜文化の特徴である動物・家畜の多様な文化層が展開されている。その視点と分化化は日常生活と関わっており、それが排出物にまで及んでいることが見て取ることが出来る。「人糞」はビラズ birāz とかガーイト ghā’it とか言っている。これに対して家畜を含めて動物一般の「糞」はジブル jibl とかシルジーン sirjīn とか別名称になる。さらに「家畜の糞」もまた形状と質によりいくつかに特化した名称を持つ。本話の注5で述べた如く、ラウス rawth はウマ類(ウマ、ロバ、ラバなど奇蹄類)の糞にのみ用いられるもの。いわゆる「馬糞」類であり、未消化分が多く、また湿ったドーム型のものである。これに対して反芻するヒツジ、ヤギ、ラクダなどの偶蹄類の糞はジャッラ jalla と呼ばれ、丸いか楕円の乾いたポロポロした糞である。後者はすぐ乾くために、また拾いやすいため、薪代わりに燃料として用いられる。薪が不足していたり、欠如する遊牧民のところではとくに重宝に用途だてられている。偶蹄類の糞の、この「ジャッラ jalla」を動詞化した jalla あるいは ijtalla は、こうした「糞を拾い集める」のように意味の拡大をみている。さらにラクダの糞は図体が大きいだけに「糞」もまた大きい。ラクダの糞も特別な用語を持っており、バアル ba‘r、ba‘ar と言って、燃料としてすぐに燃えあがるし、火持ちも良い。遊牧民の女性の朝の初仕事、午前の仕事は、袋を片手に持ったり、籠を背負って、素手か炭ハサミを用いてこのバアル集めに費やされる。このことを踏まえておくと、ラクダの糞バアル ba‘r、ba‘ar に面白いことがわかる。つまりバアルは語根から<ラクダ>と<糞>に直接かわることが分かる。語根動詞 ba‘ara は「ラクダが糞をする」、「ラクダ他偶蹄類が脱糞する」が第一義で、この自動詞から、他動詞的に用いると「バアルを相手に投げつける」と用いられる。即ち<糞であっても石ほどに大きくなければ、また握ることが出来るくらいの固さのもの>でなければ、石代わりにはできない想定に立たねばならない。「彼女は(最後の)バアルを投げた」との言い回しは ba‘arat とも、また ramat bi-l-ba‘arati とも表現する。夫に死なれた妻は、妊娠してはいないことを証明するために再婚するにイッダ(待婚期間)を要する。砂漠の寡婦はそのイッダの間、バアル集めで日々を消時せねばならない。毎日バアルを集めては、その一つを手許において日数を数

話注12他参照。

える。そしてそのイッダの最後の日には、その貯まったバアルを鬱憤晴らしにぶん投げる風習があり、そのことを言っている。従って「バアルを投げる者」とはバーイル *bā'ir* と言うが、寡婦となって再婚するにイッダが終えた者の意味となる。そしてバーイルの語形態は＜男性形＞であるが、生理的に観ても適応されるのは女性だけなので *-ah* を付した女性形態を採らないでよいことになっている。また言い回しに「彼は犬に投げつけるバアルよりも私にとっては軽い人間だ」 *huwa ahwanu 'alayya min ba'ratin yurmā bi-hā kalbun* がある。自分にとっては重きを置けない、信頼に足らない人物に対して言われる。また「あんたはバアルを手にするような人だ」 *anta ka-ṣāhibi l-ba'rati* とは、内面に秘していた信条や意図を見抜かれてそれを公にされた人物がすっぱ抜いた人物に対して告白する言い回しとされる。これには一つの話があり、簡単に言うと、部族の有力者を快く思わなかった一族員が、中傷する噂を流した。誰言うともなくこの噂は族員の中に広がっていった。有力者はあれこれ聞きまわったが、犯人の同定には至らなかった。そこで部族の者すべてを集めて言い放った。「この噂を流した者に対して、わしが手に持っているこのバアルを投げつける」。こう言い放って、己の手を振りかざして投げる仕草を見せた。すると中の一人が身を退けて「バアルをわたしには投げないでくれ！」と座から逃げて行行った。そのことからバレてしまったわけである。そのセリフが「あんたはバアルを手にするような人だ」であった。

バアルを動詞化してバイラ *ba'ira* とすると、「大きなバアルを垂れる」を直義として、ラクダが「オトナ期ラクダになる」の義を持つ。雄 *jamal*、雌 *nāqa* に対して、中性的な「性別を区別しない一頭のラクダ」、これがラクダの代表語バイール *ba'ir* なのである。すなわち「一人前(＝一頭前)の糞(＝石ほどに大きくて固いもの)を垂れるもの」、これがバイールのそもそもの謂われなのだ。*ba'ara* をさらに他動詞化した *bā'ara* は、「お互いにバアルを垂れる」が直義だが＜搾乳の折＞に用いられる用語で、ナーカ(雌ラクダ)が一方では「乳を出し」、他方では「バアルを出し」、乳搾り人の衣服や身体を二重に汚すことをいっている。さらには搾乳用のミルク受けの深鉢の中にも糞が垂れてきてしまうこともある。こうした「乳を出す」時に「バアルも出し」てしまう悪癖を持ったラクダも結構あり、ピアール *bi'ār* との用語で呼ばれて、要注意とされている。もう一つ他動詞は *ba'ara*、*ab'ara* は反義となり「バアルを取り除く」の意味である。そして「バアルの出所、排泄器をきれいにしてやる」、さらに「清める、浄化する」まで意味の拡大をみる。

さて本話の内容であるが、相変わらず掌編で、完結性が観られず、訴えどころがない。出だしのストーリーの展開は、これはと思わせる。なにせ語り手が政権を掌中にし、地方行政を任せられる設定なのだから。さらには己の行政に有力者を招いて参与させる。その中に有力部族タミームの族長も迎え入れられる。面白い設定である。語り手を「行政の長」に設定する発想はアル・ハマザーニーならではのであろう。小心者のアル・ハリリーの方には発想できない想定である。せいぜい物乞いのサーサーン集団の長として、第30話、第49話で主人公を設定させてはいるが。

筋の展開は如何であったか。この族長が太守の執務する間に来て、どんな話題になるのか。結末は相変わらず「尻切れ」であって、太守を前にしての族長の僅かな呟きで終わってしまっている。為政者と参与者との大物同士の対話があったわけではない。遊牧部族の族長が、いわば「国政」に参与したのであるから、もうすこしバドゥウ(砂漠・遊牧)の民とハダル(都市・定住)の民の考え方の相違や、為政者の治民に関する考え方、施政の諸相などを掘り下げて叙してくれたら、興味深いものとなつたろう。

前話と同様、唐突な詩で終わりを告げている。しかも内容は脈絡の無関係な、シジスターンの太守ハラフ公(Khalafハラフ・イブン・アフマド)の賛辞で終わっている。しかも砂漠のアラブの族

長である。アラビア半島内の砂漠の中で暮らす遊牧民がはるか離れ、アラビア語も通じないようなアフガニスタンに接するイラン東部のシジスターンの太守などどうして知れよう。噂として、名望として砂漠の中にまで広がっていたと想定するのであろうか。

形式的に見ても、前話と同類ではあるが、こちらは後舞台が欠如するため語り手の後段への進行もまた欠如していることになる。主人公像も不明確なままである。タミーム族族長が主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師とは到底思えない。

アラブの砂漠の中をテーマにしたものは、『マカーマート』作品の中にも散在する。本著者アル・ハマザーニーの方では粗略であるが第27話「アル・アスワドのマカーマ 遊牧民の豪族キナーン族の名士のテントに逃れて」、第51話「ビシュル伝マカーマ 野盗獅子と大蛇を斃し婿入りするが」があり、一方もう少し念が入ったアル・ハリリーの方では第27話「ワバルのマカーマ 迷いラクダを求めて」、第32話「タイバ(メディナ)のマカーマ ハルブ族集会所での100の法律問答」などが参考になろう。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版および Paris 版、いずれにも収録されていない。

## 49 話 ハムル (ブドウ酒) のマカーマ 朝に泥酔者に譴責したイマーム、夜は酒屋のナディーム (相伴役)

(原文 M. 'Abduh pp. 239-245)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：私がまだ青年期の初めの頃であった。柔和な性格と健全なる考え方を持ち合わせていたものである。だから理性の天秤にかけては平衡を保とうとしたし、正気と逸脱とを重ねあわせての公平性は維持していた積りであった。また友人にしても恋愛の(事まで話し合える真面目な)友と、娯楽相手の友とを分けて付き合っていた。昼の間は他人と真面目に対応をしていたが、夜になると酒杯を傾けることにしていた<sup>1)</sup>。

私の許には夜になると、独り者の仲間たちや、なかなか洗練された常連が集まってきたものであった。酒杯の星々(=酒泡)を飲み回しながら、手持ちのストックの酒が無くなるまで飲んだものだ。ナディーム(飲み友)達の大方の意見はダン(酒壺)<sup>2)</sup>があればあるだけ、その飲み口を開けることでは一致していた。だから我々はダンから酒精を注ぎ出しては飲み続け、時としては酩酊の果ては(打ち捨てられた)真珠が抜けた貝殻か、統治者<sup>3)</sup>の欠く町の態となった<sup>4)</sup>。

ある時のこと、こうした状態にあってもまだ飲み足りないという感じがあったのであろう、良からぬ欲求が誘ったのである、女の酌人<sup>5)</sup>のいるハーン(居酒屋)に乗り込もうと。その夜は黒の錦織のような緑<sup>6)</sup>であったし、頭の酔いの方は波が押し寄せるような様であった。その波を泳ぐような(千鳥足でハーンへと)行動を起こした。と折り悪しく早朝の礼拝を呼びかける声が聞こえてしまったのだ。その途端、若気の至りの欲望の魔力は委縮こまってしまった。それでともかく呼びかけに応じるべく、わいわいと駄弁りながらモスクに向かった<sup>7)</sup>。

モスクでは我々はイマーム(導師)のすぐ後の列に立った。最前列は敬虔な者、高貴な者の並ぶ列である。礼拝は威厳と沈着を以って、定められた礼拝所作で行われ、そのすべての所作に時間を取った、すべての動作にそれなりの意味付けがあった。我らのイマームは屈礼<sup>8)</sup>においても立礼<sup>9)</sup>においても念を込めていた。そしてその一つ一つの礼拝所作に対して、時間をかけ過ぎていたので、我々是我慢できずに平手打ちの乱行に及び(失神させ)てしまった。(信者たちは礼拝中のこととて呆気にとられたままであった)しかしイマームはすぐに正気に戻ると、最後の礼拝所作に入る合図の声を張り上げた。こうして早朝の礼拝を終えたのであったが、すぐさまイマームはミフラーブ(壁龕)の隅の所へ行き座って胡坐をかいた。そしてその顔を参集者達の方に向けると、その視線を長

1) この冒頭の段落のサジュウ(脚韻技法)の語は下線部の順に：sajṭhun / ṣaḥīḥun、'aqlī / hazlī、miqatī / nafaqatī、nāsi / ka'si。

2) ダン dann：(pl. dinnān)「酒壺」と訳したが、形は大型のアムフォラで、底が丸いため壁などに寄り掛かる形で置かれた。ラークード rāqūd (pl. rawāqūd) とも言った。

3) 統治者 hurr：hurr とは奴隷ではない、「自由人」の意味であるが、ここでは「統治能力のある自由人」とでも中和して訳しようとも、余りに意味が漠然としてしまう。なお「町」と訳した miṣr の意味は最初「軍営都市」であった。今は固有名詞としてミスルはカイロ、エジプトの意味となっている。

4) この段落のサジュウは下線部の順に：kḥulwātī / ḥulwātī、aqdāḥī / rāḥī、(nadmānī / dinnānī)、durrin / ḥurrin。

5) 女の酌人 khammāra：khammār 「ハムル(khamr)に携わる人」の女性形である。男性形の場合は「酒屋、居酒屋」を表している。

6) 緑 akḥḍar：緑は、状況により「黒」の意味にもなる。我が国の「緑の黒髪」と同様の概念である。

7) この段落のサジュウは下線部の順に：ṣaṭārātī / khammārātī、dībājī / amwājī、sabḥī / ṣubḥī、ṣabwātī / da'wātī。

8) 屈礼 khafd：khafd の意味は「身を低める、頭を下げる」こと。ここでは「屈礼」ルクーウ rukū' と同義として用いられている。ラクア(礼拝所作一巡)の中の二番目の所作。手を膝に置き、屈んで折る姿勢。

9) 立礼 raf：raf とは「立つ、頭を上げる」。ここでは「立礼」の用語キヤーム qiyām と同義として用いられている。ラクア(礼拝所作一巡)の中の最初の所作。立ったまま目を閉じ、祈る姿勢。

い間見回して、そして異臭を嗅ぎ出そうとしていた<sup>10)</sup>。

やがてイマームは声を発した、「お集まりの信者の皆さん！皆さんの中で、振る舞い方に迷誤に陥った人がいます、不作法を働いた人がいます！こういう人は、自分の家に留まっていもらいたい。その(酒臭い)息で我らが清浄な空間を汚さないでもらいたい。この私めは今朝方から大罪の母(=酒)<sup>11)</sup>の臭いが何人か(の不埒な一団)から漂っているのは気づいています。さてこうした異教神<sup>12)</sup>の影響のもと夜を過ごし、それでいてこの礼拝の家々(=モスク)に早朝やって来た者の報酬は何でしょうか？ アッラーは許されたのです、家々(=礼拝所)は高く立て(清く保たれ)るよう、またこうした信者の端くれの者達を遮断するよう<sup>13)</sup>」。こう言い放つと、イマームは我々の方を指差した。参集者は寄って集って我々を語り打擲した。こうされているうちに遂には着ている外套は引き裂かれ、首筋は血まみれになってしまった。ようやく我々がこの神聖な場所に二度と近付かないことを約束させられて、やっとのことで参集者の間をすり抜けることが出来た。我々全員が何とか五体満足で切り抜けたわけであった、こんな難事に会ったにもかかわらず<sup>14)</sup>。

我々は帰る道すがら、通りがかった若者達にこの村のあのモスクのイマームは誰かと尋ねたところ、「それはそれは敬虔なお方で、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ですよ」との返事が返ってきた。我々は叫びをあげた、「スプハーナッラー(神に讃えあれ)！(その弁舌で)時として盲人の目をも開かせ、イフリート(悪魔)ですら信者にしてしまう方だ。アルハムド・リッラー(有り難きかな)！あの方がこのように早く回心なされたとは。あの方の悔悛同様に我々の悔い改めもアッラーが許さないはずはあるまい！」。それからというもの(我々の間では)その昼の残りの時間は、アブ・ル・ファトフ師の驚異の敬神ぶりについて話題に事欠かなかった。とはいえ彼の不敬振りにについても十分聞き及んでいたのだけれども<sup>15)</sup>。

(語り手イーサーは話しを続けた)<sup>16)</sup> さて昼が死前喘鳴を行う<sup>17)</sup>かという(=殆ど昼が終わりかかった)頃、外を見渡すところだろう。ハーナ(居酒屋)の一群が星々のように、その酒旗を<sup>18)</sup>暮れなずむ夜に高々と掲げているではないか！我々はそれを見てお互い歓喜の言葉の交換を行った。輝かしい夜となることを喜びあった。出かけた我々はハーナの中でも最も門扉が大きな、最も軸受が頑丈なハーナ<sup>19)</sup>の所へ入って行った。中に入るとディーナール金貨(を見せて、それ)をイマーム(導

10) この段落のサジュウは下線部の順に：imāmi / kirāmi, sakīnatin / mawzānatin, waqtun / samtun, rafī-hi / safī-hi, baṣīrata-hu / ‘aqrīta-hu, mihrābi-hi / aṣḥābi-hi, iṭrāqa-hu / istinshāqa-hu。

11) 大罪の母 umm al-kabā’ir；直訳は「大きなものたちの母」。酒自体は「大きなもの」とは解釈されないが、その後の狼藉、意識の錯乱が「大きなもの」=大罪を生むことになる。大罪を生む故に、酒は「大罪の母」なのである。同義で umm al-khabā’ith と呼ばれる。

12) 異教神 tāghūt；偶像一般を言う。アッラー以外に尊崇され、礼拝される対象のこと。メッカの影響力ある二女神 アッラート al-Lāt とウヅァ al-‘Uzza を指す場合が多かったが、イスラム以降、悪事の誘惑に誘い込む悪魔や誘惑者をも指して用いられる。また「酒造り」、「酒販売」は殆どがキリスト教徒であったことも想定される。

13) 信者の端くれの者達を遮断するよう：「不敬を働く者を処罰するよう」。太古のアード族やサムード族は、その奢りと神に対する不敬さゆえに、七夜八日の暴風の天罰によって滅ばされた。が、最も賢い者達が最後まで残ったが、これらの末端の者も最後の八日目には滅ばされ民族は滅亡した。これを踏まえた言い回しが「その民族は滅ばされた」 qutī’a dābiru al-qawmi であり、直訳は「民族の末端(までが)根絶された」。これを踏まえたのが本文の言い回しである。

14) この段落のサジュウは下線部の順に：sīrati-hi / qādhūrati-hi, dīmāsu-hu / anfāsu-hu, yawmi / qawmi, tāghūti / buyūti, turfa’a / yuqta’a, ilay-nā / ‘alay-nā, ardiyatu / aqfiyatu, ‘udnā / kidnā, salāmāti / āfāti。

15) この段落のサジュウは下線部の順に：shiyati / qaryati, taqiyyu / iskandariyyu, ‘immīṭun / ‘iffīṭun, awbati-hi / tawbati-hi, nuski-hi / fasqi-hi。

16) (語り手イーサーは話しを続けた)；(カッコして qāla「彼は言った」とあるだけである。恐らく校訂者 M. ‘Abduh の書き加えた語句であろう。定型の語りの中入りの進行表現とは異なる。この形式はムラフ (mulah 奇譚) のものである。

17) 死前喘鳴を行う ḥashraja；人の死の直前にやって来る繰り返しの咽喉音。アラブ世界では gharghara とも言う。

18) ハーナ(居酒屋)の一群がその酒旗を rāyāti l-hānāti；ハーナは営業するときは酒旗(rāya)を掲げることになっていた。テントにこの酒旗が上っている限りは、営業していることを示していた。営業していても酒が切れた場合は降ろすこともまた、そこを頼りとする者にとっては目安となった。この風は古くプレイスラム期から存在した。

19) 最も軸受が頑丈なハーナ aḍkhami-hā kilāban；kilāb を文字どおり犬(単数は kalb)と探ると「最も太った犬のハー

き役)とし、判断は欲望に任せる格好で進んだ。案内された先は容姿が良く、媚を見せた、腰の細い娘であった。彼女は、その投げる視線は相手を殺し、そしてその放つ言葉で生き返させる、そんな娘であった。彼女は我々を快く迎え入れて、さっそく頭にそして手に接吻して遇してくれた。また彼女の仲間たちの異人たち<sup>20)</sup>も我々の乗用としてきたリハール(riḥāl ラクダの鞍)やスルージュ(surūj 馬鞍)を外すのに忙しく働いてくれた<sup>21)</sup>。

我々は彼女にワインの出来は如何かと尋ねた。彼女は答えるに詩を詠じた；

ワインね その甘美なこと、私の唾液<sup>あたし</sup>というところ

khamrun ka-rīqī fi l-'udhūbati

その美味なところも 蕩<sup>とろ</sup>けた甘さにおいてもね

wa-l-ladhādhati wa-l-ḥalāwah

咽喉越しにまろやかさ残します そうでなくても

tadharu l-ḥalīma wa-mā 'alay-hi

まろやかさに少なくとも奥ゆかしさ残す程の出来よ

li-ḥilmi-hi adnā ṭulāwah

(カーミル kāmīl 調 wāwiyya w 脚韻詩)

こう詠じてから娘は答えを続けた、「(そのワインの色と言ったら赤い)あたしの頬から搾り出したと言ったら良いかしら、(その古酒さと言ったら)祖父の祖先たちが醸造<sup>つくる</sup>り出したと言ったら良いかしら。そのダン(酒壺)の口はタールで封じられていたのよ、あたし(のあそこ)を遠ざけるみたい、あたしを邪魔するみたいに。当代ではこれっきりの上等品、喜びのポケット(=咽喉越し)に収まる秘蔵品ですわ。その粋は代々ずっと保たれてきたの、昼にも夜にも晒されることなく。そうして保たれて来たものは、他でも無いその香氣、その輝<sup>きら</sup>き、エキスの濃さ、その燃えるような酒精度ですわ。さらに言えば、例えようのない髄から発する芳香ですわ。太陽と張り合う複数妻<sup>22)</sup>、(着物つけずとも)燦然と輝く生娘、宥め<sup>すか</sup>賺せ役だったらこれ以上にない老婆と言ったところ。もっと例えましょうか、燃え上がることさらに血管の中の熱き血潮、冷涼<sup>つめた</sup>きことさらに咽喉越<sup>し</sup>しに吹く薫風、思いつき点ずることさらに思考するランプ。毒消したるやさらに時の害悪消すテリアカ<sup>23)</sup>といったところ、死者を蘇生させ元気づけさせしてしまいますもの。例え生まれながらの盲であっても目明<sup>めあき</sup>きに<sup>し</sup>てしまう程ですわ<sup>24)</sup>。

我々は(聞き終わって)言った、「お前の父親に誓って言うが、全くワインってやつは(飲む者を)踏み迷わせてしまうものなのだ。それはそれとして、ではお前のナーディー(店)の演芸人は誰なのかね？きっと飲み手<sup>よめ</sup>たちの飲欲をいや増してくれる者だろう、お前のその甘美な唾液と共に

ナ」の意味となり、「犬」と「ハーナ」との関連性の説明を要することになる。ここでは大テントの「軸受け、鉄釘、鉤」など＜門扉＞と関連させた方が文脈も相応しかろう。

20) 異人たち 'ulūj: 単数はイルジュ 'ilj。アラブではない人種。ふつうはアジャム 'ajam と言うが、イルジュと言うとき、外国人をより卑下した言葉で、もともとは「野生のロバ」を意味する。酒類の関係者は非ムスリムの、非アラブが多かった。

21) この段落のサジュウは下線部の順に: nujūmi / bahīmi, sarra'a / gharra'a, bāban / kilāban, imāman / lizāman, shaklin / dallin / munhallin, alhāzu-hā / alfāzu-hā, talaqqī-nā / aydī-nā, 'ulūji / surūji。

22) 太陽の複数妻 darra al-shams: 「複数妻」とはイスラム社会は一夫多妻制(dīr)なので、男は四人まで妻帯できる。「同じ夫を共有する妻(たち)」のことをダッラ darra と言った。妻は無標ではザウジャ zawja と言う。ダッラ darra と言った場合＜複数妻の一人であり、他にも妻にもいる＞ことを示唆している。「複数妻」の複数形はダラーイル darā'ir、または darrāt と言っている。同じ夫(=太陽)を巡って複数妻たちはお互いを羨んだり、嫉妬したりする。ここではワインはその輝かしさから太陽に、それを比較し褒めたり貶したりするのが複数妻ということになる。

23) テリアカ tiryāq: 解毒剤として有名。恐らくギリシャ語の θηριακα からの借用であろうと言われる。

24) この段落のサジュウは下線部の順に: khaddī / jaddī, qāri / duhūri / surūri, akhyāru / nahāru, shu'a'un / ladhādhā'un, nafsi / shamsi, baraqi / malaqi, 'urūqi / ḥulūqi, fikri / dahri, intashara / abšara。

入り混じるように」。彼女が答えるに、「あたしの所には年寄りなんだけど、心浮き浮きさせる根っからの才能の持ち主がいますわ。<sup>たぐい</sup>類稀なユーモアも持ちあわせているのよ。日曜の日にね、ミルバド<sup>25)</sup>の修道院の所へ行ったら逢ったの<sup>26)</sup>。彼とは打ち解けた会話が出来て、あたしを喜ばせてくれたわ。あたし達の間には親密の情が湧き、楽しさをその都度味あわせてくれたわ。あたしに話してくれた中で、彼の名誉を守った<sup>27)</sup>話や、故国での彼の部族の栄光の話なんか面白かったわ。そんなこともあって、あたし段々彼が好みになってきたの、で今は幸いなことにあたしの所で「お気に入り」になって貰っているわ。あんた達にもきっと彼に親睦<sup>ちか</sup>しさを感じてもらえますわ、そうよ会いたいという興味を起こさせる人だわ」。

こう言い終えて彼女は中へ声を掛けて、そのシャイフ(老人)を呼んだのである。答えて出て来たその人物とは、何と我々がアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフではないか！ 私は思わず声を発した、「おお何とアブ・ル・ファトフ師よ、ワッラーヒ(全くもって)、あの詩のようではありませんか(この聖俗の変身振りは)、あなたを観察しているところも、話す口調においても！」。そして私は詠じた：<sup>28)</sup>

過ぎ去りし昔 かつて我には知恵豊かにあり

kāna lī fī-mā maḍā ‘aqlun

宗教心篤く かつ品行方正の正道歩みおりき

wa-dīnun wa-stiqāmah

されど何時しか 神の御陰もちて売り渡してしまいき

thumma qad bi‘nā bi-ḥamdi

尊い法学者の職を 卑しい刺絡師<sup>29)</sup>の職へと

llāhi fiqhan bi-hijāmah

もし我が人生の終わりを少し先伸ばし出来るなら

la-in ‘ishnā qalīlan

アッラーに乞い願います わが身に平安あれと

nas’alu llāha s-salāmah

(ラマル ramal 調 mīmiyya m 脚韻詩)

アブ・ル・ファトフ師は(聞いている時も、聞き終わっても)予期に反する折の鼻息を鳴らしたり、唸り声をあげたり、目を赤く充血させたり、笑い声をあげたかと思うと高笑いに変わった。聞き終わって彼が言うには、「その詠われている内容がわしの場合と同じだということのかね？あるいは諺に挙げられている以下の内容が私の場合と似ているとでも言うのかね？」

25) ミルバド Mirbad；イラクのバスラ近郊にあって、イスラーム期以前から定期市が開かれ、詩祭も設けられた。メッカの近郊ウカーズと並ぶ大規模のものであった。

26) 日曜の日にね、ミルバドの修道院の所へ行ったら逢ったの；酌人の娘はムスリムではなく、日曜に教会(ここでは修道院)に通うクリスチャンであることを明らかにしている。修道院ではミサ用のワインを作っており、イスラーム法の規制が緩ければ、大抵にそこに行ってワインの購入もできたし、周囲にテントを張ったハーンの居酒屋も並んだ。恐らくハーンで会ったものと思われる。

27) 名誉を守った ufūr ‘irḍi-hi；「名誉」と訳したイルド ‘ird とはアラブの倫理観の一つで、「己の女子供・家族を守護する」名誉のことである。その中で「娘が傷つく」から守ることはイルドの最重要項目であった。それ故、二人の会話は「女性」とか「恋愛」とかの話に集約されることも窺える。言い回しに「彼は自分の名誉を保持した、守った」wafara ‘irḍa-hu があるが、上のような状況を踏まえたものである。

28) これまでの段落のサジュウは下線部の順に；abī-ki / nādī-ki, sharbi / ‘adhbi, aḥadi / mirbadi, khulṭatu / ghibṭatu, ‘irḍi-hi / arḍi-hi, wuddī / ‘indī, insun / ḥirṣun。

29) 刺絡師 hijāma；カッピングで患部の悪い血を吸い出す職人。賤業と看做されていた。既出、第36話注11、および訳者解説も参照。

汝止めたまえ 我を非難<sup>なん</sup>ずるを

da' mina l-lawmi wa-lākin

されど如何なる騙し手と汝看倣すや

ayya dakkākin tarā-nī

我こそは知らぬ者として無きものぞ

anā man ya'rifu-hu kullu

聞いてみなされ ティハーマ<sup>30)</sup>人<sup>30)</sup>にイエメン人に

tahāmin wa-yamānī

我こそは何処<sup>おほ</sup>の地であれ紛れて存在す

anā min kulli ghubārin

我こそはどんな場所であれ出沒する者ぞ

anā min kulli makānī

ある時はミフラーブに纏い付いてもいよう

sā'atan alzamu mihrāban

またある時には酒屋に入り浸ってもおろう

wa-ukhrā bayta hānī

かくなるが賢き者の処世法ぞ

wa-kadhā yaf'alu man ya'qilu

この世知辛い世の中においては

fī hādha z-zamānī

(ラマル ramal 調 nūniyya n 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：(師の吟ずるのを聞き終わって)私の方は神に加護を乞うた次第である、師のような状況に陥らぬようにと。それにしても師の例のように世渡り稼業が出来るものかと驚異に感じたものである。こうして我々はその週をずっと師と共に快適に過ごし、その後師の許を旅立ったわけであった<sup>31)</sup>。

#### 49 話 ハムル(ブドウ酒)のマカーマ 完

#### 第 49 話 訳者解説

直前のマカーマ数篇よりは分量があり、ストーリー性も感じられる作に出来上がっている。本舞台はモスクであって、後舞台がハーンと考えてよからう。語り手およびその遊び仲間、彼の自宅で宵から深夜までありったけのダン(酒壺)の酒を飲み尽くし、それでも足りなくて、居酒屋ハーンへ出かける。酔って千鳥足、闇を泳ぐように出かける。その中途、夜明けが来てファジュール(早朝)の礼拝を告げるアザーンが聞こえる。一時的に我に返り、モスクに向かう。この辺りは信仰を絡ませて殊勝気をチラつかせている。無視してハーンへ出かけていたら、後の筋が描けないことになる。

モスクの到着が早かったため、礼拝者たちの列、それも最前列に座ることになる。この設定も思わせぶりである。イマーム(導師)のすぐ後ろなのだから。ラクア(礼拝手順)一つ一つに時間をか

30) ティハーマ人 tahāmī; 複数形であり、単数は tihāmī。ティハーマはアラビア半島の西岸中央部。その南部がイエメンになる。

31) この最終の短い二段落のサジュウは、下線部の順に; yaqūl / amthāli, ḥāli-hi / amthāli-hi。

けるイマームに対して、酔っぱらいの連中は、怒りの感情が赴くまま、前のイマームに狼藉を働く。それも後列に居並ぶ礼拝者たちには気づかないほどに。イマームを一時気絶するほどに殴った。しかしイマームは礼拝を完遂すべく、その最後まで導く。この辺りは、ムスリムの内側からの礼拝の模様を伝えて興味深い。そしてイマームは礼拝の主導を終えた後、参集者たちが帰ろうとする前に、直ぐに一角に行行って座り直す。何事かと、参集者もならった。そして語り手も含めた乱暴狼藉を働いた酔っ払い達に相応の懲罰を喰らわせるよう指示する。

この辺りは、イスラームのモスクのこと、礼拝のこと、ラクア（礼拝所作）などは、第10話「イスファハンのマカーマ モスクの早朝礼拝に立ち寄ったばかりに」を前提にして、その内実を知る上でも読み比べると、比較文化論的視点からも興味深い諸点が浮かび上がって来よう。

這う這うの体でモスクを脱出したこの一団は帰途、通りがかった者にあのモスクのイマームは誰か尋ねると、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフとの答え。ここから後舞台となるが、自宅で寛いでアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師についての逸話をあれこれ談義していると、夕刻になりハーンの酒旗と明るさが目立って、その気を誘う。出かけた仲間たちはハーンの立ち並ぶ中で、最も大きなハーンに入って、そこの女サーキー（酌人）と酒を酌み交わし、（彼女の酒ほがい詩はなかなかのもので、アブー・ヌワースのそれを想起させる、性関係も匂わせて）、そこに老人の芸人がいると聞かされる。呼ばれた芸人は何とアブ・ル・ファトフ師ではないか！ 語り手は主人公の昼の謹厳振りと夜の放埒振りの落差に驚き、詩の引用でそれを揶揄する。これに対して、主人公は反歌でもって切り返す。今の世知辛い世の中では、こうした世渡りが、才知あるものの採るべき道、と弁明して。

このマカーマのモチーフ、「朝に泥酔者に譴責したイマーム、夜は酒屋のナディーム（相伴役）」は、後輩のアル・ハリリーも大分お気に入りのようで、換骨奪胎した形で自著の『マカーマート』に取り入れている。第28話サマルカンドのマカーマ「表で説教・裏で酒飲み」がそうであるし、すでに第1話のサンアールのマカーマ「辻説教師のうらおもて」で、表では訓戒を説いて名士となっていた説教師の主人公が、自宅に帰ると給仕を相手に酒を嗜む話などを念が入った一話をまとめ上げている。

形式であるが、この49話は主人公、語り手、進行、騙り、サジュウ文体、詩の挿入など、ハリリーの大成したジャンルとしてのマカーマ文学の多くの要素が観られる。騙りで「金銭を稼ぐ」要素がもう一つ欲しいところだ。ここでは、参集者を<sup>けし</sup>駄にかけて泥酔者を懲らしめるのが、その変形と採られられようが。主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフは定型の老人として世故の長けた役を発揮しているし、後舞台で正体が暴かれるところ、締めめの反歌も揃えている。語り手の役割は導入部、後舞台の顔出しと進行役も果たしており、主人公とは知己の間柄であることも前提とされている。本話では主人公を殴りつけ、その後のやられ役、加害者と被害者の両者を演じている。文体の方も一応は整っている。サジュウの配慮も全段落に怠りなく見られる。詩の挿入は、結末に詩が二つ、反歌の締めめの役割を担っている。願わくば本舞台の盛り上がりにつく欲しいところではある。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版、Sofya 版および Paris 版、いずれにも収録されていない。精選されている前半の方の一篇の中に入っているも良さそうとも思えるが、矢張り体裁をマカーマに整えてはいるが、もともとはムラフ（奇譚）の領域として外されているのか。

## 50 話 マトゥラバ(探求)のマカーマ 宝探しの話を持ちかけられて

(原文 M. 'Abduh pp. 246-249)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：ある日のこと、私はある寄り合いに参加したことがあった。集まった面々は(華美なこと)春咲く花々の如く、深夜が過ぎた頃<sup>1)</sup>の星々の如くであった。それぞれが顔を輝かせ、人格も満ち足りた気分の方々であった。彼らはその外装といい、気風といい同等と言ってよく、また立派な風格という点ではよく似た環境にあった。我々は思い出話の裾を引っ張って<sup>2)</sup>、集<sup>つど</sup>ての対話の門戸を開いた。ところで我々の席の中央には若者がいた、他の面々よりも背が低く、髪は短く整えていた。この若者は会話の中で一言<sup>ひとこと</sup>も言葉を発することは無く、さまざまに言及される話題の中で意味を問い質すことも無かった<sup>3)</sup>。

さて我々の話題が尽きかかり、富裕と資産家を称賛し、財産とその利点に及んでいた。それは人物評価の飾りとなるもので、完全性の極みともいえる、と。すると件の若者は恰も仮眠から目覚めたかのように、あるいは不在であったものが突然その場に現れたかのように、己のディーワーン<sup>4)</sup>(知の宝庫)を開け、己の舌を解放した(= 発言し始めた)のである。彼は口を切った、「お黙りなさい! あなた方は自分達が持ち合わせていないことについてあれこれ無駄話をしていなさる。どんなものか知りもせず決めつけて、軽蔑していなさる。不易(永遠のもの)を求めるに、流行(一時的なもの)に誤魔化されていなさる。遠きもの(彼岸・来世)を知るに、近きもの(此岸・現世)で頭を占領されていなさる<sup>5)</sup>。

この世など長旅する者の仮の宿<sup>6)</sup>に過ぎないのではございませんか、過ぎ去りゆく者の一時しのぎの場にすぎぬではありませんか? 財産などというものは(神に)返却すべき一時金でありましょうし、また諦めねばならない預かり物では御座いませんか? そんなものは(時の変化と共に)こちらの人々からあちらの人々へと運び換えられてしまいますし、また最初の人々が蓄えたとしても何時か別の人の所有となってしまう。財産などというものは単に吝嗇家にとって大事であって、高貴な方々には小事であるべきでは御座いませんか、また無知蒙昧な人にとって必要でしょうが、学ある方々には不要であるとは思いませんか?<sup>7)</sup>

皆さん、騙されてはなりません! 栄光の所在は二つある方向の一方だけにしかありません、前進

1) 深夜が過ぎた頃 ba'da hazī: 「深夜」と訳したハジューとは夜間の時間帯を指す用語であり、我が国の「更」に当たる。アラブ世界では夜間を三分割する概念があり、その「夜の最後の三分の一、三更」がハジューである。同義語にジャウフとかインクがある。拙稿「夜 そのアラブ的表象」第三章「夜の時間分割概念」第六節「夜の最後の三分の一の概念」、『アッサラーム』第22号(1981年6月)を参照。

2) 思い出話の裾を引っ張って natajādhabu adhyāla l-mudhākarati: tajādhaba 「衣の裾を引っ張る」とは「動きやすいように足のそばに裾を寄せる」動作を表わすことから、「動作を開始する、何か事を始める」ことの言い回しとなった。

3) この冒頭の段落のサジュウ(押韻技法)の語は下線部の順に: (rabī'i / hazī'in), muḍiyyatin / raḍiyyatin, ḥālī / aḥwālī, mudhākarati / muḥāḍarati, rijālī / sibālī, ḥarfīn / waṣfīn。

4) ディーワーン dīwān: 「収録庫・場所、貯蔵庫・場所」。ペルシャ語からの借用語であり、行政の記録・収集・貯蔵場所としての「官庁、役所」、詩作品のそれでは「詩集」など原義から多様に用いられている。

5) この段落のサジュウは下線部の順に: aḥlī-hi / faḍlī-hi, rijālī / kamālī, raqāḍatīn / ḡhaybatīn, dīwāna-hu / lisāna-hu, 'adimtumū-hu / hajjantumū-hu, fānī / dānī。

6) 長旅の仮の宿 munākh rākib: 直訳は「ラクダ乗りの宿泊所」、rākib は「乗り手」であって騎乗動物はラクダ以外にも馬類があるが、この場合はラクダにしか適用されない。なぜならば後接する munākh の語は<ラクダ用語>であるためである。ラクダへの乗り降りには跪かせる。その折立っているラクダの前脚の膝を杖で叩き、ナフ・ナフ nakh nakh と声を掛ける。一日の旅の終わる所、これがマナーフ manākh であり、「ナフ・ナフと声を掛けるところ」の意味。一日行程であって、これが重なって何日行程となり、旅程、距離の意味を外延して、almanac (年間スケジュール、暦、年鑑)の意味として西欧語になった。

7) この段落のサジュウは下線部の順に: rākibīn / dhāhibīn, murtaja'atun / muntaza'atun, ākharīna / ākharīna, (bukhalā'i / kuramā'i / 'ulamā'i)。

出来る道は二つの籤の矢張りのどちらか一方にしか無いのです。高貴なる出自にすぎるか、並はずれた知識を絶えず求めるか。どれほど素晴らしいことでしょう、知識、それを人々の頭脳を通して運び手とするということは！その希求者が(諦めることなく)求めて止まないということが！ワッラーヒ(誓って言うておきますが)、この私は、もし精神の高邁さと名誉とを保持していなかったならば、この地上で最も富豪な者になっていたことでしょう！何故と申すに、二つのマトウラブ<sup>8)</sup>(matlab 地上の富の探求場所)を既に知っておりますからなのです。マトウラブの一つはタルスース<sup>9)</sup>の地であって、人々は関心を持って探求しております。その埋蔵金はアマーリク人達<sup>10)</sup>の宝物とか、パトリキウス(ビザンチンの名門貴族)の隠し宝庫だとされています。その額は10万ミスカール<sup>11)</sup>分もあるそうです。もう一つのマトウラブはスーラー<sup>12)</sup>とジャーミアイン<sup>13)</sup>との間にあると言われています。そこには二つの重いもの<sup>14)</sup>(=ジンと人間)集団が、またカスラーたち(ササン朝ペルシャの帝王)が貯めた宝の埋蔵品や多くの暴君たちの補給品があふれている、とのことなのです。その中には、赤みを帯びたサファイヤ(yāqūt)、真珠(durr)、宝石類(jawhar)、金銀宝石類で鏤められた王冠(tījān)、集められた大金袋<sup>15)</sup>(bidar)などがあるとされています<sup>16)</sup>。

こんな話を耳にした我々は(色めき立って)この若者の近くに躊躇り寄った。身を傾けて彼をまじまじと見つめた。我々の見たところ、どうも彼の言っていることは根拠が弱そうで、稼ぎが易しい(=たんまりとした稼ぎではない)ことに甘んじて(強いて探し当てようとしていないで)いる風が看て取れたからである。彼が仄めかすに、こうしたマトウラブ(宝の在り場所)を知っていながらそうしないのはスルターン(官憲・御上の追及)を恐れているあまりであり、また身内の誰一人信頼に足るものがいないから、ということであった。そこで我々は彼に提案を持ちかけた、「あんたの実行しない理由は聞いて分かった積りである。その理由も受け入れよう。そこであんたの判断が、我々に善行を施しても良いと、我々にやらせてみたいと、このマトウラブの一つを手掛けて欲しいとの希望があるならばどうだろう、(成功した暁には)あなたの取り分は三分の二と言うところで、我々に任せてもらえますか？」と<sup>17)</sup>。

8) マトウラブ matlab; マトウラブとは直義は「求める場」であり、本話がこのタイトルを採っているが、この作まで来て意味がより限定されて来る。ここでは「地上の(埋蔵されている)富のあり場所、探求場所、宝探しの在り場所、秘宝の在りか」の意味である。

9) タルスース Tarsūs; 小アジア半島地中海に面する東端にあるキリキア地方の都市。古くからある都市で660年にビザンチン帝国と戦って、イスラム化される。その後放置されて廃墟となるが、アッバース朝第5代カリフ・ハールーン(在位786-809)の時代に城壁が修復され、アワースィム行政区となり、東ローマ帝国への備えと遠征への最前線の役割を担った。恐らくその廃墟となったところにさまざまな埋蔵金、宝物の逸話が生まれたのであろう。

10) アマーリク人達 al-'Amālika; 『旧約』に記述されるアマレク(Amalek)人。古代東地中海の大シリア地域に住む巨人族であった。その居住地が、ないしは領土が、遠くキリキアまで伸びていたかは疑問。

11) ミスカール mithqāl; 重量単位で、時代や地域によって変動があるが、約5グラム弱とされる。

12) スーラー Sūrā; イラク、古代バビロニアにあった都市。大都市バビロンに遠くない所にあり、捕囚時代のユダヤ人たちの拠点であった。イスラム時代ワインの生産地として知られる。

13) ジャーミアイン al-Jāmi'ayn; イラクのユーフラテス河に臨むヒッラ Hilla のこと。ジャーミアイン(両ジャーミウ)との別名は、ジャーミウ(大モスク)を誇る首都バグダードと宗教及び学術都市であったクーファのジャーミウとのふたつジャーミアインを結ぶ間にあったからである。ヒッラの住宅の多くには古代バビロニアの廃墟から持ち出した古代煉瓦が用いられており、その相当数には楔形文字の刻まれているとのことである。

14) 二つの重いもの al-thaqalān; 「重いもの」とは「思考力ある」の換言であろう。アラブ・イスラム世界の「思考力ある」者は人間だけではなく、人間社会に重層して生存するとされるジン jinn(精霊)もそうである。それ故このように「二つの重いもの」、「ジンと人間」と並行意識されているわけである。

15) 大金袋 bidar; 単数は badra。「定まった大金の入った袋」のこと。我が国の「千両箱」を想定されたい。一般には定まった大金とは「一万ディルハム銀貨」が普通で、「一千ディルハム銀貨」の場合もあれば、「七千ディーナール金貨」の場合もあった。

16) この段落のサジュウは下線部の順に; jihatayni / qismatayni, sharīfun / munīfun, hāmīlu-hu / āmilu-hu, 'irdī / ardī, (tarsūsa / nufūsu), 'āmāliqati / baṭāriqati, (jāmi'aini / thaqalayni), akāsirati / jabābirati, (ahmaru / jawharun), muraṣṣa'atun / mujamma'atun。

17) この段落のサジュウは下線部の順に; 'alay-hi / ilay-hi / (ra'ya-hu), makāsibi / maṭālībi, sulṭāni / ikhwāni, ḥujjata-ka / ma'dhirata-ka, ilay-nā / 'alay-nā, maṭlabayni / thulṭhayni。

(提案を聞き終わって) 若者は我々の方に手を差し出してきて、そして言うには、「前もって何か新たに情報を提供した者にはその見返りがあるはず。入手可能な情報を知り得たそれ相応な代価が支払われて然るべきではありませんか」。それで我々は都合のつくだけの手持ちの金品を彼に差し出した。そして誰もが彼が述べたことで次に何を言うかワクワクして待った。彼は掌が一杯に満たされたのを見届けてから、その視線を上に向け我々の方を見遣った。そして言うには、「(これからは) 私たちは質素な生活をして、余力を保つようにしておかねばなりません<sup>18)</sup>。(出立する) 私たちの時間は迫っております。それで約束の時間ですが、明日この場所ということをお願いします、イン・シャーア・ツラー(神の思し召しあらば)」<sup>19)</sup>。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた: この集まりがお開きになった後、私は座の一团が去った後もしばらくそこに留まった。やがてこの若者の方へ歩みを進め、彼の両手の間に(=彼の前に)腰を下ろした。そして問いかけた、——というのも既に私の心の中では囁いていた、この人物情報を知りたいと望んでおり、また魂が彼との対話をしたいと切望しているのだと——「私はあなたの素性を知っているように思えてならないのです、どこかで既にあなたにお目にかかっているようではありません」。若者が受けて答えるに、「そうですよ、ある道が我々を抱擁しています<sup>20)</sup>(=どこかの道中で一緒にしたことがあります)。いうなればあなたは私の道づれなのですよ」。(思い出して感慨深そうに) 私は言った、「私からみると時が随分とあなたを変えてしまいましたね。でも私はあなたのことを忘れてはいません、忘れたとすればそれはただサタンの仕業となりましょう」。彼はこれに対して、詩を詠じた答えた<sup>21)</sup>。

我は時を自由気ままに操る巨人

anā jabbāru z-zamānī

卑劣なれども多用なる策略持ち合わせる

lī mina s-sakhfī ma'ānī

所持金いかなれど その有り金すべて使い果たすや

wa-ana l-munfiqū ba'da

有り余る金策 意のままにその巾着より引き出す

l-mālī min kīsi l-amānī

望むらくは 好みの食物を食べるだけ食べ

mana arāda l-qaṣfa wa-l-gharfa

酒杯重ねる 二弦ウード<sup>22)</sup>の奏でる調べに乗せて

'alā 'azfī l-mathānī

18) (これからは) 私たちは質素な生活をして、余力を保つようにしておかねばなりません: 「質素」も「余力」も家畜飼育の縁語を用いている。「質素」の原義アラク 'alaq は「家畜、特に乗用家畜の鼻先に吊るす餌袋」で、イラーカ 'ilāqa の方がよりポピュラーである。紐の先端を後頭部から項に結わえ固定して口をすっぽり覆うように吊るす('alaqa)。口先から袋の中の餌しか食べられないよう算段された給餌用具である。都市の中でもこうした恰好をされたロバが繋ぎ止められているのをよく見かける。沢山は与えられないので「質素」の縁語となっている。「余力」の原語 ramaq の方は、人間の場合は「最後のもの、残余、残しもの」で家畜の場合には、その与えられる「残飯」と言うことになる。

19) この段落のサジュウは下線部の順に: yada-hu / wajada-hu, (yunālu / māli), ḥaḍara / dhakara, kaffa-hu / ṭarfa-hu, 'alaqan / ramaqan, waqtu-nā / hāhunā。

20) ある道が我々を抱擁しています damma-nā ṭarīqun; ある旅の街道が私たちを抱いてくれた。即ち、どこかの道中で一緒にしたことがあります。いかに旅が日常で頻繁であったかのアラブの特徴を示す表現。

21) この最後の段落のサジュウは下線部の順に: (jamā'atu / sā'atan), ilay-hi / yaday-hi, ma'rifati-hi / muḥādathati-hi, nasabi-ka / bi-ka, ṭarīqun / rafīqun, zamānu / shaytānu。

22) 二弦ウード mathānī; ウード 'ūd は胴の膨らんだ弦楽器で、リュート lute の原型。五・六弦が普通。

脇に侍るは初心<sup>うぶ</sup>で 肌滑らかな酌人

wa-ṣṭafa l-murdāna jahlan

あれは誰これは誰と 名は明かさねど

min fulānin wa-fulānī

我が所持金我が繁盛 すべて彼に託され

ṣāra min mālin wa-iqbālin

汝が見るごとく 保障されてあり

tarā-hu fī amānī

(ラマル ramal 調 nūniyya n 脚韻詩)

## 50 話 マトゥラバ(探求)のマカーマ 完

### 第50話 訳者解説

「……若者は我々の方に手を差し出してきた、そして言うには、「前もって何か新たに情報を提供した者にはその見返りがあるはず。入手可能な情報を知り得たそれ相応な代価が支払われて然るべきではありませんか」。そこで我々は都合のつくだけの手持ちの金品を彼に差し出した。そして誰もが彼が述べたことで次に何を言うかワクワクして待った。彼は掌を一杯に満たされたのを見届けてから、その視線を上に向け我々の方を見遣った。……」。マカーマ文学が騙りを語る内容である、とするならば、著者アル・ハマザーニーの『マカーマート』の51篇の中で、騙りで金品をせしめた、初めてそれらしい作品に出会ったことになる。前作第49話では、ほとんどの要件を整え、唯一欠けていたのが、金品を騙し取るという稼ぎの設定・仕掛けと稼ぎの現場が、叙述にかけていたところである。本舞台ではそれまで黙っていた主人公がマトゥラバの宝探しに一座の人々を誘う。それも宝の在り場所を彼が知っていながら、なぜマトゥラバに出かけなかったのかの、それらしい理由をつけて納得させながら。後舞台の語り手との問答から、若者は翌日の約束の時間に来るわけではなく、すっぱかしてドロンを決める腹積りであったことが分かる。このマトゥラバのモチーフはアラブの「アリババと四十人の盗賊」を始めとして、「宝探し・埋蔵金探し」などいずれの民族においても、もっともありふれたテーマである。もっとも人を引きつけ、誘惑されるモチーフである。騙しの手口としてもありふれた手口であろう。しかし騙しを主として語られるマカーマのモチーフとして選ばれたのは、初めてではなかろうか。少なくとも『マカーマート』の創始者である本著者アル・ハマザーニーの51篇においても、大成者アル・ハリリーにおいても。後者の50篇の中にもこのマトゥラバのモチーフは無かったと記憶する。

形式の方に目を移すと、すでにいくつかの点は言及してあるのであるが、まず主人公の設定については、この主人公は若者である。若者の設定は如何であろうか。このような騙りを信じさせるに足る年ごろと言えようか。アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフであることは、後半何やら匂わせるにとどまっている。語り手とは以前旅を一緒にして顔見知りぐらいの間柄でしかない、この若者に対して「私からみると時が随分とあなたを変えてしまいましたね」とあるが、年齢と採ると「若者」の前提が崩れるので、変わったのは善良さ、世知にたけたこと、ということだろうか。結末の反歌にしたところで若者が謳う内容とは到底思えない。詩の挿入で反歌として締めくくっているところ、内容が弁明となっている点はマカーマの定型として範になってゆく。

本話では語り手が本舞台および状況は反転する後舞台の序で顔を出し、進行役も勤めている。前話と合わせれば、マカーマの内容も形式もある程度の条件を満たすことになる。筋の展開にもう少し膨らみと工夫が必要となろうが。サジュウも各段に配されている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版および Paris 版、いずれにも収録されていないが、Sofya 版では第 33 話に配列されている。

## 51 話 ビシュル伝のマカーマ 野盗、獅子と大蛇を斃し婿入りを果たすが

(原文 M. ‘Abduh pp. 250–258)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：アブド族<sup>1)</sup>出のビシュル・イブン・アワーナ<sup>2)</sup>はサアルーク(盗賊)<sup>3)</sup>の一人であった。ビシュルはある時ラクブ(rakb ラクタ隊)を襲撃したことがあった。ラクブの中には美しい女性が加わっていた。(気に入った)彼はこの女性を己の妻にと迎えることにした。彼女に向って声をかけた、「わたしには今日ほど幸運日はかつて無かったぞ」と。彼女は応えて詠じた；

ビシュル喜ばせしは 我が眼<sup>まなこ</sup>のなかな

a‘jaba bishran ḥawarun fī ‘aynī

瞳の黒さなるか また銀の如く白き我が腕<sup>かいいな</sup>なるか

wa-sā‘idun abyāḍu ka-l-lujayni

されど見よ 汝が近く視界の隅の場に

wa-dūna-hu masraḥa ṭarfī l-‘ayni

やさ腰<sup>や</sup>して蹀輪<sup>あしわ</sup>付し嬋<sup>たお</sup>やかに歩む女性を

khamṣānatun tarfulu fī ḥijlayni

二足<sup>ふたあし</sup>で歩行む者の中で何と麗し<sup>あ</sup>きか

aḥsanu man yamshī ‘alā rijlayni

ビシュル もし彼女と我とを伴にせば

law ḡamma bishrun bayna-hā wa-baynī

我が異郷暮らしも独居<sup>ひとりい</sup>も長く続こうもの

adāma hijrī wa-aṭāla baynī

彼女の美しさと我を較ぶれば明らかなれば

wa-law yaqīsu zayna-hā bi-zaynī

曙光告げるぞ黒き瞳持つ者が良からましと

la-asfara ṣ-ṣubḥu li-dhī ‘aynayni

(ラジャズ *rajaz* 調 *nūniyya* n 脚韻詩)

ビシュルはこれを聞いて、「ワイハ・キ(おお何と呪われたことを)！誰のことを言っておるのか？」と尋ねると、彼女は「そなたの小父上の娘、ファートイマのことですよ」と答えた。ビシュルは再度尋ねた、「ファートイマとはお前が描いたほどに美しいというのか？」。彼女が「ずっとよ、もっともっとと言っていていいわ」。するとビシュルは(答えるように)詩で詠じた；

呪われたことかな おお美白な前歯持つ娘よ

wayḥa-ki yā dhāta th-thanāya l-biyḍi

1) アブド族 al-‘Abdī; アブド族は架空の部族、恐らくアズド族を振ったものであろう。アブド‘abd は「奴隸」の意味。

2) ビシュル・イブン・アワーナ Bishr ibn ‘Awāna; この人物も架空の設定。著者の4代前、すなわち曾祖父の父の名がこのビシュルの名ではあったが、『マカーマート』(1)「1 著者の生涯」のアンサーブ(系譜)p. 216を参照。

3) サアルーク ṣa‘lūk; スウルーク ṣu‘lūk とも。砂漠の中での自部族からのあぶれ者で、徒党を組んで野獣狩、それに狼藉や盗賊を働いていた。バガボンドの生活を送り、全くの無法者ではなく、出自によってその個性があり、詩才あるものもいれば、千里眼や地獄耳の者など。異彩放つものも多くいた。

4) 蹀輪 *hijl*; 足飾りの一種。足輪、ハルハール *khalkhāl* とも。小鈴が付けられている場合が多く、歩くとき微かにその鳴り音が周囲に聞こえる。わが国の女性の「衣擦れ」同様、男性の気を引く対象でもあった。

我思うまいぞ汝を交換<sup>かわり</sup>とすることなど

mā khiltu-nī min-ki bi-musta‘īdī

されど今 汝仄めかしたれば推し進めようぞ

fa-l-āna idh lawwaḥṭi bi-t-ta‘rīdī

汝が前の空間開けたり、されば歌え抱卵せよ<sup>5)</sup>

khalawti jawwan fa-ṣfarī wa-biydī

我が両目蓋まどろみて閉じること非じ

lā ḍumma jafnā-ya ‘alā taghmīdī

卑しき我が身を名誉ある身へと高めるまでは

mā lam ashul ‘irḍī mina l-ḥaḍīdī

(ラジャズ rajaz 調 dādiyya d 脚韻詩)

すかさず女の方も応えて詠じた；

いかに多くの求婚者が彼女を求めて迫りしことか

kam khāṭibin fī amri-hā alahhā

汝にとりては彼女こそ「小父の息子」<sup>おじ</sup>に違<sup>たが</sup>わずや

wa-hiya ilay-ka bnatu ‘ammin lahhā

(ラジャズ rajaz 調 hā'iyya h 脚韻詩)

ビシュルは(早速行動に移し)彼の小父に使いを遣り、彼の娘ファーティマに求婚を申し入れた。しかし小父は(野盗となっている)ビシュルの要望を断った。(この返答に憤慨した)ビシュルは誓いを立てた、小父の氏族の者は誰であれ危害を加えるに容赦はすまい、小父がその娘を自分に嫁がせるまではと。こうしてビシュルの彼の部族への(攻撃が始まりその)彼らへの危害が次第に見過ごせない程になっていった。部族の主だった者達が彼の小父の所に集まって訴え出た。「そなたの身内のあの気違いから、何とか我々を守って頂きたい」と。小父が答えるに、「わしに濡れ衣を着せることはしてくれるな<sup>7)</sup>。もう少し猶予を頂きたい。何とか策を立てて奴を懲らしめてくれようから」。一同は「是非そう願いたい」と言っ(て引き退が)た<sup>8)</sup>。

しばらくして叔父はビシュルに人を使わせて申し入れた、「わしは以下のような誓いを立てた、このわが娘を誰にも結婚させはしまい、但し彼女の許にマフラ種<sup>9)</sup> ナーカ(雌ラクダ)一千頭を導いて来た者は別である。そのラクダもフザーア族<sup>10)</sup>のナーカでなければ承知しない」と。小父の

5) 汝が前の空間開けたりされば歌え抱卵せよ khalawti jawwan fa-ṣfirī wa-biydī:「私が保護しているから自由に振舞って宜しい」の意味。この言い回しは抱卵している雲雀に対して言われた故事に基づく。プレイスラム期、バスースの戦いの発端となるヒマーヤ(himāya 放牧地における占有私有地)に関わっている。族長クライブは放牧地を巡回している時、雲雀が巣くって抱卵しているのを見つけた。彼は哀れに思って、伴周りの者にもそこを己のヒマーと宣言した。そしてひばりに歌いかけたのがこの句である。ここでは直義的に性関係を叙したものと受取れる。物語りの最後にはビシュルとの間に生まれた男子が登場するのであるから。

6) 小父の息子 ibnu-hu ‘ammin: 古来のアラブ社会からの結婚観に関わることにイブン・アンム「小父の息子」がある。血縁を尊ぶアラブ社会では、婚期を迎えた娘の結婚相手は、先ずそのイブン・アンム(父方の小父の息子)達にあった。それ故娘が他の相手を選ぶ場合、これらの伯父の息子達の了解を取らねばならないこともあった。

7) わしに濡れ衣を着せることはしてくれるな lā tulbisū-nī ‘āran: 直訳は「私に汚名を着させるな」。

8) 最初から前段に至るまではサジュウ(脚韻技法)は見られない。この段落のサジュウは下線部の順に: ibnata-hu / umniyyata-hu / ibnata-hu, fi-him / ilay-him。

9) マフラ種 Mahr: アラビア半島南部に生息したラクダ。野生ラクダの生き残りとも言われている。マフラ族が占有して、貴種で高価な交易品ともなった。詳しくは拙著『ラクダの文化誌』第2章 名高いラクダ2 南方系ラクダ・マフリー種 pp. 21~25 を参照。

10) フザーア族 Khuzā'a: イエメン系アラブ南族のアズド族の支族。半島西岸を北上し、ヒジャーズ地方南部を領土とする。メッカの支配権をジュルフム族と争い、カアバ正殿の鍵を支配し、それを新興のクライシュ族に渡した。クライシュは預言者ムハンマドの部族である。

狙いはビシュルが辿る道、彼とフザーア族領との間にはライオンが生息している地域があり、彼を狙ってライオンが餌食として始末してくれるであろうとの魂胆であった。しかも旅するアラブの多くはその道は避けて通っていた。何故ならばそこにはダーズ<sup>11)</sup>と呼ばれる一頭のライオンと、シュジャーウ<sup>12)</sup>と呼ばれる一匹の大蛇が屯<sup>たむろ</sup>していたからである。このダーズとシュジャーウについては当時次のような言い回しで巷間に広まっていたものである。

素早く斃すにダーズ程の シュジャーウ程のものがあろうか

aftaku min Dādhin wa-min Shujā‘i

前者の獅子ダーズ これこそ猛獣類の君主なり

in yaku Dādhun sayyida s-sibā‘i

されば後者の大蛇シュジャーウ これこそ蛇の類の女君主なり

fa-inna-ha sayyidatu l-afā‘i

(ラジャズ *rajaz* 調 ‘ainiyya ‘脚韻詩)

やがて(その難題をやって退けんと)ビシュルはその(叙されている同じ)道を(堂々と)辿って行った。そして遂に道半ばに至る前で、そのライオンと遭遇することになった。彼の乗る馬は(恐怖に駆られて)後脚を蹴上げていた。そこでビシュルは馬を降りて、その腿を切った(=腿に枷をした)。そして(態勢を整えてから)剣を抜き払い、ライオン目がけて突進した。それに切り込んで戦った末、その胴体を横一文字に切り裂いて殺した。その後おのれのシャツの上に殺したライオンの血で、小父の娘ファーティマ宛てに次のように書き込んだ；

おおファーティマ見届けて欲しきもの ハプト<sup>13)</sup>の窪地で

a-Fāṭima law shahidti bi-baṭni khabtīn

生じしこと かの地の獅子<sup>14)</sup> 汝が兄妹<sup>きょうだい</sup>ビシュルと遭遇せしこと

wa-qad lāqa l-hizabru akhā-ki Bishrā

不屈<sup>うゝい</sup>者<sup>ス</sup><sup>15)</sup>を訪れし不屈な者を汝目にしたことであろう

idhan la-ra‘ayti laythan zāra laythan

より頑強に勝るもの 頑強<sup>と</sup>のもの<sup>ザフル</sup><sup>16)</sup>と遭遇せしを

hizabran aghlaban lāqā hizabrā

彼誇らしく歩み来たり<sup>17)</sup> されば我が乗馬<sup>ひる</sup>怯<sup>あつ</sup>みて後退<sup>さき</sup>

tabahnasa thumma ahjama ‘an-hu muhrī

11) ダーズ Dādh; この固有名の由来を探ってみたが、語根から見いだせない。方名が流布したのか、単なる著者の意味のない命名か。

12) シュジャーウ Shujā‘; 形容名詞としては、ごく普通な「勇敢な(もの)、大胆な(もの)」に用いられる。しかし shujā‘ の語自体に「蛇、大蛇」の意味があり、これが固有名詞化したのであろう。我々人間の中にも腹には shujā‘ がおり、空腹になるとそれが動き出すと言う。この蛇はサファル safar と呼ばれる。わが国の「腹の虫」と似た民族概念である。

13) ハプト Khabt; 地名辞典では4か所記載されている。いずれもアラビア半島南西部にあるところから、フザーア族の領地と仮定される。

14) 獅子 hizabr; 「頑強なもの」。ライオンの名称は、アラブ世界では一説では500以上に上ると言われる。訳者は27ほどの名称と、綽名などの別称7を採り上げて、分析したことがある。拙稿「星と動物(2)「獣帯(黄道12宮)の蟹・獅子・乙女」(AREANA12号)「V-2 地界の獅子について」2-2名称・別称・綽名の節を参照。

15) 不屈な者 layth; ライオンの名称の一つ。上の注14の拙稿2-2(二)ライス laythを参照。

16) 頑強のもの hizabr; 上記注14参照。

17) 誇らしく歩み来たり tabahnasa; 「横柄に堂々とした足取りで歩く」こと。同義語に tabakhtara がある。優雅で高貴な者の誇らしげな歩き方。ライオンにも適用される。パフナス bahnas とは「太ってどっしりとしたライオン」。この語とライオンの名称バイハス bayhas とは意味も共通して入り、子音交換とみられる。注14の拙稿2-2(エ)バイハス bayhasを参照。

我獅子に音声発したり「汝、馬のために殺されに來たるや」  
 muḥādhāratan fa-qultu ‘uqirta muhrā  
 我しっかりと両の脚を大地の地表に据えたり  
 anilu qadamayya zahra l-arḍi innī  
 「大地こそ背にするに確かは汝以上なるぞ」  
 ra’aytu l-arḍa athbata min-ka zahra  
 かく我獅子に声掛けたり　されど彼われに牙を剥くのみ  
 wa-qultu la-hu wa-qad abdā niṣālan  
 鋭く研ぎ澄まされしを　形相すさまじき洪面作りて  
 muḥaddadatan wa-wajhan mukfahirā  
 油断誘ってか　片方の前脚地面に降ろしてあるが  
 yukafkifu ghīlatan iḥdā yaday-hi  
 他方の前脚我に向けて飛び掛からんばかりに伸ばしたり  
 wa-yabsuṭu li-l-wuthūbi ‘alayya ukhrā  
 その鉤爪の<sup>たくま</sup>逞しさと牙の鋭さを顕示しながら  
 yudillu bi-mukhlabin wa-bi-jiddi nābin  
 両目の燃える眼光はさながら<sup>おき</sup>燦かとも<sup>まが</sup>紛う  
 wa-bi-l-laḥazāti taḥsabu-hunna jamrā  
 かたや我　右手に構えしは切っ先鋭き劍  
 wa-fi yumnāya māḍiya l-ḥaddi abqā  
 刀傷未だあれど　振り下ろせば死の一撃の威力残り  
 bi-maḍribi-hi qirā‘u l-mawti uthrā  
 おお獅子よ汝聞き及ばぬか　我が劍の切れ味鋭きことを  
 a-lam yablughu-ka mā fa‘alat ḡubā-hu  
 カーズィマ<sup>18)</sup>にて早朝出会いしアムル<sup>19)</sup>を一撃に切捨てしものぞ  
 bi-kāzimatin ghadāta laqītu ‘amrā  
 我が<sup>きも</sup>心臓、汝が心臓同様何も恐れるところとて無し  
 wa-qalbī mithlu qalbi-ka laysa yakshā  
 攻撃されようが<sup>おどし</sup>脅迫に怯えること更になし  
 muṣāwalatan fa-kayfa yakhāfu dha‘rā  
 汝が欲しきは汝が子等<sup>20)</sup>への食糧ならん  
 wa-anta tarūmu li-l-ashbāli qūtan  
 我が求めるは小父の娘への<sup>マフル</sup>婚資なるぞ  
 wa-aṭlubu li-bnati l-a‘māmi mahrā  
 されば何<sup>な</sup>どて引き退りえよう　我が如きがおめおめと  
 fa-fi-ma tasūmu mithlī an yuwallī

18) カーズィマ Kāzima: バスラとバフラインとの間にある地名。バフラインは今のバハレーン島ではなく、対岸のアラビア半島のペルシャ湾に面する地域を広く言った。

19) アムル ‘Amr: 人名。わが国の太郎とか花子と同様、例示の典型例とされる。実話に基づくものではない。

20) 子等 ashbāl: 単数 shibl. 「動物の子供」の用語も、アラブ遊牧民的発想から家畜を主体に豊かに持ち、使い分けしている。このシブルは「ライオンの仔」を意味している。

何とて汝が両手の中で落命出来ようむざむざと<sup>21)</sup>  
wa-yaj‘ala fī yaday-ka n-nafsa qasrā  
忠告を受けよ おお獅子よ<sup>ライス</sup> 我の他に餌物探し給え  
naṣaḥtu-ka fa-ltamis yā laythu ghayrī  
我が肉は餌としてはこれほど苦きもの無きぞ  
ṭa‘āman inna lahmī kāna murrā  
されど敵 我が忠言受け容れる様子さらに無く  
fa-lammā ṣanna anna l-ghushsha nuṣḥī  
あい和することさらさら無し、我が言の空しきこと<sup>ひな</sup>  
wa-khālafa-nī ka-annī qultu hujrā  
対峙した二頭の獅子 牽制して左右に探り歩く  
mashā wa-mashaytu min asadayni rāman  
虎視眈々と 倒すに難敵と伺いながら  
marāman kāna idh ṭalabā-hu wa‘rā  
獅子目掛けて薙ぎ下ろした剣の切っ先  
hazaztu la-hu l-ḥusāma fa-khiltu innī  
暗闇を裂く曙光の一閃かと思えたり  
salaltu bi-hi lada z-ṣalmā‘i fajrā  
一刀両断 油断在りし獅子 その心中察すれば  
wa-judtu la-hu bi-jā’ishatin arat-hu  
我が言を嘘と見做した故に<sup>あなど</sup> その侮りに裏切られたりと  
bi-an kadhībat-hu mā mannat-hu ghadrā  
即死せる獅子に 右手よりインド製剣投げ出したり  
aṭlaqtu l-muhannada min yamīnī  
見るやその肋骨十本を切り裂きてあるを  
fa-qadda la-hu mina l-aḍlā‘i ‘ashrā  
絶命せる獅子<sup>まみ</sup>血塗れて大地にどーと倒れたり  
fa-kharra mujaddalan bi-damin ka-anna-nī  
我倒せしは何か巨大な建物なるかと紛うほどに  
hadamtu bi-hi binā’an mushmakhīrā  
獅子に言い聞かせしは 我にとりては難事でありしか  
wa-qultu la-hu ya‘izzu ‘alayya annī  
勇敢さと誇り高さ その対等者<sup>たお</sup>斃すことなど  
qataltu munāsibī jaladan wa-fakhrā  
汝望みしは汝以外では望まざりしもの  
wa-lākin rumta shay’an lam yarum-hu  
さればおお獅子よ それ故に我も<sup>たえ</sup>忍耐<sup>あた</sup>るに能わず  
siwā-ka fa-lam uṭīq yā laythu ṣabrā

21) この詩行、すべて主語は二人称で、「我がごとき(者)」が三人称で表されている。訳出では、ビシユルを主語として一人称で統一と集中性を図っている。

逃げ失せるよう我に教えるに努めたは汝ぞ

tuḥāwīlu an tu'allima-nī firāran

汝が父の生命にかけて 達成困難なこと求めしものよ

la-'amru abī-ka qad ḥāwalta nukrā

されば哀しむ勿れ 汝が対峙せしは手強すぎた者ぞ

fa-lā tajza' fa-qad lāqayta ḥurran

非難されるを<sup>がえん</sup>肯ぜぬ自由人 されば安眠されんことを

yuhādhīru an yu'āba fa-mutta ḥurrā

汝斃されたとして なに恥すべきことあらんや

fa-in taku qad qutilta fa-laysa 'āran

相手たるや血筋と武力二つながら備えし自由人なれば

fa-qad lāqayta dhā ṭarafayni ḥurrā

(ワーフィル wāfir 調 rā'iyya r 脚韻詩)

さてこのビシュルのライオン殺しの詩歌が小父の許にもたらされると、さすがの小父も娘との結婚を拒絶したことに悔いること頻りであった。そして甥の身の危険を心配した、(あの獐猛な)蛇シュジャーウが急に襲っては来まいかと気が気でならなかった。そこで小父自ら甥の後を追って出立することにした。小父がようやく追いついた先では、甥はシュジャーウと対決しており、蛇の狂猛さに巻き込まれんとして(=劣勢に立たされて)いた。しかしビシュルは小父のやって来る姿が目に見え、飛び込んで来ると、かつての蛮勇が再び体中に沸き立った。剣持つ手を蛇の口の中に思いきり突き入れたのである。そしてすぐに剣をあらん限り<sup>しこ</sup>扱いた。と同時に音声上げた；

ビシュル 彼栄光に向かう 目指す野望遙か遠大なれど

bishrun ila l-majdi ba'īdun hammu-hu

これなる荒れ地で戦うを目にしたは小父上に紛うこと無し

lammā ra'ā-hu bi-l-'arā'i 'ammu-hu

子失いたり<sup>22)</sup>！ 小父自身もまた彼の母もかく思えり

qad thakilat-hu nafsū-hu wa-ummu-hu

蛇、攻めに攻めるにその都度 小父の気を揉ませる

jāshat bi-hi jā'ishatun tahummu-hu

彼敢然と蛇<sup>23)</sup>に立ち向かう 気一つにして

qāma ilā bnin li-l-falaa ya'ummu-hu

突き差すその手、蛇の口の中に隠れる、袖口までも

fa-ghāba fī-hi yadu-hu wa-kummu-hu

彼の命わが命となり 我が毒彼の毒となり果てぬ

wa-nafsū-hu nafsī wa-sammī sammū-hu

(ラジャズ rajaz 調 mīmiyya m 脚韻詩)

22) 子失いたり thakilat-hu；原語サキラ thakila は母親が「子を失う」。「子を亡くした母親・女性」のことをサキール thakīl といい、＜女性＞を強調表現する場合、語尾に -ah を付したサキール thakīlah と言うが普通は前者である。赤子に限らず、戦争やガスワ(襲撃)などで息子を亡くしたような場合も言われる。このサキールは罵言にも用いられるが、＜可愛さ余って＞の場合などの言い回しにも用いられ、両義的であって、解釈には用心を要する。注 24 を参照。

23) 蛇 bnin li-l-falā；これまで「蛇」はすべてハッヤ hayya と女性表現されてきた。しかし韻文であるため、押韻の関係上 bnin li-l-falā なる連接語で表現されている。「蛇」の別名は ibn al-falā といい、「荒野の息子」の意味で、男性形になる。

こうしてビシュルは大蛇を斃した。これを目の当たりにして小父は声を掛けた、「わしはその意図をアッラーが褒め給わぬことで、お前を危険に晒せてしまった。さあ帰って来なさい、わが娘との結婚を認めよう」。

こうして故郷に戻ったビシュルは喜悦満面で、口元にさえも誇りが満ち満ちていた。そうしたある日のことであった、まだ髭も生えていない若者が(部族のテントの)はるか前方に現れた。馬に乗り、武器に身を包んだその様は半月のようであった。そこでビシュルは小父に話しかけた、「小父上、何か物々しい音が聞こえますが?」。そして(テントの外に)出て行ってみると如何だろう、身の丈が槍ほどもある(長身の)若者ではないか! 若者が声を掛けてきた、「おおビシュル、汝が母が汝を失いますよう!」<sup>24)</sup> そなたは蛆虫と虫けら<sup>25)</sup>を殺したぐらいで、両顎を自慢で満たしているそうですね。今は身の危険の心配も無い、小父に守られているのだから」。ビシュルは尋ねた、「そなたは一体誰なのだ、汝を生んだ母などくたばってしまえ!」。若者が(怒って)答えるに、「(そなたにとって)今日は黒い日<sup>26)</sup>に、そして赤い死<sup>27)</sup>になることであろう」。ビシュルは言い返した、「お前を生んだ母親など亡くなってしまうえ!」。すると(さらに憤慨した)若者は、「おおビシュルよ、そなたを生んだ母親こそ!」とやり返した。こうして二人のどちらもが武器をとっての相手との遣り合いが繰り返されることになった<sup>28)</sup>。

ところが(丁々発止と受けに回させられた)ビシュルはどうしてもこの相手には敵わなかった。彼の腎臓の辺りに突きを入れられたのは20回に及ぼう。若者は突きを入れた槍が肌に触れた瞬間、相手を生かしておくために、その穂先を脇に向け、体に傷つかないように図っていたのだ。こうして(相手に己の実力を見せつけておいてから)再び口を開いた、「おおビシュルよ、思い知ったか。やろうと思えばそなたを槍の穂先の餌食にしたって構わないのだが?」。それから槍を置いて、剣を引き抜いた。(真剣勝負に入ったが)このやり合いも若者の方が20打をも食らわせたものである、が何れも峰打ちにした。一方のビシュルの方は一撃も与えることが出来なかった。若者は再び声を掛けた、「おおビシュルよ、そなたの小父に負けを認めてもらったらどうか、どこなりと身の安全を求めて(この安住の場を)去って行ったらたら宜しかろう」。ビシュルは音を上げた、「そうすると! けれど一つだけお願いだ、そなたが誰なのか私に教えてくれまいか?」。すると若者がこう言うのだった、「私か、そなたの息子だよ」と。ビシュルは驚いて叫んだ、「スプハーナッラー(有り難きことかな)! (そなたのような立派な息子を生み育てるような)貴婦人と交わったことが無いように思うが。このような立派な子胤は一体どこからというのだ?!」。若者は応えた、「憶えておいでか、私はそなたに小父の娘を指示したあの女性の息子ですぞ」。(その答えに納得した)ビシュルは詠嘆した;

24) 汝が母が汝を失いますよう! *thakilat-ka ummu-ka*: 相手を侮辱する罵詈雑言の際の一つの言い回し。以下の「汝が母などくたばって(亡くなって)しまえ!」も同じ。相手の身内、女性、母親を貶すことで、相手のイルド(尊厳)を傷つけることになる。41 話注2、42 話注19なども参照。わが国の「おまえの母さん出陣!」も同様で「お前の父さん…」にはならない。しかしここでは単なる罵言ではなく、事実を踏まえての若者の、ビシュルの息子の言葉であることが分かる。若者はその事実を踏まえての願望と罵言を交えて言っているのに対して、それを知らないビシュルは無意識の定型通りの罵言をはいている。

25) 蛆虫と虫けら *dūda wa-bahīma*: 蛆虫が蛇 *hayya* を、虫けらがライオン *asad* を、矮小化して誇張の逆の蔑み効果を狙った換言の言い回し。

26) 黒い日 *al-yawm al-aswad*: 「黒い日」とは「暗黒になる日、不吉な日、縁起の悪い日、凶日」のこと。

27) 赤い死 *al-mawt al-aḥmar*: 「赤い死」とは血=赤であるから、家の中での、畳の上で死ぬのではなく、戦って、切り殺されての死、流血が元で死ぬ、流血死の意味。

28) 今までどの段落にも文体でのサジュウ(脚韻技法)の配慮はなかった。この段になって2例見られる。下線順に: *ṣayd / qayd*, (*salahāt-ka / salahāt-ka*)と指摘できようが、後者の例は同語であって、サジュウとは見做されない。

むべなるかな かの母親にしてこの子ありか<sup>29)</sup>

tilka l-‘aṣā min hādhihi l-‘uṣayyah

蛇が蛇以外を生もうはずがないも道理かな

hal talid l-ḥayyatu illa l-ḥayyah

(ラジャズ rajaz 調 yā’iyya y 脚韻詩)

こうしてビシュルは誓ったのであった、今後は決して高貴な馬には乗らないことを、貴婦人とは結婚しないことを。そしてこの己の息子を小父の娘と妻合わせたのである<sup>30)</sup>。

## 51 話 ビシュル伝マカーマ 完

### 第 51 話 訳者解説

最後のマカーマである本話は、細部をもう少し綿密にする必要があろうが、物語の展開に関してはなかなか読み応えがある作品に仕上がっている。本舞台は難題を克服するために出かけ、獅子と大蛇との格闘のマカーマ(=場)と設定してよからう。獅子を倒した後の、長大な詩行は、著者アル・ハマザーニーの『マカーマート』の中でも珍しく異常なほどである。しかも一番の見せ所、聞かせ所での詩であるだけに、評価できよう。それに留まらず、後舞台に対して、本舞台の圧巻がそこに嵌め込まれる詩行であり、聴衆をうならせるに不可欠なパートなのだ。大成者アル・ハリリーーのジャンルとして確立するマカーマ文学での主たる構成要素となっていることから考えあわせると、この先達アル・ハマザーニーの本マカーマそのものが、大成者アル・ハリリーーのマカーマ文学ジャンル確立においてもその影響を深くしたものと思われる。しかしこれほど長い詩を着用しているシャツに書き得るものであろうか。ライオンの血をインク代わりとするのは分かるのであるが。

後舞台は小父のテントになる。ビシュルが小父の許に武術も励まずに安穩と得意満面に暮らしている。そこに若者が現れ、相手を侮辱して戦意を煽って試合になる。槍で 20 突き、次に剣で 20 振り、打ち込まれる。この若者にはどうしても勝てず、降参する。名乗られて自分の息子である、と聞かされ、母親のことを思い出し、また立派な青年となった我が息子に喜ぶビシュルであった。

後舞台のこの設定にはいくつかの疑問点が浮かび上がる。一点は誰をも恐れさせていた獅子と大蛇を斃した武勇のビシュルが、まだ青年になったばかりの者に太刀打ちも出来なかったという設定。もう一点は、ファートイマとの婿入りの条件で、難題に立ち向かって成功した直後なのに、そのファートイマのことを教えてくれた女性との我が子が、青年となって<現前>する設定である。青年と想定して、年齢は少なくとも 16 歳には成っていよう。しかも甲冑を身に着け、長身で半月のような青年と言うのであるから。現実離れをもう少し修正し、それなりの年の経過と、忘れられていた女性およびその子である青年のことの記述も多少は言及しておくべきであろう。

結婚には婚資マハルが必要であろうし、この場合は略奪婚に当たろうが、残された女性は孕まされた後、どう子を産みどう過ごしたのか、この武人としての成長ぶりを見れば、立派に育て上げた

29) かの母親にしてこの子ありか tilka l-‘aṣā min hādhihi l-‘uṣayyah: 直訳は「この杖はあの小杖から」。注釈者 M. ‘Abduh によれば、アサー(al-‘aṣā 杖)とはジャジーマ Jadhīma al-Abrash という人物の名馬の名前であり、この名馬の母馬がウサッヤ(‘uṣayyah 小杖)という名であった。こうしたところから、馬の親から子へと血筋をよく伝えるこのような言い回しが生まれた。アラブ馬の血統は、その血筋、能力、性格をよく伝えるものと理解されており、アラブから血筋を受け継いだサラブレッドもまた今日に至るまで証明されていることはご存知であろう。al-‘Askarī の俚諺集 II 40 も参照。

30) 注 28 に続く最後までの段落にサジュウの技法の配慮があったのは、この最終段落の 1 例に過ぎない。下線順に hiṣānan / ḥaṣānan である。

カーミラ (女性の鑑) とも受け取れる。

さて主人公のことであるが、定型としてのアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではなく、彼は全く顔を出さない。主人公はビシュルという仮想の人物としている。それだけに、ここで主人公像を定型の形に持ち込めなかったものか。いくらかの工夫を見せれば、可能だったと思えるが。さてそのビシュル像であるが、典型像を求めれば、プレイスラム期の英雄イムルウ・ル・カイスとアンタラとを合わせた形が考えられよう。前者に関しては、本話の序での血筋の良さとサアリーク、すなわちバガボンド生活は、キンダ族の王子イムルウ・ル・カイスのそれを彷彿とさせよう。求愛とその難題克服への冒険譚は黒人奴隷の子でありながら、族長の娘アブラを射止める黒騎士アンタラのそれを想起させる。難題「このわが娘を誰にも結婚させはしまい、但し彼女の許にマフラ種ナーカ (雌ラクダ) 一千頭を導いて来た者は別である。そのラクダもフザーア族のナーカでなければ承知しない」は、アンタラへのアブラとの結婚許可の条件と同じで、これを下敷きにしていると思われる。ましてラクダのマフラ種のことなど、ベルシャ人である著者がどのくらい知識として持っていたのかとなると…。

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは、中入り後の進行係としての顔出しがないところは気になるところである。詩の導入に関しては、序からして、韻文主体のマカーマと思わせるほどに詩が織り込まれており、アル・ハマザーニーの作としては出色の一篇であろう。対話も韻文でやって退け、特に本舞台の盛り上がりの部分では成功していようし、大団円となる帰結部に対しても一詩行だけではあるが挿入がなされている。

問題はサジュウである。著者の詩行の入れ込みと反比例するかのように、配慮が欠けている。この最終マカーマにみられるサジュウ文体への配慮は、注8、28、30に示した通り数えるほどにしか見られない。それらを検討して見て気が付くことがある。これらの数例も偶然で出来上がったものではないか、とも解し得るのだ。もしそれが意図してのものであれば、その時点で文体への配慮の手抜きは気が付くはずである。このサジュウの偶然性であるが、アラビア語はそういう意味でも、押韻技法は踏みやすい構造ともなっている。本話に関してはサジュウ文体へのこだわりは著者にはなかったと見做してよからう。

上記のような問題点を孕んでいる故か、アル・ハマザーニーのマカーマ作品として、確実視されている30話前後の序列の中に入っていない。詩が主体となり、散文ではサジュウを採っていない。しかも物語り主体で劇性を出しておりこれもマカーマというよりムラフ (mulah 奇譚) の一つに分けられている可能性がある。翻刻・注釈を行った M. ‘Abduh もかろうじて最終のマカーマ作品 (51話、本来ならば52話) として加えられているのは。本マカーマの異同においても、Fatih 版では第30話に、Sofya 版では第8話に配されているのに対して、Paris 版では収録されていない。

なお本話の脚注の最後に付け足しとして、注釈者 M. ‘Abduh はアブ・ル・ファドゥル・バディーウ・ツザマーン・アル・ハマザーニーの『マカーマート』に関して見いだされる関連資料で我々が集めようとした最後のものであるとして、脱稿した日付をイスラム暦1306 (西暦1888) 年ラマダーン月17日としている。イスラム暦1306年の始まりは、西暦1888年9月7日に相当しているの、西暦では1889年のことになる。

## 「終わり」に代えて

ここでは(1)の初めに「著者の紹介」で述べていなかったいくつかの点と、アル・ハマザーニーおよびアル・ハリリーーの両『マカーマート』について、おのおのの特徴と全体的比較をいくつか述べておきたい。マカーマ文学研究では、Monroe および Anttila の著作(第1分冊目、引用参考文献参照)に当たれば、大凡は知りえることになる。それらを参照しつつ、私見を述べておきたい。

### 1. 一篇ごとの訳、訳注および解説についての訳者の配慮

3分冊の形で、アル・ハマザーニー原作、ムハンマド・アブド M. ‘Abduh (1905 年没) 校訂編『マカーマート』全 51 篇を訳出した。1889 年にバイルートの Dār al-Mashriq 社から出版されたもので、訳業はその第 3 版、1973 年のものに基づいている。訳業の経過であるが、アル・ハリリーーの『マカーマート』の仮訳が済んだあと、その参考のためにと中途ではあったが、推し進めていた。仮訳で進めておいたものを、前者の出版後本格的に取り組んで、漸くここに 3 分冊の体裁ながら脱稿したものである。訳だけなら、それほど時間を要する作品ではない。分量からしても後者の三分の一ほどのものであるから。アル・ハマザーニーの『マカーマート』を訳出するにあたって、M. ‘Abduh の校訂本を元として、一篇一篇に脚注を付し、解説を加えた。訳出をするにも、M. ‘Abduh の校訂本に加えて、Prendergast の英訳本無くしては、訳出は不可能であったろう。M. ‘Abduh の校訂本にしても、注釈が少なくあまり参考にするところがなかった。Prendergast の英訳にしても抽象的な表現で済ます所が多く、ましては各篇に関しては訳のみで、訳者の注はほとんどなく、また解説は全くない。マカーマ文学の権威 Anttila [p. 101] もまた、Prendergast の英訳は不十分な訳であり、満足のゆくものではないと述べている。

こうした中で訳業を進めていったわけであるが、Prendergast 流に何の注解も施さず、解説もなしに済ます方法もあった。しかし訳だけでは異文化の人間にアラブ・イスラム文化の深層を理解させるのはほとんど不可能と思える。独特の言い回しや文脈、イスラムの理解、文化の諸相の理解には、地域研究者の仲介が無ければ不十分であり、さらには不可能と思われるところも多い。訳業を進めてゆく中で、曲解も覚悟で敢えておのれの解釈を加えて、文脈の通りを良くしたり、それなりの注解は付してみた。短絡すぎて解説も不要ないし不能とも思える一篇もあったが、一篇ごとに脚注を付し、さらに解説を加えた。さらに一篇ごとに篇題のあとに、副題を付した。副題を添えたのは、そのマカーマがどんな内容であるのかを肝にして要であるよう、分かり易く伝えたいがためである。というのもこれらの配慮は既に訳出を終えているアル・ハリリーーの訳書に倣って、同一体裁を整えたいためでもある。訳、注、解説、それに副題に意を傾けて整えた。この訳注と解説には時間と己の知見の出来るだけを懸けた。

もう少し詳しく述べておきたい。これから述べることと関連するが、アル・ハマザーニーが一体いくつのマカーマ作品を書いたか、その数についてはさまざまな説があるように、短篇に関してはマカーマ文学の範疇に入れてよいものか疑われるものも相当数ある。こうしたマカーマ作品の出来栄えに関しては、読者も一篇一篇の本訳を読み進めるうちに、この一篇がマカーマの資格あるやと訝る作品も幾つかも散見せられたことであろう。訳者もあまりにあっさりと片づけられた一篇には訳出するのみに止めてわざわざ解説を入れるまでも無かろう、と思って

解説を中断仕掛けたことも何回かある。その都度思い継がれたことは 訳者の良心として二つあった。一つは、内容と形式に関わることであるが、本文の内容は断片的であって如何ともし難いが、訳書とするからには一篇一篇の形式的統一を図っておくべきであろう、それ故に解説も入れねばならないと。二つには、既にアル・ハリリー原作の『マカーマート』は完訳を終えているので、この両『マカーマート』の形式・内容を視座に入れて、比較視点や材料があらうから、そうしたケースの開示の場とすべきであろう。そうした点で訳者の意見を述べ添えておくのも、両作品をよく知る者の務めではないか。それを解説の枠を借りられればその言及ができるであろう。そうすれば読者の方にも、マカーマ文学に限らずアラブ・イスラム文化の特徴を一層広く深く知識の共有が図られるのではないかと、思ったからである。このような、ある種の訳者・研究者魂の義務を感じたこともその理由となろう。従って要らぬ解説を入れたものだ、と思われる一篇の幾つかも出てはいよう。が、そうした異文化地域の文化や文学の情報に対しての、一步踏み込んだ認識を新たに、あるいは再度深めて頂きたいとの思いを込めたものとしての駄文とご理解いただき許されたい。

マカーマ文学の華であるサジュウ文体について、どう訳文に採りこむか、作者の意図や原文の技巧を知る人間にとっては常に悩まされている。サジュウ文体に関しては前号(2)の付説『マカーマートの文体サジュウについて』で「マカーマ文学」が採り入れられる過程までをあらまし述べておいた。そこには聖典『クルアーン』の文体も＜精霊の文体＞として限りなく近い位置に座を占めていた。やがて口頭の段階から書承の段階に発展して最早「精霊」の介在はなくなり、文人たちの高度な言語学・文学の開拓によって＜人間の文才＞が切磋琢磨できることになっていった。マカーマ文学がこのサジュウ文体を採ることによって、アラビア語散文学において、文体・修辞技法では欠かせない領域に高めた。

訳出においては、アル・ハリリーの方では最終的にサジュウの語の後に原語をローマナイズで入れ込んだ。サジュウを最も分らせる訳出法かと思われた。が、どうも和語文にローマナイズが入るのは馴染めないようだ。論文では普通のスタイルであるが、一般書ましては文学書となると話は別のようなのである。そこで本訳では和語文の中には入れ込まず、サジュウ語相当部分に下線を引いてそれを示し、段落を終えたところで脚注を付し、その段落部分のサジュウ語をローマナイズで一括して順序のまま示した。これの方が、内容が妨げられずに済むし、まとまりがあって押韻法まで分かる仕組みに仕上がることになる。ただ日本語と構文が異なるので、サジュウ相当語の順序が変わる場合、できるだけそうはせずもう一度訳し直して順序通りになるよう改訳に努めた。それでも改訳出来ない場合は、順序が入れ替わるころはその注内で、それはそれで示しておいた。

が、『マカーマート』はアラビア語の構造を反映して肝にして要、コンパクトである。ましてはアル・ハリリーの方ではいくつかの参照資料があり、解釈の方向性は定められていた。しかしアル・ハマザーニーの本作品の方は、資料が限られその翻訳作業は一層の苦労と手間暇を要したことを吐露しておかねばならない。と言うより異文化の己の訳者・研究者にとってみては、半生かけて取り組んだ馴染みの分野でさえ、こうした類の記述に一言も注することのできないほどに、アラブ・イスラム文明は、その数ある諸相の積み重ねであり、どの分野も固有の奥行きを蔵していると痛感された、と言う方が実感であろう。古代オリエント文明を継承しているアラブ・イスラム地域研究の一つの異文化性の際立つ特徴とも指摘できよう。

## 2. 作者アル・ハマザーニーについて

著者であるアル・ハマザーニーについての生涯については分冊(1)で述べておいた。その他に、既にアル・ハリリー『マカーマート』第1巻の解説 pp. 38~43 において『マカーマート』の創始者、アル・ハマザーニーについて、また彼のアル・ハリリーに与えた影響について」と題して記しておいた。ここでは後者と重複するが、それを敷衍する形で補っておきたい。

アル・ハマザーニーは努力の人ではなかった。知性溢れた天才肌の人であった。聡明で記憶力抜群、50行を越える長詩であっても一度耳にしたものならば、一字も違えず復唱できた、書物でも四・五葉はいとも易いものであった。さらに作文力もお手の物で、韻文から散文は勿論のこと、より困難な散文から韻文に改作するのも容易にやってのけた。詩作においても、与えられたテーマや、脚韻文字で編むこと、さらに16種に上る律格型にセットして作り上げることも難しいことではなかった。従ってプレイスラム時代から伝わる説教を語らせたなら、さまざまな修辞を織り交ぜて、長短はその折の都合に任せて自在であった。

文章化し書き写した「書簡」は時間の余裕があるだけ彼には楽であったろうが、即興的な「弁舌」や「説教」もまた何ら苦ではなかった。それどころか説教や語りは、その表現で凝ったものは書簡同様サジュウ(押韻散文)の文体・形式をとる慣習から、彼も意図的にサジュウでスタイル化した。それによりますます好評を博した。そしてその説教の内容に物語性を伴うものも盛り込んだ。こうなれば語りか説教か、書かれたものか、口頭かの壁も、彼の頭脳の中では越えていた。こうした物語性を生かして語りに徹したものが生まれてゆく。彼のマカーマ作品を作る直接的動機となったのは、彼より半世紀前、バグダードで一世を風靡していた詩人であり言語学者であったイブン・ドライド(Ibn Durayd, Abū Bakr Muḥammad 312/933没)の著作と評判であった。この種の内容と形式を備えた40篇の物語を作っていたとされる著作(本題 *Kitāb al-Arbaʿīn*)を目にして、それを読破して自分もそれくらいのこと、と対抗して作り上げたものだという。

こうして熟してきたサジュウを駆使して新たな散文の極致として誕生したのが『マカーマート』文学であった。10世紀末のことであった。物語類の一ジャンルといえようが、明らかにそれまでの通俗的なものと異なる。英雄譚、歴史もの、恋愛物語、奇譚類のような平易な散文ではない。言葉にも内容にも一筋も二筋も込み入らせたものを盛り込んで誕生した。主人公と語り手を配し、放浪しながらマカーマ(人の集う所)に出てはさまざまな詐術を弄して金品を得てその日を凌ぐ。偶然居合わせた語り手とその出来事を伝える、文体を散文サジュウで統一し、訴え所、最高潮に達した所は韻文詩で盛り上がるというスタイルで一話のマカーマが形作られ、それが集まって『マカーマート』作品となる。飽くまで語り手によって朗詠される、それが前提である。こうして主人公をアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ Abū al-Faṭḥ al-Iskandarī として、語り手をイーサー・イブン・ヒシャーム ʿĪsā ibn Hishām として、数々の悪事を重ねてゆく物語マカーマ集が生まれて出た。なお語り手の出自をアラブ南族イエメン系の雄族アズド族出としている個所が第45話に見られる(第45話注5及び訳者解説を参照)。彼のこうした技芸と才能は直接に接する人、聞き及ぶ人に舌を巻かせ、驚かせた。平易で陳腐な通俗ものに飽き足らなかった知識人・教養人に驚嘆と絶賛を持って迎え入れられた。創作者アル・ハマザーニーは、バディーウ・ツザマーン(Baḍīʿ al-Zamān)、即ち「時代の驚異」と称えられたが、『書簡集』と並んで、この文学領域の創作者であることが与かっという。彼がどれほどのマカーマを作ったかは定かではない。長く居場所を定めない彼の著作活動は、無類の旅好きが災いしてそのため著作物の散逸するものも多々あって、『マカーマート』も同じ憂き目を見た。彼と旅と作品『マカーマート』の重層関係については後述しよう。

### 3. アル・ハマザーニーの『マカーマート』の作品篇数について

アル・ハマザーニー原作の『マカーマート』を、ムハンマド・アブド M. ‘Abduh 校訂編全 51 篇を訳出したわけであるが、訳業をしていく中で困惑したのは、もっと文意を汲み正確を期すにも、また注を付すにも参照すべき注釈書もないことであった。Anttila [p. 124] によれば、近代に至るまで纏まった注釈書は存在しなかった、と述べている。ダブト (dabt 母音符号を文章に付すこと) をしたテキストさえ無かったらしい。ダブトの必要性は、聖典『クルアーン』が編まれた段階から必要とされたことから分かるように、ある意味では母音表記しないアラビア語の構造的欠陥である。もっともセム系 (アフロ・アジア諸) 語の共通するもので、その伝統を継承しているわけであるが。子音構成だけの文字の並びは確かに整然として審美観も伴うわけである。文字 = 子音であるために、母音は文字の上下に符号化して付さねばならず、見た目はごちゃごちゃしていて汚らしく見苦しい。が、反面初心者や初学徒にはおよそ音読や発音も覚束ない難物ということになる。ましてはマカーマの文体はコンパクトな 2 語・3 語構成文も多いのであるから。子音構成文に母音を付すと、同じ一行の範囲を広げねばならず、そのままの行間で入れ込んでいったら、見た目は煩雑で汚くさえ見える。教養あるアラブはこれをこれを好まず、母音を付すことをシャクル (shakl 枷) と言って煩わしいと見做していた、こうしたシャクルの付された文章をムウジャマ (mu‘jama 非アラブの、外国人用のもの) と呼んで、伝統的には避けて通したものであった。しかし伝統的ではあっても、聖典同様正確を期す場合やテキストとされる場合は、ダブトとされるのもまた常識でもあった。近代に至ってはむしろ母音を付すムウジャマの方が主流にもなっている。

それ故に M. ‘Abduh は写本から校訂本を世に問うに当たっては、第一の関門であるダブトの作業から、次にタスヒーフ (語法上の誤りやスペルミスを校正すること) があって、困難を極めたことであろう。ダブトを付す作業、それだけでもおのれの知見・見識が問われる状況に晒されることになる。M. ‘Abduh の校訂本はバイルートで出版されたのであるが、序文で述べるところによれば、見慣れぬ言葉や言い回しについては、言辞学者や知識人たちに大分聞き回って確かめ、その上で注釈を加えているとのこと。とは言え、各頁下の欄外にある脚注も、多くを語ってくれていない。M. ‘Abduh 自らの序文や後書き (51 話の最終頁脚注 3 の後の付記) には写本なり、原典なり底本なりに関しては何も述べてはいない。後述するように 51 話に関しては、上記のような問題点を孕んでいる故か、アル・ハマザーニーのマカーマ作品として、確実視されている 30 話前後の序列の中に入っていない。翻刻・注釈を行った M. ‘Abduh もかろうじて最終のマカーマ作品 (51 話、本来ならば 52 話) として加えられているのは。本マカーマの異同においても、Fatih 版では第 30 話に、Sofya 版では第 8 話に配されているのに対して、Paris 版では収録されてはいない。なお 51 話の脚注の最後に付け足しとして、注釈者 M. ‘Abduh は「アブ・ル・ファドゥル・バディーウ・ツザマーン・アル・ハマザーニーの『マカーマート』に関して見いだされる関連資料で我々が集めようとした最後のものである」として、脱稿した日付をイスラム暦 1306 (西暦 1888) 年ラマダーン月 17 日としている。イスラム暦 1306 年の始まりは、西暦 1888 年 9 月 7 日に相当しているので、西暦では 1889 年のことになる。が、当時の資料収集および情報収集を考え合わせると、イスタンブール写本や英仏の国会図書館などは対象となるまい。エジプトやシリア、せいぜいその近隣の地域に限られたことであろう。そこで最も有力に浮かび上がってくるのは、恐らく一世代前のシリアの文人アル・ラーフィイー M. Maḥmūd al-Rāfi‘ī (1815 年没) の校訂本であつたろう。この文学者アル・ラーフィイーはアル・ハマザーニーの写本から校訂本を出したばかりではない。さらには彼自身マカーマを著作しており、シリア中西部の首邑ヒムス及びハマの両都市を主題とした「ヒムスとハマとのムファーハラ

(自慢合戦)のマカーマ *al-Maqāma fī al-mufākhara bayna Ḥimṣ wa Ḥamā* と題したものが知られる。M. ‘Abduh もこれ故に知見があったことと推定されるが、序文・後書きには明記はされていない。幸いこのラーフィイーの方にはダブトがある程度なされている。それを参考にできたとしたならば、校訂作業も多少は容易に進んだのではなかろうか。

篇数のことであるが、訳者が訳出するにあたって底本としたのは M. ‘Abduh 校訂本である。それに従うと 51 篇である。本来は 52 篇であり、1 篇を欠いている。これは序文にも述べてある。その欠けた 1 篇、それは第 26 話に入るべき *al-Maqāma al-Shāmiyya* 「シリアのマカーマ」と題するマカーマであった(第 26 話訳者解説参照)。本来 52 篇であったとしても、もう 1 篇余分である。これに関してはラーフィイーの底本が興味深い事実を明らかにしている。後者は『マカーマート』本体は 50 篇である。これも後述する「50」の決まりを守っている体裁である。そしてこの後に *maqāma* としてではなく、ムラフ *mulah* (興味譚)として 2 篇が付加されているのである。最後の 50 篇目は「マトウラバ(探究)のマカーマ 宝探しの話を持ちかけられて」として完了した後、行のスペースも空けずに、*Mulah Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī* として付録的に加えており、その内容は(1) *Qīṣṣa Bishr* (ビシュル物語)、(2) *Qīṣṣa al-A‘rābī* (アラブの中のアラブ＝遊牧民の物語)との物語類 2 篇が加えられている。篇名および内容からも推断できるように、これらを一篇にまとめて、校訂者 M. ‘Abduh は最後の第 52 篇としたのであろう。形式も同じ語り手イーサー・イブン・ヒシャームとしてマカーマ作品の体裁をとりながら。マカーマとムラフについては最後に述べる。

また M. ‘Abduh では外された 1 篇、第 26 話の *al-Maqāma al-Shāmiyya* 「シリアのマカーマ」に関してであるが、内容が不謹慎な性愛を描いている(この分野はムジュン *mujūn* 「恥知らず・おふざけ・破廉恥話」と呼ばれている)ために、編者 M. ‘Abduh はこの一篇を外してしまったことによる。内容が不謹慎と言うわけである。それが正断であったかどうか。

マカーマ文学の大成者であるアル・ハリリーにもいくつかのムジュン作品がオブラートに包まれながら存在している。直接的表現はしていないものの、ムジュンの分野のものが歴然と存在している。アル・ハリリーは恐らくアル・ハマザーニーのこの第 26 話を目にして、着想が膨らんだのであろう。突破口が師と仰ぐアル・ハマザーニーによって開かれているので、後輩の、このモラリストにしても、自らがその分野をマカーマ文学のテーマとするに、モチーフとするに余程の意を決するほどのことは無かつたろう。結構夫婦の性関係を法廷に持ち込んで、その性不全を夫婦が交互に述べ立てたり(第 40 話タブリーズのマカーマ 「隣」で済まそうとする夫婦生活が法廷に持ち込まれて)、あるいは性交渉を暗喩(タシュビーフ *tashbīh*)的にコホル壺と筆、針と糸などにえて作り上げたマカーマ(第 8 話マアッラのマカーマ コホル筆と針を喩えれば)などが存在する。後者はアル・ハマザーニー第 31 話「紡錘のマカーマ 喩えて妙の紡錘と櫛」から着想を得ていることは明らかであろう。他にはボタンとボタン穴などが知られている。が、このマカーマ本体にムジュンが入り込むこと自体、画期的なことであった。文人や教養人の座談の場に、裏の世界であった話題が公に本文の中に書き記されるようになったのであるから。さらにはその本文に基づき、注釈書ではこうした教養人の陰の分野がさまざまに説明、解説されたであろうし、またマカーマの創作のテーマとされたことであろう。オフリミットの世界が公に開示されることに寄与を果たしたことにもなったからである。こうした解説・注釈により、訳者もある程度はアル・ハリリーの作品の方では注に盛り込んだ *al-Sharīshī* の注釈から大分学んだものである。

アル・ハマザーニーの方でこの点を考慮すると、校訂者 M. ‘Abduh が第 26 話 *al-Maqāma al-Shāmiyya* 「シリアのマカーマ」を外した理由も分かる。というのは、著者アル・ハマザーニーは

その性格と作風からして、恐らく婉曲的表現を採らず、より直裁的に性描写しているのであろう、と察せられる。なにせ野獣との血なまぐさい戦いのみならず、殺人がごく当たり前のように作品のなかに描写記述されているのだから。第6話「獅子のマカーマ 獅子に殺され、盗賊に殺され、さらに二つの殺し屋に悩まされて」などでは、訳出する最中でもその生々しさに驚かされた。旅好きで盗賊や野獣と遭遇して直接体験も多いアル・ハマザーニーであってみればこそであろう。それに比べアル・ハリリーの方では人殺しや流血沙汰、格闘などの場面描写は、第47話「ハジャルのマカーマ 刺絡師が文無しの若者に施術しないと言い張って」で言い争って相手の上着を破るぐらいにしか、そうした記述描写が訳者の記憶には浮かばない。それ故、アル・ハマザーニーの方の訳出時には殺人場面があって驚いた経験があり、一方ではフィクションであるからこうした方が寄り「劇」的な効果を作品に生かせるな、とも思った感懷を持ったものである。編者 M. ‘Abduh は、近代アラブの覚醒者・革新思想家と知られる。しかしさすがの彼も、恐らく注釈をつける前の段階、校訂の段階で当時としては倫理的に問題ありと見做してしまって、マカーマ一篇として削除の止む無きに至ったのではないかと察する。

作品の順序からも 51 篇の中で、前半の方に主要作品が集中して位置づけられているのも納得がゆこう。D.S. Richards はアル・ハマザーニーの写本類を探して、比較検討を行っている (D.S. Richards, “The Maqāmāt of al-Hamadhānī,” *Journal of Arabic Literature*, XXII pp. 89-99)。彼が集めて検討した写本は 6 種であり、Richards によれば、パリの Bibliothèque Nationale 所蔵の写本はマカーマ作品 19 篇だけであり、イスタンブールの Aya Sofya 所蔵の写本にしても 33 編に留まる。すでに述べた British Library および Cambridge University 所蔵の写本はともに 50 篇であることにも付言しておこう。

#### 4. 『マカーマート』は 50 篇

「50 篇」ということについてはマカーマ文学の特色となっており、これもアル・ハリリーが創始したものである。50 篇を集めなければ『マカーマート』一書とはみなされない、すくなくともその完成品とは見做されない。マカーマ文学においては、そのマカーマ作品が 50 篇という数を目安に、一書が編まれる慣行が生まれた。これはアル・ハリリーがおのれの『マカーマート』を 50 と言う篇数にしたからである。そして彼以降の『マカーマート』の作者たちも 50 篇を編んで一冊の書物とすることに意を用いている。「50 を単位とする」、これはアル・ハリリーの創始になる新機軸の革新であった。

50 と言う数についてであるが、ある程度の多さ、「数の多い」と言うことは、単なる偶然な数篇から成る佳作だけでは済まされない、多くの作品が一定の品質・水準が維持していること、されねばならないことの能力の保証となるものだからである。ある程度の量、数の「多さ、広さ」は、アラブの通念では「40」が普通である。ハディースの基本テキストとされる al-Nawawī (1277 年没) の『40 の書』*Kitāb al-Arba‘īn* とか、『千一夜物語』の「アリ・ババと 40 人の盗賊」‘Alī Bābā wa Arba‘īn Ḥarāmī とかで我々もお馴染みである。シーア派でアルバイーン (Arba‘īn 40) という、第 3 代教祖 Ḥusayn が殉教したアーシューラーウ (イスラム暦ムハッラム月 10 日の殉教祭) に続く教祖を追悼する「40 日」との用語にもなっている。アラブ・イスラム世界のキリスト教徒の間ではアルバイーンという、復活祭前の齋戒をする「40 日間」、即ち「四旬節」と言うことになる。何か大きめの、長めの、多めのものを括る時の「40」は、わが国の「八百<sup>やっ</sup>」と通ずる概念である。わが国では足の多い代表とされるムカデは「百足<sup>むか</sup>」であるが、これは英語も同じで centipede < centi (百) + pede (足) である。これに対してアラブでは「40 (足)」<sup>アルバイーン</sup>、または「40 の父」Abū Arba‘īn 「40 の母」Umm Arba‘īn と言い表している。

面白いことに『マカーマート』の篇数に関しては、矢張り最初期は「40」が前提であったようだ。ア

ル・ハマザーニーにおいても、またアル・ハリリーにおいても「40 篇」の想定、その括りであったことが分かっている。アル・ハマザーニーについては、マカーマ文学の創始に関連したエピソードで言われていることであるが、彼の『マカーマート』の著作動機のところではこう言われている。彼のマカーマ作品を作る動機となったのは、イブン・ドライド Ibn Durayd (924 年没) という文人が 40 篇の物語 (Ḥadīth Arba‘īn) を作って人々に披露して、評価されていたのを見て、自分もそれくらいのこと、と対抗して作り上げたという (拙訳 平凡社版 I p. 39 を参照)。ここでは Ḥadīth (新伝承) と言う用語である。一方アル・ハリリーの方であるが、こちらはもっと明らかに分かっている。彼も『マカーマート』として 40 篇の一書を仕上げて完成と見た。以下のエピソードはそれを物語っている：「一説では、バスラで 40 篇まで完成させ一書とした。そして故郷バスラから、アル・ハリリーはこの作品を携えて首都バグダードに上った。そして著名な文人や教養人に見てもらったわけであるが、多くの人が彼の作と信ずるのを拒んだという。彼らの主張するには、この作品はアル・ハリリーのような無名な者が自ら作り出したものではなく、あるマグリブ〔西方アラブ〕出身の、典雅な文人がかつてバスラに住んでいて、彼の残した作品であり、アル・ハリリーはそれを書写したか、剽窃して作品化したに過ぎない、というのである。そこでこれに関わった大臣はアル・ハリリーをディーワーン (官庁) の公の場に呼び出し、彼を審問した上で、嫌疑を晴らすためにこれこれを主題にして一つのマカーマを創作してみよ、と命じた。アル・ハリリーは紙とインクを持って一室に籠もり、長い時間をかけて作品を編み出そうと努めた。しかしその決められた主題では発想が浮かばず、不幸な結果に終わり、バスラに引き上げて籠もってしまった。こうして失意のうちに過ごしていたが、意を振ってようやく十篇を仕上げて完成品とした。そしてそれをバグダードのディーワーン (官庁) に郵送した、前回の上京時の困惑と不能に陥った忌まわしい経験を申し添えて。そして 700 部を写本として自らの名を記して世に送り出した。(同上書 I p. 46 を参照)

この 50 篇のマカーマがアル・ハリリーの名声を高めた。従ってこうした結果が 40 プラス 10 の形で 50 篇となったわけである。こうして 50 篇の『マカーマート』の書として世に問うたのはアル・ハリリーが初めてであり、以下の『マカーマート』の作者たちも、この『マカーマート』の大成者に倣って、50 篇を編むことでマカーマの一冊を上梓したいと励んだ。同年代のあのザマフシャリー al-Zamakhsharī (1144 年没) も、タフシール (『クルアーン』注釈書) や俚諺集で著名であるが、アル・ハリリーの影響を受けて主として wa‘aziyya (忠告、訓戒) を内容とする『マカーマート』を編んでいるが、矢張り 50 篇に<sup>こだわ</sup>拘って仕上げている。最近 Monroe によって英訳されたアンダルシア・アラブのサラコスティー al-Saraqustī (1143 年没) の al-Maqāmāt al-Luzūmiyya も 50 篇で成り立っている。近代のマカーマジャンルの復活者ヤージジー N. al-Yāzījī (1871 年没) も「二つの海の交わる所」 Majma‘ al-Baḥrayn のタイトルの下に 50 篇のマカーマを編んでいる。近代になっても『マカーマート』の伝統は 50 篇を 1 書とする、1 書に纏めるという意識がそこに働いていることが窺える。

## 5. マカーマ作品の名称・表題について

各マカーマ作品には名称が付されている。そうでなければ一篇一篇の同定や共通理解が得られないであろう。残念なことに何番目の作かという数字を用いての、もっと分かり易い表示も原則しないのである。この数字表示も伝統的にアラブは嫌った風がある。聖典『クルアーン』114 章にしても近代になって数表示されるものも見られるようになって来ているが、伝統的には『クルアーン』に接して原文を知る者にとっては、「クライシュの章」とか「復活の章」とかと言ってそれで講義なり、議論や話題としているわけである。『クルアーン』にしてもその目次には章題の羅列があるだけで、

数順は表記されない(前者は第106章、後者は第75章に当たる)。それ故まだ習熟しないものは、その章題を見つけるべく聖典を開いて、114の章題名の羅列から探し出して、相当部分を開いて議論や話題に参加せねばならない。こうした数字で順や総数を示さない風は、実はマカーマの著作態度にも出ており、参照とする場合、目次なり索引に書き入れなければならない。著者の方も同じことをして50篇を数え上げ、一書の節目としていた、こうした書式がアラブの伝統であった。

訳者がテキストとして用いた『マカーマート』にしても、maqāma ～とあるだけで、目次にしても各篇の冒頭にしても篇題があるのみで数字で何番目かの配慮をしていていない。古典を資料とする者は誰もその不便さを味わっているはずである。自分で番号を打って行き、それに基づきその話の項を始めねばならない不便さがある。

この50篇にまつわるアル・ハマザーニーの『マカーマート』編集であるが、集めたは良いがマカーマ自体に題名が付されていないものもあって、マカーマ作品のそれぞれには、後世に作品名が付されたものがまた少なからずある。そのため同じ作品でも別のタイトル名になっている場合すらもあることになる。本訳でも各マカーマの解説の最後に、表題が異なる場合は「写本の異同」として書き添えておいた。しかし文学ジャンルを確立したアル・ハリリー作品が50篇として纏められ、前書きも後書きも添えられていること。マカーマの各作品には表題を付すこと、これは現代では数字順も付すのと同様当然視されるが、アラブ的著作伝統に従えば必ずしもそうではなかったことが窺えよう。但しアル・ハリリーの方は序文も結語も整っており、各マカーマの表題も明記されている。そしてこのアル・ハリリーのマカーマに関する著作は内容においても、形式においてもアル・ハマザーニーの作品を範としていること、後続するマカーマ作品も50篇を区切りとし、表題を付していること、などからアル・ハマザーニーの作品に関しても表題の欠如するマカーマはあるにせよ、マカーマが完成品であるならば表題を付していたであろうことは疑いのないところであろう。マカーマの一篇ずつの作品名に都市名、地名が多いことに関しては後述する。

## 6. マカーマ作品を通しての両著者の比較

傑作と言われる作品は、やはり説話・物語作品ならば質は量を伴うものであろう。両『マカーマート』との比較においては、残念ながらアル・ハマザーニーの方の作品の方には掌編のもの、というより語彙集を並べてマカーマの体裁を付けたようなものが多く、アル・ハリリーの作品の豊潤さと重厚さと比して、そのいくつかの著しい違いや落差に遭遇することになる。アル・ハマザーニーの全作品の中にも観るべき作品、彼のバディーウ(新機軸・新奇さ)を思わせる、その才能を躍如とさせているマカーマもあるにはある。しかし断片的なマカーマが多すぎるし、その短篇過ぎる故に重さ・膨らみと言う点では、内容・形式においても不備を指摘せざるを得ない作品が多い。アル・ハマザーニーの作品で、アル・ハリリーのそれと質や量で対抗できるのは、訳者の記憶によれば数えるぐらいしか無かろう。第6話「獅子のマカーマ：獅子に殺され、盗賊に殺され、さらに二つの殺し屋に悩まされて」、第22話「マディーラのマカーマ：うんざりした講釈、食わず終いの挙句の果ての不運」、第26話「訓戒のマカーマ 何たる俗世の執着、来世の忘却、智者への不遜」、第28話「イラクのマカーマ 謎あり訳あり技ありの16の詩芸」、第29話「ハムダーンのマカーマ アラブ馬讃歌 馬の観方54相」、第35話「イブリース(悪魔)のマカーマ 詩人に憑くジンとは、創作なのか剽窃なのか」、42話「サイマラのマカーマ 信頼した友人達に見捨てられて報復する」、第49話「ハムル(ブドウ酒)のマカーマ 朝は泥酔者に譴責したイマーム、夜は酒屋のナディーム(相伴役)」など、10指にも上らない。

これに準ずる作品として、ある程度の体裁と内容あるものを抜き出してもそう多くはない。第1

話「カリード(詩評)のマカーマ 詩・詩人を論ず」、第7話「ガイラーンのマカーマ 中傷された詩人の敵対者への苦悶」、第8話「アゼルバイジャンのマカーマ 困窮の旅人対句を駆使して神を賛美し布施求める」、第9話「ジュルジャー(ゴルガン)のマカーマ 接待が過ぎて逃げ出して」、第10話「イスファハンのマカーマ モスクの早朝礼拝に立ち寄ったばかりに」、第11話「アフワーズのマカーマ 棺持ち出され逸楽を止められる」、第12話「バグダードのマカーマ 奢りに奢ってドロンを決める」、第13話「バスラのマカーマ 公園の閑談の場に窮状を訴えられて」、第14話「ファザーラのマカーマ 砂漠で武人と対峙 されど」、第15話「ジャーヒズのマカーマ 作家論を戦って」、第16話「マクフーフィヤ(盲人)のマカーマ 盲人に成り済まして広場で訴える」、第17話「ブハーラのマカーマ 賢い子を出汁にして」、第18話「カズウィーンのマカーマ 隠れムスリム、身一つで逃れて越境」、第19話「サーサーンのマカーマ 物乞い集団に乞われて」、第21話の「モスルのマカーマ 死人を生き返らせると、洪水の流路を変えるからと嘯<sup>うそぶ</sup>いて」、第27話「アル・アスワドのマカーマ 遊牧民の豪族キナン族の名士のテントに逃れて」、第30話「ルサーファのマカーマ 73にわたる詐欺・物盗りの手口」、第33話「フルワーンのマカーマ アラブ版浮世風呂・浮き世床 さんざんな被害」、第34話「ナヒーダ(フレッシュバター)のマカーマ 上等なバターとパン、焼き肉で持て成しを受けると思いきや」、第37話「ナージム(星占い師)のマカーマ 頼るべき方に頼れば」、第44話「詩のマカーマ 55の謎詩行、5つのみ解き明かされて」、第50話「マトゥラバ(探究)のマカーマ 宝探しの話を持ちかけられて」、第51話「ビシュル伝のマカーマ 野盗、獅子と大蛇を斃し婿入りを果たすが」、など。これらを合わせても、およそ30数篇だけである。列挙しても分かることであるが、ある程度の質と内容を伴ったものは矢張り順序からしても前半に集中している。それらこそマカーマ作品としておよその批評に耐えたものであったろう。これらだけのマカーマ作品群で『マカーマート』が構成され固められていたならば、アル・ハマザーニーの「マカーマ文学」の開拓者としての評価は上がっていたであろうし、後世への影響力のみか、写本も作られたであろうし、注釈も多々編まれたであろうに。分量は少なしいえども、随所に見せる才気煥発さ、バディーウ(新奇さ)は大いにその道に通ずる学者や文人たちを唸らせ、これについて筆を起こしたはずである。

両『マカーマート』の比較に関しては、全体的なことを述べれば、アル・ハリリー<sup>1</sup>の完成度の高さと、創始者であるアル・ハマザーニーの試作の段階に留まることの追認されたことであろう。アル・ハマザーニーの『マカーマート』大半が試作であったとしても、十余の珠玉のマカーマ作品は、後続の者アル・ハリリーに大いに学ばれ鏡としたことは疑いない。またそれらをベースにさらにそれらを超えるレベルでの作品を完成させる意欲を注ぎ込んだことであろう。さらにたとえ試作品ないしムラフ(興趣譚)としてマカーマに組み込まれた他の作品群であっても、アル・ハリリーは、先人のその文体や内容を周到に研究して、その多くをモチーフやテーマとして生かしていた。そのことは、アル・ハマザーニーのマカーマ作品の訳者解説の枠を活かして、個々に指摘して述べておいたことである。それ故アル・ハリリーの完成された『マカーマート』は、先人であるアル・ハマザーニーの開拓的作品の存在が無ければ、それを礎としていなければ、著作されたかどうかとも訝れ、マカーマのジャンル自体が存在したのか危ぶまれることになる。そうなればアル・ハリリーも単に言語学者・文法学者として、その分野の名ある一人として終わっていた可能性すらある。マカーマジャンルの開拓者アル・ハマザーニーの存在があり、この先人のへの作品への感動があったからこそ、後輩アル・ハリリーはこの分野の著作動機に誘われたのであり、文体と内容形式を整えて、この分野を確立できたわけである。その溢れる言語能力といささか劣る機智の文才を、先輩アル・ハマザーニーの作品から様々なヒントを得ながら、アル・ハリリーは旅に出るのでも無く引きこ

もってひたすら努力して磨き上げて大成したわけである。前書きにも己を「足悪の馬」と、そして先人アル・ハマザーニーに対しては文才と異能ぶりを「強健な馬」と喩えて敬意を表して。こうして単にマカーマの分野に留まることなく、文学作品、著作、書体など、後世の見本となり学ばれ研究され、『クルアーン』に次いで学ばれ教習される教材となった、と言われているのも頷かれよう。

『マカーマート』文学においては、主人公像が世故に長け異常な知識経験を持つ初老の、流浪の旅人として設定されている。アル・ハマザーニーの方ではアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ、アル・ハリリーの方ではサルージュ出のアブー・ザイドとされる。しかし主人公像としてこう確定されるのは、アル・ハリリーによってであり、それは全篇によって貫かれている。一方アル・ハマザーニーの作品の中では、主人公アブ・ル・ファトフは各作品に必ずしも設定されておらず、その名すら登場しない。さらに、まだ主人公像の年齢は確定されたものとなっていない。それどころか状況次第であり、つまり主人公像の設定を前提としたかすら疑わしいところすらある。第7、8、12、33、34、35、38、42、43、45、48話の11篇にはアブ・ル・ファトフは不在である。また年齢においてもアル・ハリリーの方は老人に、いわば長老として一貫して登場する。たとえ若者として登場しても、それは変装した姿であることがアト舞台で暴露されたりする。一方アル・ハマザーニーの方は、例えばアブ・ル・ファトフとして登場しても、全くの若者であったりするのは、第1、3、14、25、28、36、40、44、46、47、50話の11篇に上る。他にも中年や熟年と見られるものも多く、完全に老人と見せているのは、第4、17、26、33、49話の5篇に過ぎない。

## 7. 改めて『マカーマート』とは、その再考

アル・ハマザーニーは、マカーマート *maqāmāt* とする文学ジャンルについての認識はあったようだ。というのも、これについてはアル・ハマザーニーの生涯の中で触れたフワーリズミーとのマジュリス（公開論争）で明らかなのだから。論敵フワーリズミーが提示された文学領域のどれを選んで論争するかの記述の中で、その中にはジャンルとしてマカーマートも含まれていた。但しそれが明確な分野であったかは定かではない。というのもマカーマートという領域が、ムバーダハート *mubādhāt*（即興的作品 *muqtirāh* と同義）やムナーザラート *munāzarāt*（論争、主義主張）と共に挙げられているからである。フワーリズミーはそこで即興詩ムバーダハートを選んで、論争を挑んだことが知られている。ギリシャ語の *Mime* のような一種「娯楽の対話」、「閑談」と言うような意味であったらしい。さらにはアル・ハマザーニー自身の己の著作『マカーマート』の中で、「マカーマート」の語の用例が見られるので、示しておこう：

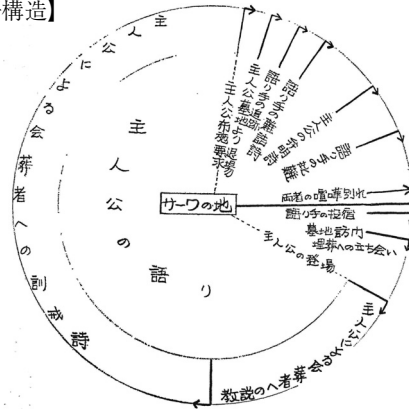
次に㉔ 分限者の寄り合いに集る連中、*man ya'ti l-maqāmāti* [直訳は「マカーマートにやって来る連中」]。ここでのマカーマ *maqāma* の意味は単なる人が集うところではなく、一種メンバー制になっており、「富裕者、地位や名誉ある者、名士、上流社会に属する限られたものの集会所やサロン」であり、そうした寄り合いに出かけ、立派な服装と高雅な振る舞いで閑談を交える。そうした間にも暇を見つけて物品を掠め取る。〕 第30話 ルサーファのマカーマ 拙訳(2) 397頁。〔 〕内は訳者の解説。

この30話は、いわば詐欺・窃盗・コソ泥・誤魔化しの手口を73披露しているマカーマであるが、その28番目に挙げられている。

マカーマートは文学ジャンルとしてどのような特徴があるのか。マカーマートの構成要素においては、創始者アル・ハマザーニーによっては個々の一篇づつバラバラで明確な形式像が結べない。が、大成者アル・ハリリーによっては大凡が形式化されて、それ以降のマカーマ文学のジャンル作品としての構成要素となっている。それをここで纏めておこう。図1～3は筆者が30年以上前に翻訳

を手がけ、その構造を分析し、図示したものであるので、それを参考にして頂きたい。34年後の今でも大きな修正を加える点はないと思っている。ここにアル・ハーリーの第11話～第13話までを話の流れ・内容・文体を円環構造で示して再現しておく。単円よりも双円で描いた方が、本舞台とアト舞台の「場」の転換が明別できており、より適していると思われる。が、文字挿入が見づらく煩雑になる難がある。

【図 1：第 11 話の円環的物語構造】

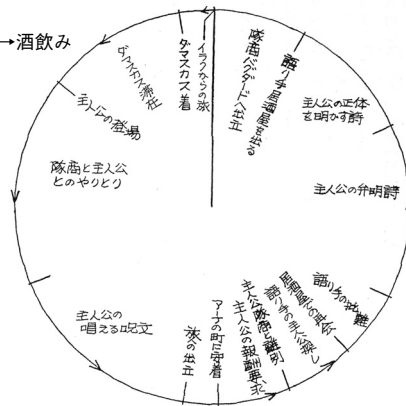


出典：『月刊シルクロード』第6巻第3号(1980年4月)25頁

【図 2: 第 12 話の円環的物語り構造】

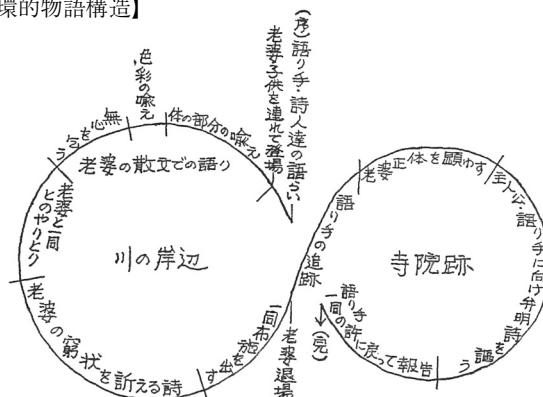
(トリック)

身成り（修行僧風）呪文 敬虔さ→酒飲み



出典：『月刊シルクロード』第6巻第6号（1980年7月）30頁

【図 3：第 13 話の円環的物語構造】



出典：『月刊シルクロード』第6巻第7号（1980年8・9月）69頁

マカーマの文学ジャンルとしての特徴であるが、以下に簡条書きにして、それから解説を加えよう。マカーマ文学ジャンル作品としての構成要素として、1 形式、2 内容と分けて、それをここで纏めておこう。

## 1 形式

表題 マカーマ一篇づつに表題有り 多くは地名

登場人物

主人公 定型主人公 漂泊の旅人・老人、弁舌巧みで狡猾

主人公 マカーマ(舞台)の主役で固有名あり、地名のニスバ(～出身の)が付される。

状況に応じて 説教者、詩人、旅人、零落者

食客・<sup>たか</sup>集り屋、貧乏人・乞食・遊行・門付け

<sup>かた</sup>騙りの 失敗者・懲り懲りを喰らう者

語り手 定型の語り手

主人公の知己 進行役 固有名有り

主人公に愛憎を持ちながらもその才覚には一目置いている

時に傍観者 時にカモ 時に相棒

独創性・独自の知的領域

場の設定 舞台回し 幕・場あり

多くは主舞台とアト舞台よりなる 劇中劇あり

文体

語り 散文でサジュウ体(押韻散文)

詩 主舞台の盛り上げ、アト舞台での正体暴露および申し開き・反語

修辞 散文・韻文共に技巧凝らしたもの。語りの散文と挿入される詩、いずれにも見られる

独創性 マカーマ一篇ずつ異なった趣向

## 2 内容

以下の分類はあくまでも要素を強調したものである。従っていくつにも跨る作品が多い。

- 1) 物語り性あり：アル・ハマザーニーの作品には物語性を欠くものあり。
- 2) 主として旅の途中または旅先での出来事が内容となる。
- 3) ピカレスク風、物盗り、強盗、出し抜き、暴力・強引さを伴うもの
- 4) 滑稽譚 喜劇 ユーモアもの
- 5) 乞食・物乞いもの、遊芸、大道芸もの
- 6) サロンもの、知識・教養もの、珍話・奇話披露もの、話芸上手さ
- 7) 技芸・詩芸・芸争いもの、言辞・修辞技法を争う
- 8) 裁判もの 法廷裁き、太守公邸・族長テント裁き
- 9) 称讃・中傷もの ある人物を想定して称讃・中傷する内容
- 10) 説教・忠告・訓戒もの 遺訓話も含まれる。
- 11) その他

一話ごとに異なる内容・テーマ・プロット、場の設定の斬新さが求められる。

語り手に対して、複数の聴衆の対応がある。相手が一人・一対一の場合もある

口頭芸の多様な展開：弁論術 口頭伝承芸 詩芸 連歌 謎掛け

聴衆への喚起：真摯な訴え、騙しの訴え

稼ぎの有無 騙しの手段・手口 これに関してはアル・ハマザーニーの方は「稼ぎ」まで記されているものは少ない。

語り以外の様々な騙しの手練手管：身なり 変装 相棒 奇策 動物使い

マカーマ文学には、その内容に支配・上層階層、大衆・庶民階層、職業集団、アウトカースト的集団などあらゆる社会層の実生活や風俗習慣、考え方や態度や素振り、信仰に関連する教義や儀礼、さらには旅の関連事、都市・村・砂漠、騎乗するラクダや馬など、アラブならではの古き良き時代の民族・民俗学的資料が集積されているのを読み取ることが出来る。アル・ハマザーニーの作品においては、こうした分野においても、数篇の作品が、アル・ハリリーのものと同肩を並べるくらいで、多くはあっさり済まされている。むしろパトロンを頼ってその保護を受けて、旅以外には悠々自適な生活を送っていたアル・ハマザーニーに対して、貧民やアウトカーストの人々を描いたアル・ハリリーの作品には資料的価値の高い秀作がある。特にサーサーンの特殊社会を描いたものはアル・ハリリーの最も特色を出した作品の一つと言えよう。外に出たがらず文献の中に埋没する傾向にあったアル・ハリリーでも、彼らのことを知るために身をもって接しそれを作品の中に生かすために、恐らくバスラやバグダードの場末や郊外にある一面に足を運んでの調査の結果であろう。この種の類でアル・ハマザーニーの作品を探すならば、せいぜい第20話で「猿回し」を、第30話で「物盗り」、第39話でクルド人を扱っている。いずれもが名称が並べ立てられているだけで、それ以外の実態を知る手がかり情報に堪えては落胆するほどに何も知らせてくれはしない。

ここで両『マカーマート』を訳し終えた訳者のマカーマ文学についての幾つかの点について述べておきたい。

先ず訳者なりにマカーマを定義し直してみよう。既にアル・ハリリーの拙訳『マカーマート』の著者紹介の2-1『マカーマート』とは、の説明のところで述べてはいる。そこでは『マカーマート』maqāmātとは、その原義は「立つ所」マカーマmaqāmaの複数形である。英語ではassembly(集い、集会)などと訳されている。抽象的な題名である。訳者の理解する所では『マカーマート』の語根qāmaとは、「立つ」を基本義として、「人の前に立つ」、即ち「何らかの行動を起こす」意味で、「決起する」が最も近い訳となろう。坐っている(jalasa, qa'ada)ことは「何も行動しないこと」、「座して待つ」ことと、この意味でも対照的である。したがってマカーマの一篇一篇は、ある意図をもって、主としてどんなにかして騙しのテクニックを用いて、相手から金品をせしめるか、それを予め決めておいた意図をもって人または人々の前に立つ、それを行動に移す」ことの意味と採る……、と概要述べておいた。(拙訳、平凡社版I pp. 33~34を参照)

ここで、もう少し広い意味で『マカーマート』の定義を考えてみたい。マカーマートmaqāmātと言う用語は、マカーマ文学の領域および作品として位置付けて来た。即ちアラブ文学の一ジャンルとして、またその作品として。しかしmaqāmātの用語使用はひとり文学のジャンルだけではない。他の分野でも用いられ、音楽用語(旋法)やタサウフ(イスラム神秘主義)用語(修行階梯)としても使用せられている。そしてこれらの分野での単数形はマカームmaqāmとされている。maqāmaとmaqāmの違いは、形態的なことではあるが、前者の方は男性形、抽象的で集合的であり、後者の方が女性形、具象的で個化的な用法と言うことになる。上の状況を踏まえて単数マカーム、マカーマ、そしてその共通する複数形マカーマートとは、「ある動き・人為的現象の立ち上がりの場、

新たな局面・事態の場」というのが最も中和した定義となろう。

そして両『マカーマート』の訳業を終えて、実感するところ文学ジャンルとしての「マカーマ」とは、もっと厳密に言えば主人公が何らかの新たな切り口、新奇な行動(口頭技芸の場合が多い)が披露されるその「舞台」と定義して良いのでは、と思っている。上で例示した如く、多くは本舞台とアト舞台とからなる二場のものであり、主人公(=主演)の見せ場を表の舞台・本舞台とし、その後の語り手との再会、主人公の実態や正体暴露を裏の舞台・アト舞台とする。語り手の役割は物語の引き回し役であり、舞台が開演する時、名乗り・前口上を述べる:「イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて次のように話した」と始め、語り続ける。そして舞台の中入り後や状況が変わる段では中口上を述べる:「イーサー・イブン・ヒシャームは語り続けた」と、改めて語り手を名乗って、顔出しを見せ口上を述べる。こうした舞台回し役を務めている。語り手が名乗るのは多くの場合、この本舞台が始まる前と中入り後のアト舞台前の二か所である。これはアル・ハマザーニーの方では、試作のままに留まっているが、アル・ハリリーの方ではほぼ定式化されている。

そしてその舞台の多くが「旅先」であり、「旅の途次」の物語である。この旅との関係については後に述べよう。舞台としては多くの場合モスク、広場、辻、集会所、サロン、宴会場、学校、公衆浴場、変わった所では墓地、刺烙師などの人の集う所、溜まり場であるが、相手が一人である場合があり、地方長官、裁判官、分限者など、それだけでしこたま稼げる場所ではある。従って内容から合わせて推すと「施しを求めて」、より原義に近い「人前に立って」が妥当するわけである。アル・ハマザーニーの場合、51篇すべてが「施し」を求めるわけではないし、ましては詐術で稼ぎをしているのは僅か数篇のマカーマではないかと記憶する。これに対して、アル・ハリリーの方は50話の全篇にわたってほぼ、詐術と稼ぎとが織り込まれている点、上のこうした訳語が妥当するものと思われる。

アル・ハマザーニーがどれほどのマカーマを作ったかは定かではない。長く居場所を定めない彼の著作活動は、無類の旅好きが災いしてそのため著作物の散逸するものも多々あって、『マカーマート』も同じ憂き目を見た。マカーマは100篇以上作られていた、と言う説もあながち否定されてもいない。否400篇以上を最初に作り上げていたのだ、と言う説すらあるのだ。Yāqūt[I 99]によれば、アル・ハマザーニーは *maqāmāt al-kudya* (乞食・物乞いのマカーマ) だけで400篇を編んでいる、と述べている。Anttila [p. 124] もまた14世紀シリアの文人 al-Ṣafadī (1363年没)の主著 *al-Wāfi* の中の記述として同様に述べている。

ただそうしたアル・ハマザーニーのマカーマ作品が夥しい数に上るとの説が一概に否定できないのは、本訳書でも明らかになったように、1篇のボリューム、長短が極端であって、マカーマだけの本文では紙の一葉にも満たない短い作品も相当数見かけられる事実から推論できる。長篇であってもアル・ハリリーの一編に伍すくらいのものである。訳者の訳注と解説が無ければ、本誌の体裁では一紙葉・一頁で終わってしまうものも多い。紙数のボリュームが測り兼ねるし、マカーマ文学の形式・内容・語りの統一も厳格にされているには程遠い。文学ジャンル『マカーマート』の創作と言う点で、内容・形式共に出来・不出来の差が激しいという事実は51篇の本作品を読んだ後では明らかであろう。また体裁のみならず、アラビア語の洗練度と言う点でも、第8話のような出来栄の作品もあるが、その領域と分量において、さらにはより高度の修辞技法、そうした点でもアル・ハリリーの念のいった纏まりある作品には遠く及ばない。というよりも先人で開拓者のアル・ハマザーニーのマカーマ作品の断片群を精読して、それらの中から取捨選択して学ぶべき作品

から形式・内容の点を踏まえて、マカーマ文学を築いたというのがアル・ハリリーへの評価であると観たい。恐らくアル・ハリリーの座右の書として、彼なりに集めたアル・ハマザーニーの書簡集とマカーマ作品群が積み重なっていたことであろう。またアル・ハリリーの『マカーマート』が世に出た後の、それ以降に続く著者への評価と夥しい注釈書の類、それを模範化してマカーマに手を染める才覚ある文人は後を絶たず近代にまで続くことになる。アル・ハマザーニー作品への校訂や注釈書の欠如とは、この点著しい対照を示しており、こうした背景を読み解かねば理解できるものではあるまい。アル・ハマザーニーがアル・ハリリーに与えた影響については、既にアル・ハリリーの『マカーマート』第1巻の解説 pp. 38～43 に記しておいたので参照されたい。

## 8. 旅とマカーマ文学

マカーマ一篇ずつの表題についてであるが、別の面が浮かび上がって来る。その命名に大に関わりを見せているのが旅との関係である。マカーマに付される表題には多くは地名が選ばれている。マカーマの多くの作品はその舞台が「旅先」であり、「旅の途次」の物語である。旅の途中も、旅先と大きく含めると、物語の展開が「旅先の出来事」であることになり、この点にも注意しなければならない。「旅先の出会い文学」とも称し得よう。旅先の、あるいは旅の途中の、ある場所で主人公(多くは老いた放浪の奇才・弁舌巧みな旅人)が口頭芸を主として何らかの口頭での演技を行い、それに讃嘆したり、その訴えに同情した聴衆が身銭を切って与えたり、布施として与えたりする。そこまでがメインの本舞台である。アト舞台も旅先・旅の途中の出来事であることは共通して旅の文学を持続していることになる。

旅の文学とは紀行文学であり、その訪れた地誌や風土を扱うのが一般であるが、マカーマは旅の文学でも形式内容が全く異なる。マカーマの舞台とされるのは、この旅先の滞在地か旅の途中のできごとである。紀行文としてイブン・バットゥータやイブン・ジュバイルのリフラ(旅行記)が知られている。このリフラ文学とマカーマ文学は共に旅を舞台としていることは共通している。そして同時にアラブにとって旅が如何に日常的なものであったかも知らせてくれよう。ボックス・イスラミカ(イスラム教下の平和)のもと、巡礼も商人の旅も、知識を求めての学者の旅も良く行われた。旅は昼だけではなく夜旅もごく普通であった。夜旅の常習化は著者アル・ハマザーニーの旅でも同じであった。夜旅で如何に星月が頼りにされたか、そのパノラマに見惚れたことか! このことは反語的であるが、彼のマカーマの次の引用で分かつ：

おお夜の星々を頼りに夜旅する者よ それほど賛美するのなら

yā sāriyan bi-nujūmi l-layli yamdaḥu-hā

もし太陽を目にするならば 如何ほどの賛美も当たらぬを思い知らされよう

wa-law ra'ā sh-shamsa lam ya'rif la-hā khaṭarā

(第45話 拙訳)

但しマカーマ一篇ずつの表題が順次幹線道や街道に沿ったものかと言うと。そのところは恣意的である。マカーマに付される表題の多くの地名は何かの配慮で選ばれているというわけではない。表題の地名選択は、アル・ハマザーニーならばベルシャ以東の地名が、アル・ハリリーの場合ならば広く当時のアラブ・イスラム世界から選ばれている傾向がある。もっともアル・ハマザーニーのマカーマの各篇には名前も付されていないものが多く、いくつかは編者が後に命名したということも事実であるし、編者によっては表題が異なる場合も13話ほどがある。それについては各篇末

の訳者解説のところで触れておいた。

各マカーマが何故多くを地名が表題とされたのか、これの疑義は後輩のアル・ハリリーに当たっては解けない。訳者もまたアル・ハリリー的一篇一篇を訳出するにあたって、地名がマカーマの表題になっているのに、内容は全くの関係ないものが殆どで、解けない難題であった。注と解説を付す関係上、訳者は表題の地名については一言せざるを得なかった。殆どの中東諸地域に足を運んでいる訳者にとってみたら、馴染みの都市も多く出ているので、その土地のどんな情報や風物詩が登場するやら、楽しみにしていたものである。マカーマ文学を引き継いで大成したアル・ハリリーにおいては、何故作品の表題名に地名を付したのであろうか。先人の表題名の付し方を無視して、内容か訴えどころなどメインであるべき主題を表題にしても良かったはずだ。その理由、そこには先輩を重んずるアル・ハリリーの難しい選択であったろう。座右に置き参照していたアル・ハマザーニーの、恐らく地名が付されたマカーマ各篇が抜きがたく呪縛となっていたのであり、例外はあるにせよ地名を表題にするのがマカーマ文学と言う限りにおいては、踏襲せねばならないところに煩悶があったことであろう。

バスラに閉じこもって、首都バグダードを往復したぐらいの地誌観しか持たないアル・ハリリー。彼がメッカ巡礼に行きついでハッジュとなっていたかも知れないが、文献上は定かではない。一定の裕福者であり、イスラームへの信心も固いアル・ハリリーであってみれば、巡礼を果たして、長期の旅や野営の体験をしたことではあろう。そうした場面では体験が生かされたはずである。少なくともそう観たい。マカーマの創作を構想する中で、座右の書に見られる表題をベースに、己の個々の表題をどのように付けるか、マカーマ一篇一篇の題名に苦慮せねばならなかった。アル・ハマザーニーもそうであったからと言って、実際その地名とは関わらずに一篇の名称としようとするには、相当の決断が要ったはずだ。50篇という多いマカーマをアラブ・イスラーム世界から恣意的に選ぶことになった。その多きが故に、地名の表題を付したにも拘らず、その土地と内容はなんら関わらない場合が殆どになってしまった。訳者の見るところアル・ハリリーの50篇のうち、さすがに故郷バスラについての第48話と最後の第50話とは表題とも結びついた地誌をも織り込んでおり素晴らしい展開である。そこから得るバスラ情報は恐らく何にもまして詳細であり、「おらが町」を謳歌したものである。お国自慢を韻文でムファーフアラに、そして散文でマハーシンに謳い上げている。またシリアのヒムスの住人の愚かさの風評については第46話でその真偽を試しにマドラッサの子供教育を視察する話にまとめている辺りが、表題の地名とスムーズに結びつく作品とみなし得よう。しかし大半は単に表題に選んだに過ぎず、内容はその地名とは何の有意性を伴わない。

マカーマの一篇一篇が旅であり、マカーマ作品の表題にもそれを見ることが出来る。マカーマ文学は、その設定自体が旅であり、移動である。そしてある旅先での出来事が一篇の作品となる。そしてその表題に多くはその旅先の地名が付されている。後輩アル・ハリリーが表題を地名に拘ったのは他でもない創始者アル・ハマザーニーに敬意を表し、それに準じたからであろう。たとえアル・ハマザーニーが己の書き散らしたマカーマのそれぞれの一篇には篇題を付してはおらず、後世に写本を書写する段階で付されたものと一般的には認められているとはいえ。編者が無題マカーマに表題を付す時、彼の脳裏を掠めたのは、他のマカーマ作品の表題の命名法であったろう。編者の恣意に任されて良いはずがない。それゆえ13篇ほど写本によっては、異なる篇名が付されている。これについても個々の解説で触れておいた。しかしそれを認めるにしても、著者が幾つかは題名を付しており、それが地名であったことはアル・ハリリーにおいても十分意識されて、マカーマの篇題として継承されたことであろう。その地と内容は全く関わらない前提に立って、篇題も付して

ゆかねばならない事情はそのあたりにあったはずである。

これと重なることであるが、忘れてはならないのは、「旅」と係ることだ。我々は両者の人間像の違いも考慮に入れて置かねばならない。マカーマ一篇の舞台をどこかの滞在先にする。そしてその表題をその地名にする。この両者を結び付ける発想はアル・ハマザーニーからの性向の然らしむる結果であった。彼がマカーマ作品に表題を付してはいなかったという前提に立ったとしても、そうした無題作品は少数であり、多くはマカーマと言う限りにおいては表題は付されていた状況証拠は十分であろう。アル・ハマザーニーは無類の旅好みであって、その先々の文学的好奇心が高じて、文才の発露を生み出し、さらにはマカーマのジャンルを開拓したのである。この旅好きの先輩が開拓した新領域、これをここでアル・ハリリーは文学領域として踏襲し、完成せねばならない煩悶があった、と見てよいであろう。

アル・ハマザーニーの旅への執着は異常と言えるほどであった。長期滞在と言う定点観測は己の精神に危害や呪縛を及ぼすものと見做していた。その意味では根っからのベドウィンタイプであった。ある地点のキャンプ地に長く留まれば、その滞在地が汚れるだけでなく、人性の心身にも悪影響を与えるのだ。アル・ハマザーニーはどんなに快適で、客扱いの良い滞在先であっても、せいぜい数年で居たたまれず、そこを逃げ出すように後にしている。アル・ハマザーニーは、彼の書簡の中の一つで以下のように述べている；

水がもし長く淀めば、その害悪の弊おのずと出で来よう  
されば同じところに動かずば、汚辱蔓延ることになろう  
それは客扱いも同じこと、滞在が長引けば不興を買うは必定  
逗留に許される時過ぎれば、客人もただの使用人に過ぎず。

(Ibn Khallikān, De Slane 英訳 I p. 113)

彼が何故に旅に明け暮れたかを、如実に吐露していよう。一か所に留まることのこの土地・場所への「不浄感」は、アラブの砂漠の遊牧民と変わるところがない。狂気に似た、精神に異常を来し、これ以上の滞在は堪らず逃げ出すアル・ハマザーニーの旅姿が思われよう。そして次の旅の途次、旅先の知識教養のある領主や富貴な名士に前もって文の遣いを出す。

次の書簡は旅の途中、次に頼りとなる栄誉ある人物に宛てたものである；

希求する者にとりて、その目指す対象こそが重要であります。恰も巡礼者にとりてカアバ在るが如し、それは言うに及ばぬことですが。客人の望むらくは、彼のパトロンからの報奨であります。(巡礼行の最後に行う)ハイフのミナーにおける(犠牲祭の)犠牲獣の奉献の如くに。報奨の源に向かうは常に一方向、パトロンを向くこと、それは礼拝者のキブラ(礼拝方向)の如く、と申せましょう。

(Ibn Khallikān, De Slane 英訳 I p. 113)

目指す人物をメッカ巡礼に関したことに喩えて、イスラム的発想がここに見られるのも興味が惹かれる。また以下は寛大なパトロンへの恵み求める彼の長い頌詩の一部である；

土砂降りの有難き恵みの雨降り注ぐ そは汝か  
閉じた口開かば金貨湧き出だせる そは汝か  
授与するに期待裏切ること無し そはまた汝なり  
汝の口からの音声、そは太陽 獅子の如く狩られること無し  
汝はまた大海なり、その押し寄せる報奨の波 常にありければ

(Ibn Khallikān, De Slane 英訳 I p. 113)

人生は旅。それを生<sup>なま</sup>で生きた巨人アル・ハマザーニー。彼の終<sup>つい</sup>の棲家はヘラート、イスラーム世界でも東辺の果て。旅路の、そして人生の果て。生の果ては棺の中。彼の死出の旅路もまた一混乱があった。訳分冊の(1)の「アル・ハマザーニーの生涯」の中で言及した如く、棺の中のエピソードよろしくその中に納まらなかった、留まらなかった。己が説いた死の旅路は以下の書簡のようにはいかなかった。

次の書簡は榮譽ある人物に宛てた、己の死出の旅路についての考え方を述べたものである；

さて、死のことを考えてみまするに、それは確かに恐ろしきもの。されどそれ(死の恐怖)は生前までのこと、迎えてみれば意外と気易きものでしょう。死がその触手伸ばせば、相手たる人間の身体には、恐怖に震えおののきましよう。されど(その直後には何の抵抗も無く)安らかになるもの。浮世は(善良なる者には)敵意を剥き出しにし、不正は余りに夥しき限り。されば死ぬ方が厄害を負うことなく、悪事なれども生きることより懲罰を軽減されるに非ずや。右に目を遣れば困苦苦痛は明らかな、左に目を遣れば邪見なる者ばかりが浮世なのですから。

(Ibn Khallikān, De Slane 英訳 I p. 113)

引用中、「されば死ぬ方が厄害を負うことなく、悪事なれども生きることより懲罰を軽減されるに非ずや」の後半部「悪事なれども」とは天寿を全うしないこと、みずから命を絶つことを言っている。それ故に神からの「懲罰」に言い及ばねばならない。「自殺」としてイスラームと対峙する重いテーマである。

アル・ハマザーニーは主人公像よろしく漂泊の人、旅の文人。そのマカーマ作品も彼の性向が反映されて、旅の文学であり、必然的に一篇の表題が地名を付すことにも繋がった。先人の生き方・著作、これを尊ぶアル・ハリリーもまた、おのれのマカーマをそれに準じ旅の文学として、アル・ハマザーニーを彷彿とさせる旅にある主人公像、その表題にも地名を付し、内容も旅先の出来事とするスタイルを踏襲したわけである。

## 9. アル・ハマザーニーの故郷への愛着、ファダーイルの呪縛

アル・ハマザーニーの生地ハマザン。愛してやまぬ故郷ではあったが、年端の行く頃になって気が付けば、人の噂として「愚かしさとケチさ」とで辺りに聞こえる町であった。ちょうどシリアのヒムスがそうであったように(後者ヒムスは、後輩のアル・ハリリーによってどれほどの愚かしさなのか、そこに出かけた設定で、彼の『マカーマート』第46話によってその真偽が子供たちの授業風景を通して描写されている)。アル・ハマザーニーは故郷の悪評が影響しているのであろうか。故郷を後にしてから再び戻ることはなかった。イスラーム世界としては東方のペルシャ世界を広く東西に南北に旅して回り、さらに東の辺境に当たるアフガニスタンを旅してヘラートで没している。ペルシャの最西端に生まれ、最東端で亡くなったことになる。何故名士になってから故郷に一度も足を向けなかったのか、さらにアラビア語の本流でもあり、文芸運動も最盛期を迎えていたアラブ世界に足を向けなかったのか、いくつかの謎が残る。こうした西のアラブ世界の文人たちとも書簡のやりとりをしていたにもかかわらず。しかもこの上ない旅好きであったにもかかわらず。

彼の情報の多くは伝えるのは、同時代人の文人サアーリビー al-Tha‘ālibī (1038年没)であり、彼もまたイランやアフガニスタンなどはほぼ時を同じくして文人として歩き回って、代表作ヤティマ *Yatīma al-Dahr* (時代の比類なき真珠)を残している。多くのページをアル・ハマザーニーに割いて紹介している。もう一人後年になりアル・ハマザーニーの名声が確立されたころ『学者人名事典』を著したヤーカート al-Yāqūt (1229年没)の記述によるものである。アラブ地域、学芸の中心地に

足を向けなかったためか、アル・ハマザーニーの資料は限られてしまう。(1)の著者紹介の項末文献 223～24 を参照)

故郷ハマザーンの風評は己のニスバ(由来名)がそれを体現しているハマザーニーであるから、相当程度彼の人物評にも影響は与えたといえるであろう。それ故に「愚かさ」との、負のファダーイルは己を絶えずおのずと意識させられていたことであろう。とはいえ、郷土愛は誰にもあるもの。「俺が故郷」として悪評があるのならば、それを打ち消してむしろ良い点、自慢したい点(ファダーイル)を述べ立てて、悪評は振り払いたいという気持ちは誰も抱くものである。アル・ハマザーニーの著作物のあちこちにそれを覗かせる。己の作品の中にも、心中の思いは筆に乗り移るものだ：

「流浪は私をありとあらゆる異境の地に投げ出したものです。そして遂に岩場多い一帯を踏み越えてハマザーンの地に行き着かせました。その住人は私を温かく迎えてくれ、その連れ合い仲間達は(興味しんしんと)私の方に首を長くしておりました。しかし私は招待してくれる人の中で、持て成しの器の最も大きな人の許に頼りました。無作法とは最も遠そうな人物を選んだものでした。

彼見晴らし良き所に用意せり 旅人招く持て成しの火焚くを

心細さ募る時その火の炎 身も心も温かく包めり

かの人物は私のために寢床をしつらえてくれ、なにくれとなく臥所を按配してくれました。我が郷愁が生じ、我が息子への思いが募ると、彼はイエメンの剣のごとく(素早く察知しその対応に当たってくれました)、あるいは雲・埃一つ見当たらない空に現れる三日月の如く(その思い遣りが冴え渡っていたの)でした。彼はあらゆる便宜を図ってくれ、私のその当時の分際では身に余るほどでしたし、私の胸襟を開いてくれたものです。部屋の家具を調べてくれましたし、果てはディーナール金貨一千枚ほども差し出されたのです。私がそこを飛び出したのは他でもありません、彼の余りの物惜しみの無さ故なので御座います。贈り物は引切り無しに続き、進物の雨は止むことはなかったのですよ。結局私は逃亡者のように、(人を見て)逃げ去る野獣のようにハマザーンを後にせねばなりませんでした。

『マカーマート』第9話 (1)p. 267～68

第9話において表題は「ジュルジャーンのマカーマ」であり、そして副題を「接待が過ぎて逃げ出して」としておいた。が、内容の主体は故郷ハマザーンであり、副題がそれを示しているように、ハマザーンの人々の寛大さが度を通り越しており、主人公はこれ以上迷惑を掛けまいとして逃げ出してジュルジャーンにたどり着く設定である。ハマザーンが主題ならば、表題を「ハマザーンのマカーマ」としても良かったはずだ。ここにいくつもの著者の配慮を読み取ることが出来る。「ハマザーンのマカーマ」としたならば、世評の如くであり「接待が過ぎて逃げ出して」とはとてもできない。読者も承知しないであろうし、著者にも如何ほどかの忸怩たる思いがのこる。そこで挿話として入れ込み、中和を計ると同時に「愚かしさとケチさ」の悪評を払拭したいとの思いを盛り込んだわけであった。「愚かしさ」の風評に対しては、ハマザーンの人々をよく気がつく聡明な人々で、「イエメンの剣のごとく」に鋭い明察をし、「三日月の如く」その思い遣りが冴え渡る人々であった、と。「ケチさ」については、「ディーナール金貨一千枚ほども差し出された」のであったし、「贈り物は引切り無しに続き、進物の雨は止むことはなかった」ほどであった。余りの手厚い保護に長居してはどれほど散在させるかその程が知れない、として逃げ出すことになる。断わって旅立てばそれはそれで銭がどれほど届くかわからない、との想定である。彼は「俺が故郷」に対して、こうした

挿話で入れ込む便宜を捉えては「愚かしさとケチさ」の悪評を払いのけようと試みる。そうではあるまいとして用意周到な弁護をエピソード仕立てで弁護する。「愚かしさとケチさ」の負のファダーイルを打ち消そうと勤めている心理が、「俺が故郷」をそれとなく擁護しているのが見て取れるわけである。第9話の主題はその意味でも興味深い一篇である。エピソード自体は短い、「接待が過ぎて逃げ出して」として、この町の人々の持て成しが過ぎて、それが堪らなくなり、この理由でこの街を脱出することになる。そのエンディングの工夫にもまた著者ならではの才気が出出されていよう。著者の「俺が故郷」を深読みできる一篇である。

もう一つ「俺が故郷」としてファダーイル意識が表現されているところを述べておこう。第43話のマカーマではアルワンド山 *Arwand* (ペルシャ語ではアルヴァンド。ザグロス山脈の北方の山名) を登場させている。故郷ハマザーンを懐に抱く山で、富士山よりやや低い標高 3572m。この故郷の山とペルシャの最高峰ドゥマーワンド山 *Dumāwand* (ドゥマーヴァンド。テヘラン北方のエルブルズ山脈の最高峰。標高 5671m 富士山よりはるかに高いが、よく似て優美に聳える) とを、2000m も高さが異なるにもかかわらず、最高峰として比肩して喩える記述がある。(『マカーマート』第43話 本研究誌(3)の当該箇所を参照)。これ程の標高差のある山ならば、ザグロス山脈には 5165 m あるアララト山やザルド山 (4548 m) やディナール山 (4431m) 他、4000 m 級が連なり、3000m 級の山は比較にならない。それをファダーイルとして「俺が故郷の山」をその最高峰の双肩としてわざわざ選んでいるのであるから。

アル・ハマザーニーの故郷への愛着心、俺が意識についてであるが、彼の郷土愛も人並みではない。こうした背景にはそもそも、人物の交流や移動が激しく、興隆し成熟に向かうその当時の社会では、「人定め」、「物定め」、「所定め」が要求されていた。土地柄を巡って、都市柄を巡って、出身地や出身人物、特産品などを巡って、ある風評や逸話が諸所飛び交い、その正否を論議したり、書物に記されたりして、それを巡ってさらに論議を呼んだ文化事情が説明されねばならない。文学に限らず文化全般に観られたファダーイル(美点、優秀性)論である。歴史書も含めた博物学的領域にも登場する。ここでは部族や血筋、土地柄や都市民観であるが、対象はあらゆる分野に及び、ファダーイルが議論された。さらには対象を二者にして匹敵し、拮抗するもの、同列に並ぶ対抗者に対して、ある一方に立ちその優位を示そうとする表現領域である。また一つの対象に絞って、そのファダーイルとしての美点・美德、優秀点だけでなく、逆の汚点、弱点、劣悪さなども狙上りのぼった。

アラブ世界にはイスラーム期以前から、ファダーイルを主張し合うのは、口頭ではあっても、詩を主とした韻文で行われるのが普通であったが、散文で行われる場合でも韻を踏んだサジュウ(押韻散文)のほうが説得力を持ち、審判者や聴衆の高評価に結びついた。ファダーイル (*faḍā'il* < *faḍl*) は<人>が対象ならば「美德、長所、秀逸性」と訳せようし、<物>が対象ならば「美点、利点、優秀性」と訳し得よう。起源をたどれば、論争を行う習慣は古くからアラブ社会に在った。と言うよりも遠祖古代オリエントから継承される風でもあったわけだが。イスラーム期以前はもっぱら、部族性を反映して<人>が対象であった。ファダーイルを言い当て、数え上げて説明を加え、己の側を優位に導く。カーヒン(巫者)やハーティブ(説教師)ならばサジュウ(押韻)を効かせた散文で、詩人ならば詩で「おらが郷土・おらが部族・おらが血筋」を歴史や逸話、部族戦争や襲撃、高名な先祖名をファダーイルとして挙げて、その説明に美文や詩に詠じ合ったものであった。そして部族を挙げての戦闘 (*yawm*) に先立って、部族の代表詩人が敵の代表詩人に対峙して、お互いに己の側のファダーイルを即興詩やサジュウ(押韻散文)を投げ掛け競い合った。これをファフル *fakhr* (自讃詩) と言った。特に己の、自分の属する集団領域の良い点や自慢点を対抗者のそれと張り合う論争

をムハーファラ mukhāfara (自慢合戦)と言った。これが一方では、相手の部族の弱点や欠点、血統の卑しさや部族気質の難癖を指摘し、中傷することになる。敵対する相手や部族を屈辱的に卑しめたことも演説でぶたれたり、詩のヒジャーウ (hijā') で揶揄されて詠じられた。敵対相手を前に非難中傷し合って詩を主たる媒体で争うことはムナーファラ munāfara と、そして散文主体でのやり合いをマサーリブ mathālib と言った。こうしたファダーイルを中心とした論争文学の領域はいずれもイスラム期に入ると、口承・口誦の段階から文字資料・書承の段階に至って、次元が異なるほど積み重なって多彩さを見せた。

イスラム期を迎えると、アラブはイスラムの拡大に伴い、砂漠を出た出身が異なる部族の交流があつて各地に拡散してゆく。イスラム化以前から存在していたこうした「俺が」意識の風潮は、イスラム時代になり各地に新たな市や町が誕生して、町にも集住するようになると、定住化が進んだアラブにも己の出身はアイデンティティとプライドを護持するのに欠かせない自己意識であつた。自部族や己の属する集団、俺が故郷の名を知らしめるべく、高めようとすべく、ファダーイル (美德、秀逸点) を己または自部族の出自、気高さ、徳高さ、武勇や伝承などの誇りとして演説したり詩に吟じたり、話題にしたりして自慢し合った。特に「俺が〜」の領域は特に盛んであつた。故郷を持つ者は誰しも「俺が」のことは気に掛けるものである。その領域におけるファダーイルは更に盛んになった。微に入り細をうがったファダーイルが展開された。

こうした一方、イスラム化の安定と豊かさは文化を深め多様にした。それぞれの地域や都市が豊かになり、ローカル色やユニークさを競い合つてもいた。ファダーイル論も新展開を見せていた。新興都市まで含みこんだ地域的特色を鮮明にしていだったのである。バスラやクーファの様々な分野での派閥などがその典型になった如くに、あらゆる面で「おらが」土地、故郷意識とその特色を色濃くファダーイルに反映させたのである。こうした面で各地の世評・風評が生まれ、ハマザーンの悪評も立ったものと思われる。

ファダーイルがイスラム期以前からそうであつたように、その対象としたのは人物や部族だけではない。彼らが関係する地域、地名もそうであつたし、なによりもイスラム期以降、最も特色として浮き出た領域は、イスラムの宗教と、預言者他の宗教関係者のファダーイル論であつた。周囲や内部に紛れ込む他の強力な信仰共同体に対して、新教としての信仰護持のため、聖典『クルアーン』の教義や信仰に関するファダーイル論が急務であり、究明が急がれた。一神教を共有する世界で新興のイスラム教が如何に他の宗教より優れているか、その美点や秀逸点をファダーイル論として、信者に確信させ、他の先行するキリスト教徒やユダヤ教徒とも競合しながら優位性を保たねばならない。そうした上でも護教的ファダーイルの究明は飽くことなく続けられてゆく。後にコーラン諸学 'Ulūm al-Qur'ān として成立する中で、その一分野が「コーランのファダーイル (美德・秀逸性)」 Faḍā'il al-Qur'ān なのである。同じくイスラム信仰に関わる人物たちの、預言者やアリーやフサインなどの係累は一般にアフル・バイト (Ahl al-Bayt お家の人々・聖家族) と呼ばれ、聖化されてゆく。ファダーイルにもそれは如実に観られ、それらの個々人のファダーイルも集められる。また正当カリフ達、ムハージルーン (メッカを主としたヒジュラ人達) やアンサル (メディナの助け人達)、サハーバ (信仰共同体を預言者と共に護持した第一世代) など、さらにタービウーン (サハーバに続く第2代) 以下偉人や傑人のファダーイルが収集され記録されてゆく。こうした分野は naqba (功德・德行) のファダーイル論としてマナーキブ manāqib (聖人功德伝) として、後世の聖者たちの逸話や伝記に引き継がれてゆく。

イスラム期以後のアッバース朝の黄金期を迎えると、文化が成熟し文人教養人が多く輩出される。

文学領域も洗練されてサロンや集いの場も広がりを見せた。王侯貴族や富裕者はパトロンとなってそれを誇ったし、その邸では豪華な場が設けられて慣行となっていた。ごく日常の教養人や文人の集いやサロンも庭園や集う雰囲気があるならば何処でも座が組まれた。こうした集いや座談の中で、マカーマ作品の中に多く観られるように、文学談義としてファダーイル論も恰好な材料となった。こうしたファダーイル (fadā'il 美点・秀逸点) に基づいて展開される話題の中で、詩での遣り取りの分野も盛んであって、多くの詩人がファフル (khafr 自賛詩) でもって対抗馬とやり合うムハーファラ (mukhāfara 自慢合戦)、サルブ (thalb 中傷、誹謗) やヒジャーウ (hija' 中傷詩) で論争するムナーファラ (munāfara 中傷合戦) またはマサーリブ (mathālib 誹謗合い) も、例えばウマイヤ朝を代表する大詩人ファラズダクとジャリールの間でナカーイドとして知られる詩での激しい合戦も行われ、座談の中に巻き込んでいった。イスラームの興隆と民族的広がり、ファダーイルの内容も変質していくことになる。

座談あるいは論争文学に一層の広がり多才さを加える分野が誕生した。ムナーザラ (munāzara 主張合戦・論戦) である。この萌芽もイスラーム以前の時代にさかのぼるが、上のファダーイルをベースにしたムハーファラ (自慢合戦) とムナーファラ (中傷合戦) が下敷きにあると言える。ある意見・主張 (naẓar) のファダーイルをもって対向者と論陣を張り、己の主張を通し相手を説き伏せ、やり込めようとするものであった、これを総称してムナーザラ (munāzara、主張合戦・論戦) といっていた。ナザル (意見・視点・論点) のファダーイルをお互いに主張し合うことである。穏やかならば座談形式の「消時の話題」として、より改まった形では「意見交換会」として論じ合った。敵対関係が厳しい場合は公式の「論戦」の意味合いを持っていた。話好き、論争好きのアラブは、お互いの知識教養の蘊蓄、これをアダブと言うのであるが、それをこうした場を通して磨き励んでいったのである。お互い同士が場を決めて、論争となる領域のファダーイルをナザル (論点) として主張する。これに対して対抗者もまたおのれの方のファダーイルを主張する。必ずしも詩である必要はないのがムナーザラの特徴である。演説や詩でおこなっていたが、イスラーム期以降は書き記しての、書簡での論争も輪をかけて盛んとなった。こうした論争が敵対心むき出しになると、それに収まらず公開でお互いが仕掛け合う風が広まった。特定の場 (majlis) を設けて、聴衆や判定人を置くような場合は、宮廷や領主、貴人などの応接間などが裁きの場となった。さまざまな分野でのナザル (主義・主張) が争われていたわけであった。口頭ではあっても、韻文で行われるのが普通であったが、散文で行われる場合でも韻を踏んだサジュウ (押韻散文) のほうが説得力を持ち、審判者や聴衆の高評価に結びついた点は古来より変わりはない。ハマザーニーがニシャープールで行った当時名声の高かったフワリーズミーとの公開の舌戦もこのようなものであった。

こうしたムナーザラもさらに特化し、深化が進んだ。ムナーザラのナザル (論点) の中でも、ファダーイルの対象は、文化の広さ深さと比例して多様化し、繊細で巧緻な分野にまで及ぶことになる。人間関係とは直接関係ないところにナザル (視角) が及び、新たなファダーイルの発展を見ることになる。ファダーイルが「人定め」から「信条定め」など思想・信条に及び、さらに拡大して「物定め」の領域にまで及ぶ。半ば趣向的な面も持ち合わせていたわけであるが、それこそ教養人・文人の求めるところ。こうした広義のムナーザラ (論争合戦) が座談やサロンの場で展開されることになる。この背景はイスラーム文化が発展して成熟してくると、信仰や文化の深層にナザルが及び、諸相に日常生活や日常品、ものごとの長所や短所、利点や汚点の指摘され議論され、さらにその根拠や論理が、一方では口承で他方では書承で蓄積されて来ていた。口承はアラブ古来からであるから範囲には限界があったが、それでもアラブの記憶力はその遊牧民資質と関わり優れたものであった。加え

てそれらが収集され書かれた資料となつて行つたし、新たに誕生し確定したものも蓄積されてファダーイル論が展開されてゆく。それがこうした分野ではムナーザラの体裁を帯びて先鋭化するわけである。それは対抗軸となり得る二者が対象となつた。例えばスンナ派とシーア派を巡つてであったり、カダル派(自由意思説)とジャブル派(予定・運命説)との信条の主張であつたりした。またアブド(黒人奴隷)とマムルーク(白人奴隷)、ファター(若者)とジャーリヤ(娘)などの同列に並び得る人間関係、例えば書記官と会計官などの同列に並び得る職能集団など、次々と新たなファダーイル論が展開されてゆく。

ムナーザラの発展はそのジャンルの中にさらに新たな領域を生み出してゆく。論争当事者に対立軸を同一のものごとにおいて、その同一物の良し悪しを主張させるのだ。これもマカーマでは金貨などでその話題を提供しているが、その利点・長所(hasan)とするところを指摘してマハーシン mahāsin、とその汚点・短所(sū')を訴えるマサーウィウ masāwī、平易化されてマサーウィー(masāwī)と言う領域が用語化されてゆく。これらの対象はあらゆるものがその組上に上り、一つの対立軸を置いてその善悪の両面をも論じ合う。このマハーシンとマサーウィーと言う分野は文学のみか、一般化実用化の評判と結びつく重みが加わることになる。このファダーイルの領域は既にイスラム暦3世紀には散文の名手ジャーヒズが「マハーシンとアドダード」(addād 対立・背反するもの)と言うテーマで、土地に限らず犬(『動物の書』7巻中第2巻目はすべて犬を扱っている)、羊とヤギ、若者と乙女、人体の背と腹(いずれも多分に性的)など比定・比較できるものは対立項として論じたり、また同一物であっても対立項が設定できるものは素材として論じた。「マハーシンとマサーウィウ」(褒め合いと貶し合い)と言うテーマが確立したのは、アル・ハマザーニーと同時代のバイハキー al-Bayhaqī がこの領域では初めての書『マハーシンとマサーウィーの書』*Kitāb al-Mahāsin wa-l-Masāwī* を俟つてのことであつた。両マカーマートにおいてもこうした領域はいくつか指摘できる。語り手が舞台となる集いに出かけ、その座談の座を組み、あるいはその座に連なる、あるいは拝聴している、そうした場、そこで話題となるのも多くはムナーザラであつた。

ファダーイルがお国自慢として定着する中で、ハマザーニーが内に秘めたおらが故郷ハマザーンを擁護して、地元の悪評を修正すべく手に染めたのがマカーマの第9話「ジュルジャーンのマカーマ」であり、そのハマザーンを懐に抱くアルワンド山 Arwand をおらがお国の山として最高峰の対抗馬として選んだのが第43話のマカーマであつた。あれほど諸国遍歴している著者をして、対抗馬として選んだのは決して偶然ではなく、故無しとは受け取れない理由は単なる俺が故郷の問題ではなく、重層的にファダーイル論の文化を背景とした事情があつたからである。(なお訳者はこのファダーイル論の一つを、「クルアーンのファダーイル」として、聖典『クルアーン』の個々のスーラ(章)、アーヤ(節)が大衆の信者にどのようなご利益となっているのか、その諸相を扱ったことがある。「コーランと民衆イスラーム」『シンポジウム 中東の社会変化とイスラームに関する総合的研究 報告と討論の記録 3. 文化分科会』国立民族学博物館 昭和55(1980)年3月39～60頁)

## 10. マカーマとムラフ Mulaḥ (奇譚) との関連

アラブ世界では古い砂漠の伝統として様々な諺言や言い回し、逸話や物語が「ベドウィンの大話」akādhīb al-‘arab、「ベドウィン夜話」asmār al-‘arab などが紡ぎ出されており、フォークロアの世界を豊饒にしていた。口頭伝承として継承され、また新たに創作されたり、改作されて蓄積されていた。牧民思想を反映して、文字や物質を介せず、口頭話芸を盛んにしていた。単なる口頭と暗誦とからなる話芸に、弾き語りや歌舞音曲も加わって集いの場をもちあげたことであろう。己の血筋や

高貴さを体現していた人物の逸話、己の部族を超えた英雄譚や寛大な人物伝、滑稽譚、俚語の由来や教訓、逸話、民話、夜話など多芸で豊饒な世界が紡ぎ合わされていった。これらが元となって座談や話芸、文学の構成要素として、後世大きく成熟発展して展開される。イスラーム世界の成立と拡大に伴って、ベドウィンのアラブ世界もアラビア半島を出て、大きくアラブ世界を広げる。土着化したベドウィンは彼らの部族ごとの物語や民話、小話や逸話などの口頭伝承を広く伝え、土着の要素、都市的要素と習合して、地方的変異を大きくする。こうして土着化して採り入れられる「ベドウィンの大話」や「ベドウィン夜話」は大きなテーマやモチーフとなって様々に分枝する。これに加えて他にも都市中の文人や庶民のユーモアに繋がる話が様々に積み重ねられてゆく。しかも成熟社会を迎えて、マカーマの座談やサロン、集会などで具体的諸相を垣間見たように、語りのありとあらゆる世界が展開する。そうした中でユーモアある逸話を集めたのがジャーヒズの「けちん坊どもの話」al-Bukhalā'であったし、貪欲でしみつたれの「アシュアブ (Ash'ab) の話」、滑稽譚としてトルコに伝わって「ゴハー物語」の元となる「ジュハー (Juhā) 物語」などが良く知られている。こうしたユーモア文学はハズル hazl と括られる。こうしたハズルの中に、塩味風味の効いたムルハ (奇譚) があるわけである。他にも領域が重なることになるが、珍奇な話の意味でナワーディル (nawādir「珍譚」)、快い<sup>みやび</sup>雅な話の意味でラターイフ (laṭā'if「瑞譚」)、滑稽・冗談話のことはフカファーウ (fukahā'「滑稽譚」)、それにイスナード (伝承者付記) の実話・史話 (もどき) のリワーヤート (riwāyāt「伝承語り」) などがある。最も遅く誕生したマカーマ文学は、ムラフを主たる内容として誕生したものと思える。『千一夜物語』と『ムラフ』および『マカーマート』に関連して述べると、こうしたユーモア文学のうち、やや高踏的で修辞の効いた創作話譚・逸話群が、上に述べたハズル (ユーモア文学) であったろうし、『ムラフ』および『マカーマート』もこの典型例になって位置づけられるのが読み取れよう。一方形式にも縛られず文体も修辭も凝ることがなく興味本位の話群が一般大衆に受け入れられ易い、より面白おかしく纏められて語られていったのが『千一夜物語』と解釈も出来よう。後者は形式的にペルシャ起源の『千物語』の体裁をとってはいるが。一方ではそれら作品群にヒントを得た教養と機智に富む個人の作者によって、他方は語り部ラーウィー rawī によって様々なキッサ (qiṣṣa) やリワーヤ (riwāya)、ハディース (ḥadīth) として引き継がれて、継承発展して、書物に纏められる形で。ハディースのことを一言しておく、この語は「預言者の言行録」として特化した学問用語になったが、広義にはそもそも語根  $\sqrt{h/d/th}$  の語義は「新たに生ずる、起きる」であるように英語のニュース news と同じであった。すなわち「新情報」、「新譚」の意味であって、逸話的・物語的なものも含めて、イスラーム誕生以前から創造的な「新たな情報・物語・逸話」の意味で用いられていた。アル・ハマザーニーが『マカーマート』を著作する動機とされたイブン・ドライドの『40篇のハディース (物語)』(Ḥadīth Arba'īn) であったことを想起されたい。10世紀に著されたハディース集なわけであり、ここでは文脈からして ḥadīth は「新情報」、「新譚」と訳し込めて良いだろう。ハディースがこの意味合いの文学ジャンルとして近現代までも引き継がれている。文学ジャンルとしては広くキッサ (qiṣṣa)「物語」の意味に含まれていよう。一例として近代の文人 M. アル・ムワイリヒー Muḥammad al-Muwayliḥī (1868-1930) の「イーサー・イブン・ヒシャム物語り」Ḥadīth 'Īsā ibn Hishām をマカーマ形式でハディースを用いて著作したことはご存知であろう。

さて形式や内容によってさまざまな呼称を持つジャンルが、座談や話芸の場で繰り広げられていたわけであるが、中世の黄金期 10-12 世紀アラブ世界でどのような語りやジャンルが話題とされていたのであろうか。幸いハマザーニーやハリリーーの両『マカーマート』作品の中には、その時代に語りのサロンや集い、座談の場でどんなものが語られ、話題の花となっていたのか、具体的記

述がある。ここでは両者の作品の中からそうした場面を再現してみよう。ここではアル・ハマザーニーの方だけを扱い、アル・ハリリーの方は後でムラフの解説の中でその事例を引用する：

遊行の旅を重ねるうちに両頬は日焼けして、両の睾丸が縮んでしまった(=精力を使い果たした)。けれども(知を求めての旅でもあったので)いろいろな知識が収集できた、珍譚(nawādir)や新奇譚(akhbār)、夜話(asmār)、有益譚(fawā'id)、由緒話(āthār)、珍しがり屋(mutaṭarriḥūn)の詩歌(ash'ār)、面白がり屋(mulhūn)のお惚気話(sukhf)、恋狂い(mutayammūn)の狂歌(asmār)、哲学者(mutafalsifūn)の諸見解(aḥkām)、妖術師(musha'widhūn)の策略譚(hiyāl)、仕掛け策士(mutamakhrīqūn)の騙くらかし話(nawāmīs)、飲み仲間(munādīmūn)の酔狂譚(nawādir)、星占い師(munajjimūn)のまやかし話(rizq)、藪医者(mutaṭabbibūn)の名医ぶり話(luṭf)、女装男(mukhannathūn)の芸談(kiyād)、ペテン師(jarābiza)の舌先三寸話(dakhmasa)、イブリース(abālisa 悪魔)の誘惑話(shayṭana)、(法官)シャアビーの政談(futya)の要約譚、(博学の)ダッビーの蘊蓄譚(hifz)、(故事来歴に詳しい)カルビーの学識話('ilm)、などである。

(ハマザーニー 第42話 拙訳)

ここでは訳出した後、引用文なので本項趣旨の関連語はローマナイズで原語を挿入した。この点訳出した本文とは異なる。上の引用で述べたそれぞれの話譚・物語・逸話は、大きくも小さくもジャンルとしての考察に役立てる参考となろう。ここには形式から観た分類は一切ない。すべて多様な内容によって色分けした分類である。引用の中で「面白がり屋のお惚気話」の記述が出てきたが「面白がり屋」の原語 mulhūn は「座興屋、気晴らし屋」が直義で、語根√l/h/w (遊び・気晴らし)であって、ここで議論している mulah とは別語である。

アル・ハリリーの『マカーマート』の中からの事例は後で引くが、そこでは説教、洒落話、サマル、カスィーダ詩、金言、軽易即妙話、さらに韻文、散文、物語、書簡文、ルクマーンの教訓、戦記物、頌詩、ラジャズ詩、ハディース語りなどが記されており興味深いものである。

さて、マカーマ文学のジャンルの背景を考える上で、隣接分野ムラフ mulah (奇譚・興趣譚)との相関は無視できない程に近いものである。マカーマ文学は中世アラブ文学においてジャンルとしては最も新しい領域である。その起源はさまざまに論じられているが、ここではムラフに視点を宛てて述べてゆきたい。マカーマートの内容そもそもが、ムラフ(奇譚・興趣譚)を主としてナワーディル(珍譚)やラターイフ(瑞譚)、アフバル(新情報)、フカハーウ(滑稽譚)、ハディース(新譚)などを内容としているのである。それもムラフなどの騙りや話芸の技巧披露をオモテ舞台に、ウラ舞台では正体暴露や申し開きの内容をムラフにして。そこにはムラフ二つが繋ぎ合わされて披露されていることになる。そしてマカーマートの形式の方は語り手=進行係を脇役に、主人公=主役にそれぞれ双方を同一人物に配する。そして文体をサジュウ(押韻散文)にそして盛り上がり詩にして一篇の仕上がりとする。内容をムラフとして、形式は新たな「演劇」形式にして、「騙りや異才振り」を内容の中心に改編すれば、マカーマ一篇が出来上がることになる。散文文学(nathr)として、云わば重層的領域と言える分野が誕生したわけである。

ここでは特にムラフを考察の場に据えてみよう。マカーマに最も近い分野であり、マカーマに紛れ込んでいることが知られている(Anttila pp. 77-80)。特にアル・ハマザーニーのマカーマ作品の中には、形式・内容とも確立しておらず、両者はあいまいな領域のまま残された。アル・ハリリーがマカーマ文学を確立した後ですら、これから述べるように近代に至るまでムラフとマカーマとは重層領域であったのである。

そもそもムラフ mulah とは(ムルハ mulḥah の複数形で)一言で表すと「奇譚集」の意味である。

従って単数形ムルハが「奇譚」一篇である。複数形ムラフは、マカーマート *maqāmāt* (単数はマカーマ *maqāmah*) がそうであるように、文学に限らず多くの分野では、アラブの慣習として複数形が総称としてその＜用語＞になることが多い。単数形はその用法として、個々の事例、具体的な一例、その一篇・一話となってしまう。特に単数形が／-ah／と終る場合 (*maqāmah*, *mulḥah* など) はそうした意味合いが強い。それ故この分野では単数ムルハとせずに、複数形ムラフを文学ジャンル用語「奇譚(集)」としている。

後述するように、ムラフはユーモア文学のジャンルの中に位置づけられている。ムラフは「奇譚」として訳しておくが、もう少しムラフの特徴を述べておこう。ムラフは語根義「塩」 *milḥ* から派生しており、塩が外延する。塩が効いた、風味のある、味わい深い、興味誘う「話譚」→「奇譚」、「興趣譚」と言うことになる。「塩」＝「機智・ウィット」の効いた話・逸話・物語ということになる。本稿ではこのムラフを肝要な訳として「奇譚」または「興趣譚」として扱う。が、しかしムラフの領域はジャンル用語としてよりも、もっと広範である。

蓋然的に述べると、ムラフおよびその単数形ムルハは、すでに述べたように「塩 (= 機智) の効いた」の意味で、文学を超えたあらゆる領域に用いられる。「塩の効いた文言」はすべてそう呼ばれていた。何よりもマカーマートの大成者アル・ハリリーその他領域の著作品の中にも見出されている。訳者は彼の著作品を『マカーマート』第1巻1-6 (平凡社版) で記しておいた。その著書のなかで3として *mulḥatu l-i‘‘raab fi n-naḥw* 『文法に関するイウラーブ (語尾変化) の優雅さ』として挙げておいた (32 頁)。この書は2として挙げた、彼の権威づけられた有名な言語・文法作品 *durratu l-ghawwās* 『潜水夫の真珠』 (31 頁) に、著者自らが部分注解した作品である。ここではムラフの単数が表題に選ばれているが、著者の得意な領域だけに「塩味を効かせた」注解に仕上げたものとの感応があったのであろう。

ムラフを題材にした著書を残した最初期の文人はタイフル *Ibn Abī Ṭāhir al-Ṭayfūr* (819～893) である。彼はバグダード史を著した歴史家として知られ、アッバース朝のカリフの宮廷とも関係していた。文学趣味も旺盛で著書の中に『女性達の雄弁』 *Balāgha al-Nisā‘* があり、その中でジャーヒリーヤ時代からイスラーム勃興期までに活躍した多才な女性達の *mulḥ al-nawādir* (珍譚・奇譚) について述べている。またムラフの用語は、時代的にアル・ハマザーニーとアル・ハリリーの頃になるとごく普通に散見される。この両者の一世紀の中間期に生きた文人カイラワーニー *al-Qayrawānī ‘Alī al-Ḥuṣrī* (1061 年没) は、この時代すでにムラフの作品群を収録しており、『奇譚・珍譚の至宝集』 *Jam‘ al-Jawāhir fī al-Mulḥ wa-l-Nawādir* の著作を残したことが知られている。またアル・ハリリーと同時代、スペイン・アラブのセビリヤの文人イブン・ハーカーン *al-Faḥḥ ibn Khāqān* (1140 年没) は、『マトゥマフ (見上げ場所) の書』 *Maṭmaḥ* で始まる長い題名の下に「アンダルシア人の奇譚集」 *mulḥ ahl al-Andalus* のことを記している。同時代のアンダルシア・アラブの文人情報を押韻散文の文体で比喻を効かせて著し、当時の貴重なスペイン・アラブの教養人達の状況を知らせてくれている。この書自体アル・ハリリーの死亡した2年前1120年に著作されたものである。それから少し後の12世紀後半から13世紀前半にかけて、作者は不詳であるけれどもエジプトで著作された写本がオックスフォード大学に保存されており、『芸術の驚異と鑑識眼の奇譚集』 *Kitāb Gharā‘ib al-Funūn wa-Mulḥ al-‘Uyūn* と題されている。内容は天文学と地理学に関するもので、しかも細密画も挿入されているとのこと。時代的に絵画が書物の中に許容された最初期のもので、アル・ハリリーの『マカーマート』の写本に絵画が挿入された時期と重なる。

さらに純文学用語においては、韻文・詩 (*nazm*) の領域においても、ジャンルとしてムラフはあっ

た。恋愛詩であるガザル(ghazal)あるいはナシーブ(nasīb)、マドゥフ(madh 頌詩)、ヒジャーウ(hijā' 風刺詩)、ズフド(zuhd 宗教詩)などと並んでムラフ(興趣詩)が存在している。一例を挙げると、有名なアブー・タンマーム(845年没)の『ハマーサ詩集』*Dīwān al-Ḥamāsa*のジャンル別分類においては10のテーマ別に分類されており、ジャンルとしては表題通りハマーサ(武勇詩)の詩篇が多いのだけれども、ムラフ(興趣詩)のジャンルの下に36詩篇が集められている。

ムラフの語の広がりや認識についてであるが、アル・ハリリーも己の『マカーマート』のなかにムラフを用いた箇所が3例あり、第3例目は「奇譚、興趣譚」に意味で用いられている。ムラフの全体的意味としてまず2例を見てみよう。四角囲みの部分 語法・語義が参考になろう：

例1 ムラフ：老人が己の嗜みを明らかに見せ、歯並びを顕にした(口を開いて会話を始めた)ところ、その巧みな言葉つきと醜悪な黄色い歯並びから、私はふと気が付いた。よく見たらこの人こそあのアブー・ザイド長老ではないかと。

(拙訳 第26話 平凡社版 II p. 278)

例2 ムラフ：私はかつてマラティッヤの地で旅のラクダを<sup>ひざまず</sup>跪かせたことがあった。その当時私の鞆の中には金銀の硬貨が一杯詰まっていた。当地で旅の杖を投げ出して以来、習慣となったのは興味に任せて娯楽施設に入り浸り、気に入った遊びを追い求めることであった。当地で見る物聞く物を逃すことは無かったし、遊ぶ場食べる場で行かない所は無かった。

(第36話 同上書 III p. 44)

ここでの2例、四角囲みで述べているムラフ *mulah* に関連でいえば、第26話では「話の巧みさ」をより具象化した「興趣譚」とか「奇譚」とはちょっと訳しにくい。また36話の方は「気に入った話」と訳しても良さそうであるが、文脈上随分限られて狭い意味になってしまう。しかし以下の例3の方は、教養・文学・話芸だけで食べていけるかが主題となっており、ここでの文学ジャンルとも関連しているので長い引用となるが、状況説明も参考になろうし、具体化されたレパトリーが披露されて興味深い断章である。引用中のムラフは「洒落話」と訳したが、本項の主題に合わせて「奇譚」「興趣譚」と訳しても良いものである。ハリリーのこの断章は文人・教養家の話芸をさまざまに開示してくれる。

例3 *mulah*：

我々は必要物資を調達するべく村に入っていった。二人とも食料に事欠いていたからである。我々が宿場に、ラクダを跪かせる印のある場所に着くと、程なく一人の若者に出会った、まだ穢れを知らない年頃に見えた。この若者は肩に飼葉を担いでいた。アブーザイド師はムスリムの挨拶を交わした後、ちょっと尋ねたいがと問い掛けた。若者が答えるに、「何についてお尋ねでしょうか？アッラーがあなたを榮えますように！」。師は訊ねるに、「ここではルタブ(新鮮なナツメヤシ)は売られておらないか、説教をする(*khuṭab*)代金がわりに？」。若者は、「売られていません、誓って」。師は、「ではバラフ(干しナツメヤシ)も売られておらんと、洒落話(*mulah*)がその代りとなるが？」。若者、「売られていません、勿論のこと」。師は、「では果物もか、サマル(*samar* 夜の閑談)を取り仕切るが？」。若者、「何でそんな物を、アッラーに誓って！」。師は、「ではアスィーダ(ブディンの類)も売られておらんと、カスィーダ詩(*qaṣā'id* < *qaṣīda* 頌詩)を作って差し上げるが？」。若者、「お黙りなさい、アッラーがあなたを守り給わんことを！」。師は、「ではサリーダ粥もか、金言(*farā'd* < *farīda*)を授けるが？」。若者、「あ

なたは気が触れているのですか？アッラーが導かれんことを！」。師は、「ではダキーク（製粉）も売られておらんと、輕易即妙話（daqīq）を致そうと思うが？」。若者、「もう止めてください、アッラーがあなたの意識を正しますよう！」。

ところがアブーザイド師の方はこの質疑応答の連続を、その同韻の綴り袋から計り出すことを、自ら求めて楽しんでいる風であった。若者は未だ相手のゴールが遠く（＝真意を測りかねて）、老人が教養ある人物だと見て取って、「もう十分です、老師殿！あなたの言葉の彩（fann）に気付かされました、その話芸（ann）には感心しました！私の答えを一括してお受け下さい、それで事の次第を納得してください！この土地では韻文（shī'r）で物を買おうとしても大麦一粒買えません。散文（nathr）ではパン切れ一枚 買えません。物語（qīṣaṣ < qīṣṣa）では爪切り一つ買えません。書簡文（risāla）では残飯も買えません。ルクマーンの教訓（ḥikam Luqmān）だとして一口の食べ物も手に入りません。戦記物（akhbār malāḥim）だとして一片の肉にもありつけません。当節の世代の人たちは、その人物に頌詩（madīḥ）が捧げられても、誰もその報酬を与える者などおりません。ラジャズ詩（arājīz < urjūza）を詠み上げられたとしても、返礼する者などおりません。ハディース語り（ḥadīth）で楽しまされたとして、それで心の寛<sup>くろ</sup>い所を見せてくれる人などおりません。例え相手が君主であろうとも、糧<sup>かて</sup>食を分け与える人などおりません。彼らにあっては教養人は干上がった土地のようなもの、その土地に降雨が無ければ、何の価値も無い、家畜すら寄り付かないものですから。教養も全く同じです、財力の支えが無ければ、その研鑽に励もうと徒労に終わるだけ。その蓄積に努めようと、粗<sup>こ</sup>朶<sup>だ</sup>束<sup>こしら</sup>を拵<sup>こしら</sup>えるだけなのですよ」。こう言い終えると少年は急いでこの場を後にした、我々に背を向けて追い立てられるように。

（ハリリー 43 話 拙訳 平凡社版Ⅲ pp. 199～202）

この断章は教養人や文人が学識や文才で食べてゆけるのかをテーマにして、実際市場近くの村人に尋ねる。世故長けた主人公が青学の士である語り手との対話で、学問・知識の積み上げや教養が実生活には何になるか、とその現実を語り手に思い知らしめる場面である。説教、洒落<sup>しやれ</sup>話、サマル、カスィダ詩、金言、輕易即妙話など話芸や語り、教養話を披露したとてスーク（市場）で売られている必要な食料品を買い求めるか、語り手を横において主人公が尋ねてみる。これに対しての村の若者が教養・知識・話芸では物を売ることにはできないと答えている。韻文、散文、物語、書簡文、ルクマーンの教訓、戦記物、頌詩、ラジャズ詩、ハディース語りでは今どきそれに関心を持ち対応してくれる奇特の者などいない、との答えである。教養・文学・話芸だけで食べていけるかとの問いを主題としており、興味深い。教養人、文学者、詩人などはパトロン、支援者に頼って生きていく場合が多かった時代のことであるから、切実なテーマでもあったわけである。この両者の応対振りの話芸は韻を聞かせた見事なものなのだ。この両者の対話の中に洒落<sup>しやれ</sup>話と訳した語がムラフ mulah であり、本稿に沿えば「興趣譚」ないし「奇譚」と訳して然るべきものである。

こうした話譚・逸話は以下に述べるが、事実に基づいた話と虚偽やフィクションを交えた話を大きく二種に分類する分け方がある。真面目な話でいえば上述の、哲学者の諸見解や（法官）シャアビー<sup>さばき</sup>政談の要約譚、（博学の）ダッビーの蘊蓄譚、（故事来歴に詳しい）カルビーの学識話などがその事例となろう。その他は多かれ少なかれフィクションが紛れ込む類となる。上に述べられていない有名な物語類、例えばプレイスラムの黒騎士「アンタラ（‘Antara）物語」などの英雄伝や伝記なども虚偽やフィクションが紛れ込んで、物語を熱く面白くしている。

ムラフとマカーマートの重層的関係は、明確な定義もなく近代に至るまで続く。アル・ハマザー

ニーのマカーマ作品の算定に関しても影を落としている。というのも彼の『マカーマート』校訂者M. ‘Abduh は1889年完成したわけであったが、彼に先行してシリアの文人ラーフィイー al-Rāfi‘ī (1815年没)が『マカーマート』の校訂本を既に出版していた。ラーフィイーの死亡年からして、アラブ近代の覚醒の前であり、アラブ文学の伝統概念を色濃く反映していたはずである。M. ‘Abduh の校訂本出版とは1世紀近く隔たっている。それ故ラーフィイーの先行書も恐らく参考になっている可能性は大であろう、第51話の最後の注は「後書き」にも当たるが、ラーフィイーについても、彼の『マカーマート』校訂本についても触れてはいないが。ラーフィイーはアル・ハマザーニーのマカーマ1篇1篇を収集して『マカーマート』校訂本を作成するに当たって、52篇の注目すべき編集を行っている。中世のまどろみの中、伝統を引きずったシリアのタラブルスの文人は、そうしたアル・ハマザーニーのマカーマ作品を収集するにあたって、恐らく何らかの文学的伝統・伝承に沿ってなされたものであろう。ムラフ Mulah との関連が窺える纏め方をしているのである。ラーフィイーの校訂本はアル・ハマザーニーの『マカーマート』では50篇の校訂(マカーマートは50篇)を終えた後、その続きとしてスペースも空けずに、即ち段落や頁を改めることはせずに、「アル・ハマザーニーのムラフ」Mulah Badī al-Zamān al-Hamadhānīとして続けているのである。そのムラフは2篇あり、これゆえ大きく括られる『マカーマート』は総計52篇となるわけである。最後に加えられたムラフ2篇とは(1) Qiṣṣa Bishr (ビシュル物語)、(2) Qiṣṣa al-A‘rābī (アラブの中のアラブ＝遊牧民の物語)との物語類2篇のことである。

そして注目すべきは(1)のムラフの方は我々が既に観たM. ‘Abduh では、第51話としてマカーマ作品の中に組み込まれているわけである。全くマカーマの体裁で「イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した…」と。ラーフィイーの方は50話までは語り手の名はそれまで通り「イーサー・イブン・ヒシャーム」であったが、ところがこの51話はムラフとして別扱いとなっている。語り手を「アル・ハサン・イブン・ムハンマド al-Ḥasan ibn Muḥammad al-Fārisīnī」としており、「アル・ハサン・イブン・ムハンマドは我々に語り伝え、以下のように話した」としている。さらにまた第52話に当たる Qiṣṣa al-A‘rābī (アラブの中のアラブ＝遊牧民の物語)の方では、語り手を登場させること無く、語り方まで変えている。haddatha-nā wa-qāla「～は我々に語り伝え、以下のように話した」とせずに、「そのイスナード(伝承系譜)を～に拠って以下のように伝承されている」yurwā bi-isnādi-hi ilā ～ としているのである。

ラーフィイーの50篇後に付加された2篇のうちの 하나가、M. ‘Abduh の方ではマカーマの中に組み込まれているのである。一方ラーフィイーの方は区切りを設けてムラフとジャンル分けして記しているのである。ところがラーフィイーの付加したこの2篇がムラフの範疇として別の枠組みとされてはいる。それならばムラフの1篇1篇の名称も単数形mulḥa とせねばならないはずである。しかも2篇のみを収録してあるのであれば、アラブは双数形を厳然と識別しており、その双数mulḥatānī とすべきところである。2篇を括る表題を複数形にしたのはジャンル用語mulḥaとしたのであろう。あるいはもっとmulḥaの話を続けるところを中断したか、あるいはMulah Badī …の前に、min を付して min Mulah Badī …「アル・ハマザーニーの奇譚集より」とするところであったことも考えられる。さらに興味を誘うのは、この付加された2篇の表題のことである。二つの話はいずれも、ここでは1篇づつの篇題をmulḥaとしていないのだ。上に示した通り、キッサ qissa (物語)としている点がまた議論を呼ぶところである。ムラフなる分野が不分明で確立していたかどうか。キッサは「悲恋もの」、「武勇もの」などすべての「物語」類を指す総称的用語である。そういう意味では物語性のあるマカーマもムラフの1篇もキッサに入るわけではある。

それではなぜマカーマとも、またムラフとも一話の篇題としなかったのであろうか。と言うことは付加された2篇もムラフのジャンルと見做しており、同時にマカーマの範疇に入れても差し支えないか、ないしは近似してはいるが異なるジャンルであると解釈していることになる。ここに矢張りマカーマなり、ムラフなりの確立したジャンル分けがなされていなかった、とラーフィイーのような近代直前の文人に至るまで、中世を通じても推察されよう。しかもラーフィイー自身はマカーマ文学を十分認識しているはずであるのだから。というのもラーフィイー自身マカーマを著作しており、前に触れた通り「ヒムスとハマとのムファーハラ(自慢合戦)のマカーマ」*al-Maqāma fī al-mufākhara bayna Ḥimṣ wa Ḥamāh* と題したものが知られるのであるから。M. ‘Abduh の51話目に加えたその扱いの判断を見ると、近代に至ってもムラフの位置づけが不分明であり、それ以降はこの種のジャンルは忘れ去られ、近代・現代文学に移行してしまったのではないとも思われる。アル・ハマザーニーの写本を収集研究した Richards (p. 95) によれば、他にも *Fātiḥ* 写本では40マカーマが集められているのであるが、そのうち33話までが *maqāmāt* となっており、残りの7話はムラフ *mulaḥ* となっているとのことである。

## 11. アル・ハマダーニーの作品

### 1 『マカーマート』:

アル・ハマダーニーのマカーマ作品は上で述べたように、確実視されているのは30余りの篇数であり、50を超えたり100篇以上と言われる彼の「マカーマ」類の、多くはサジュウもが欠如する形式も欠如するムラフ (*mulaḥ* 奇譚) の領域のものか、次に挙げる『書簡集』から直接・間接に、あるいは全面的に・部分的に採られて校訂・編者が形式を合わせたものと言われる。本訳51篇のうちにも、特に後半の諸篇にはそれを窺わせるものが多い。

### 2 『書簡集』 *al-Risālat al-Rasā'il* :

アル・ハマザーニーの文学的評価はこの分野に定まる。233通あったことは知られるが、現在136通の書簡が残存している。巧緻な修辞技法を用いて、パトロンとなってくれる地方の為政者、裕福な文芸愛好者、知識人・学者・教養人などに宛てたものである。内容は当面必要な経費の無心や税の支払い猶予、書物や資料の借用願など私的なものが多いが、中には主義主張を訴えたもの、シーア派思想の広がりへの懸念などの信念の吐露を表したものもある。残念ながら彼の「知識を求めての旅」と同じく、西のアラビア語の本場ではなく、ペルシャから東の人士宛てが殆どであるため、アラビア語理解者は当然限られることになる。世評は西のアラブ世界の中にこそあった。書簡の幾つかは「旅」の項で引用しておいた。結構サジュウの文体を採る長文も多く、それがマカーマに紛れ込んでいる。書簡集の中には、序文で書いたように、修辞技法に溢れた名文が多く収集されている。他にも文字／w／を用いずに何行もの詩篇を編んだりもしている。すなわち接続詞 *wa* (そして) を使用できないので相当作詞には技巧が要る。『書簡集』の収集は、彼の死後早期に行われ、ハーキム・アブー・サイード *al-Ḥākim Abū Sa'īd 'Abdullāh* (1040年没) の編纂になるものが知られる。近代では I.A. al-Ṭarābulṣī の *Kaṣṣḥ al-Ma'ānī wa-al-Bayān 'an Rasā'il Badī' al-Zamān*, Beirut, 1890 がある。

### 3 『詩集』 *al-Dīwān* :

アル・ハマザーニー多くの詩作品は散逸しており、収集されたものがすべて秀逸であるわけでもない。彼の他の作品の評価・名声が高まったために、その関連で詩の方も集められた、と言う

のが実際のところであろう。高く評価した同時代人サアーリビーによって部分的に収集され、その著 *Yatīma* の中に収められている。同じくヤークートの文学者辞典の中にも収集されている。詩作の内容の方は、かつての叙情や叙景をおおらかに謳い上げるといよりは、パトロンへの賛辞、頌詩が多く、『マカーマート』と比して、どちらかと言うと、文体が優れた比較的穏やかな詩品で占められていると言えよう。『詩集』の編纂に関しては、‘Abd al-Wahhāb Riḍwān, Muḥammad Shukrī, *al-Dīwān al-Hamadānī*, Cairo, 1903 (僅か 84 頁に過ぎない) および Y.A. ‘Abdullāh, *al-Dīwān al-Hamadhānī*, Beirut, 1987 がある。

なお本『マカーマート』の詩の挿入に関して少し述べておこう。アル・ハリリーのように、本舞台での盛り上がりの部分、およびアト舞台の言い訳や正当化の反歌がきれいに配されているわけではない。全篇にわたって統一されているわけでもないし、多くはアト舞台の反歌に当たるものである。また時には何首も集中して挿入されている作品もある。詩品が欠如するのは、第 4、5、7、10、11、17、18、19、21、23、28、32、34、36、39、41、42、43 の 18 篇に及ぶ、また逆に 2 首以上の詩品が見られるのは、6、9、13、15、37、49、51 の 7 篇であり、うち傑作とみなされる第 6 マカーマには 4 首の詩篇が効果的に挿入されている。さらに第 51 マカーマにはラジャズ調 6 篇 (9 詩行、以下 5、2、3、7、2)、ワーフィル調 1 篇 (24 詩行) の 7 詩篇もある。

詩篇の数は総計 113 首に及ぶ。その中の 20 首が引用詩であるから、自作になるものは 93 首ということになる。これらの詩形である律格型 (*baḥr pl. buḥūr*) はどうなっているかチェックを入れてみた。律格形式 16 種の中、12 律格型が使用されている。この傾向は彼の詩趣とも、得意な分野とも関連していようから、これからのアル・ハマザーニーの詩作品研究の資料ともなろう。以下の律格型の丸囲み番号は、16 種ある律格型の配列順序 (後述) を表す。

113 首、そのうち最も多い律格型は、雄大で詠じられるに最も相応しい ①タウィール (*ṭawīl* 長調) であり、28 首ある。うち引用詩は 9 首、自作になるものは 19 首に及ぶ。タウィールは律格の順序としても最初の第 1 律格とされ、その構成は歩脚型二つを合わせて成り立つ。最初に来る歩脚型は *fā’ūlun* 歩脚 [長母音 ‘ū は /‘+u+w/ の *tashīl* (平易化) と解される] であり、5 子音・3 母音・3 拍、短長長拍、タ・タン・タンの拍となる。そしてそれに続く歩脚型は、7 子音・4 母音・4 拍、短長長長拍、タ・タン・タン・タンの拍からなる *mafā’īlun* 歩脚 [*fā* の長母音は /f+a+/ の、*ī* の長母音は /+i+y/ の *tashīl* (平易化) と解される] とである。この二つの歩脚を交互に合わせるので、12 子音、7 母音、7 拍、タ・タン・タン／タ・タン・タン・タン／の連続からなる。このように子音数、拍数が 16 律格形式のうち、最も長大となるためタウィール (*ṭawīl* 長調) と命名されている。

次に多いのは律格形式としては最も整っているとされる ⑤カーミル (*kāmil* 完調) であり、15 首、そのうち自作 13 首である。このカーミルは第 5 律格と序され、*mutafā’īlun* 歩脚の単独形式とされる [*fā* の長母音は /f+a+/ の *tashīl* (平易化) と解される]。そしてその構成は 7 子音・5 母音・5 拍からなる短短長短長拍 タ・タ・タン・タ・タンの連続する拍となり、7 子音 5 母音 5 拍は最も完全な律格形式と見做されている故にカーミル「完全な律格、波長」と命名されている。

第 3 番目に多いのはもっともリズムの基本となり身体動作と密着している ⑦ラジャズ (*rajaz* 脚震調) であり、14 首作詩されている。ラジャズは律格型の順序としては、第 7 番目に配されている。これは単一歩脚型で *mustafīlun* 歩脚と形式化されている。7 子音・4 母音・4 拍からなり、そして長長短長拍 タン・タン・タ・タンの連続する拍となり、最後に短長拍タ・タンが来る。ラジャズ (脚震調) の語の由来と関連しており、ラクダの歩様において、後脚の左右どちらかが傷か病、または性癖のため、通常の負担がかけられず、短めになる。その負担に耐えられず、その脚が短めに震え

て(短拍になり)、次の前脚の方に負担をかけてしまう(最後の長拍)ためである。それ故にラジャズ(rajaz 脚震調)と呼ばれる。このラジャズ調は、人工化、技巧化、詩芸化されると、これがもつともアラブの自然なリズムとされるに至った。

第4番目のものは ⑭ムジュタッス(mujtathth 抜調)の律格型であり、12首に及び、うち11首が自作のものである。16律格型の順序では第14番目に配されるムジュタッスは、歩脚型を二つ合わせたもので、一つは mustaf'ilun 歩脚(すなわち⑦rajaz 調と同一)、即ち7子音・4母音・4拍、長長短長拍 タン・タン・タ・タンの拍である。もう一つの歩脚型は同じく7子音・4母音・4拍からなり、そして長短長長拍 タン・タ・タン・タンの拍となり、fā'ilātun 歩脚(すなわち後述する⑧ramal 調と同一)である。タン・タン・タ・タン／タン・タ・タン・タン／の連続となる。この律格型がムジュタッス mujtathth (抜調)と呼ばれるのは、歩脚型一つを引き抜いている(jaththa)からである。すなわち fā'ilātun 歩脚 mustaf'ilun 歩脚と連続する律格型は後述する⑪ハフィーフ調である。その派生として fā'ilātun 歩脚を「引き抜いて」mustaf'ilun 歩脚 fā'ilātun 歩脚 fā'ilātun 歩脚として成立する律格型のためである。

第5番目に多い詩型は ③バスイート(basīt 延調)であり、11首あり、うち引用詩4首、自作品7首である。律格型の順序は第3番目に配されるバスイート(basīt 延調)、その構成は2歩脚型を合わせて成り立つ。最初に来る歩脚型は mustaf'ilun 歩脚、次に fā'ilun 歩脚が続く。前者が7子音・4母音・4拍、長長短長拍、タン・タン・タ・タンの拍からなり、後者は5子音・3母音・3拍、長短長拍、タン・タ・タンの拍となる。合計12子音、7母音、7拍タン・タン・タ・タン／タン・タ・タン／の連続より成り立つ。この律格がバスイート(basīt 延調)と呼ばれるのは、拍を音で表せば分かるように、非常にリズムカルに広がる延びをみせて(basāṭa)、その後に広がる音響・音感を与えているからである。歩脚がいずれもサバブ(sabab テント綱=長拍)が脚韻で核となるワティド(テント杭=短長拍タ・タン)の前後に広がり延びているからであると理論付けされる。

次の第6番目の律格型は ④ワーフィル(wāfir 豊調)であり、9首あり、引用詩2首の他7首は自作である。このワーフィルは第4律格とされ、単一歩脚型で7子音・5母音・5拍からなる mufā'alatun 歩脚であり[fāaの長母音は／f+a+／の tashīl(平易化)と解される]。そして短長短長長拍 タ・タン・タ・タ・タンの拍の連続する形となり、単一歩脚型ながら7子音・5母音・5拍の長く文字数・拍数も多い(wafara)豊かな歩脚なので、ワーフィル(wāfir 豊調)と名付けられている。

第7番目に多いのは ⑧ラマル(ramal <sup>はやあし</sup>「速歩調」)の律格であり、8首ある。ラマルは第8番目の律格形式と順付けされており、これは単一歩脚型で fā'ilātun 歩脚[fā および lā の長母音は／f+a+／の、同じく／l+a+／の平易化と解される]と形式化されている。すなわち7子音・4母音・4拍、そして長短長長拍 タン・タ・タン・タンの拍の連続となり、真ん中にワティド(テント杭=短長拍タ・タン)が来るために歩脚全体の繰り返し走る様に速くなる(ramala)ため、ラマル(ramal <sup>はやあし</sup>「速歩調」)と呼ばれる。乗馬の歩態でいうとハルワル harwal と同義であり、常歩(<sup>なみあし</sup>mashy 英語の walk)と駈歩(<sup>かけあし</sup>'adw 英語の run)の間の速歩(<sup>はやあし</sup>trot)に当たる。ラクダの歩態ではラタク ratak とも言われる。理論的には歩脚の脚韻となるサバブ(テント綱=長拍)が、次の歩脚の最初のサバブと連続しており、それが速歩を促している故ラマル(ramal <sup>はやあし</sup>「速歩調」)の律格であり、第8番目の律格形式とされる。

8番目は ⑮ムタカーリブ(mutaqārib 短調)であり、上のラマルと同じ8首あるが、自作は6首であり他は引用詩である。律格型の順序は15ではなく、最後の16番目に配される説もある。ムタカーリブ、この歩脚型は歩脚型 fa'ūlun の単独型を採り、5子音・3母音・3拍、短長長拍 タ・タ

ン・タンの拍の、いずれをとっても短い歩脚の繰り返しとなる。ムタカーリブとは、短い3拍子一つを繰り返すため、こちょこちょの小股歩き、歩態用語で言えば「伸長」に対しての「短縮」<sup>あし</sup>歩に当たる。原語 *mutaqārib* とは「お互いに接近している」であり、律格では歩脚型が短く、お互いに近接していることから、「短調」と言われる。専門的にはワティド(*watid* テント杭＝短長格)がサバブ(*sabab* テント綱＝長格)一つを挟んでお互いに間近にあるためムタカーリブ(*mutaqārib* 短調)との用語となった、とされる。

9番目は ⑪ハフィーフ(*khafif* 軽調)であり、3首ある。律格型の順序は11番目に配されるハフィーフは2種の歩脚型を用いて成り立つ。一つは *fā'ilātun* 歩脚(すなわち⑧ *ramal* 調)、7子音・4母音・4拍、長短長長拍 タン・タ・タン・タンの拍である。そしてこの歩脚型を挟む形で、もう一つの *mustaf'ilun* 歩脚(⑦ *rajaz* 調)からなる。後者は前者と同じ7子音・4母音・4拍からなるが、異なる構成となる長長短長拍 タン・タン・タ・タンの拍とからなる。タン・タ・タン・タン／タン・タン・タ・タン／の繰り返すこの調子は軽快であるとして、ハフィーフ(*khafif* 軽調)との用語となった。理論的には短拍が少なくとも二つ以上の長拍を挟んで、軽快さを保っているからである、とされる。

10番目は ⑥ハザジュ(*hazaj* 声震調)であり、2首詩作されている。歓喜を謳う場合に多く採られ、また歌舞に好んでセットされるのがこの第6律格ハザジュである。ハザジュは単一歩脚型で *maf'īlun* 歩脚である。すなわち7子音・4母音・4拍からなり、そして短長長長拍 タ・タン・タン・タンの連続する拍となる。上の⑦ラジャズ調のワティド(テント杭＝短長拍タ・タン)を最初に移行して成立している律格であり、その応用である。それゆえ名称も、ラジャズ<腰の震え>の身体的に後の部分を、より前の頭に持って来て<声の震え>を応用したわけで、ハザジュ(*hazaj* 声震調)と命名された。理論的にはワティド(テント杭＝短長拍タ・タン)で声を張り上げて十分訴えた後、サバブ(テント綱＝長格)二つで細かく震わせて発声を戻してゆくから、とされる。

11番目は ⑨サリーウ(*sarī* 速調)で、10番目のハザジュと同じ2首が作詩されている。律格型の順序は9番目に配されているサリーウは、名称自体⑧ラマルと紛らわしいので、後者は歩態用語でもあるので「速歩調」<sup>はやあし</sup>と訳し分けた。サリーウもまた二つの異なる歩脚型を用いている。一つは⑦ラジャズ(脚震調)の同一であり、*mustaf'ilun* 歩脚型、7子音・4母音・4拍、長長短長拍 タン・タン・タ・タンの拍である。二つ目は歩脚型としては珍しい *maf'ūlātu* となり、7子音・4母音・4拍であることは変わらないが、長長長短拍 タン・タン・タン・タの拍である。最後が短拍で終わる。それ故すぐに後ろの歩脚にリエゾンされなければならない。すなわちこの後者の歩脚型は急が(*sara'a*)されているわけである。これゆえこの律格型はサリーウ(*sarī* 速調)と名付けられたわけである。もう一つの特徴はこの後者の歩脚型。それを前者の歩脚型を二つ続けた後挿入させる律格であることだ。拍は従ってタン・タン・タ・タン／タン・タン・タ・タン／タン・タン・タン・タ／の連続となる。但し *maf'ūlātu* には歩脚型の核となるワティド(テント杭)が欠如する。すなわち一詩行の核となる短長拍タ・タンが欠如する。なので最後の短長拍タン・タを便宜的にテント杭と見做している。この歩脚型は異常なため、最後にテント杭が配されるように歩脚型末が削られ、*fā'ilun* 歩脚が採られることが多い。タン・タン・タン・タの7子音・4母音・4拍、長長長短拍から、タン・タ・タンの5子音・3母音・3拍、長短長拍、タン・タ・タンの拍となることが許容されている。

最後に来る歩脚型が ⑩ムンサリフ(*munsariḥ* 流調)であり、1首のみ作詩せられている。律格型の順序は第10番目に配されているムンサリフの歩脚は二つの歩脚型から合成される。一つは⑦

ラジャズ(脚震調)と同一であり、*mustaf'ilun* 歩脚型、7子音・4母音・4拍、長長短長拍 タン・タン・タ・タンの拍である。二つ目は上の⑨サリーウ(速調)にも適用された *maf'ulātu* 歩脚型、7子音・4母音・4拍、長長長短拍 タン・タン・タン・タの拍である。この後者を間に挟む形で、タン・タン・タ・タン／タン・タン・タン・タ／タン・タン・タ・タン／を連続することになる。後者の歩脚型は急がされており、矢張り「速調」なのであるが、基本歩脚型⑦ラジャズ(脚震調)を挟むので、馬やラクダがすいすいと水が流れる (*insaraḥa*) ように歩んだり走ったりするところからムンサリフ (*munsariḥ* 流調)と命名されている。

以上であるが、16種の律格型のうち、著者ハマザーニーが主として本書で自作した韻文の詩型である律格型12種を紹介した。他は②マディード (*madīd* 伸調)、⑫ムダーリウ (*muḍārī'* 類似調)、⑬ムクタダブ (*muqtaḍab* 縮調)、⑯ムタダーリク (*mutadārik* 続調)の4律格がある。すでにお分かりのように、律格型の順序16種は単一步脚を連続させるか、2つの歩脚型を交互に、あるいは組み合わせて連続させるかの2つのタイプに分けられる。

16種の律格型 (*buhūr*) それぞれは歩脚型を下位単位とする。最も短いのは5子音・3母音・3拍で構成される2種、標準的な7子音・4母音、4拍の4種、そして長いのは、7子音・5母音・5拍の2種、計8種の歩脚型である。そして歩脚型には「核」となるワティド(テント杭=短長拍タ・タン)とサバブ (*sabab* テント綱=長格)とから成立して、ワティドは動かしては(=変更しては)ならないとされている。こうした歩脚型、これらを単独の繰り返しか、複合して繰り返してゆくかで律格型のパターンが形成される。

典型的律格型タイプは、同時に基本歩律格の単独の繰り返しでもある⑦ラジャズ (*rajaz* 脚震調)であるとされている。第7番目に配されているが、それは上の⑥ハザジュ及び⑧ラマルと合わせて3種のこの歩脚型が同一の律格円を描き、標準的な7子音・4母音、4拍の4種からなるため、律格型の順列でそうされただけの話である。このラジャズ調は詩の原型であるとされる。散文から韻文への架け橋であって、押韻散文サジュウから詩の形式に発展したものとも説かれている。そしてラジャズの起源では語義で説明したように、ラクダの四肢の歩みと砂漠、キャラバンと関連付けられている。ラクダの四肢の歩みである4拍を基本として、歩脚型が成立する。さらに自然や身体労働から関連付けて人間が、加工して人工的に作り出したリズムであり、16種存在する律格形式に発展して韻律学を形成する。歩脚型はワティド (*watid* テント杭)と呼ばれる核(短長拍タ・タン)を据えて、そこは変更不能とした。杭が外されたり、弛んでしまうと、バイト(テント=詩行)が成り立たなくなるわけであるから。この基本歩脚型⑦ラジャズからワティド (*watid* テント杭)と呼ばれる核(短長拍タ・タン)を移行して、⑧ラマル (*ramal* 速調)、⑥ハザジュ (*hazaj* 声震調)が生み出されてゆく。それ故これら3者は「単一步脚型で7子音・4母音・4拍からなり」と同一表現を採っていることは上での記述で気づかれたことであろう。これら3種の律格型はワティド (*watid* テント杭)と呼ばれる核(短長拍タ・タン)がどこに置かれるかの違いだけである。

アラブの韻律学を理論化し、この詩の律格を究明したのはハリール (*Khalīl ibn Aḥmad* 791年没)である。彼はこれら16種の律格形式を見事な5円 (*al-Dawā'ir al-Khams*) にまとめ上げた。いわゆる「ハリールの円」(*Dawā'ir al-Khalīl*)として知られるものである。そしてこれら単一步脚型で7子音・5母音・5拍からなる3種の律格を第3円として位置付け、ダーイラ・ムジュタリブ *Dā'ira al-Mujtalib* との名称を付した。「移行円」の意味であるが、原義が *ijtalaba* 「荷物・品物・家畜を他の場所にうつす」ことなのである。すなわち4拍の中核となるワティド・テント杭を移し替えて成立する。即ち⑦ラジャズ(脚震調)が4拍中最後の3・4拍に置いて基本としたのに対して、⑥ハザジュ

(声震調)はその最初の1・2拍目に、⑧ラマル(速調)は真ん中の2・3拍目に、移し替えて(mujtalib)成立した律格形式となっている。これが連続している円構造になっている。別の説として後述する第1円の構成、2歩脚型のうち、最初に来る歩脚型をそのまま残し、後に続く歩脚型7子音・4母音・4拍をこの第3円に「移し替えて」成立させている。この故に第3円として、ダーイラ・ムジュタリフ Dā'ira al-Mujtalib「移行円」と命名した、とも言われる。本来ならばこれを基本である第一円としても良かった。

しかしハリールが第1円としたのは、この『マカーマート』の作者も詩作において最多の詩篇であったように、技巧化され詠じられて耳目を引き付ける律格型の代表であるタウィール調を第1番に据えた。この律格は2歩脚型を合わせて成り立つため、12子音、8母音、7拍と最も長大なものである。これ程長大ではないが、ワティド(テント杭=短長拍タ・タン)を異ならせる2歩脚型を互い違いに組み合わせて成り立つ律格は、他にも②種あり、②マディード(madīd 伸調)、③バスィート(basīṭ 延調)であった。この合計①～③種を配して律格円を作り上げた。ハリールはこれを異なる歩脚型を互い違いに用いて成り立つことから、第1円としてダーイラ・ムフタリフ Dā'ira al-Mukhtalif「互い違い円」と名付けた。

次に単歩脚型で7子音・5母音・5拍からなる2種の律格型を円にまとめ上げた。律格型カーミル(完調)とワーフィル(豊調)とも実は歩脚型では「単歩脚型で7子音・5母音・5拍からなる」ことで共通しており、上の3者と異なるのは母音数、および拍数がひとつづつ多いことが特色となっている。核となるワティド(テント杭=短長拍タ・タン)が最初にあるか、最後に行くかの違いである。この両者が属するのはハリールの円の中、第2円のダーイラ・ムウタリフ Dā'ira al-Mu'talif「緊密円」である。この第2円には、この⑤カーミル調と④ワーフィル調の2種しか存在せず、しかも歩脚型は単独でありながら、7子音・5母音・5拍と長大な構成にも拘らず仲良く親密性を保って(ulfa)円構成を分け合っているため、ダーイラ・ムウタリフ「緊密円」と命名された。

次の第3円は最初に説明をした標準的な7子音・4母音、4拍の4種、ラジャズを中心としたダーイラ・ムジュタリフ Dā'ira al-Mujtalib「移行円」である。

そして第4円はダーイラ・ムシュタビフ Dā'ira al-Mushtabih「類同円」と呼ばれる第⑨～第⑬番目までの見事に、また多様に纏められた円である。いずれの律格型も7子音・4母音・4拍の4種の歩脚型を2種ずつ異ならせて成り立たせている。この紛らわしい、類同した(mushtabih)歩脚を採ることから、第4円はダーイラ・ムシュタビフ Dā'ira al-Mushtabih「類同円」と名付けられている。

最後の第5円はダーイラ・ムッタフィク Dā'ira al-Muttafiq「合同円」と呼ばれる。上の⑮ムタカーリブ(mutaqārib 短調)と、本文では欠如した⑯ムタダーリク(mutadārik 続調)の2種の律格型が属している。⑮ムタカーリブのところを観たように、これらの律格型は5子音・3母音・3拍で短長長拍、タ・タン・タン、長短長拍、タン・タ・タンの拍の、いずれをとっても短い歩脚の繰り返しとなる。短いリズム、3拍子一つを繰り返すため、「短調」であり、それを繰り返すことから「続調」となったりする。核となるワティド(watid テント杭=短長格)がサバブ(sabab テント綱=長格)一つを挟んでお互いに間近にあり、連続しているため、合同している(muttafiq)としてダーイラ・ムッタフィク Dā'ira al-Muttafiq「合同円」とされている。恐らくこの律格は容易に作詩が可能であるために、アル・ハマザーニーは採らなかった律格型であったろう。

「終わりに」あたり、小杉泰氏、岡本多平氏に謝辞を述べておきたい。小杉氏は京都大学で「イスラーム地域研究センター」を主宰され、同時に研究誌『イスラーム世界研究』で著作論文と同様にその広

く深い見識を反映されて、広範な諸研究および重要原典の翻訳を率先して研究誌の場を提供されている。本マカーマと関連するエッセーにも、研究誌の場を提供して下さった。3回とも結構な分量になったにも拘らず、許容して頂き感謝に絶えない。岡本氏はアラビストでありながら、PC関係にも詳しく、訳者にとって不慣れな word 原稿を良く読み込んで校正して頂いた。特にサジュウの相当語の訳語およびローマナイズの厄介な難所を、時間をかけてチェックして校正作業をして頂いた。そのみかアラビア語、アラブ文化・文学に関して、訳者の知識の不足しているところや、曲解している部分に関して、原典資料を上げて指摘して大いなる助けを頂いた。